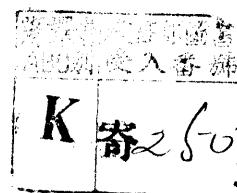


HP 『海軍砲術学校』公開史料



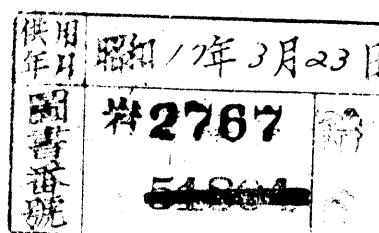
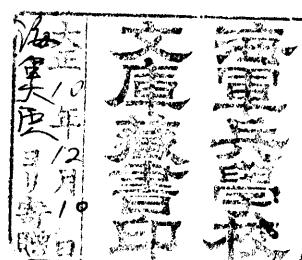
大正十一年十月

軍備沿革



海軍大臣官房

完





正

誤

本文一五四頁七行中 本文二二五頁初行最下段 附錄、四四頁石廊ノ行中 ノ部、二十五年ノ段、計ノ欄 同部、三十一年ノ段、二等ノ欄 同部、同年ノ段、計ノ欄 同部、三十七年ノ段、二等ノ欄 同部、同年ノ段、計ノ欄	ナランヌシテ 五八、八二九、六六六〇 大正一〇、九、二一 大正一〇、九、二 ナランヌシテ 五八、八二九、六六六	誤
一、 八〇・七・二・八・〇・四・三・ 三・六・二・三・ 一、 八・三・七・〇・二・〇・四・〇 一〇・八・〇・七・〇・五・〇・三・〇・七・〇	六八 六八 六八 六八	正

海軍軍備沿革

緒言

此書ハ明治維新後ニ於ケル帝國海軍軍備ノ沿革ヲ叙述スルモノナリ
海軍軍備ハ艦船兵器ノ整備、士官兵員ノ養成、廳衛工場ノ施設、其他水陸
各機能ノ經營等苟モ海軍勢力ニ關係ヲ有スルモノヲ包容スヘシト雖
モ本編ハ主トシテ艦船ノ整備ニ就テ之ヲ記述ス是レ艦船ハ實ニ海軍
軍備ノ根幹ニシテ之ニ依リ海軍勢力ノ隆替ヲトスルコトヲ得ヘケレ
ハナリ

艦船整備ノ経過ヲ按スルニ明治維新海軍草創ノ時代ニ於テハ其艦船
ハ徳川幕府ヨリ收納セルモノ諸藩ヨリ獻納セルモノ及購入セルモノ
等ヨリ成リシカ明治八年ニ至リ臨時經費ノ支出ヲ仰キ英國造船會社
ニ託シテ新ニ軍艦三隻ヲ建造シ十一年其竣工ヲ見タリ扶桑金剛比叡
ノ三艦是レナリ而シテ明治四年ヨリ十五年ニ至ルノ間經常費ニ由リ

内地造船所ニ於テ新造セル艦船若干隻ヲ算セリ然ルニ艦船整備ノ事業タル到底經常費ノ能ク措辨スル所ニアラサルヲ以テ明治十六年新ニ財源ヲ開キ之ニ據リ經常費外ニ於テ軍艦製造ノ臨時経費ヲ設ケ以テ軍備ノ充實ヲ圖ルコトト爲リ爾來艦船ノ製造及購入ハ皆之ヲ臨時経費ニ待ツノ制ヲ馴致シ今日ニ至レリ而シテ其間明治二十七八年及三十七八年ノ役ニ於テ收容セル戰利艦船ハ我海軍勢力ノ一部ヲ成セルモノナリ

本編各節ニ於ケル経費ノ記述ハ叙上ノ臨時経費ニ之ヲ止メ經常費ニ及ハス是レ他意アルニアラス明治十五年以前ニ於ケル經常費内艦船造修費ノ支出區分ヲ叙スルハ頗ル煩瑣ニ涉ルヘキヲ以テ茲ニ省略セルニ過キス但其大要ハ之ヲ本編附錄中ニ摘載シ以テ通覽ニ便ス看者諒焉

大正十年十月

海軍編修 淺 井 將 秀 識

海軍軍備沿革

目次

第一章 明治初年以後明治二十七八年戰役迄	一頁
第一節 明治維新當時ニ於ケル海軍所管艦船	一
第二節 明治三年兵部省建議製艦計畫(不成立)	三
第三節 明治六年左院ノ諦問ニ對シ提議セル海軍卿ノ製艦計畫(不成立)	三
第四節 明治八年軍艦三隻ヲ英國ニ註文ス	四
第五節 明治十四年海軍卿請議、軍艦製造及造船所建築計畫(不成立)	五
第六節 明治十四年海軍卿請議、船舶會社ヲ保護シテ海軍ノ輔翼ニ充ルノ議	六
第七節 明治十五年海軍卿請議、軍艦製造計畫(十六年度以降軍艦製造費設定ノ起因)	六
第八節 明治十五年陸海軍整備ノ御沙汰(十六年度以降軍艦製造費ノ設定)	七
第九節 明治十八年海軍卿請議、軍艦整備計畫改定(海軍公債發行—別途費—特別費ノ設定附十六年度以降既定軍艦製造費ノ聯繫)	一二
第十節 特別費支出ノ經過	一二

第十一節 明治二十一年海軍大臣提議、海軍臨時費ノ請求(二十二年度起業軍艦

製造費及兵器水雷費ノ設定).....二四

第十二節 明治二十三年海軍大臣提議、海軍事業計畫(一部分成立——第一回帝國

議會通過實施——二十四年度起業軍艦製造費ノ設定).....二七

第十三節 明治二十四年海軍大臣提議、九箇年間繼續軍艦製造費ノ要求(閣議一
部分ヲ認メ第二回及第三回帝國議會ニ提出セシモ成立セサリキ).....三五

第十四節 明治二十五年海軍大臣提議、軍艦製造計畫(二十六年度起業軍艦製造

費ノ設定).....三六

第十五節 明治二十七年海軍大臣請議、軍艦四隻購入ノ議(一隻成立——和泉ノ購
入).....四五

第十六節 明治二十七八年戰役當時ニ於ケル帝國海軍艦船及清國ヨリ收容ノ

艦船.....四八

第二章 明治二十七八年戰役以後明治三十七八年戰役迄.....五四

第十七節 明治二十八年及二十九年海軍大臣提議、海軍擴張計畫成立——所謂第
一期擴張及第二期擴張——海軍擴張費ノ設定).....五四

第十八節 明治三十五年及三十六年海軍大臣提議、海軍擴張計畫(成立——所謂第
二期擴張及第二期擴張——海軍擴張費ノ設定).....五四

三期擴張—三十六年度以降軍艦製造及建築費ノ設定) 八三

第十九節

明治三十六年海軍大臣提議、軍艦購入及第三期擴張計畫ニ係ル軍艦
中製造期限ノ繰上(成立—春日、日進二隻ノ購入—第三期擴張ニ屬ス
ル戰艦ノ内二隻ノ製造期限繰上).....

一〇〇

第二十節

明治三十七八年戰役當時ニ於ケル帝國海軍艦船及露國ヨリ收容ノ
艦船

一〇五

第三章 明治三十七八年戰役以後大正十年迄

一一九

第二十一節

明治三十七八年戰役臨時軍事費ニ於ケル艦艇補足費ノ設定 一一九

第二十二節

明治三十九年海軍大臣提議、海軍整備ノ議(成立—一般會計ニ於ケル
艦艇補足費—整備費—補充艦艇費ノ設定)附軍艦水雷艇補充基金特
別會計法

一二四

第二十三節

明治四十三年海軍大臣提議、海軍軍備充實ノ議(軍備補充費ノ設定—
明治四十四年度以降二億四千八百六十七萬三千五百八十一圓—成
立).....

一二八

第二十四節

明治四十四年海軍大臣提議、海軍軍備緊急充實ノ議(閣議之ヲ認メタ
ルモ財政上ノ都合ニ依リ計畫中ノ一部ヲ四十六年度以降ノ豫算ニ

計上スルコトトス).....

一五〇

第二十五節

大正元年海軍大臣提議、海軍軍備緊急充實計畫實施ノ議(軍備補充費六百萬圓追加—成立).....

一五二

第二十六節

大正二年海軍大臣提議、海軍軍備補充計畫實施ノ議(軍備補充費一億五千四百萬圓追加要求—衆議院三千萬圓削減修正可決—貴族院更ニ四千萬圓削減修正可決—兩院協議會成案—衆議院可決—貴族院否決—遂ニ不成立).....

一五八

第二十七節

大正三年海軍大臣提議、軍備補充費六百五十二萬六千圓追加ノ議(成立).....

一六七

第二十八節

防務會議規則ノ制定

第二十九節

大正三年ニ於テ臨時軍事費中驅逐艦製造費ノ設定(千五十七萬八千九百十圓—大正三年九月乃至四年一月勅裁濟).....

一七五

第三十節

大正三年海軍大臣提議、海軍充實ニ關スル議(軍備補充費八千五百九十三萬三千二百八十二圓追加—不成立).....

一七七

第三十一節

大正四年度ニ於テ軍備補充費繼續費九千三百九十四萬六千九百十

四圓追加(成立).....

一八六

第三十二節

大正四年海軍大臣提議、海軍軍備補充ニ關スル議(軍備補充費追加三

億六千四百二十九萬千七百四十四圓案——大正五年度ニ於テ四千三百二十三萬八百九十九圓追加成立——其他ハ大正六年度ヨリ實行ノコトトス).....

一九〇

第三十三節 大正六年度豫算案ニ於テ軍備補充費繼續費二億六千六十四萬千七百九十三圓追加(不成立).....

一一〇一

第三十四節 大正六年度豫算追加案ニ於テ軍備補充費繼續費二億六千五百十二萬千百六十圓追加(所謂八四艦隊完成案——成立).....

一一〇六

第三十五節 地中海方面派遣驅逐艦ニ對スル代艦建造(大正六年ニ於テ臨時軍事費支辨千十八萬七百五十二圓——大正六年五月勅裁濟).....

一一一八

第三十六節 大正七年度豫算追加案ニ於テ軍備補充費繼續費三億五十四萬八千四百三十七圓追加(所謂八六艦隊完成案——成立).....

一一一九
造船造兵及修理費ヲ大正七年度以降準備軍需品費ニ組替ノ爲メ軍備補充費既定額ヨリ四千四百五十一萬三千百十一圓ヲ減ス

一一一九

第三十七節 大正八年度乃至十年度ニ於テ輕巡洋艦二隻建造ノ議不成立.....

一一三一

第三十八節 軍艦製造費豫算ニ關スル覺書.....

一一三二

第三十九節 大正八年度軍艦製造費追加(物價騰貴ニ依リ五千二百五萬九百五十八圓追加——成立).....

一一三四

第四十節 大正八年度軍艦製造費ノ補足(繼續費外トシテ二千七百三十九萬四

附

- 千七百三十八圓支出) 一一三五
- 第四十一節 大正八年海軍大臣請議、軍備充實ノ議(大正九年度以降十六年度迄軍
艦製造費七億六千百十一萬二千百五十二圓追加)所謂八八艦隊完
成案—成立) 一一三六
- 第四十二節 大正九年度軍艦製造費追加(物價騰貴ニ依リ三千七百六萬六千七百
五圓追加)成立 一一五〇
- 第四十三節 大正十年度軍艦製造費追加(物價騰貴ニ依リ一億五百五萬百十二圓
追加)成立 一一五一
- 第四十四節 軍備補充費設定以後ニ於ケル同費豫算ノ更訂及支出經過ノ概要 一一五二

- 第一 製艦一覽表
- 第二 艦船年表
- 第三 艦船種類別規準沿革撮要
- 第四 軍艦累年一覽
- 第五 驅逐艦累年一覽
- 第六 水雷艇累年一覽
- 第七 海軍人員累年一覽
- 第八 海軍經費累年一覽

海軍軍備沿革

海軍編修 淺井將秀編

第一章 明治初年以後明治二十七八年戰役迄

第一節 明治維新當時ニ於ケル海軍所管艦船

明治維新海軍創業當時ニ於ケル艦船ハ概々幕府及諸藩ヨリ收納セルモノニ係リ五年二月海軍省設置ノ日其管理ニ屬スル艦船大小合シテ十七隻ヲ算セリ

軍艦

日進	揚春	雲龍	東筑	士富	波士	山富	日進

一三五八噸

二五三〇噸

一九七八噸

一〇〇〇噸

一二六九噸

二四五噸

一四六八噸

第一丁卯	一二五噸
第二丁卯	一二五噸
鳳翔	三一六噸
孟春	三五七噸
乾行	五二三噸
千代田形	一三八噸
攝津	九二〇噸
運送船	四四〇噸
大坂	八八五噸
春快	六年五月二日肇敏ト改名
風	一五五噸
合計	一三八三二噸
十七隻	

(編者註)

是ヨリ先キ明治元年正月十七日始メテ海陸軍務課ヲ置キテ海陸軍ヲ管シ二月三日海陸軍務課ヲ廢シテ軍防事務局ヲ置キ閏四月二十一日軍防事務局ヲ廢シテ軍務官ヲ置ク當時軍務官ニ管スル所ノ艦船ハ左ノ如シ

軍艦十一隻

和泉、河内、武藏、攝津、甲鐵ト改名後チ東、朝陽、翔鶴、富士山、觀光、陽春、千代田形

運送船八隻

咸臨、長鯨、鳳凰、立象、開運、飛隼、飛龍、快風

而シテ前掲ノ外尙ホ當時諸藩ノ所有ニ係ル艦船三十五隻アリ(此隻數ハ諸藩ヨリノ申牒ニ據ルモノニシテ遺漏アルモ亦未タ知ル可カラス、四年七月十四日藩ヲ廢シテ縣ヲ置クニ及ヒ艦船ノ所屬統一ニ歸セリ)

二年七月八日軍務官ヲ廢シテ兵部省ヲ置キ海軍及陸軍ヲ管シ五年二月二十七日兵部省ヲ廢シテ陸軍省海軍省ヲ置ケリ

第二節 明治三年兵部省建議、製艦計畫(不成立)

明治三年兵部省製艦ノ議ヲ建ツ其要ニ曰ク

軍艦二百隻、運送船二十隻ヲ製造スルコトトシ二十箇年ヲ以テ之レカ完成ヲ期シ尙ホ完成ノ後ト雖モ毎年十隻宛ノ新艦ヲ製造シ終始新陳代謝シテ其勢力ヲ維持セシメントスト此議當時行ハルニ至ラサリシモ製艦計畫ノ權輿ナリトス

第三節 明治六年左院ノ諮詢ニ對シ提議セル

海軍卿ノ製艦計畫(不成立)

明治六年一月左院ノ諮詢ニ對シ海軍卿勝安芳ハ左ノ製艦計畫ヲ提議セリ

甲鐵艦二十六隻、大艦十四隻、中艦三十二隻、小艦十六隻、運送船八隻、練習船二隻、帆前運送船六隻、計百四隻ヲ以テ海軍ノ全勢力ト爲シ十八箇年ヲ以テ整備ヲ期セントス此議實施ニ至ラサリキ

第四節 明治八年軍艦三隻ヲ英國ニ註文ス

明治八年四月十五日海軍大輔川村純義(當時海軍卿缺員大輔省務ヲ攝ス)ハ軍艦三隻ヲ英國造船會社ニ註文ノ議ヲ請ヒ同年五月二日其聽許ヲ得タリ之ニ基キ建造セルモノ左ノ如シ

甲鐵艦	一隻(扶桑艦)	建造費(通貨)	百三十九萬四千七百四十四圓餘
鐵骨木皮艦	二隻(金剛艦、比叡艦)	同	百七十二萬千九十五圓餘
計	三隻	同	三百十一萬五千八百三十九圓餘

右三艦ハ八年九月起工、十一年竣工セリ

此建造ノ動機ハ明治七年佐賀ノ役及征臺ノ役アリ尋テ清國トノ交渉起リ軍艦増備ノ急ヲ告ケ二隻ヲ英國及和蘭國ヨリ購入セントノ議アリシモ暫ク之ヲ忍ヒ新ニ堅艦ヲ造ルヲ得策ナリトシ茲ニ本議ニ出テタルモノナリ蓋シ明治海軍創始以來斯ク勢力アル軍艦ヲ加ヘタルハ之ヲ以テ嚆矢ト爲ス

第五節 明治十四年海軍卿請議、軍艦製造及造

船所建築計畫(不成立)

明治十四年十二月二十日海軍卿川村純義ハ軍艦製造及造船所建築ニ關シ大要左ノ主旨ノ請議ヲ爲セリ

先ツ國防上海軍ノ地位ヨリ說キ起シ現有艦船ノ狀態ニ及ヒ逐次廢艦ニ歸スルモノ多ク荏苒推移セハ退歩ヲ免レサルヘキヲ憂ヒ海外各國ノ軍備施設ニ鑑ミ我國亦今ニ於テ相當ノ設備ヲ爲スノ急務ヲ論シ歲入四分ノ一ヲ軍備ニ充ルノ英斷ヲ以テ廟議ヲ仰クト云フニアリ而シテ軍艦製造及造船所建築ニ關シ左ノ具體計畫ヲ策案シ之レカ實施ヲ期セントス

軍艦製造

第一期 六十隻新造

明治十五年度以降毎年三隻宛新造シ二十箇年ヲ以テ六十隻ヲ得ントス此總費額四千十四萬三百四十圓ナリ

第二期

第一期終ルノ後其方案ヲ立ントス

造船所建築

現下横須賀造船所ハ内外修復ノ艦船輒湊シ工事繁忙ヲ極メ毎年一隻ノ軍艦ヲ竣工セシ

ムルノ外餘力ナキカ如シ依テ西部邊海ノ良灣ヲ選ヒ先ツ一造船所ヲ新設セントス此費額ヲ三百萬圓トシ五箇年ヲ以テ完成ノ計畫ナリ

此議實施ニ至ラサリシカ後出、軍艦製造費ノ設定及海軍公債ノ因ト爲レリ

第六節 明治十四年海軍卿請議、船舶會社ヲ保

護シテ海軍ノ輔翼ニ充ルノ議

明治十四年十二月二十日川村海軍卿ハ船舶會社ヲ保護シ其所有ノ船舶ヲ以テ海軍ノ輔翼ニ充ルノ議ヲ三條太政大臣ニ提出セリ其大要ニ曰ク

現有海軍艦船ハ軍艦名ヲ帶フルモノ二十隻、蒼龍丸、石川丸ノ如キ船名ヲ帶フルモノ三、四隻ニ過キス其中、真ニ軍艦タルノ用ニ適スルモノ甚タ少シ、今茲軍艦製造及造船所建築ノ議ヲ建テタリト雖モ之レカ完成ヲ期スルハ幾多ノ星霜ヲ閱セサル可ラス幸ニシテ該建議ノ容認セラレテ六十隻ノ新艦ヲ得ルトスルモ未タ以テ完全ナル海軍ト爲スニ足ラサルナリ是ヲ以テ他ニ又海軍ヲ輔翼スルノ方法ヲ講スルノ要アリ乃チ外國ノ例ニ倣ヒ民間船舶會社ニ特別ナル保護ヲ與ヘ一ハ以テ海運ヲ獎勵シ一ハ以テ海軍ノ輔翼ニ充ルノ便ヲ圖ラントス云々

翌明治十五年共同運輸會社ノ設立ヲ見タルハ蓋シ本議ニ起因スルモノナリ

第七節 明治十五年海軍卿請議、軍艦製造計畫

(十六年度以降軍艦製造費設定ノ起因)

明治十五年十一月十五日川村海軍卿ハ軍艦製造ノ議ヲ提出セリ其大意ニ曰ク
東洋ノ形勢前日ノ比ニ非サルヲ以テ二十箇年ヲ期シ六十隻ヲ新造スルノ計畫(第五節ニ出ツ)
ヲ改メ左ノ如ク整備セントス

四十八隻新造

毎年六隻宛八箇年ヲ期シ四十八隻ヲ得、餘ノ十二隻ハ暫ク現有艦中ヨリ選ヒテ豫備トシ
八箇年後ニ於テ新造セントス

此毎年六隻製造費銀貨四百二萬圓ニシテ又六艦ノ維持費ハ一箇年通貨六十九萬四千六
百四十六圓四十錢ヲ要シ毎年六隻ヲ追加シ第八年目ニ於テハ通貨五百五十五萬七千百
七十一圓二十錢ヲ要スル割合ナリ云々
此議十六年度以降ニ於テ軍艦製造費設定ノ因ヲ爲セリ

第八節 明治十五年陸海軍整備ノ御沙汰

(十六年度以降軍艦製造費ノ設定)

明治十五年十二月二十五日三條太政大臣ヨリ諸省卿ニ對シ陸海軍整備ノ御沙汰ヲ傳フ其大意
ニ曰ク

戊辰以來民力ヲ休養シ根本ヲ培殖シ偏ニ内政ノ急ヲ思食サル然ルニ方今宇内ノ形勢ニ於

テ陸海軍ノ整備ハ實ニ已ムヲ得サルノ事宜ナリ因テ此際時ニ措クノ宜キヲ酌定シ國家ノ長計ヲ誤ラサル様精々廟議ヲ竭スヘシ

同日三條太政大臣ヨリ諸省卿ニ對シ庶務節略ノ達アリ其大要左ノ如シ

維新日淺ク民力未タ舒ヒサルノ際事宜已ムヲ得サルノ急務ニ依リ陸海軍整備ニ關シ別紙(前出)ノ通仰出サレ候就テハ深ク

宸襟ヲ憐マセラレ候條此際各廳ニ於テ不急ノ庶務ヲ節略シ深重ノ聖旨貫徹候様致ス可シ

右ハ蓋シ海軍卿ノ請議(前第七節ニ出ツ)及陸軍卿ノ請議(陸兵増加費及東京灣砲臺建築費ノ請議アリシモノナリ乃チ右御沙汰ノ發布ト同時ニ前述海陸軍兩卿ノ請議ヲ太政大臣ヨリ大藏卿ニ下附シテ意見ヲ問ハル之ニ對スル大藏卿松方正義ノ答議ニ曰ク

増稅ノ概額取調前途支出ノ方法審案規畫候處造酒煙草等ノ諸稅額一箇年凡七百五十萬圓ヲ收入シ得ヘキ見込ニ有之而シテ軍艦維持費ハ逐年艦數ノ增加ニ隨テ其額相嵩ミ候ニ付前年ニ有餘ヲ存シ後年ノ不足ヲ補フヘキ一種ノ經畫ヲ要シ且ツ方今ノ如ク内國銀貨缺乏ノ際ニ在テハ海軍卿上請ノ如キ巨額ノ銀貨目下支辨ノ道無之候間新艦製造費ハ先以テ年々通貨三百萬圓ヲ目的トシ其銀貨ヲ要スル分ハ總テ時價交換取計ラヒ、陸兵増加費ハ年々通貨百五十萬圓ヲ目的トシ右新艦維持ニ係ル費用及東京灣砲臺建築ニ關スル一切ノ費用ハ前同様ノ振合ヲ以テ増稅金中ヨリ別途支辨ノ事ニ致度、右御裁可ノ上ハ準備金中新タニ軍備部ヲ置キ該

七百五十萬圓中交付ノ殘額アル年ハ該部ニ移シテ國庫ニ管守シ不足ノ年ハ該部ヨリ支出補填スルノ一法ヲ設ケ而シテ該部中ノ金額ハ誓テ陸海軍更張並臨時非常ニ際シ該軍費ノ外一切支出ヲ禁シ今般増稅ノ御趣意後年迄屹度貫徹候様致度云々

同年十二月三十日三條太政大臣ヨリ海軍省ニ左ノ内達アリ

軍備皇張ノ儀被仰出候ニ付新艦製造ノ儀明治十六年度以降年額通貨三百萬圓ヲ目途トシ年々製造スヘキ艦船ノ種類及製造費ハ支出年度ノ割合並新製ノ軍艦維持ノ費用等取調可申出尤今般獨逸國ヨリ買入候軍艦ノ代價モ右年額ノ内ヨリ支出候儀ト心得ヘシ

但年額ニ餘贏アルトキハ大藏省ニ於テ之ヲ軍備金ニ組入置候等

右ニ對シ明治十六年二月二十四日川村海軍卿ヨリ稟議シテ裁可ヲ得タリ稟議ノ大要左ノ如シ新艦製造費トシテ十六年度以降毎年下附セラルヘキ三百萬圓ニ今回許可セラレタル從來海軍省定額經費中ノ艦船新造費三十三萬圓ヲ分割合算シテ年額三百三十三萬圓トシ之ヲ以テ先ツ八箇年間ニ製造整備スヘキ艦數種類ヲ左ノ如ク豫定ス

大艦	五隻	通貨	七百五十萬圓
中艦	八隻	同	七百八十萬圓
小艦	七隻	同	二百五十二萬圓
水雷砲艦	十二隻	同	八百八十二萬圓
計	三十二隻	同	二千六百六十四萬圓

而シテ新艦(常備軍艦)維持費ハ平均一隻年額十一萬五千三百八十六圓十三錢ノ算當ナリトス
因ニ記ス川村海軍卿ハ前述八箇年計畫三十二隻新造ノ稟議ヲ爲スニ先チ明治十六年二月六日
製艦年度ノ短縮ニ關シ大要左ノ如キ提議ヲ爲セシカ此議行ハレサリキ

軍艦ノ製造ハ起工着手ヨリ竣工整備マテ少クモ二箇年ノ日子ヲ要ス故ニ八箇年計畫ニテモ
實際十箇年ヲ經過セサレハ三十二隻ヲ整備スル能ハス然ルニ東洋ノ形勢ヲ察スルニ現下益
々軍艦整備ノ急ヲ告クルモノアリ依テ八箇年ヲ四箇年ニ短縮シ五箇年ヲ以テ三十二隻ノ整
備ヲ完成セントス云々

乃チ如上十六年度以降八箇年計畫三十二隻整備案ノ實行ニ進ミタルナリ而シテ當時其計畫ヲ
定ムルニ際シ左ノ方案ニ基準セリ

(現有及製造中ノモノ)

(新造スヘキモノ)

大艦	六隻	
中艦	十二隻	
小艦	十二隻	
水雷砲艦	十二隻	
計	(十隻)	三十二隻

十六年五月二十五日川村海軍卿ハ新艦製造費総上支出ノ議ヲ稟請シ同月二十八日裁可ヲ得タ
リ稟請ノ大意ニ曰ク

十六年度ニ於テ曩ニ横須賀造船所ニ於テ起工ノ天龍艦ヲ整頓シ且ツ英國「ニユウカツスル」ニ在ル軍艦一隻ヲ購求シ葛城外五艦ノ新製ニ着手シ十八年度ニ至リ都合八隻ヲ整備致度目論見ニ有之然ル時ハ造船艦裝兵器其他ノ費用ヲ込メ十六年度ニ於テ百五萬四千三百七十九圓九十五錢六厘、十七年度ニ於テ二百十一萬二千二百四十七圓九十九錢、十八年度ニ於テ九十一萬五千二百八十二圓七厘ノ不足ヲ生ス依テ十六年度不足額ハ十七年度ヨリ、十七年度不足額ハ十八年度ヨリ、十八年度不足額ハ十九年度ヨリ繰上支出セラレ度云々
斯クテ十六年度十七年度十八年度ニ於テ製造ニ着手シ又ハ購入セルモノハ左ノ如シ

大艦

三隻 滑速、高千穗、敵傍

中艦

五隻 葛城、高雄、大和、武藏、筑紫

小艦

三隻 愛宕、鳥海、摩耶

計

十一隻

葛城、武藏ハ十五年度ニ於テ着手セルモノナルモ其費額本費ノ負擔ニ係ルモノ大部ナルヲ以テ茲ニ組入レタリ

右ノ外、航洋水雷艇小鷹(百五十噸)一隻ヲ製造セリ

我國ニ於テ水雷艇ヲ製造セシハ明治十三年第一號ヲ英國「ヤーロー」會社ニ註文セルヲ創始トス次テ同型ノモノ第二號、第三號、第四號ノ三隻ヲ同會社ニ註文セリ、當時ノ水雷艇ハ其後世ニ行ハレタル水雷艇型ノ嚆矢ナリト雖モ魚形水雷ノ未タ用キラレサリシ爲メ其水雷艇ニハ艇首ニ外裝水雷ヲ裝備セリ既ニシテ魚形水雷ヲ水雷艇ニ裝備スルノ法歐洲ニ行ハルニ至リ

四箇ノ魚形水雷發射管ヲ裝備セルモノヲ「ヤーロー」會社ニ註文セリ之ヲ小鷹トス
然ルニ其後列國海軍進歩ノ趨勢ニ鑑ミ我國亦海軍整備計畫ヲ增大スルノ議起リ普通歲入ニテ
ハ到底之ニ應スル能ハス遂ニ海軍公債ニ由リ整備ノ道ヲ講スルコトト爲リ本費豫定ノ計畫ハ
中途變更スルノ已ムナキニ至リ本費ハ九百餘萬圓ノ支出ニ止マリ爾餘新計畫ニ依ルコトトナ
レリ但シ本費ニテ着手セル艦艇ハ前出浪速以下諸艦艇ノ外尙ホ次節ニモ出ツ參照ヲ要ス

第九節 明治十八年海軍卿請議、軍艦整備計畫

改定

(海軍公債發行—別途費—特別費ノ設定)附十六年度

以降既定軍艦製造費ノ聯繫

明治十八年(月日佚ス)川村海軍卿ハ三條太政大臣ニ大要左ノ提議ヲ爲セリ

十六年度以降八箇年計畫軍艦三十二隻新造ノ豫定ヲ以テ進行中ノ處造船技術ノ進歩ト兵器
製式ノ改良トニ伴ヒ茲ニ其計畫ヲ改定スルノ要アリ例セハ英、佛、伊ニ於ケル新戰艦ノ如キ其
構造著シク改良セラレ排水量及裝甲鐵ノ增大等到底我艦ノ比ニアラス則チ我亦相當ノ甲鐵
艦ヲ備ヘサル可ラス而シテ甲鐵艦ノ外巡洋艦、砲艦、水雷艇ノ整備ヲ要ス其計畫左ノ如シ

(現有及製造中ノモノ充當) (新造スヘキモノ)

一等巡洋艦	十六隻	十二隻
二等巡洋艦	十二隻	<small>(扶桑、浪速、高千穂、筑波、大和、金剛、海門、天龍、葛城、愛宕、摩鹿加、那須、秋津洲)</small>
砲艦	二十四隻	五隻
水雷運輸船	四隻	十九隻
一等水雷艇	十二隻	
二等水雷艇	三十二隻	
計	百八隻	

此整備費額通貨七千五百五十一萬四千二百四十二圓トス

十六年度以降八箇年計畫軍艦製造費二千六百六十四萬圓中既ニ支出セシ高及將來支出スヘキ高(十八年末ノ計算)ノ合計一千百四萬三千八百圓ナルヲ以テ其殘額千五百五十九萬六千二百圓ヲ今回計畫ノ整備費ニ充當スルモ尙ホ五千九百九十一萬八千四十二圓ノ増額ヲ要ス
若シ今後ノ造艦ヲ既定ノ軍艦製造費額ニ限ルトセハ甲鐵艦ノ製造ヲ止メ巡洋艦砲艦等二十二隻、水雷艇二十四隻、裝甲水雷船十八隻ヲ新造セントス
兩者其採擇ヲ請フ云々

是レヨリ先キ明治十四年十二月二十日川村海軍卿ハ三百萬圓ヲ以テ五箇年ヲ期シ西海ニ一ノ造船所ヲ建設スルノ議ヲ建テ(第五節參照)尋テ十六年二月十四日再ヒ前議造船所新設ノ外、西海鎮守府設置費二十四萬八千圓及水雷布設費別途請求ノ稟申ヲ爲シ十八年三月十七日更ニ西海

ニ設置セラルヘキ鎮守府造船所等ノ位置ヲ吳港若クハ江田灣ノ内ニ選定スルノ案ヲ具シ地所買收費十萬二、三千圓ヲ十八年度ニ於テ支出シ鎮守府及兵營病院倉庫武庫獄舎等ノ建築費二十四萬八千圓及造船所建築費三百萬圓(前記三百萬圓ノ内ニ含有セシム)ハ十八年度以降五箇年間ニ支出セラレンコトヲ請議シ該請議ニ對シテハ吳港及江田灣兩所ノ内ニ就キ設置場所ニ關シ海軍省ノ意見ヲ定メ更ニ申出ヘキ旨十八年四月六日指令ヲ得タリ

然ルニ當時ニ於ケル國帑ノ状態ハ普通歲入ニテハ十九年度以降五箇年間ノ軍艦製造費ヲ支出スル能ハサルニ至リ且海軍整備ノ事業ハ獨リ軍艦製造ノミニアラス鎮守府設置海防水雷敷設等皆焦眉ノ急ニ屬シ其着手ヲ要スル等ノ事情アルニ鑑ミ翌十九年ノ初メ閣議(十八年十二月二日官制ノ更革アドリ從前諸省太政官ニ隸屬スルノ制ヲ改メ内閣ヲ以テ諸宰臣會議御前ニ事ヲ奏スルノ所トシ太政大臣左右大臣參議各省卿ヲ廢シ内閣總理大臣及外務内務大藏陸軍海軍司法文部農商務遞信ノ諸大臣ヲ置キテ内閣ヲ組織シ内閣總理大臣ハ内閣ノ首班トシテ大政ニ參シ専ラ中外ノ権機ニ當リ旨ヲ承ケテ宣奉シ以テ全局ノ平衡ヲ保持シ各部ノ統一ヲ得シメ諸大臣ハ入テハ大政ニ參シ出テハ各省ノ事ヲ管理統督スルノ制ト爲ス又宮中ニ内大臣ヲ置キ御璽國璽ヲ尚藏シ常侍輔弼シ及宮中顧問官ノ議事ヲ總提セシム、同日三條公ハ内大臣ニ伊藤博文伯ハ内閣總理大臣ニ西郷從道伯ハ海軍大臣ニ任シ其他諸大臣亦夫レ(任命アリ)

海軍公債證書條例ハ明治十九年六月十二日御裁可同月十五日官報ヲ以テ公布セラル其第一條ニ於テ海軍公債證書ハ海軍軍備ノ費途ニ充ツル爲メ一千七百萬圓ヲ限り三箇年間ニ漸次之ヲ發行スルコトヲ示セリ

是ニ於テ海軍省ハ已ムヲ得ス計畫ヲ變更シテ左ノ艦艇ヲ建造スルコトニ決セリ

一等海防艦	二隻	合計一二〇〇〇噸
二等海防艦	四隻	同一六〇〇〇噸
一等甲鐵艦	一隻	九〇〇〇噸
海岸用甲鐵艦	一隻	
一等巡航艦	一隻	六〇〇〇噸
二等巡航艦	一隻	四〇〇〇噸
三等巡航艦	二隻	五〇〇〇噸
一等報知艦	二隻	三五〇〇噸
二等報知艦	四隻	同
一等砲艦	二隻	五〇〇〇噸
二等砲艦	六隻	一六〇〇噸
一等水雷艇	十六隻	三〇〇〇噸
二等水雷艇	十二隻	同

九〇〇〇噸
(此
隻內
ヲニ
算入
現
ス在
ノ)

計

五十四隻

六六三〇〇噸

第一期軍備
擴張ト稱ス
ルモノ

嚴島以下六
艦及水雷艇
ノ製造

此計畫ヲ第一期軍備擴張ト稱セリ、此計畫ノ内十八年度以降(軍艦製造費ヲ以テ着手セルモノア
ルヲ以テ暫ク十八年度以降トナセリ)特別費ヲ以テ着手セル艦艇ハ左ノ如シ(此内八重山ヲ除ク
ノ着手ニ係ル但其費用僅少ナ
ルヲ以テ特別費ニ入レタリ)

二等海防艦

嚴島、松島、橋立

一等報知艦

八重山

二等報知艦

千島

砲艦

赤城

一等水雷艇

十六隻(各五三噸)

水雷艇ハ佛國クルーゾー「シユネーダー」社ニ註文シ始メハ十七隻ノ處後十六隻ニ改メ其二
隻ハ「ノルマン」社ニ註文セリ、但シ内三隻ハ前記計畫ノ外ニシテ對州海防ニ使用ノ目的ナル
ヲ以テ海防水雷費ノ款ヨリ二十年度ヨリ二十五年度ニ亘リ十八萬二千四百四十九圓十九
錢七厘ヲ支出シテ製造セリ

尙ホ茲ニ軍艦製造費ノ支出ト別途費一特別費ノ支出トヲ明カニセンカ爲メ以下之ヲ記述スル
所アラントス

軍艦製造費ハ前記特別費(初メ別途費ト稱セシモ後チ特別費トシテ特別費ト)
起工ノ艦艇ニ費シタルノミナラ
ス該製造費ノ支出決定前製造ニ着手セル海門、天龍ノ二艦及既成ノ軍艦扶桑、金剛、比叡、迅鯨等

軍艦製造費
ノ特
支
出
經
緯
ト

千歳傍亡沒、
千代田製造

富士山、肇
ノ老朽

滿珠、干珠
ノ製造

千島ノ沈沒

軍艦
ト特別費
ト割合
ノ支出

ノ兵裝改良ト練習専用ノ木製帆前軍艦滿珠、干珠ノ二隻及小蒸氣船端舟ノ製造ト舊艦ニ要ス
ル兵器ノ製造等ニモ之ヲ支出セリ
十七年佛國ニ註文シテ製造セル歟傍艦十九年本邦ニ回航ノ途次新嘉坡ヨリ本邦ニ至ル間ニ
於テ亡沒二十年其保險金百二十四萬五千三百九圓七十七錢五厘ヲ收ム此代艦トシテ巡洋
艦千代田ヲ製造セリ

帆走練習ノ專用ニ供スル富士山、肇敏ノ二艦逐年老朽ニ赴キ其代艦必要ナルモ新製ノ艦船ハ
他ニ須要ノ役務アリテ帆走練習ニ代用スルコトヲ得サルノミナラス裝帆ナキモノ多キト近
時ノ艦船ハ皆鐵製ナルヲ以テ年來貯蓄ノ艦材今後需要少ク之ヲ利用スルノ得策ナルトノ理
由ニ依リ滿珠、干珠ノ二隻(帆走練習専用木製軍艦、共ニ八百七十七噸ニシテ小野濱造船所ニ於
テ建造)ヲ製造セリ

特別費ノ計畫ニ係ル二等報知艦千島ハ二十二年佛國ニ註文製造シ本邦ニ回航ノ途次二十五
年十一月三十日愛媛縣堀江沖ニ於テ英國商船「ラヴェンナ」號ト衝突沈沒セリ

英國ヨリ購買ノ軍艦筑紫(第八節ニ出ツ)ハ悉皆軍艦製造費ノ支辨ニ係ル其他第八節ニ掲ケタ
ル浪速高千穂等ノ十艦及本節ニ見ユル滿珠、干珠ノ二艦竝ニ十五年度以前着手ノ海門、天龍ノ
二艦ニ就キ費用支出ノ割合ヲ示セハ左ノ如シ

筑紫 軍艦製造費ニテ悉皆支辨

浪速 軍艦製造費百分ノ九十七

特別費百分ノ三

高千穂 軍艦製造費百分ノ九十八

特別費百分ノ二

大和 同 八十五

同

葛城 同 八十

同

武藏 同 六十九

同

摩耶 同 五十一

同

畠傍 同 三十六

同

鳥海 同 三十五

同

高雄 同 二十三

同

愛宕 同 十七

同

満珠 同 三

同

千珠 同

同

三

同

九十七

以上葛城、武藏ハ十五年度以前着手ニ係ルモ十六年度以降計畫ノ隻數中ニ算入ス其他皆十六年度以降計畫着手ノモノナリ

海門 軍艦製造費百分ノ十二

特別費百分ノ一未滿十五年
以前
經費

百分ノ八十八弱

天龍 同 五十六

特別費百分ノ一

同

百分ノ四十三

以上二艦ハ十五年度以前着手ニ係ル

右十五隻ニ對スル軍艦製造費ハ十六年度ヨリ二十一年度即チ六箇年度ニ亘リテ支出シ之

軍艦製造費支出年度別及艦船別等ヲ左ニ表示ス

(完結セリ) (外ニ嚴島、松島、橋立、赤城、千島ノ五艦ニ對シテモ亦軍艦製造費ヲ以テ茲ニ割合ヲ省略ス)

軍艦製造費支出年度別

年 度	豫 算 額	各 年 度 增 額	減 額	流 用	前 年 度 緑 越 金		翌 年 度 緑 越 金	現 豫 算 額	支 出 額	削 除 減 額
					度	度				
十六年度	三,三〇〇,〇〇〇,〇〇〇円	一,〇四〇,〇〇〇,〇〇〇円	一,〇四〇,〇〇〇,〇〇〇円	八四〇,〇一〇,〇〇〇円	八四〇,〇一〇,〇〇〇円	八四〇,〇一〇,〇〇〇円	八四〇,〇一〇,〇〇〇円	一,〇四〇,〇〇〇,〇〇〇円	一,〇四〇,〇〇〇,〇〇〇円	一,〇四〇,〇〇〇,〇〇〇円
十七年度	三,二七〇,〇〇〇,〇　〇円	一,〇一〇,〇〇〇,〇　〇円	一,〇一〇,〇〇〇,〇　〇円	九〇〇,〇〇〇,〇　〇円	九〇〇,〇〇〇,〇　〇円	九〇〇,〇〇〇,〇　〇円	九〇〇,〇〇〇,〇　〇円	一,〇一〇,〇〇〇,〇　〇円	一,〇一〇,〇〇〇,〇　〇円	一,〇一〇,〇〇〇,〇　〇円
十八年度	三,二四〇,〇　〇,〇　〇円	一,〇一〇,〇　〇,〇　〇円	一,〇一〇,〇　〇,〇　〇円	九〇〇,〇　〇,〇　〇円	九〇〇,〇　〇,〇　〇円	九〇〇,〇　〇,〇　〇円	九〇〇,〇　〇,〇　〇円	一,〇一〇,〇　〇,〇　〇円	一,〇一〇,〇　〇,〇　〇円	一,〇一〇,〇　〇,〇　〇円
十九年度	三,二一〇,〇　　,　　　円	一,〇一〇,　　　,　　　円	一,〇一〇,　　　,　　　円	九〇〇,　　　,　　　円	九〇〇,　　　,　　　円	九〇〇,　　　,　　　円	九〇〇,　　　,　　　円	一,〇一〇,　　　,　　　円	一,〇一〇,　　　,　　　円	一,〇一〇,　　　,　　　円
二十一年度	三,一八〇,　　　,　　　円	一,〇一〇,　　　,　　　円	一,〇一〇,　　　,　　　円	九〇〇,　　　,　　　円	九〇〇,　　　,　　　円	九〇〇,　　　,　　　円	九〇〇,　　　,　　　円	一,〇一〇,　　　,　　　円	一,〇一〇,　　　,　　　円	一,〇一〇,　　　,　　　円
總計	九,六〇〇,〇　　,　　　円	一,〇一〇,　　　,　　　円	一,〇一〇,　　　,　　　円	九〇〇,　　　,　　　円	九〇〇,　　　,　　　円	九〇〇,　　　,　　　円	九〇〇,　　　,　　　円	一,〇一〇,　　　,　　　円	一,〇一〇,　　　,　　　円	一,〇一〇,　　　,　　　円

(備考) 現豫算額ハ翌年度へ繰越タル金額ヲ除算シタルモノナリ

軍艦製造費支出艦船別

艦 名	十六年度	十七年度	十八年度	十九年度	二十年度	二十一年度	合 計
葛城藏和雄門	三,六〇〇,〇　　,　　　円	三,四〇〇,〇　　,　　　円	三,二〇〇,〇　　,　　　円	三,〇〇〇,〇　　,　　　円	二,八〇〇,〇　　,　　　円	二,六〇〇,　　　,　　　円	一,〇一〇,〇　　,　　　円
大和	一,〇一〇,〇　　,　　　円	一,〇一〇,　　　,　　　円					
雄門	一,〇一〇,　　　,　　　円						
高城	一,〇一〇,　　　,　　　円						
大和	一,〇一〇,　　　,　　　円						
武藏	一,〇一〇,　　　,　　　円						
海城	一,〇一〇,　　　,　　　円						
葛城	一,〇一〇,　　　,　　　円						

雷

千

郵 小 蒸 汽 船 端 舟 等 千 橋 松 嚴 赤 迅 比 金 扶 水 干 滿 小 鳥 摩 爱 筑 敵 浪 天
雷 千 島 立 島 島 城 鯨 叢 剛 桑 船 珠 珠 鷹 海 耶 宕 紫 傍 穗 速 龍

第十節 特別費支出ノ經過

特別費ハ前既ニ叙述セルカ如ク海軍公債ノ財源ニ依リ明治十九、二十、二十一ノ三箇年度ニ於テ
海軍整備ニ使用スル目的ヲ以テ設定セラレタルモノニシテ二十二年度以降ニ繰越シ二十三年
度ニ於テ國庫繰入金ヲ以テ其不足ヲ補ヒ前年度ノ繰越金ト共ニ尙ホ後年度ニ繰越シ二十七年
度ニ至リ十九年度以降造船費支出總額千七百四十三萬二千二百二十圓三十八錢六厘ヲ算シ之
ヲ以テ完結ヲ告ケタリ

其支出ノ經過左ノ如シ

費目	當初豫算額	決定豫算額	決算額	不通用額
造船費	一六,九六八,一九〇八八三	一八,一〇一,一五五四五五	一七,四三三,三三〇八六	六六九,九三六
吳鎮守府設立費	一、五五三,一九五四七	一、五六三,六五三,五四三	一、五五三,五八五,六五五	一七三
佐世保鎮守府設立費	八四二,四八一五〇九	八四二,五〇五,〇〇九	八四二,五〇五,〇〇九	八四二
海防水雷費	一、一九九,九九〇一八	一、三三六,七七一,七七九	一、三三七,〇七六	一、三三七
火藥製造所建築費	二六〇,九九三,四六七	二六〇,九九三,四六七	二二六	二二六
長浦灣堀割費	一〇〇,〇〇〇四〇〇	一〇〇,〇〇〇四〇〇	一〇〇,〇〇〇四〇〇	一〇〇,〇〇〇四〇〇

總	造船所營業資本	火器費	兵器費	學校設立費	兵費
				二一、三九三	000
				二一、六〇五	000
				二八、四三九	000
				六一、八三七	000
				四九、五三三	000
				三三、〇一九	000
				三三、一七八	000
				七五〇	000
					一、九三〇
					五五七
					一〇九、九六〇
					七六六
					一一〇、六三八
					九九三
					一
					一
					一

特別費中、造船費支出年度別

年 度	豫 算 額	豫 算 額		現 豫 算 額	決 算 額	不 用 額
		綠 年 額	前 年 度			
十九 年 度	三、八三、五〇五 四、五九、三六四 四、五五、九二一 三、〇六八、七〇五 一、五九五七、〇〇三 五七四	三、八三、五〇五 四、五九、三六四 四、五五、九二一 三、〇六八、七〇五 一、五九五七、〇〇三 五七四	一〇〇〇 一〇〇〇 一〇〇〇 一〇〇〇 一〇〇〇 一〇〇〇	一〇〇〇 一〇〇〇 一〇〇〇 一〇〇〇 一〇〇〇 一〇〇〇	一〇〇〇 一〇〇〇 一〇〇〇 一〇〇〇 一〇〇〇 一〇〇〇	一〇〇〇 一〇〇〇 一〇〇〇 一〇〇〇 一〇〇〇 一〇〇〇
二十 年 度	—	—	—	—	—	—
二十 一 年 度	—	—	—	—	—	—
二十 二 年 度	—	—	—	—	—	—
二十 三 年 度	—	—	—	—	—	—
二十 四 年 度	—	—	—	—	—	—
二十 五 年 度	—	—	—	—	—	—
二十 六 年 度	—	—	—	—	—	—
二十 七 年 度	—	—	—	—	—	—
合 計	—	—	—	—	—	—

特別費中、造船費各艦船支出別

第十一節 明治二十一年海軍大臣提議、海軍臨時

費ノ請求

(二十二年度起業軍艦製造費及兵器水雷費ノ設定)

明治二十一年二月(日佚ス)海軍大臣伯爵西郷從道ハ第二期海軍臨時費請求ノ議ヲ内閣總理大臣伯爵伊藤博文ニ提出セリ是レ前叙ノ第一期軍備擴張ト稱スルモノニ對シ第二期軍備擴張ト稱

スルモノ是レナリ其大意ニ曰ク

曩ニ十六年度以降軍艦製造費及十九年度以降特別費ノ支出ヲ得タルモ未タ以テ獨立國タル
海軍ヲ整備スルニ足ラス參謀機關ノ計畫ヲ參酌シ帝國ノ地位ヲ考察シ財政ノ状態ニ鑑ミ二
十二年度ヨリ五箇年ヲ期シ左ノ艦艇ヲ新造セントス

海防艦 六、五六三噸 一隻

モニトル艦 各二、〇二〇噸 四隻

巡航艦 各二、一三三噸 三隻

報知艦 七〇〇噸 一隻

砲艦 六一五噸 六隻

練習艦 三〇〇〇噸 一隻

水雷艇 三十隻

計 四十六隻

右艦船ノ新造ニ要スル費額ハ二千五百八十五萬七千七百九十一圓ニシテ其他二十一年度以前ニ着手セル軍艦ノ補充費三百十五萬六千二百五十三圓及鎮守府設立費、兵器火薬製造所改築及機械費、兵器購買費、海防水雷費等二千三百八十三萬三千三百十圓ヲ要ス此總計五千二百八十四萬七千三百五十四圓ナリ

依テ速カニ公債ヲ起シ五千二百八十餘萬圓ノ支出ヲ仰クト云フニアリ

此議ニ對シ明治二十一年五月二十四日伊藤内閣總理大臣ヨリ左ノ廟議ヲ傳フ

海軍臨時費請求ノ件ハ認可シ難シ

二十二年度ニ於テ二十一年度ノ定額タル五百九十二萬千六百三十三圓五十三錢ヲ目途トシ
之ニ百七萬八千三百六十六圓四十七錢ヲ加ヘタル額即合計七百萬圓ヲ以テ該年度ノ豫算極
度トシ外ニ特別費補充トシテ三百十五萬圓ヲ支出ス云々

是ニ於テ已ムナク秋津洲、大島ノ二艦及水雷艇三隻七十九噸一隻ヲ製造スルコトトナレリ二十二
年度起業ノ軍艦製造費ト稱スルモノ是レナリ但シ特別費補充費トシテ支出ノ三百十五萬圓ハ
前節特別費ノ計算ニ含有セリ

二十二年度起業ノ軍艦製造費ハ右ノ如ク巡洋艦一隻砲艦一隻水雷艇三隻ヲ製造シ及浮船渠ヲ
購買スルノ用ニ供セル繼續費ニシテ其目途高總額ハ二十五年度迄百九十一萬八千三百四十五
圓二十五錢ナリシカ實際ノ支出年度別等ハ左ノ如シ

明治二十二年度起業軍艦製造費支出年度別

種別	支				
	二十二年度	二十三年度	二十四年度	二十五年度	二十六年度
秋津洲	二〇,〇〇〇,〇〇〇	三七三五九・八九六	二九三、四五・三三	三〇五、三六・三四	一六六、〇三八・五五
大島	一八、三七九・一七	四九、八八二・六六	二九、二二三・八七〇	一三、六二・九六三	九九三、九五九・八一六
水雷艇(三隻)	四七、七四二・七〇	一〇九、六一・九五九	一三、一七九三九	一五二、三七四・一三五	三〇三、四三八・五三二
浮船渠	二六、一四一・七四	三〇、九六二・六七	三、八六七・八三七	二四、八六七・一〇四	一、五七三、六三九・五六六
總計	五四、九七一・〇六四	三八、四五五・四六三	一六八、〇三八・五五五	一、五七三、六三九・五六六	一、五七三、六三九・五六六

又同年度起業ノ兵器水雷費ハ即チ前段秋津洲、大島ニ裝置スル兵器水雷ヲ製造購買スルノ資ニ供スル繼續事業費ナリ其別左ノ如シ

種別	支					額	合計
	二十二年度	二十三年度	二十四年度	二十五年度	二十六年度		
秋津洲兵器水雷	一、三〇五・七〇	一八二、八八四・六六	一九五、三〇〇・一六	一九六、三〇四・二三	一九六、六〇三・〇九	五六、六〇三・〇九	五六、六〇三・〇九
大島兵器水雷	八、四七七・四四	一〇三、五三四・九五	三〇、五三一・八七	一四三、三四二・六三	一四三、三四二・六三	一四三、三四二・六三	一四三、三四二・六三
總	九、六三六・一八	二六、三九六・一七	一八九、五二一・〇三	一九六、三〇四・二三	一九六、九九三・三三	七二、九五五・六九	七二、九五五・六九

(備考) 兵器水雷費中ニハ佐世保軍港及對州阿曾灣防禦水雷費トシテ四萬二千七百十四圓五十五錢九厘ノ支出アリテ兵器水雷費決算總額ハ七十五萬三千六百六十圓二十五錢八厘ナリ

第十二節 明治二十三年海軍大臣提議、海軍事業

計畫

(一部分成立—第一回帝國議會通過實施—二十四年度
起業軍艦製造費ノ設定)

明治二十三年西郷海軍大臣ハ二十四年度ニ於テ起業セントスル艦船製造ニ關シ大計畫ヲ策定スル所アリシカ未タ奏議ニ至ラスシテ更迭セリ、海軍大臣子爵樺山資紀ハ此策定ヲ繼承シ尙ホ之レニ鎮守府増設等ノ計畫ヲ加ヘテ海軍事業計畫ノ議ヲ建テ同年九月(日佚ス)之ヲ内閣總理大

臣伯爵山縣有朋ニ提出シテ閣議ヲ請ヘリ其要ニ曰ク

明治十六年度以降軍艦製造費及十九年度以降特別費ヲ以テ軍艦ヲ製造シ鎮守府ヲ設置シ水雷隊ヲ置キ火薬製造所ヲ改設シ二十二年度及二十三年度以降ノ繼續費ヲ以テ軍艦ヲ製造シ兵器製造所ノ改設ニ着手セリト雖モ海軍ノ力未タ帝國ヲ防護スルニ足ラス依テ茲ニ海軍事業ノ計畫ヲ定メ閣議ニ提出スト前提シ先ツ海軍力ヲ定ムルノ標準ヨリ說キ起シ列國ノ状勢ヲ考較シ帝國ノ地位ニ在テハ近キ將來ニ於テ新舊軍艦ノ噸數合計二十萬噸ノ程度ニマテ之ヲ進メサル可ラサル所以ヲ論述シ更ニ我國ノ富力ニ顧ミ今遽ニ之ヲ備ヘント欲スルモノ或ハ其堪ヘサラシコトヲ恐ルルヲ以テ已ムヲ得ス最少限ヲ目途トシ之ヲ第一期七箇年計畫トシテ遂行セントス(最少限トハ軍艦總噸數ヲ十二萬噸トシ現存及製造中ノ軍艦凡五萬噸アルヲ以テ差引七萬噸ノ艦船ヲ增製スルニアリ)云々即艦船増製ノ計畫ハ左ノ如シ

現存及製造中ノ軍艦(軍用ニ堪フルモノノミヲ掲ク)

巡航甲鐵艦 扶桑

一等巡航艦 嚴島

同 橋立

同 松島

二等巡航艦 浪速

同 高千穂

三、七七七噸

四、二七八噸

同

同

三、七〇九噸

三等巡航艦

秋津洲

三一五〇噸

千代田

二四四〇噸

金剛

二二八四噸

比叡

同

高雄

一七七八噸

葛城

一五〇一噸

大和

一五〇〇噸

武藏

同

天龍

一五四三噸

海門

一三七五噸

筑紫

一三七二噸

八重山

一六〇九噸

千島

七五〇噸

磐城

七〇八噸

摩耶

六二二噸

鳥海

同

愛宕

同

二等砲艦

二等水雷艦

一等通報艦

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

二等砲艦

赤城

六二二噸

同

二十五隻

大島

六三〇噸

右ノ外、蒸氣軍艦ハ筑波、日進、春日、天城ノ四隻アルモ皆老艦ナリ

水雷艇ハ現存ノモノ十隻、製造及註文中ノモノ十九隻アリ

増製ヲ要スヘキ艦船及費額

甲鐵艦

二隻

各九、五〇〇噸

巡航甲鐵艦

三隻

各六、〇〇〇噸

一等巡航艦

一隻

四五〇〇噸

二等巡航艦

三隻

各三、五〇〇噸

三等巡航艦

二隻

各二、五〇〇噸

四等巡航艦

三隻

各一、五〇〇噸

一等水雷艦

八隻

各七、五〇〇噸

二等水雷艦

三隻

各五、〇〇〇噸

一等水雷艇

二十五隻

各六、九〇〇〇噸

二等水雷艇

六隻

各一、〇〇〇噸

計

二十隻

六隻

各三〇噸

二等運送船 一隻 二〇〇〇噸

練習艦 一隻 二、五〇〇噸

計 二十八隻 六、六八〇噸

合計 五十三隻 七五六八〇噸

右増製ニ要スル費額五千八百五十五萬二千六百四十五圓トシ七箇年ヲ以テ完成スルノ計畫ニシテ尙ホ該增製艦船ノ維持費ハ七箇年末迄ノ累計七百一萬二千七百十七圓ノ豫算ナリ

而シテ軍艦製造ニ伴ヒ鎮守府ノ設置ヲ要ス、吳、佐世保兩鎮守府ハ既ニ繼續費ヲ以テ整備ノ計畫定マレリト雖モ尙ホ舞鶴及室蘭ノ兩鎮守府ノ設置ヲ必要トス其費額二百八十八萬千九百九十圓ナリ此外、海岸望樓建設費二十四萬三千百三十圓、綿火薬製造所設立費二十二萬六千三百七十圓、軍港及須要港灣等ノ防備ニ充ツヘキ敷設水雷費百四十萬圓、右孰レモ七箇年度ニ支出セラレンコトヲ要ス

以上ヲ通計スルニ軍艦増製費以下水雷敷設費ニ至ルマテ總額七千三十一萬六千五十二圓ニシテ初年度支出百二十八萬餘圓、次年度以後ノ支出千三十一萬餘圓乃至千二百五十萬餘圓ノ割合ナリ之ヲ表示スレハ左ノ如シ

海軍事業計畫費支出年度割

費別	年						合計
	初年	二年	三年	四年	五年	六年	
軍艦製造費	七九二、五四九	九六三、四八五	一〇、八六六、六三三	一〇、六七四、三〇〇	八、二五八、六四三	九、九〇五、九二二	八、四三九、一二四
軍艦維持費	一三〇、四五〇	一九六、五五六	三五六、四八三	一五三、一二二	一五三、一二二	一五一、一二三	七、〇一三、七一七
舞鶴鎮守府設立費	一〇〇、〇〇〇	一五〇、〇〇〇	三三一、三三〇	二四〇、〇〇〇	二五〇、三三九	二五四、三七五	六、五五三、六四五
室蘭鎮守府設立費	一八、六六〇	四六、五九〇	三五、六〇〇	三八、〇四〇	三八、〇四〇	三五、〇三〇	一、六六一、一九〇
海岸望樓建設費	三〇〇、〇〇〇	四七、八五〇	二〇〇、〇〇〇	三八、〇四〇	三八、〇四〇	三〇〇、〇〇〇	一、三〇〇、〇〇〇
綿火薬製造所設立費	一八、六六〇	四六、五九〇	三五、六〇〇	三八、〇四〇	三八、〇四〇	三五、〇三〇	一、三〇〇、〇〇〇
水雷敷設費	三〇〇、〇〇〇	三五、六〇〇	三〇〇、〇〇〇	三八、〇四〇	三八、〇四〇	三五、〇三〇	一、三〇〇、〇〇〇
合計	一、三八〇、七九九	二、一〇、三一五、九五五	二、一〇、三一五、九五五	二、一〇、三一五、九五五	二、一〇、三一五、九五五	二、一〇、三一五、九五五	七、〇一三、七一七

右海軍事業計畫ハ閣議ニ於テ之ヲ不可トスルノ說ナカリシモ財源ナキノ故ヲ以テ國庫ヨリ支出シ得ヘキ金高五百二十一萬餘圓ヲ目途トシ先ツ本計畫中ノ軍艦ヲ製造スル事ニ決シ之ニ基キ明治二十四年度軍艦製造費追加案ヲ第一回帝國議會ニ提出セリ其要領左ノ如シ

海軍勢力ハ一定不易ノモノニアラス彼我ノ情勢ニ應シテ之ヲ定ムヘキモノタルハ宇内ノ通論ニシテ常ニ其實例ヲ見ル所ナリ今帝國海軍力ノ程度ヲ那邊ニ定ムヘキカラ案スルニ少ナクモ十二萬噸ニ相當スル軍艦ヲ備フルノ必要ナルヲ認ム而シテ現有軍艦ノ噸數約五萬噸ナルヲ以テ尙ホ約七萬噸ノ増艦(甲鐵艦、巡洋艦、水雷艦)ヲ合シテ二十五隻ヲ要シ且ツ之ニ伴フテ水雷艇二十六隻運送船一隻練習艦一隻ノ製造ヲ欲ス然レトモ此費額通計五千八百五十五萬二千六百四十五圓ニ上ホリ目下ノ財政到底之カ遂行ヲ許ササルモノアリ依テ已ムヲ得ス二十四年度以降五箇年ヲ期シ先ツ二等巡洋艦一隻三等巡洋艦一隻一等水雷艦一隻合計三隻(六

千七百五十噸ノ軍艦ト之ニ伴フ水雷艇二隻ヲ製造セントス是レ前述計畫ノ十分ノ一ニモ足ラナルモノナリト雖モ現有軍艦中追々老朽ニ至ルモノアルニ鑑ミ勢力ノ減退ヲ補充スルノ旨意ヲモ參酌シテ此要求ニ出ツル所以ナリ云々

右ニ關スル豫算ハ左ノ如シ

明治二十四年度要求額

軍艦製造費

繼續費

二十五萬七千百二十一圓

繼續費

二十五萬七千百二十一圓

明治二十四年度設計軍艦巡航艦二隻水雷艦一隻水雷艇二隻ノ總費額概算五百二十
一萬八千二百十六圓

明治二十四年度

二十五萬七千百二十一圓

同 二十五年度

百九十七萬八千三百十一圓

同 二十六年度

百八十一萬九千二圓

同 二十七年度

九十九萬九千四百七十四圓

同 二十八年度

十六萬四千三百八圓

尙ホ右ニ就キ二十三年十二月十六日樺山海軍大臣ノ衆議院ニ於ケル演說ノ要旨ハ左ノ如シ

本大臣ノ希望スル所ハ我國海軍力ハ軍艦七十五隻之ヲ噸數ニスレハ二十萬噸ノ實力ヲ具フルニアリ然レトモ今日ノ國力之ヲ許ササルヲ以テ此計畫ハ後日ニ讓リ最少限ノ十二萬噸ヲ

七箇年間ニ整備スル計畫ヲ建テタリ此最少限ノ計畫ニ依リ本議會ニ要求セントセシカ目下
米穀ノ輸入、金銀相場ノ變動、水難風災等ノ爲メ困難ノ折柄今日ノ民力ニ察シ國庫ノ支出シ得
ヘキ財力五百二十一萬餘圓ノ程度ヲ目途トシ今期議會ニハ此程度ノ要求ニ止メタル次第ナ
リ、但シ此六、七年間ニ右ノ十二萬噸マテノ勢力ヲ有スル様ニ致シタイト云フ希望ハ持テ居リ
マス云々

右軍艦製造費ハ第一回帝國議會ノ協賛ヲ經テ裁可セラレタリ乃チ之ニ依テ製造セルモノハ巡
洋艦吉野(三、五〇〇噸)須磨(二、五〇〇噸)水雷砲艦龍田(七五〇噸)ノ三艦及水雷艇二隻ナリトス其決
算總額五百三十四萬六千百九十八圓五十九錢二厘ニシテ支出年度割等左ノ如シ

明治二十四年度起業軍艦製造費支出年度別

種別	支						額
	二十四年度	二十五年度	二十六年度	二十七年度	二十八年度	二十九年度	
吉							
須							
龍							
水雷艇	(二隻)						
總計	一八五・六四四・四八三	一八四三・七九五・一三三	一五四八・三八三・四七六	一三〇九・四七一・八六七	三七七・一八七・九六九	八一・六九五・六七六	五三四六・一九九・五九三

第十三節 明治二十四年海軍大臣提議、九箇年間

繼續軍艦製造費ノ要求

(閣議一部分ヲ認メ第二回及第三回帝國議會へ提出セシモ成立セサリキ)

明治二十四年七月八日樺山海軍大臣ハ軍艦増製ノ計畫ヲ閣議ニ提出セリ其要領ハ左ノ如シ
明治二十五年度以降三十三年度ニ亘ル九箇年間ノ繼續費五千八百五十五萬二千六百三十六
圓ヲ以テ甲鐵艦四隻巡航艦六隻通報艦一隻合計十一隻(七三・九〇〇)噸及航洋水雷艇十二隻一
等水雷艇四十八隻ヲ新造セントス、惟フニ客年提議ノ内軍艦三隻及水雷艇二隻ノ製造ハ成立
シテ本年度ヨリ着手スルヲ得タリト雖モ僅ニ老朽艦ノ補充ニ過キス而シテ現在ノ甲鐵艦扶
桑ハ明治十年ノ建造ニ係リ近時落成ノ外國甲鐵艦ニ匹敵スルヲ得ス巡航艦ハ松島、嚴島、橋立
浪速、高千穂以下數隻アルモ其勢力亦他國ノモノニ下ルコト數等ナリ故ニ主トシテ甲鐵艦ト
巡航艦トヲ新造セサル可ラス之ヲ外國ニ註文スルモ我國ニテ製造スルモ完成迄ハ九箇年ヲ
費スヘシ九箇年後即明治三十三年ニ於テ現存スヘキ我軍艦ノ噸數ヲ查スルニ四萬九千五百
三十四噸ナルヲ以テ前議十二萬噸ノ勢力ヲ得ントセハ尙七萬噸ノ増加ヲ要ス、本議新造艦十
一隻ノ噸數ヲ七萬三千九百噸トセルハ備砲鐵厚速力人員ノ關係ニ由ル推算ニ基ケルモノニ
シテ三十六年ニ至レハ葛城、大和、武藏、摩耶ノ四隻(五、七〇〇)噸老朽ニ入ルヲ以テ過分ノ計算ニ

アラス、此費額ハ大ナリト雖國權ヲ維持スルニハ本議ノ如クシテ十二萬噸ノ海軍力ヲ備フルヲ必要トス冀クハ費額供給ノ方法ヲ案定シテ速ニ實施ニ進マレンコトヲ云々此計畫ニ關シテハ閣議其一小部分ナル巡洋艦報知艦ノ二隻ヲ製造スルニ決シ明治二十四年十二月第二回帝國議會ニ提出セリ其大要ニ曰ク

帝國軍艦ノ内戰闘ノ用ニ堪ユヘキ現在ノモノ及製造中ノモノ合シテ二十八艦(五九、四五八噸)トス而シテ三十年度以前ニ於テ老朽ニ入ルヘキモノ三艦(五、二七六噸)ナリ依テ二十五年度以降三十年度ニ亘ル六箇年繼續費二百七十五萬圓ヲ目途トシ巡航艦(一、七〇〇噸)一隻ヲ製造シテ補充ニ供ヘントス云々

第二回帝國議會ハ衆議院解散ノ爲メ議了ニ至ラス

次テ明治二十五年五月第三回帝國議會ニ之ヲ提出セリ

經費額ハ前回ト同シ、但シ二十五年度以降三十一年度ニ亘ル七箇年繼續費トス

右ハ第三回帝國議會ニ於テ否決スル所トナリテ實施ニ至ラサリキ

第十四節 明治二十五年海軍大臣提議、軍艦製造

計畫

(二十六年度起業軍艦製造費ノ設定)

明治二十五年十月海軍大臣子爵仁禮景範ハ海軍參謀部ノ提案ニ基キ樺山前海軍大臣提出ノ二

十三年閣議案ニ於ケル海軍勢力最少限十二萬噸ヲ程度トシテ造艦計畫ヲ定メタリ其新造スヘキ軍艦種別噸數費額等左ノ如シ

甲鐵艦	四隻	各一、一、四〇〇噸	三三、一、一四、三九二・三四四
一等巡洋艦	四隻	各五、二〇〇噸	一二、三、二四、二六〇・五六〇
二等巡洋艦	二隻	各三、八〇〇噸	四、三四一、八六六・八八〇
三等巡洋艦	一隻	二、七〇〇噸	一、六六八、〇二一〇〇〇
四等巡洋艦	三隻	各一、六三〇噸	二、九六九、四三二・六〇〇四
報知艦	二隻	各一、八〇〇噸	二、一六三、九五八・〇〇〇
水雷砲艦	三隻	各八七〇噸	二、六一五、四八七・七四四
計	一九隻	八七、八〇〇噸	五九、一九七、四一九・一三二

此計畫ハ十六箇年ヲ期シテ海軍勢力ヲ十二萬噸ニ達セシメントスルニ在リ

然レトモ此全部ヲ一時ニ製造セントスルニハ國庫ノ堪ヘサルヘキヲ慮リ先ツ計畫中ノ甲鐵艦二隻三等巡洋艦一隻報知艦一隻ヲ製造スルコトニ閣議ヲ經、其費額ノ協賛ヲ二十五年十二月開會ノ第四回帝國議會ニ要求セリ、要求書ノ説明ハ左ノ如シ

臨時歲出ノ部

軍艦ヲ建造シ海軍ノ勢力ヲ増進スルハ啻ニ國防上ノミニ止ラス平時ノ任務ニ於テ亦實ニ今日ノ急務ナリトスニ其大計ヲ案畫シ必要ノ艦數ヲ增製セントセハ一時ニ巨額ノ費用ヲ要

シ國庫之カ負擔ニ堪ヘサルヲ慮リ歲計ノ許ス所ニ隨テ軍艦ヲ製造シ漸次其歩ヲ進メ以テ國家ノ急務ニ應セシメントス是本案ニ於テ甲鐵戰艦二隻巡洋艦一隻及報知艦一隻ノ製造ヲ企畫セシ所以ナリ依テ其費額ヲ左ノ如ク要求ス

艦種	概算噸數	概算馬力	製造場所	費額
甲鐵戰艦	一一〇〇〇	一二六〇〇	外國ニ註文ノ見込	八四〇四、二七一・三六六
同	一一〇〇〇	一二六〇〇	同	八四〇四、二七一・三六六
巡洋艦	二七〇〇〇	九〇〇〇〇	横須賀造船部	一六六八、〇二一・〇〇〇
報知艦	一八〇〇〇	七〇〇〇〇	吳造船部	一〇八一、九七九・〇〇〇
計	二六八〇〇			一九五五八、五四二・七三三

此經費ハ甲鐵艦ハ七箇年度巡洋艦報知艦ハ六箇年度分割シテ支出ヲ要ス

(製造費支出年度割表ハ茲ニ略ス)

尙二十六年一月十日仁禮海軍大臣ノ衆議院ニ於ケル演説ノ要領ヲ舉クレバ左ノ如シ

軍艦製造ニ關スル我海軍ノ方針ハ過大ノ艦船ヲ造リ諸強國ニ均シキ艦隊ヲ編製シテ漫リニ艦數頗數上ノ權衡ヲ得ントスルモノニアラス帝國ノ地位ト宇内ノ情勢トヲ觀察シ國防上ノ必要ニ考へ少クモ十二萬噸ノ實力アル軍艦ヲ要スト云フニアリ而シテ其製造ニ關シテハ素ヨリ計畫スル所アリ抑々海軍ノ事業ハ單リ軍艦ノ製造ノミニアラス鎮守府ノ設置水雷隊ノ施設望樓ノ築造等亦之ヲ完備セサル可ラスト雖モ是等ハ軍艦ノ増加ニ伴フテ爲スヘキモノ

ニシテ軍艦ノ製造ヲ以テ第一トセサルヲ得ス故ニ東洋ノ大勢ニ考へ軍備上ノ必要ニ應シ吳、佐世保鎮守府ノ設置ハ既ニ着手セルモ舞鶴、室蘭兩鎮守府ハ未タ着手ニ至ラス水雷隊及望樓ノ如キモ漸次其歩ヲ進ムルノ計畫ナリトス即チ軍艦ハ海軍ノ基本タルモノナレハ先ツ必要ナル噸數ノ軍艦ヲ製造スルハ急務中ノ急務ニ屬シ一日モ稽延ス可ラス是レ本年度ニ於テモ軍艦ノ製造費ヲ要求スル次第ナリ茲ニ要求セル甲鐵艦二隻巡洋艦一隻報知艦一隻ハ現下我國財政ノ許シ得ヘキ範圍ニ於テ前述方針中ノ最モ緊急ナル艦種ヲ選定シタルモノニシテ漸次財源ノ許ス所ニ隨ヒ歩ヲ進メ終ニ計畫ヲ完フセントスルモノナリ

此選定セル甲鐵艦巡洋艦及報知艦ニ就テ聊カ陳述セントス甲鐵艦ハ艦隊ノ編制上其中堅トナルヘキモノニシテ巡洋艦報知艦ハ其羽翼ナリ故ニ勢力アル艦隊ヲ編制セントスルニハ完備セル中堅ヲ具ヘ併セテ之ニ伴フ所ノ羽翼ヲ備フルヲ必要トス我海軍ニ於テ大方針策定ノ當初ヨリ甲鐵艦ノ必要ヲ感シタリシカ當時甲鐵艦ノ構造ハ變化甚タシクシテ甲ノ是トスル所乙之ヲ非トシ有名ナル造船諸家モ甲鐵艦ノ利害ニ關シテハ甲論乙駁殆ント其底止スル所ヲ知ラス人ヲシテ實地ノ戰闘ニ於テ利害ヲ判別スルノ外ナシト思ハシメタル程ナリキ而シテ甲鐵艦ハ其製造ニ巨費ヲ要スルヲ以テ我海軍ニ於テハ實驗旁ミ之ヲ造ルト云フカ如キ輕舉ハ之ヲ避ケ今日マテハ主トシテ新式ノ巡洋艦及輕快ナル艦船ヲ製造シ暫ク歐米各國ニ於ケル甲鐵艦ノ進捗ニ注意シツツアリシカ今ヤ我當局者ハ研究調査ヲ遂ケタル結果歐米諸國ノ實驗ヲ利用シテ甲鐵艦ノ製造ニ着手スルノ時機ニ達シタルモノナリ云々

テノ納給文圖内六詔
シムレ補足十武官下付三十年間母歲
ニ艦製一僚付シ俸充費ヲ

然ルニ衆議院ニ於テハ明治二十六年度總豫算案ニ修正ヲ加ヘテ議決シ(豫算案本會議ハ二十五年十二月十九日ニ始マリ引續キ同月二十一日、二十二日、二十三日、二十四日及二十六年一月九日、十日、十一日、十二日ニ於テ之ヲ開キ議了セリ、右ノ軍艦製造費ハ二十六年一月十日ノ會議ニ於テ削除議決セラレタリ)其修正ノ中憲法第六十七條ニ依ル歲出ニ就キ政府ノ同意ヲ求ムル所アリシカ政府ハ之ニ同意ヲ與ヘス二十六年二月七日衆議院ハ之ニ關シテ上奏案ヲ通過シ翌八日之ヲ奉呈セリ

明治二十六年二月十日在廷ノ臣僚及帝國議會ノ各員ニ對シ詔勅下ル其御旨意ノ大要ニ曰ク
憲法第六十七條ニ掲ケタル費目ハ既ニ正文ノ保障スル所ニ屬シ今ニ於テ紛議ノ因タルヘカラス但シ朕ハ特ニ閣臣ニ命シ行政各般ノ整理ハ其必要ニ從ヒ徐ロニ審議熟計シテ遺算ナキヲ期シ朕カ裁定ヲ仰カシム

國家軍防ノ事ニ至リテハ苟モ一日ヲ緩クスルトキハ或ハ百年ノ悔ヲ遺サム朕茲ニ内廷ノ費ヲ省キ六年ノ間毎歲三十萬圓ヲ下付シ又文武ノ官僚ニ命シ特別ノ情狀アル者ヲ除ク外同年八月間其俸給十分一ヲ納レ以テ製艦費ノ補足ニ充テシム

朕ハ閣臣ト議會トニ倚リ立憲ノ機關トシ其各々權域ヲ慎ミ和協ノ道ニ由リ以テ朕カ大事ヲ輔翼シ有終ノ美ヲ成サムコトヲ望ム

是ニ於テ衆議院ハ豫算案ヲ再議ニ附シ軍艦製造費ヲ復活シテ修正議決シ(百四十七萬六千十七圓十七錢四厘ヲ減シ千八百八萬二千五百二十五圓五十五錢八厘トス)貴族院亦此修正ニ依リ議

明富士、八島、
ノ製造
宮古

詳記事等ハ及
算額更定及
後決算

決シ御裁可ヲ經テ施行セリ
其艦種及經費豫算等左ノ如シ

甲鐵戰艦 (富士) 一一、七五〇噸
同 (八島) 一一、七五〇噸

巡洋艦 (明石) 二、七〇〇噸
報知艦 (宮古) 一、八〇〇噸

二十六年度起業軍艦製造費豫算

外國ヘ註文
横須賀造船部製造
吳造船部製造

種別	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十	三十一	三十二	合計
	年	度	年	度	年	度	年	度	年	度	年	度	年	
甲製造費	一、六三、七六・八〇	一、六二、五五・九〇	一、六一、五五・九〇	一、六〇、四九・〇六	一、五九、四九・〇六	一、五八、四九・〇六	一、五七、四九・〇六	一、五六、四九・〇六	一、五五、四九・〇六	一、五四、四九・〇六	一、五三、四九・〇六	一、五二、四九・〇六	一、五一、四九・〇六	二、四八、六四・八〇
船費	一、六三、七六・八〇	一、六二、五五・九〇	一、六一、五五・九〇	一、六〇、四九・〇六	一、五九、四九・〇六	一、五八、四九・〇六	一、五七、四九・〇六	一、五六、四九・〇六	一、五五、四九・〇六	一、五四、四九・〇六	一、五三、四九・〇六	一、五二、四九・〇六	一、五一、四九・〇六	二、四八、六四・八〇
兵費	一、六三、七六・八〇	一、六二、五五・九〇	一、六一、五五・九〇	一、六〇、四九・〇六	一、五九、四九・〇六	一、五八、四九・〇六	一、五七、四九・〇六	一、五六、四九・〇六	一、五五、四九・〇六	一、五四、四九・〇六	一、五三、四九・〇六	一、五二、四九・〇六	一、五一、四九・〇六	二、四八、六四・八〇
計	三、一〇、一〇、四〇													
巡洋艦建造費	三、七、四〇、七・五〇													
報知艦建造費	三、七、四〇、七・五〇													
巡洋艦造船費	三、七、四〇、七・五〇													
報知艦造船費	三、七、四〇、七・五〇													
總計	三、一〇、一〇、四〇													

右甲鐵戰艦製造費ハ明治二十七年ニ至リ繼續費七箇年ヲ五箇年ニ短縮スルノ議起リ西郷海軍大臣ハ閣議ヲ經テ二十七年十二月第八回帝國議會ニ左ノ要求ヲ爲セリ

明治二十六年二月帝國議會ノ協賛ヲ經テ英國へ註文製造中ノ甲鐵戰艦二隻ハ七箇年ノ繼續事業ニシテ明治三十二年度ヲ以テ竣工ノ目途ナリシカ本年六月清國ト交戰以來未タ結局ニ至ラスト雖モ必スヤ爾後東洋ノ形勢一變シ隨テ軍艦ノ任務ヲ増スニ至ラン則チ製造中ノ軍艦ハ一日モ速ニ竣工セシメンハ目下ノ急務タリ此甲鐵戰艦二隻ノ製造期限ヲ短縮シテ五箇年トシ明治三十年度ニ於テ竣工シ本邦ニ回航セシメ以テ其必要ニ應セシメントス依テ明治二十六年度ヨリ三十二年度ニ涉ル七箇年ノ繼續費ヲ改メ之ヲ二十六年度ヨリ三十年度ニ涉ル五箇年ノ繼續費トシ三十一、三十二兩年度既定支出額ヲ以テ二十八年度ヨリ三十年度マテノ支出額ニ繰上ヲ要ス又本艦製造着手以來銀貨暴落ノ爲メ外國貨幣交換相場ニ非常ノ激變ヲ來タン從來ノ交換相場ハ英貨一磅ニ付我通貨十圓轉ト見積リ之カ差額ヲ增加スルノ要アリ從テ各年度支出豫算額ヲ左ノ如ク更定スルヲ要ス

科 款	項 目	支 出 年 度	既定豫算額	
			既定豫算額ノ内 外國貨幣交換 既定豫算額ノ内 外國貨幣交換 既定豫算額ノ内 外國貨幣交換	差額增加高 差額增加高 差額增加高
軍 艦 製 造 費	業 甲 鐵 戰 艦 製 費	二 十六 年 度 起	二 四 八 六 四 八 三 〇	
		二 十七 年 度	二 三 六 七 七 七 〇	
		二 十八 年 度	二 三 四 五 七 〇 〇	
		二 十九 年 度	二 一 〇 一 三 九 五 一 三 三	
		三十 年 度	二 三 四 五 七 七 二 三	
		二 三 〇 五 七 六 〇 八 九 減	二 三 〇 五 七 六 〇 八 九 減	
			二 一 四 九 〇 六 九 八 七 七 〇	
			一 一 四 九 〇 六 九 八 七 七 〇	
			一 一 三 六 六 七 七 〇	
			六 五 七 九 〇 〇 一 五 〇 三	
			六 一 四 六 九 四 八 九 八 〇	
			四 八 八 四 五 八 〇 八 八	

此豫算ハ同議會ノ協賛ヲ經テ裁可セラレタリ

而シテ二十六年度起業軍艦製造費ハ尙ホ後ニ至リ更定セルモノアリ其決算ハ左表ノ如ク總額二千三百八十三萬四千九百五十五圓四十錢八厘ト爲レリ

二十六年度起業甲鐵戰艦製造費明細表

		支		額	
		二十六年度	二十七年度	二十八年度	二十九年度
		三十年度	三十一年度	三十一年度	三十一年度
士	富				
費	造				
兵	船				
造	造				
兵	船體及機關				
費	監督其他諸費				
回	保證機關師給料				
航	進水式費用				
計	回航費用				
運搬並保險料	保證機關師給料				
計	保證機關師給料				
三、四六、五三	三、四六、五三	六、九三、三五九	一、六四六、零四三、五三八	二、八三、一〇九、五〇五	一、九五、一三五八九〇
三、四六、五三	三、四六、五三	一〇四、一〇一、五三一	八四、五五四、一〇四	九四、一〇五、一一四二	一五七、九五四、六九六
三、四六、五三	三、四六、五三	一一〇、五三一、九七	一一、五三一、一〇一	一三、一〇一、〇八	一五七、〇五四、九九四
三、四六、五三	三、四六、五三	八四、五三一、九七	八五、九三一、九九	九〇、九三一、八〇一	一〇、九三一、八〇一
三、四六、五三	三、四六、五三	九二、九三一、六六一	一、六四、一六六	二、七二、九三一	二、六四、一六六
三、四六、五三	三、四六、五三	一五五、一五三、五三〇	二、六一、五三〇	二、六四、一六六	二、六四、一六六

合

計
一五、四二七、七四五、五五八

三十二年度

二、〇五五、一四九、八四八

11

二十六年度起業巡洋艦報知艦製造費支出明細表

第十五節 明治二十七年海軍大臣請議軍艦四隻

購入ノ議

(一隻成立 — 和泉ノ購入)

明治二十七年十月十日西郷海軍大臣ハ軍艦購入ノ議ヲ閣議ニ提出セリ

遠征日ヲ重ヌルニ從ヒ軍艦ノ使用度ニ過クヘク遂ニハ修理ノ必要ヲ來タシ或ハ入渠手入レノ止ムヲ得サルモノ續出スヘキハ數ノ免カレサル所ナリ殊ニ我海軍終局ノ好果ヲ收メンニハ倍々艦隊ノ整頓ヲ圖ラサルヘカラス左レハ今ノ時ニ於テ成ルヘク軍艦ノ數ヲ増加シ置クハ軍事計畫上緊要ノ事トス然ルニ幸ヒ亞爾然丁國軍艦「アドミラル・ブラウン」號、「バタゴニヤ」號、「メイ」號ノ三隻及智利國軍艦「エスマラルダ」號ノ一隻ヲ賣却スルノ情報アリ此四隻ヲ得ルハ實ニ我海軍ニ執リテ失フヘカラサルノ好機トス依テ右四艦至急購入相成度云々

右軍艦購入ノ議ハ閣議ノ諒解ヲ得テ亞爾然丁國軍艦三隻購入費概算ヲ八百九十二萬七千七百六十七圓五十錢トシ臨時軍事費ノ款臨時軍事費ノ項ニ艦船費ノ目ヲ設ケ支出スルコトヲ二十七年十二月二十八日海軍大臣ヨリ大藏大臣ニ照議シ十一月五日勅裁ヲ經タリ然ルニ此三隻購入ニ關スル交渉ハ種々ノ故障ノ爲遷延シテ遂ニ決スルニ至ラスシテ止メリ智利國軍艦「エスマラルダ」Esmeralda 購入費概算ヲ二百九十六萬三百二十三圓五十錢トシ是亦前記ノ如ク十一月九日海軍大臣ヨリ大藏大臣ニ照議セルニ右ハ既ニ勅裁ヲ經タル前記ノ艦船費八百九十二萬七千七百六十七圓五十錢ノ内ヲ以テ支出スルコトニ内閣總理大臣ノ承認ヲ得タルヲ以テ之ニ依リ整理然ルヘシトノ旨十一月十八日大藏大臣ヨリ回答アリ斯クテ同艦ハ十一月十五日賣買契約成立シ且ツ「イクエードル」共和國ヲ中介ニ立ツルノ條約等十二月五日至リ調印濟十二月八日Valparaiso 出艦 Galapagos 及 Honolulu ヲ經テ二十八年二月五日横須賀軍港ニ回着セリ

因ニ記ス是レヨリ先キ二十六年十一月二十九日開會ノ第五回帝國議會ハ同年十二月三十日

衆議院解散ノ爲メ豫算ヲ議定スルニ至ラス乃チ二十七年度豫算ハ前年度豫算施行ノ事ト爲レリ尋テ二十七年五月十五日開會ノ第六回帝國議會亦同年六月二日衆議院解散セラレタリシカ朝鮮事變ハ日清間交戦ノ已ムナキニ至リタルヲ以テ緊急必要ノ費額ニ就テハ政府ハ二十七年六月以降勅裁ヲ經テ豫算外支出ノ方法ヲ執レリ(以テ憲法第七十條ニヨリ朝鮮事件費ニ關スル財政上必要處ノ件ヲ公布セラル)而シテ同年十月十八日臨時廣島ニ開會ノ第七回帝國議會ニ於テ臨時軍事費豫算(前記豫算内外支出ノ費額ニ舍有ス)ノ協賛ヲ經同月二十三日裁可施行セラレタリ(是レト同時ニ法以テ臨時軍事費特別會計法ノ公布アリ臨時軍事費ハ明治二十七年六月一日ヨリ)「エスマーラルダ」號ハ二十八年一月八日和泉ト命名帝國軍艦ニ編入セラレタリ其ノ購買費額ハ前記ノ如ク臨時軍事費ヲ以テ支出セシカ其ノ決算ハ總額三百二十三萬六千九百九十九圓四十錢九厘ニシテ内譯等左ノ如シ

和泉購買費

内譯

原價

手數料

回航費

雜費

三、二一四、〇四五〇三九
三、二三六、九九〇四〇九^四

八、二九一〇一〇

一四、〇〇〇〇〇〇〇

六五四、三六〇

第十六節 明治二十七八年戰役當時ニ於ケル帝

國海軍艦船及清國ヨリ收容ノ艦船

明治二十七八年戰役當時ニ於ケル帝國海軍艦船及清國ヨリ收容セル艦船等左ノ如シ

一、戰役開始前(二十七年六月)現在セルモノ

軍艦

扶桑	甲鐵艦	三、七七七
松島	海防艦	四、二七八
嚴島	海防艦	四、二七八
橋立	海防艦	四、二七八
吉野	巡洋艦	四、二一六
浪速	巡洋艦	三、七〇九
高千穂	巡洋艦	三、七〇九
秋津洲	巡洋艦	三、一五〇
千代田	巡洋艦	二、四三九
高雄	巡洋艦	一、七七八
筑紫	巡洋艦鋼甲帶	一、三七二

鳳翔	鳥海	赤城	大島	磐城	愛宕	摩耶	八重山	天城	海門	葛城	武藏	大和	天龍	筑波	比叡	金剛	コルヴェント鐵甲帶	二、二八四
砲艦	砲艦	報知艦	スループ	スループ	スループ	スループ	スループ	スループ	コルヴェット鐵甲帶	二、二八四								
三二一	六二二	六二二	六二二	六二二	六二二	六二二	六六七	九二六	一、三六七	一、五〇二	一、五〇二	一、五〇二	一、五四七	一、九七八	一、九七八	コルヴェット	一、九七八	
三二一	六二二	六二二	六二二	六二二	六二二	六二二	六四〇	一、六〇九	九二六	スループ	一、五〇二							

満珠	裝帆艦	八七七
干珠	裝帆艦	八七七
館山	裝帆艦	五四三
計	三十一隻	五九、八九八
水雷艇	一隻	二〇三
小鷹	一隻	八五
第二十二、第二十三號	二隻	八〇
第二十一號	各	八五
第五號乃至第十四號 第十五、二十號	一隻	五三
	十四隻	五四
第一號乃至第四號	四隻	四〇
計	二十四隻	一・四七五
軍艦水雷艇合計	五十五隻	六一、三七三
西京丸	同	二、九一三
山城丸	船材鐵	二、四七三
近江丸	同	二、五二八
<small>一、軍艦代用船舶(戰役開始ニ當リ日本郵船會社所有汽船中武裝ヲ施シ軍艦ニ代用セルモノ)</small>		

	相模丸	同	同	一、八八五
	計	四隻	同	九、七九九
三、購入軍艦	和泉	巡洋艦	二、九六七 <small>噸</small>	
	和泉	甲鐵戰艦	一二、六四九	英國工場ニ註文
	八島	甲鐵戰艦	一二、五一七	同
	龍田	水雷砲艦	八六四	
	須磨	巡洋艦	二、七〇〇	橫須賀鎮守府造船部製造
	明石	巡洋艦	二、八〇〇	同
	宮古	報知艦	一、八〇〇	吳鎮守府造船部製造
	計	六隻	三三、三三〇	
水雷艇	第二十四號	八〇	吳鎮守府造船部小野濱分工場製造	
同	第二十五號	八五	同	
計	二隻	一六五		

軍艦水雷艇合計 八隻 三三、四九五

龍田ハ二十七年七月三十一日竣工、同日英國出發ノ處八月一日日清兩國ノ宣戰布告アリ英國ハ局外中立ヲ布告シタルノ故ヲ以テ八月二十八日「アデン」ニ於テ其抑留スル所トナリ本戰役ノ海戰ニ參加スルヲ得サリキ而シテ翌二十八年一月二十日解放セラレ三月十九日横須賀軍港ニ到着、同月二十一日西海艦隊ニ編入セラレタリ

水雷艇第二十四號ハ二十八年一月十五日、第二十五號ハ同年二月二十八日竣工セリ

五、戰役中我海軍ニ於テ捕獲收容セル清國艦艇

軍艦

操江

鎮遠

濟遠

平遠

廣丙

鎮東

鎮西

鎮南

鎮北

砲艦

甲鐵砲塔艦

巡洋艦

裝甲砲艦

水雷砲艦

砲艦

砲艦

砲艦

砲艦

六一〇

獲同年九月十二日帝國軍艦ト定メラル
同年三月十六日帝國軍艦ト定メラル
於テ收容

七、三三五

二、五六〇

二、一八五

一、二三五

同

同

同

同

四四〇

四四〇

四四〇

四四〇

四四〇

同

同

同

但シ渭雲敏捷二隻ノ順數ハ算入セヌ

第二章 明治二十七八年戰役以後明治三十七

八年戰役迄

第十七節 明治二十八年及二十九年海軍大臣提

議、海軍擴張計畫（成立——所謂第一期擴張及

第二期擴張——海軍擴張費ノ設定）

明治二十八年七月西郷海軍大臣ハ海軍擴張ノ計畫ヲ閣議ニ提出セリ

此計畫ハ明治二十五年ノ計畫（第十四節ニ出ツ）ニ起因ス而シテ二十五年ノ計畫ハ當時ノ財政ニ
制セラレ全計畫ニ對スル要求ヲ爲スコトヲ得ス其中ノ一部分ヲ二十六年度ヨリ實行シ他ハ之
ヲ後年ニ讓ルコトト爲レリ其經緯ハ第十四節ニ述ヘタリシカ今參考ノ爲メ左ニ摘錄ス

	明治二十五年ノ計畫		明治三十六年度ヨリ實施		明治二十九年及三十年竣工ノ時	
甲鐵戰艦	四隻各一	四〇〇噸	二隻各一	七五〇噸	八富士	一一六四九噸
一等巡洋艦	四隻各	五,二〇〇噸			一二五七噸	
二等巡洋艦	二隻各	三,八〇〇噸				
三等巡洋艦	一隻	二,七〇〇噸	一隻	二,七〇〇噸	明石	二,八〇〇噸
四等巡洋艦	三隻各	一,六三〇噸				
報知艦	二隻各	一,八〇〇噸	一隻	一,八〇〇噸	宮古	一,八〇〇噸

水雷砲艦　三隻各　八七〇噸
 計　十九隻　八七、八〇〇噸　四隻　二八、〇〇〇噸　四隻　二九、七六六噸
 而シテ二十七八年戰役ノ結果東洋ノ情勢ニ變化ヲ來タセルト實戰ノ經驗トニ鑑ミ明治二十八
 年ニ至リ二十五年ノ計畫ニ修正ヲ加ヘ更ニ左記ノ艦艇ヲ新造スルノ計畫ヲ立テタリ

甲鐵戰艦	四隻	一萬五千噸ノモノ
一等巡洋艦	四隻	七千三百噸ノモノ
二等巡洋艦	三隻	吉野型
三等巡洋艦	四隻	三千噸ノモノ
報知艦	二隻	千九百噸ノモノ
水雷砲艦	五隻	龍田型
水雷母艦兼工作船	二隻	「ヴァルカン」型
「アルミニユーム」水雷艇	付六隻完	「ヴァルカン」型
運送船	各軍港ニ一隻宛常時附屬シ火夫ノ練習ニ兼用セシム	「トリブル、エキスパンション」ノ機關ヲ備ヘタルモノヲ

以上ノ外ニ驅逐艇(二五〇噸)十一隻、一等水雷艇(一二〇噸)三十一隻、二等水雷艇(八〇噸)二十
 三隻、三等水雷艇(五四噸)十隻
 然ルニ右計畫ノ艦艇新造ニ要スル費額及之ニ伴フテ施設スヘキ沿岸防禦等ニ要スル費額ヲ積
 算スルトキハ二億圓ヲ超過スルヲ以テ先ツ之ヲ二億圓以内ニ縮減スルノ考量ニ依リ製艦計畫

ヲ左ノ如ク更定セリ二十八年七月西郷海軍大臣ノ閣議ニ提出セルモノハ此更定計畫ニ依レルナリ

一等甲鐵戰艦	四隻
一等巡洋艦	四隻
二等巡洋艦	三隻
三等巡洋艦	二隻
水雷砲艦	三隻
水雷母艦兼工作船	一隻
水雷驅逐艇	十二隻
一等水雷艇	十六隻
二等水雷艇	三十七隻
三等水雷艇	十隻
計	七十五隻

甲鐵戰艦以下水雷母艦以上
驅逐艇水雷艇

七十五隻

右製艦計畫ニ就キ西郷海軍大臣ノ内閣ニ提出セル説明書ノ要領ヲ擧クレハ左ノ如シ

海軍擴張ノ事ハ今ヤ既ニ朝野ノ等シク急務ト認メ一人ノ異議ヲ唱フルモノナキノ氣運ニ達シタレハ復タ之ヲ論スルノ要ナシ故ニ直ニ本計畫ニ就テ説明セントス

夫レ海軍主要ノ目的ハ海上ノ權ヲ制スルニ在リ海上ノ權ヲ制センニハ先ツ充分洋中ノ戰鬪

航海ニ堪ヘ敵ノ艦隊ヲ洋面ヨリ撃攘スルニ足ルノ主戦艦隊ヲ備ヘサル可ラス而シテ主戦艦隊ハ甲鐵艦隊ヲ主體トセサル可ラサルハ固ヨリ明カナル所ニシテ昨年來清國トノ役ニ於テ愈々其然ルヲ實驗シタリ是レ本計畫ノ冒頭ニ於テ先ツ甲鐵戰艦ノ製造ヲ策案セル所以ナリ然レトモ唯トリ甲鐵戰艦ノミヲ以テ作用完全ナル主戦艦隊ヲ組織シ得ルモノニアラス必スヤ別ノ數種ノ軍艦アリテ之レカ補助隊ヲ組織セサル可ラサルコト猶ホ陸軍ニ砲工騎兵アリテ歩兵ノ本隊ヲ輔佐セサル可ラサルカ如シ今此補助隊ニ編入スヘキ軍艦ノ種類ニ就キ左ニ之ヲ述ヘン

(イ) 戰略ヲ定ムルニハ敵ノ所在運動ヲ偵知スルヨリ先ナルハナシ之ヲ爲スニハ速力極メテ迅快ナル巡洋艦ノ多數ヲ有シ交々敵地ニ派遣シ斷ヘス敵ノ動靜ヲ本隊ニ報告セシメサル可ラス而シテ我之ヲ爲スト同時ニ敵モ亦タ之ヲ爲スヘケレハ我艦隊ノ之ヲ防クニモ亦速力迅快勢力優等ナル巡洋艦ヲシテ之ヲ追撃セシメサル可ラス又戰術ヲ決スルニハ務メテ速カニ敵ノ艦數陣形ヲ前知スルヲ要スルカ故ニ艦隊ノ航行ニ當テハ前面及左右ニハ必ス斥候艦ヲ出スヲ例トス是レ亦速力迅快ナル巡洋艦ノ任務ナリ是ニ由テ之ヲ觀レハ多數ノ巡洋艦ハ必ス甲鐵艦隊ニ附屬セシメサル可ラサルヤ明カナリ是レ本計畫ニ於テ第二ニ大小三種ノ巡洋艦製造ヲ策案セル所以ナリ

(ロ) 巡洋艦ニ次テ必要ナルハ水雷砲艦ナリ其任務ハ主トシテ敵ノ水雷艇ヲ破壊スルニ在リ抑々甲鐵戰艦ノ最モ恐ルヘキ所ノモノハ水雷艇ノ攻擊ト爲ス故ニ水雷砲艦アリテ常ニ

艦隊ニ伴ヒ日中若シ敵ノ水雷艇ヲ見レハ之ヲ追撃破壊シテ後ノ憂ヲ絶チ艦隊夜中航行ノ際ハ甲鐵戰艦ノ側面ニ在テ之カ警戒ニ任シ艦隊港灣ニ據ル場合ハ其港灣口ヲ巡邏警戒シ又敵ヲ封鎖スルトキハ其封鎖線ヲ哨戒シテ敵水雷艇ノ來襲ヲ防禦セシムル等ノ任務ニ從事セシメサル可ラス是レ主戰艦隊ニハ必ス此種ノ軍艦ヲ要スル所以ナリ而シテ此種軍艦ハ其主タル目的ハ此ニ存スト雖モ水雷ヲ備フルカ故ニ又夜中敵ノ甲鐵戰艦ヲ海上ニ襲フコトヲ得ヘク且ツ速力大ナルヲ以テ通報艦ノ代用ヲ爲サシムルヲ得ヘク吃水淺キヲ以テ河江ヲ溯航セシムルヲ得ル等間接ノ利便少ナカラサル艦種ナリトス

(ハ)主戰艦隊第一ノ任務ハ敵艦隊ヲ洋面ヨリ攘フニ在リト雖モ敵其防禦港内ニ潛籠シ我艦隊ト雌雄ヲ決スルヲ避ケ隙ヲ窺ヒ時々出テテ我海上ノ交通ヲ妨碍セントスルカ如キコトアルトキハ則チ今回威海衛ノ役ノ如ク我艦隊ハ敵ニ接近シテ之ヲ封鎖シ機ヲ見テ水雷艇ヲ敵港内ニ放チ之ヲ破壊セシムルノ策ニ出テサル可ラス然ルニ水雷艇ヲ敵地ニ送クルニハ天候ノ最モ穩カナル場合ヲ見テ航行セシメ途中諸所ニ寄泊シ乗員ヲ休養シ炭水ヲ補充セシメサル可ラサル等大ニ時日ヲ費スノミナラス或ル季節ニ際シテハ到底之ヲ實行シ得サルコトアリ故ニ此缺點ヲ補フニハ水雷艇數隻ヲ運搬シ得ル軍艦ヲ製シ之ヲ艦隊ニ所屬セシムルヲ要ス本計畫ニ水雷母艦トアルモノ即チ是レナリ而シテ水雷母艦ハ唯トリ此任務ヲ完フスルノミナラス我艦隊ノ出征根據地ニ防禦ヲ施シ又ハ敵ノ港灣ヲ封鎖スルニ要スル布設及機械水雷ヲ積載シ或ハ時宜ニ依リ他ノ水雷艇隊ノ給養ニ

任スル母艦トナリ又水雷艇ノ修理工場ノ用ヲ爲ス等頗ル用途ノ多キモノニシテ艦隊ニハ必要缺ク可ラサルモノナリトス

主戰艦隊ヲ組織スルニ必要缺ク可ラサル要素ハ前述ノ如ク第一甲鐵戰艦、第二大小巡洋艦、第三水雷砲艦、第四水雷母艦ナリトシ次ニ起ル問題ハ我國ニ備フヘキ此主戰艦隊勢力ノ程度ナリトス

案スルニ將來國際ノ關係固ヨリ測ル可ラスト雖モ徒ラニ列國ト對抗シ得ヘキ艦隊ヲ備フヘシト云フカ如キ空論タルヲ免レス故ニ東洋ニ於ケル利害ノ關係ヨリシテ我國ニ對シテ連合對抗ヲ爲スノ虞アルモノニ就キ其東洋ニ派遣シ得ヘキ艦隊ヲ想定シ之ニ優ルノ艦隊ヲ備フルヲ以テ方針ト爲スヘシ然ラハ今各種ノ軍艦何隻ヲ造ラハ此程度ニ達スヘキカ此實際問題ヲ決スルハ至難ナリ何トナレハ各國海軍ノ勢力ハ一日モ靜止セス一國之ヲ擴張スレハ之ト利害ノ關係アル他國モ亦之ヲ擴張スルノ常勢ナルカ故ニ今我國ニ於テ之ヲ擴張スレハ其實現ヲ見ルノ曉ニハ彼モ亦之ヲ擴張シテ東洋派遣ノ軍艦ヲ増サントスルハ必然ノ趨勢ナレハナリ然レトモ此ノ如ク論スルトキハ遂ニ際限ナキヲ以テ先ツ現今ニ於ケル宇内ノ大勢ニ察シ緩急事アルニ當リ東洋ニ派遣シ得ヘキ一國ノ勢力若クハ之レニ一、二國連合スルノ勢力ヲ標準トシ之ニ對抗スルニ足ルノ艦隊ヲ備フルヲ以テ程度ト爲スヘシ

本計畫ハ實ニ前述ノ標準ニ依リテ成レルモノナリ即チ一等甲鐵戰艦四隻ヲ造リ目下製造中

ニ係ル二隻ノ甲鐵戰艦ト合シテ六隻ノ新式甲鐵戰艦ヲ備ヘント欲スルモノナリ若夫レ彼等
カ既ニ派遣シツツアリ又將來派遣スヘキ舊式甲鐵戰艦ニ對シテハ我ハ鎮遠、扶桑、松島、嚴島、橋
立及新計畫一等巡洋艦等ヲ以テスレハ敢テ不可ナカルヘシ

主戰艦隊ノ主體タル甲鐵戰艦ノ隻數既ニ定マラハ其補助隊タル巡洋艦及水雷砲艦ノ隻數ハ
自ラ一定セル比例アリ即チ甲鐵艦一隻ニ付キ巡洋艦ハ大小合シテ三隻、水雷砲艦ハ一隻トス
而シテ水雷母艦ニ至テハ未タ此ノ如ク定マレル比例ナシト雖モ敵ノ一港ヲ封鎖スルニハ少
クトモ十二隻ノ水雷艇ヲ要スルモノト認メ其六隻宛ヲ積載運搬シ得ルモノニ二隻ヲ艦隊ニ附
屬スルモノトセリ

今前記ノ比例ヲ以テ主戰艦隊ヲ組織スルモノトセハ巡洋艦ハ實ニ十八隻ヲ要シ水雷砲艦ハ
六隻ヲ有セサルヘカラス然ルニ本計畫ニ於テ新ニ製造セントスルモノ此數ニ充タサル所以
ノモノハ既ニ吉野、秋津洲、高千穂、浪速、千代田、須磨、明石、龍田等ノ諸艦アリテ此用ヲ爲サシムル
ニ足レハナリ

本計畫ハ十年ヲ期シテ完備セシメントスルモノナリ而シテ此十年ノ後ニ至テハ我現在ノ軍
艦中前記吉野以下八隻ノ外ニ尙ホ用ヲ爲スヘキモノ概略左ノ如シ是等ノ軍艦ハ宜シク別ニ
一艦隊ヲ編制シテ主戰艦隊ノ豫備隊ト爲スヘキモノナリ

鎮遠
扶桑
嚴島
松島
橋立

和泉　濟遠　高雄　筑紫　廣丙
八重山　平遠　大島　赤城　鳥海
摩耶　愛宕

金剛、比叡、葛城、武藏、大和、天龍、海門、天城、磐城等ノ裝帆艦ハ假令其船體機關完全ナルモノト看做スモ之ヲ戰闘艦トシテ使用シ得ル軍艦中ニ算入ス可ラサルモノトス況ンヤ十年ノ後ニ至ラハ船體機關共ニ老朽シテ其勢力效用兩ナカラ一層衰フヘキニ於テヲヤ然レトモ是等ノ軍艦ト雖モ全ク無用ニ歸スヘキニアラス平時或ハ練習艦或ハ隣邦居留帝國臣民ノ保護密獵ノ取締測量艦等ノ任務ニ用フルニハ充分ナルノミナラス戰時ト雖モ既ニ主戰艦隊ヲ以テ海上ノ權ヲ占メシ上ハ諸般ノ任務ヲ負ハシムルヲ得ヘキナリ

捕獲砲艦鎮東形六隻及操江ノ如キハ十年後ノ用務ニハ全ク堪ヘサルモノト看做スヘキナリ

本計畫ノ甲鐵戰艦ハ其排水量一萬五千噸ノ上ニ出テ之ヲ英國最新ノ最大甲鐵戰艦ニ比スルニ優ルコトアルモ劣ルコトナク他ノ各國ニ於テハ未タ其比ヲ見ス然ルニ今我國ニ於テ之ヲ備ヘントスルハ左ノ如キ實利アルヲ思ヘハナリ

(イ)此ノ如キ大甲鐵戰艦ハ蘇西運河ヲ通過スルヲ得サルヲ以テ有事ノ際歐洲ヨリ我甲鐵戰艦ニ西敵スヘキ軍艦ヲ送ラントセハ必ス喜望峰ヲ廻ハラサルヲ得ス喜望峰ヲ廻ハルトセハ時日ト費用トヲ要スルノミナラス英國ノ外此航路ニ於テ相當ノ石炭貯藏所ヲ有セ

サルカ故ニ英國中立ヲ守ルトキハ殆ント途中石炭ヲ得ルニ究スハシ此一事既ニ其意氣ヲ沮喪セシメ從前ノ如ク事アレハ則チ俄然我ニ優レル勢力ノ軍艦ヲ派シテ示威運動ニ類スル舉措ヲ爲スヲ得サラシム

(ロ)然ラハ平時ヨリ喜望峰ヲ廻ハリ豫メ我ニ對スルニ足ル甲鐵戰艦ヲ派遣シ置カンカ之カ爲其本國ニ於ケル勢力ノ大部分ヲ割カサル可ラサルカ故ニ新ニ一大計畫ヲ立テ其海軍ヲ擴張シテ之ヲ補充スルヲ要シ又東洋ニ此ノ如キ大艦數隻ヲ修繕スヘキ造船所船渠ヲ有セサルヲ如何セン是等ヲモ更ニ増築セントセハ益々莫大ノ費用ヲ擲タサル可ラス是レ平時東洋ニ有スル利益ニ比準シテ容易ニ實行シ能ハサル所ナラン

(ハ)果シテ然ラハ緩急ニ應シ東洋ニ派遣スヘキモノハ大抵蘇西運河ヲ通過シ得ル次等ノ甲鐵戰艦及巡洋艦ト看做シテ大過ナルヘシ之ニ對シテハ我ハ甲鐵戰艦六隻ニ加フルニ各七千餘噸ノ一等巡洋艦四隻ヲ以テセハ可ナラン

本計畫ノ巡洋艦モ亦未タ曾テ本邦ニ見サル所ノ大艦ニシテ其一等ニ位スルモノハ從來歐洲諸國ノ東洋ニ派遣セル巡航甲鐵艦及舊式甲鐵艦ノ如キモノニ充分匹敵シ得ヘキモノナリ而シテ其二等以下ノモノモ亦タ我現有同等ノ巡洋艦ヨリモ勢力優レルモノニシテ現今東洋派遣ノ外國同等艦ノ企テ及ハサル速力ト速射砲ノ多數ヲ有スルモノナリ

本計畫ノ甲鐵戰艦ハ其艦型目下在東洋ノ最大艦タル英艦「センチユリフン」ニ似テ排水量ハ同艦ヨリ多キコト殆ント五千噸勢力亦從テ大ナルモノナリ又一等巡洋艦ハ現今東洋ニ最銳利

ノ稱アル英國一等巡洋艦「エドガー」ニ類シ二等巡洋艦ハ我吉野ニ改良ヲ加ヘテ其大サヲ増シタルモノ三等巡洋艦ハ我須磨ニ改良ヲ加ヘ稍々其排水量ヲ増加セルモノナリ

爰ニ附言セント欲スルハ今多數ノ艦船ヲ製造セントセハ之カ爲メニ財政ノ事ヲ外ニスルモ尙ホ乗員ノ養成ナリ船渠倉庫ノ増築ナリ艦船繫泊場ノ擴張ナリ其他鎮守府一般工事ノ擴張ノミナラス新ニ鎮守府ヲモ増設スルノ必要起ルカ故ニ是等ニ要スル年月ヲ考慮セハ決シテ一時ニ過大ノ計畫ヲ實施シ得ヘカラスト云ヒ或ハ一時ニ實施シ能ハサルモ大計畫ハ之ヲ立て二十年三十年若クハ四十年五十年ヲ期シテ之ヲ完備スルノ方針ヲ執ルヘシト云フコト是レナリ其言一理アルカ如シト雖モ學術日新ノ今日十數年後ニ製造スヘキ軍艦ノ種類型式ヲ計畫スルカ如キハ迂遠ノ至リナルノミナラス本計畫ト雖モ四年五年ノ後ニ於テハ或ハ之ヲ變更スルノ止ムヲ得サルニ遭遇スルヤモ測ル可ラス且ツ前ニモ述ヘタル如ク各國海軍ノ程度亦今日ノ儘ニ靜定スルモノニ非サレハ其未來ヲ想像シ之ニ對シテ百年ノ大計ヲ畫スヘシト云フカ如キハ眞ノ空論タルニ過キス要ハ先ツ各國海軍艦船ノ現勢ト其刻下増製計畫ノ進行トニ察シ又艦船製造ニ伴フテ必要ナル乗員ノ養成鎮守府等ノ諸準備ニ要スル年月等ニ考ヘ尙ホ學術進歩ノ結果トシテ從來艦船兵器ノ製式變遷ノ年代等ニ鑑ミ本計畫ノ如ク十年ヲ期シテ製造スヘキ艦船ヲ案定シ爾餘ハ常ニ各國海軍擴張ノ狀態ニ注意シ必要ヲ察知スルニ從ヒ漸次增勢スルノ方針ヲ採ルコト最モ妥當ナリトス

尙ホ一言スヘキコトアリ本計畫ニ於テ新製スヘキ軍艦ヲ外國ニ註文スルモノト内國ニテ製

造スルモノト區分セルハ全體經費及竣工年月ノ上ヨリ觀察スレハ外國ニ註文スルコトハ内國ニ於テ製造スルヨリ遙ニ得策ナリト雖モ此ノ如クセハ我職工ヲ維持シ又其技術ニ熟練セシムルノ機會ヲ與フルコト能ハシシテ戰時及將來ニ大影響ヲ及ホシ海軍永遠ノ見地ヨリ却テ不得策ナルヲ覺フ是レ經費多額ニ上リ竣工年月延引スルノ不利アルニ關セス若干ノ軍艦ハ本邦ニ於テ製造セシメントスル所以ナリ

以上叙述セル所ヲ綜合要約スレハ左ノ如シ

- 一、海軍ノ目的ハ海權ヲ制スルニ在リ故ニ敵ト對抗スルニ足ルヘキ主戰艦隊ヲ備フヘシ
- 二、主戰艦隊ノ主體ハ甲鐵戰艦ナリ
- 三、主戰艦隊ハ甲鐵戰艦ノ外ニ巡洋艦以下ヲ以テスル補助隊ナカル可ラス
- 四、我主戰艦隊ノ程度ハ現下及近キ將來ニ於テ東洋ニ派遣セラレ得ヘキ一國ノ勢力若クハ之レニ一、二國連合スルノ勢力ヲ標準トシ之ト對抗スルニ足ルヘキモノタルヲ要ス
- 五、右ノ標準ニ依レハ甲鐵戰艦六隻、巡洋艦十八隻、水雷砲艦六隻、水雷母艦二隻ヲ備ヘサル可ラス

甲鐵戰艦四隻ハ本計畫ニ依リ二隻ハ製造中ノモノヲ充ツ

巡洋艦九隻、水雷砲艦三隻、水雷母艦一隻ハ本計畫ニ依リ他ハ現有及製造中ノモノヲ充

ツ

六、本計畫ハ十年ヲ期シテ製造スヘキモノヲ策定セルモノニシテ之ヲ以テ永遠ノ程度トス

ルモノニ非ス故ニ常ニ列國情勢ニ注意シ必要ヲ認ムル毎ニ漸次計畫ヲ要ス

七、現有軍艦ハ其速力大ナル巡洋艦ノ外ハ本計畫ノ主戰艦隊ト運動ヲ共ニスルコト難シ故ニ是等ハ豫備隊ト爲シ又ハ平時ニ於ケル諸般ノ任務ニ充ツ

右西郷海軍大臣ノ提議ハ二十八年七月閣議ノ決定ヲ經タリ但シ財政上ノ關係ヨリ本計畫ハ之ヲ二期ニ分チテ帝國議會ニ提案スルコトトナレリ

明治二十九年度以降第一期擴張實施

(海軍擴張費設定、二十九年度
以降七箇年度繼續擴張費)

第一期擴張ハ前述明治二十八年七月西郷海軍大臣ヨリ提議シ閣議ノ決定ヲ經タル計畫中ニ屬スルモノニシテ同年十二月第九回帝國議會ニ提案セラレタルモノナリ

其提案ニ依レハ償金繰入、事業公債、普通歲入ヲ以テ財源トシ金九千四百九十七萬九千六百八十五圓八十四錢七厘ヲ支出シ以テ造船、造兵、建築ノ諸費ニ當テムトスルモノニシテ其豫算説明書ノ要領ハ左ノ如シ

海軍軍備ノ企圖ハ夙ニ計畫スル所アリシモ現時ノ状勢ニ應シ艦艇ノ製造ヲ要ス

艦船ヲ増備スルニ從ヒ之ニ要スル兵員ノ訓練配給、軍需品ノ貯藏供給及艦船兵器並ニ其屬具ノ製造修理等ニ至テハ横須賀、吳、佐世保、三鎮守府ニ於ケル現今ノ程度ヲ以テハ之ニ應スルニ足ラス故ニ各鎮守府ノ主眼トスル性質及程度ニ伴ヒ兵舍病室造船工場及諸倉庫等ノ増設ヲ要ス又一方ニ於テハ舞鶴鎮守府ノ設備ヲモ漸次完成セントス

軍港要港其他ノ要所ニハ水雷艇及敷設水雷其他副防禦ヲ要スルカ故ニ水雷隊攻撃部及水雷隊敷設部ヲ配置シ水雷艇圍場水雷艇船渠倉庫及兵舍等ノ新設ヲ要ス
海軍望樓ハ主トシテ陸上ト艦船トノ信號及海上ニ起ル要事ノ通信ヲ掌ラシムルニ在ルヲ以テ沿ク沿岸ノ諸要所ニ設置セサルヘカラス現時望樓ノ數僅少ニシテ其用ヲ充備スルニ足ラサルヲ以テ増設ヲ要ス

如上ノ計畫ニ對シ其費用ヲ算定スルニ總計九千四百九十七萬九千六百八十五圓八十四錢七厘ヲ要ス因テ本年度臨時部中海軍擴張費ノ款造船費造兵費建築費ノ三項ヲ設ケ二十九年度ヨリ三十五回度ニ涉ル七箇年度間ノ繼續費トシ以テ之カ事業ノ完成ヲ期セントス

但本費豫定金額内ニ於テ外國貨幣ヲ以テ仕拂フヘキ貨幣交換相場ハ英貨一磅ニ付我通貨十圓換ノ豫定トス

(豫算科目及年度割等ハ建築費ニ對シテ議會ニ於テ修正ヲ加ヘ其他ハ原案通過シ後出豫算決定支出割等ニ同シキヲ以テ茲ニ省略ス)

右費金ヲ以テ製造スヘキ各艦ノ種別左ノ如シ

甲鐵戰艦	一五、一四〇 <small>頭</small>	一隻
一等巡洋艦	七、三〇〇	二隻
二等巡洋艦	四、八五〇	三隻
水雷砲艦	一、二〇〇	一隻

驅逐艦

二五四

八隻

水雷艇

(三二等
五隻
二十八隻)

三十九隻

第九回 帝國議會ハ本豫算案中建築費ノ項ニ於テ二十萬三千四百四十圓ヲ削減シ修正ヲ加ヘテ協賛シタリ(即チ海軍擴張費二十九年度以降三十五年度ニ亘ル七箇年度間ノ繼續費總額九千四百七十七萬六千二百四十五圓八十四錢七厘斯クテ御裁可ヲ經テ實施セル豫算決定支出割等左ノ如シ

科 款 項 目	目	各年度支外出豫算額						合計
		二十九年度	三十年度	三十一年度	三十二年度	三十三年度	三十四年度	
擴海軍費	造船費	三、二九・七九五〇	三、八四・〇一七七五	三、一三五・四四五	二、八〇・九三五	二、六七・九九五	一、八〇・五〇九五	一、一三一・九七七
軍艦兵器費	軍艦製造費	三、七九・四七三〇	二、一九・九八六	一、〇三九・一〇五	一、〇三九・一〇五	一、〇三九・一〇五	一、〇三九・一〇五	一、〇三九・一〇五
軍艦兵器費	水雷艇製造費	六、一九・三一三〇	一、三・九七八	一、〇一・九三八	一、〇一・九三八	一、〇一・九三八	一、〇一・九三八	一、〇一・九三八
軍艦兵器費	雜船製造費	五、四五・三八〇〇	五、七三・九三四	六、一〇一・九三五	六、一〇一・九三五	六、一〇一・九三五	六、一〇一・九三五	六、一〇一・九三五
軍艦兵器費	作監造船費	二、九五・〇〇〦〇	三、九七・八〇〦〦	一、〇一・九三五	一、〇一・九三五	一、〇一・九三五	一、〇一・九三五	一、〇一・九三五
軍艦兵器費	船場機械費	一、一七・三三〇〇	一、一七・三三〇〇	一、一七・三三〇〇	一、一七・三三〇〇	一、一七・三三〇〇	一、一七・三三〇〇	一、一七・三三〇〇
軍艦兵器費	守府機械費	一、一七・五九一〇	一、一七・五九一〇	一、一七・五九一〇	一、一七・五九一〇	一、一七・五九一〇	一、一七・五九一〇	一、一七・五九一〇
軍艦兵器費	造兵費	一、一七・五九一〇	一、一七・五九一〇	一、一七・五九一〇	一、一七・五九一〇	一、一七・五九一〇	一、一七・五九一〇	一、一七・五九一〇

水雷艇兵器費	一九零九年六月一日至一九一〇年五月三十日止	五百零九元六角五分
水雷隊兵器費	一九〇九年六月一日至一九一〇年五月三十日止	五百零九元六角五分
海兵國及望	一九〇九年六月一日至一九一〇年五月三十日止	五百零九元六角五分
樓兵器費	一九〇九年六月一日至一九一〇年五月三十日止	五百零九元六角五分
海兵器械費	一九〇九年六月一日至一九一〇年五月三十日止	五百零九元六角五分
既造舞鶴鎮守府費	一九〇九年六月一日至一九一〇年五月三十日止	五百零九元六角五分
豫造兵械費	一九〇九年六月一日至一九一〇年五月三十日止	五百零九元六角五分
備砲機械費	一九〇九年六月一日至一九一〇年五月三十日止	五百零九元六角五分
購入機械費	一九〇九年六月一日至一九一〇年五月三十日止	五百零九元六角五分
守府費	一九〇九年六月一日至一九一〇年五月三十日止	五百零九元六角五分
督諸費	一九〇九年六月一日至一九一〇年五月三十日止	五百零九元六角五分
監督費	一九〇九年六月一日至一九一〇年五月三十日止	五百零九元六角五分
作場費	一九〇九年六月一日至一九一〇年五月三十日止	五百零九元六角五分
建築費	一九〇九年六月一日至一九一〇年五月三十日止	五百零九元六角五分

(建築費ノ各目ハ之ヲ省ク)

明治三十年度以降第二期擴張實施

(擴張計畫中追加) 第一期擴張費追加(第一期第二期ヲ通シ二十九年度以降三十八年度ニ亘ルト簡年度ノ繰賣費ニ更定)

年度以降三十八年度^ニ貢ル十箇年度ノ繼續費ニ更定

第一期擴張費ニ關シテハ前項ニ記述セルカ如シ而シテ其後東洋ノ形勢ニ鑑ミ尙ホ有力ナル巡洋艦建造ノ必要ニ迫リ明治二十九年五月西郷海軍大臣ハ第一期第二期擴張計畫ノ内ニ更ニ一等巡洋艦二隻ヲ追加スルコトヲ閣議ニ提出シ裁可ヲ經タリ是ニ於テ本計畫中ノ一等巡洋艦ハ六隻ト爲レリ

乃チ明治二十九年十二月西郷海軍大臣ハ第二期擴張費豫算ヲ第十回帝國議會ニ提案シ一ノ修

正ナクシテ其協賛ヲ得タルヲ以テ裁可ヲ經テ實施セラレタリ

右提案ハ當初計畫ノ外前記一等巡洋艦二隻ノ追加及第一期擴張ノ内一等巡洋艦ノ設計變更ニ伴フ增費ヲモ含ミ第一期第二期ヲ通シテ海軍擴張費ヲ明治二十九年度ヨリ三十八年度ニ亘ル十箇年度ノ繼續費ト更定シ其總額ヲ二億千三百十萬九百六十四圓八十四錢一厘トセリ(外國貨幣換算)萬百十六圓三十四錢八厘ト更定(後出)步合變更ノ爲メ總額ヲ二億千百六十五

提案ノ要領及費金ノ決定支出額等ヲ舉クレハ左ノ如シ

海軍擴張事業ニ關シテハ既ニ第一着手トシテ總額九千四百七十七萬六千二百四十五圓八十
四錢七厘ヲ以テ明治二十九年度ヨリ三十五年度ニ涉ル繼續費ノ決定ヲ見タリト雖モ今此事業ノ目的ヲ達センカ爲メ第二着手トシテ明治三十年度ヨリ三十八年度ヲ期シ尙一億千二百九十八萬六千九十八圓九十九錢四厘ヲ要シ又第一着手一等巡洋艦二隻ノ設計ヲ變更セサルヲ得サル情勢ニ迫リ之レカ增費金五百三十三萬八千六百二十圓ヲ要シ此合計一億千八百三十二萬四千七百十八圓九十九錢四厘ノ追加支出ヲ要ス依テ既ニ二十九年度ニ於テ決定シタル海軍擴張費ノ繼續費ニ併算シ即チ海軍擴張費ノ總額ヲ二億千三百十萬九百六十四圓八十
四錢一厘ニ改メ明治二十九年度ヨリ三十八年度ニ涉ル十箇年度ノ繼續費ト更定セラレンコトヲ要ス

其更定ヲ要スル概要ヲ表示スレハ左ノ如シ

款項	既定支出額	追加支出額			合計
		第一着手ニ要スル分	第一着手巡洋艦設計増ノ分	第二着手トシテ要スル分	
海軍擴張費	九四、七七六、三四五、八四七	五三八、六三〇、〇〇〇	一一三、一〇〇、九六四、八四二	一一三、九六〇、九六四、九九四	二二三、九六〇、九六四、八四二
造船費	四七、一四、五七六、一六〇	五三八、六三〇、〇〇〇	一二六、〇四七、九五二、八〇	一二六、〇四七、九五二、八〇	一二六、〇四七、九五二、八〇
建兵費	三三、七五一、一六一、八〇〇	〇	三三、一七六、三九〇、六〇	六六、九三七、四九二、五六〇	六六、九三七、四九二、五六〇
	三三、八七〇、五〇六、八八七	〇	六、三五四、九〇〇、一九四	二〇、一三五、四九七、〇八二	二〇、一三五、四九七、〇八二

尙既定豫算額ノ外今回協賛ヲ經ヘキ第二期擴張費追加支出額各自金額ノ區分ヲ左ニ摘示ス
 (備考) 追加支出額中外國貨幣ヲ以テ仕拂フヘキ貨幣換算相場ハ英貨一磅ニ付我通貨十圓
 換ノ豫定トス

科款	項目	各年度豫算額						合計
		三十年度	三十一年度	三十二年度	三十三年度	三十四年度	三十五年度	
擴張費	造船費	一、七七六、三四五、八四七	一、八七〇、五〇六、八八七	一、九三一、五〇三、八四七	一、九〇六、六五〇、八六七	一、九〇六、六五〇、八六七	一、九〇六、六五〇、八六七	二一六、三九〇、九九四
軍艦製造費	軍艦製造費	一、七七六、三四五、八四七	一、八七〇、五〇六、八八七	一、九三一、五〇三、八四七	一、九〇六、六五〇、八六七	一、九〇六、六五〇、八六七	一、九〇六、六五〇、八六七	二一六、三九〇、九九四
水雷艇製造費	水雷艇製造費	一、七七六、三四五、八四七	一、八七〇、五〇六、八八七	一、九三一、五〇三、八四七	一、九〇六、六五〇、八六七	一、九〇六、六五〇、八六七	一、九〇六、六五〇、八六七	二一六、三九〇、九九四
雜船製造費	雜船製造費	一、七七六、三四五、八四七	一、八七〇、五〇六、八八七	一、九三一、五〇三、八四七	一、九〇六、六五〇、八六七	一、九〇六、六五〇、八六七	一、九〇六、六五〇、八六七	二一六、三九〇、九九四
作監造既造船費	作監造既造船費	一、七七六、三四五、八四七	一、八七〇、五〇六、八八七	一、九三一、五〇三、八四七	一、九〇六、六五〇、八六七	一、九〇六、六五〇、八六七	一、九〇六、六五〇、八六七	二一六、三九〇、九九四
舞鶴鎮守府費	舞鶴鎮守府費	一、七七六、三四五、八四七	一、八七〇、五〇六、八八七	一、九三一、五〇三、八四七	一、九〇六、六五〇、八六七	一、九〇六、六五〇、八六七	一、九〇六、六五〇、八六七	二一六、三九〇、九九四
機械費	機械費	一、七七六、三四五、八四七	一、八七〇、五〇六、八八七	一、九三一、五〇三、八四七	一、九〇六、六五〇、八六七	一、九〇六、六五〇、八六七	一、九〇六、六五〇、八六七	二一六、三九〇、九九四
及費	及費	一、七七六、三四五、八四七	一、八七〇、五〇六、八八七	一、九三一、五〇三、八四七	一、九〇六、六五〇、八六七	一、九〇六、六五〇、八六七	一、九〇六、六五〇、八六七	二一六、三九〇、九九四
建造兵費	建造兵費	一、七七六、三四五、八四七	一、八七〇、五〇六、八八七	一、九三一、五〇三、八四七	一、九〇六、六五〇、八六七	一、九〇六、六五〇、八六七	一、九〇六、六五〇、八六七	二一六、三九〇、九九四
造兵費	造兵費	一、七七六、三四五、八四七	一、八七〇、五〇六、八八七	一、九三一、五〇三、八四七	一、九〇六、六五〇、八六七	一、九〇六、六五〇、八六七	一、九〇六、六五〇、八六七	二一六、三九〇、九九四
擴張軍費	擴張軍費	一、七七六、三四五、八四七	一、八七〇、五〇六、八八七	一、九三一、五〇三、八四七	一、九〇六、六五〇、八六七	一、九〇六、六五〇、八六七	一、九〇六、六五〇、八六七	二一六、三九〇、九九四
造兵費	造兵費	一、七七六、三四五、八四七	一、八七〇、五〇六、八八七	一、九三一、五〇三、八四七	一、九〇六、六五〇、八六七	一、九〇六、六五〇、八六七	一、九〇六、六五〇、八六七	二一六、三九〇、九九四
擴張費	擴張費	一、七七六、三四五、八四七	一、八七〇、五〇六、八八七	一、九三一、五〇三、八四七	一、九〇六、六五〇、八六七	一、九〇六、六五〇、八六七	一、九〇六、六五〇、八六七	二一六、三九〇、九九四
海軍擴張費	海軍擴張費	一、七七六、三四五、八四七	一、八七〇、五〇六、八八七	一、九三一、五〇三、八四七	一、九〇六、六五〇、八六七	一、九〇六、六五〇、八六七	一、九〇六、六五〇、八六七	二一六、三九〇、九九四

二 年 度 マ テ 要 求 濟 額 三十	海 軍 擴 張 費	內	譯
一 三 、九 八 、五 〇 九 九 五	造 船 費	造 兵 費	建 築 費
八 一 、六 一 、九 六 九 、三 六 三	四 〇 、六 三 七 、一 六 三 、六 〇	一 〇 、七 一 、六 四 、八 九 三	

(建築費ノ各目ハ之ヲ省略ス)

右金額ハ其後外國貨幣換算率ノ變動ニ由リ左ノ如ク更定セラレタリ

海軍擴張費ニ於テ外國貨幣ヲ以テ支出スル貨幣交換相場ハ從來英貨一磅ニ付我通貨十圓ニ換算豫定シタリシモ明治三十年法律第十六號貨幣法發布ノ結果トシテ明治三十二年一度以降ノ既定支出豫算額ニ於ケル外國貨幣交換相場ハ我新金貨ヲ以テ英貨一磅ニ付我新金貨貨九圓七十六錢三厘換算スルコトトナリ其差額合計金百四十五萬八百四十八圓四十九錢三厘ヲ減スル爲メ各年度ノ支出額ヲ左表ノ通り更定セリ

更定海軍擴張費總額

ノ金額ヲ以テ第一期第二期ヲ通シテ左ノ艦船ヲ製造スル計畫ナリ	甲鐵戰艦	四隻
一等巡洋艦	六隻	一等巡洋艦
二等巡洋艦	三隻	二等巡洋艦
三等巡洋艦	二隻	三等巡洋艦
水雷砲艦	三隻	水雷砲艦
水雷母艦兼工作船	一隻	水雷母艦兼工作船
驅逐艦	十二隻	驅逐艦
一等水雷艇	十六隻	一等水雷艇
二等水雷艇	三十七隻	二等水雷艇

三等水雷艇

十隻

雜船

五百八十四隻

第一期第二期ヲ通シテ製造セル艦船

第一期第二期ヲ通シテノ製艦計畫ハ前掲ノ如シト雖モ其後ニ至リ編制上及貿易保護等ノ必要ニ依リ艦種隻數ニ若干ノ變更ヲ生シタリ今其狀態ヲ左ニ概叙ス

(計畫)

(實際製造セルモノ)

甲鐵戰艦

四隻

敷島、朝日、初瀨、三笠

一等巡洋艦

六隻

八雲、吾妻、淺間、常磐、出雲、磐手

二等巡洋艦

三隻

笠置、千歲、高砂

三等巡洋艦

二隻

新高、對馬、音羽

水雷砲艦

三隻

千早、後通報艦ト爲ル

淺喫水砲艦

一隻

宇治、伏見、隅田

水雷母艦兼工作船

一隻

驅逐艦

十二隻

二十三隻

(霞、電、叢雲、東雲、曙、連、夕霧、不知火、薄雲、朝霧、曉、有明、吹雪、曉)

一等水雷艇

十六隻

十六隻

(鶴、燕、真鶴、鷦鷯、千鳥、雁、蒼鷹、白鷹、
鷺、燕、雲雀、雉、鸞、鷗、鷂、鷦鷯、白鷹)

二等水雷艇

三十七隻

(第二十九號乃至第七十九號)

三等水雷艇

十隻

十隻

(第五十號乃至第五十九號)

雜船

五百八十四隻

五百八十四隻

右計畫中、編制上及貿易保護等ノ必要ニ依リ變更シタル經緯ヲ左ニ示ス

一、海軍ノ編制上水雷艇ノ増設ヲ急要トシ三十三年一月大藏大臣ノ同意ヲ得水隻母艦兼工作船一隻ノ製造ヲ止メ該費額ヲ以テ驅逐艦八隻ヲ建造スルコトニ變更セリ

二、海軍ノ編制上巡洋艦及淺喫水砲艦ノ増設ヲ急要トシ三十四年二月大藏大臣ノ同意ヲ得水雷砲艦三隻ノ内二隻ノ製造ヲ止メ該費額ヲ以テ三等巡洋艦一隻(音羽)及淺喫水砲艦一隻(宇治)ヲ建造スルコトニ變更セリ

三、揚子江上流用トシテ淺喫水砲艦ヲ急造スルハ貿易保護上其他ノ點ニ於テ最モ必要ナルヲ以テ水雷艇製造費ニ於テ約二十七萬圓水雷艇兵器費ニ於テ約七萬五千圓ヲ節約シテ之ニ充用シ三十六年度ニ於テ更ニ淺喫水砲艦一隻ヲ建造スルコトニ三十五年十月大藏大臣ノ同意ヲ得テ之ヲ豫算ニ組入レタルモ三十六年度豫算ハ第十七回帝國議會解散ノ爲メ不成立トナレリ然レトモ此揚子江上流用淺喫水砲艦ノ建造ハ稽延スヘキニアラサルヲ以テ三十七年度ニ於テ建造スヘキ豫定ナリシ一隻ヲモ合セ二隻(伏見)製造ノ事ニ三十六年二月更ニ大藏大臣ノ同意ヲ得テ着手セリ而シテ其工事費ハ造船費五十四萬圓造兵費十五萬圓ト豫算シ之ニ充當スヘキ財源ハ嘗テ計畫中ニアル百二十噸水雷艇船體ハ佛國ニ於テ製造スル豫定ナリシヲ内地ニ於テ製造セシ爲メ節約シタル費用ト兵器ノ外國購買ヲ内地製造ニ變更シ水雷製造ニ於

テ節約シタル費用ヲ以テセリ

四、造船費豫算内ニテ三十七年度ニ於テ雜役船六隻ヲ製造スルノ計畫ナリシニ豫算不成立ノ爲メ未タ其着手ニ至ラス然ルニ時局ハ更ニ驅逐艦ヲ製造スルノ必要ニ迫レルヲ以テ三十六年十二月大藏大臣ノ同意ヲ得テ右雜役船ノ製造ヲ止メ造船費豫算額内ニテ更ニ驅逐艦三隻(有明、吹雪、霞)ノ製造ニ着手セリ而シテ其費額ハ造船費百十八萬六百七十一圓ノ豫定トス

尙ホ第一期及第二期ヲ通シテ製造セル各艦船總表ヲ示セハ左ノ如シ

編者註、千早ハ三十年十月十八日一等水雷砲艦トシテ命名シ三十一年三月二十一日通報艦ト定メラレタルモノナリ、又本計畫中ニ甲鐵戰艦トアリテ左表中ニ一等戰艦トセルハ元來帝國海軍艦船ノ艦種類別ハ三十一年三月二十一日其標準ノ制定ヲ見ルニ至ルマテハ區々ノ稱呼ヲ用キタルニ因レリ、即チ明治六年八月二十四日甲第百七十一號海軍概則並俸給表ニ依レハ艦船ハ乘組人員數ヲ基準トシテ其等級ヲ設ケ之ヲ一等乃至七等トシ裝鐵艦ノミハ乘員數ニ關セス三等以上ニ列シ大中小ニ從ヒ一等二等三等ニ配シ尙ホ軍艦全體ヲ通シ三等以上ヲ大艦、四等五等ヲ中艦、六等七等ヲ小艦ト唱ヘ大尉艦長タルトキハ四等五等モ亦小艦ト稱セリ次テ二十三年八月十三日達第二百九十一號海軍艦船籍條例ニハ艦船ヲ第一種乃至第五種ニ區別シ、戰鬪航海ノ役務ニ堪フル軍艦ヲ第一種、水雷艇ヲ第二種、戰鬪航海ノ役務ニ堪ヘサル軍艦ヲ第三種、運送船曳船小蒸氣船ヲ第四種、倉庫船荷船雜船ヲ第五種トシ、二十六年十月十九日達第五號ヲ以テ水雷艇ハ排水量ニ從ヒ一等乃至三等ニ分テリ、二十九年三月二十九日勅令

第七十一號海軍艦船條例ニハ艦船ヲ四種ニ大別シ第一種軍艦、第二種軍艦、水雷艇、雜役船舟ト爲セリ、而シテ三十一年三月二十一日達第三十四號(親裁ヲ經タルモノ)ヲ以テ軍艦ヲ戰艦、巡洋艦、海防艦、砲艦、通報艦、水雷母艦ノ六種ニ、水雷艇ヲ驅逐艇、水雷艇ノ二種ニ類別シ、通報艦水雷母艦驅逐艇ヲ除クノ外、叙上ノ艦艇ハ各其排水量ニ從ヒ等級ヲ附スルコトトセリ、故ニ此類別等級制ヲ設ケラレタル以前ニ在テハ艦種型式ノ稱呼區々ニ涉レルモノアル亦已ムヲ得サルナリ

七八

七	七	六	六	四	四	四	四
十	十	十	十	十	十	十	十
五	一	七	三	九	五	一	號
十	八	八	八	八	二	〇	一
四	八	八	八	六	四	四	一
號	號	號	號	六	十	十	一
號	號	號	號	十	二	二	〇
號	號	號	號	六	六	六	一
號	號	號	號	四	四	四	一
號	號	號	號	十	十	十	〇
號	號	號	號	九	九	九	一
號	號	號	號	五	五	五	一
號	號	號	號	三	三	三	〇
號	號	號	號	一	一	一	一

三等水雷艇	十隻	五三〇噸
五	十	十
五	十	十
五	十	十
五	十	十
五	十	十
五	十	十
五	十	十
五	十	十
五	十	十

第一期第二期ヲ通シテノ海軍擴張費各年度實行支出別

第一期第二期ヲ通シテノ海軍擴張費更定額ハ明治二十九年十二月開會ノ第十回帝國議會ニ提出決定セル豫算ハ二億千三百十萬九百六十四圓八十四錢一厘ニシテ當時其繼續年度中ニ於ケル外國爲替相場ノ豫想減額百四十五萬八百四十八圓四十九錢三厘ヲ差引シテ總額二億千百六十五萬百十六圓三十四錢八厘ト爲ル計算ナリシカ其後實際支出セル總額ハ二億千九百九萬七

千九百六十二圓七十六錢六厘ニシテ内譯建築費二千二百十萬四百十三圓二十五錢六厘ヲ除キ
造船費造兵費ノ合計一億九千六百九十九萬七千五百四十九圓五十一錢ナリトス其各年度實行
支出別ハ左ノ如シ

海軍擴張費年度別自明治二十九年
至同年四十年度

度年一十三	度年十三	度年九十二	豫算現額	仕拂命令額	翌年度繰越額	不用額
海軍擴張費	海軍擴張費	海軍擴張費	三一九三・七〇九五〇	四〇四三・八七・六七六	一八・一四八・六〇・三二	四一・四〇四
造船費	建造費	建造費	二二・七四九・四六七・三一〇	三・〇九九・四八二・三九陆	九・六四九・五三・四二	四四一・四〇四
擴張費	擴張費	擴張費	七・七四七・五三九・一三〇	七九九・三〇九・二九九	六・九四八・三九八・三四	
			一・六九五・七二三・一六	一四四・五九六・一八六	一・五五一・二六・九五五	
			一六八〇九・九四五・七〇四	三三・四八七・四〇三・九五七	四六・三一九・二七七・四九二	三・三六四・二一六
			四五五・三九五・四六七・九五	三三・九一三・九六六・七九五	二一・四七六・一八五・七八四	四四一・四〇四
			二六・三五三・五〇三・九四	七・三一八・三三一・〇八三	一九・一三五・一八一・八三三	
			七・〇六一・〇〇五・九五五	一・三五五・〇九六・一三〇	五・七〇五・九〇九・八七五	
			九・四一・九五六・五六六	四五・五四、六二・九五五		
			五、四四四、一一・四二三	三〇・三九八・九六七・三八五		
			五、六〇三・五三・五四	三四・三〇三・五三六・一六九		
			三三・六一九・六三二・八三	二〇・一六六・六九〇・〇三二		
			九・四一・九五六・五六六	七・四三六・九〇九・二六六		
			五、七七一・三〇一・九三	二九四・〇〇〇		
			四五三六九・〇四五・七〇〇			
			六・三三・五六九・三六六			
			一七・六四三・六三九・三九三			
			五六二・五〇〇			

議、海軍擴張計畫

第十八節 明治三十五年及三十六年海軍大臣提

(成立―所謂第三期擴張―三十六年度以降軍艦製造及建築費
ノ設定)

明治三十五年十月二十七日海軍大臣男爵山本權兵衛ハ海軍擴張ノ議(明治三十六年度以降十一箇年度間ノ繼續費一億千五百萬圓ヲ以テ製艦及陸上設備ニ充ツルコト)ヲ閣議ニ提出セリ

此擴張案ハ最初一億五千萬圓ヲ以テ一等戰艦(一萬五千噸)四隻、一等巡洋艦(一萬噸)四隻、二等巡洋艦(四千五百噸)二隻及陸上設備ヲ爲スノ計畫ナリシカ財政ノ状態ニ鑑ミ費額ヲ一億千五百萬圓トシテ本議ノ提出ヲ見タルモノナリ其提議ノ梗概ハ左ノ如シ

明治三十六年度ヨリ四十六年度マテ十一箇年度ニ亘ル繼續費一億千五百萬圓ヲ以テ左記ノ造船及施設ヲ遂行セントス

一等戰艦 一五、〇〇〇噸

三隻

一等巡洋艦 一〇、〇〇〇

三隻

二等巡洋艦 五、〇〇〇

二隻

陸上ノ設備(船渠及教育機關ノ増設)

明治二年初メテ海軍ヲ置クニ當リ其艦船ハ皆一時ノ鳩備ニ出テ殆ント軍國ノ用ニ適セス爾來二十有餘年ノ間造艦ノ事拮据籌畫スル所一再ニ止マラサリシモ常ニ歲計ニ制セラレ規模褊小僅ニ輕艦ヲ備ヘ隣邦ニ對シテ守勢ヲ保ツニ過キス二十七八年戰役ノ如キ弱劣ナル艦隊ヲ以テ優勢ナル艦隊ニ對抗シ装甲ナキ巡洋艦ヲ以テ强大ナル甲鐵戰艦ト相格スルノ止ムヲ

得サルニ逢遭セリ幸ニ作戦其宜キニ適ヒ大捷ヲ得タリト雖モ蓋シ是レ 聖天子ノ御稟威ト
 臣民ノ熱誠ト將又我將校下士卒ノ忠勇ナルニ由レルモノニシテ決シテ偷安ヲ容ルス可キニ
 アラス乃チ帝國ノ光威ハ國軍ノ名譽ト共ニ宣揚シ列強ノ視線亦我國ニ傾注シ倍々國防整備
 ノ必要ヲ促シ既ニ海軍擴張ヲ經營シ大ニ其勢力ヲ増進シ國防ノ基礎鞏固ヲ加ヘ以テ東洋ニ
 重キヲ爲スニ至レリト雖モ今ヤ清國ハ戰餘漸ク老憊ヲ顯ハシ歐洲諸強ハ之レニ乘シテ根據
 地ヲ其沿岸ニ占取シ汲々乎トシテ勢威ノ扶植ニ努ムルノ時ニ方リ帝國ハ更ニ警戒ヲ要スル
 ノ地位ニ立ツモノニシテ或ハ禍目睫ノ間ニ在ルヤ亦知ル可ラス苟モ帝國ノ福利ト光榮トヲ
 増進シ一タヒ占取シタル位置ヲ確保シ東洋ノ和平ヲ維持セムト欲セハ審カニ將來ノ趨勢ヲ
 察シ之ニ應スル備ヲ爲スノ緊切ナルコト論ヲ俟タサル所ナリ今試ニ列強海軍ノ狀勢ヲ示サ
 ムニ左ノ如シ

七大海軍國所有新式航洋裝甲艦噸數比較(明治三十五年一月調査)進水式後二十年以上ヲ經
 タル舊製軍艦ヲ除ク

一、英吉利	五十六萬千九百噸
二、佛蘭西	二十四萬六千九十六噸
三、露西亞	十九萬三千三百十一噸
四、日本	十二萬九千七百十五噸
五、伊太利	十二萬四千九百五十三噸

六、合衆國

十一萬九千百二十噸

七、獨逸

十一萬五千九百六十八噸

由是觀之明治三十五年ニ於ケル我海軍ノ實力ハ宇内七強國中ノ第四位ニ在リト雖モ輓近列國ノ海上權力ヲ重視スルノ觀念著シク進ミ競フテ新艦ヲ製造シ威力ヲ增加セシメムトスルノ意氣亦旺盛ヲ極メ彼ノ萬國平和會議ノ如キ其目的トスル所ハ遠大高尚ナルモ署印未タ乾カサルニ軍備節減ノ精神ハ絕對的反對ナル施設ノ爲メニ蹂躪セラレ今ヤ殆ント其殘影ヲタモ見ルコト能ハス之ヲ歐米諸強ニ就キ證示セムニ各其海軍擴張ノ結果トシテ四十一年ニ於ケル新製裝甲艦ノ噸數(英獨米三國ハ三十八年佛國ハ三十九年及三十年以降ノ計畫未詳ナリ)
(英獨米三國ハ三十八年及三十九年ノモノトスリ)我帝國ニ於テハ僅ニ十四萬五千噸ニ過キサルニ英國ハ九十九萬噸佛國ハ四十八萬噸露米兩國ハ各三十萬噸以上ニ増加シ又獨國ハ凡ソ二十二萬噸トナリ伊國ノ如キモ亦二十萬噸ヲ超ヘムトス三十五年ニ於テ第四位ヲ占メタル帝國海軍ハ年ノ進ムト共ニ第五トナリ第六トナリ四十一年ニ於テハ終ニ第七位ニ降ラムトスルノ趨勢ナリトス軍備ヲ以テ我帝國カ列國ノ間ニ伍シ今日ノ地位ヲ維持セムトスルニ止ムルモ亦以テ更ニ海軍擴張ノ已ム可ラサルヲ知ルニ足ラム抑ミ歐米諸國カ軍備ヲ盡策スル所ヲ觀ルニ其目的ニ從ヒ程度ニ差等アリト雖モ要スルニ一ノ標準ヲ設定シ常ニ其標準ノ命スル所ニ從テ兵力ノ充實ヲ期シ軍備ノ經濟ト相俟テ以テ之カ完整ヲ圖ラサルハナシ英國ノ二國標準ニ於ケルカ如キ獨國ノ二箇艦隊標準ニ於ケルカ如キ皆然リトス故ニ我海軍ニ在テハ我帝國カ近キ將來ニ於テ取ルヘキ政策ニ從ヒ之ヲ我富力

ニ鑑ミテ勢力ノ標準ヲ一定シ進テハ其政策ヲ實行シ退テハ防衛ノ道ヲ講セサル可ラス彼ノ二國標準ノ如キ壯大ナル冀望ハ我富力ノ許サル所ナリトスルモ歐米諸強カ東洋ニ移動シ得ヘキ實力ニ對シ如何ナル程度マテニ我海軍ヲ擴張シ以テ均衡ヲ維持セサル可ラサルカ左ニ之ヲ概叙セムトス

史乘ニ徵シ戰役勝敗ノ蹟ヲ察スルニ同盟艦隊カ其聯合力ヲ利用シ劣勢ナル艦隊ヲ制壓シタルノ例證固ヨリ乏シカラスト雖モ管ニ物質的實力優勢ナリトノ一事ヲ以テ勝敗ヲト定スルニ足ラサルノ事蹟モ亦鮮シトセス若シ夫レ我國ノ富力カ果シテ常ニ優勢ナル艦隊ヲ備フルコトヲ得セシメムカ二三強國カ聯合シテ我ニ對スルコト二十七八年戰役ノ後ニ於ケルカ如キ場合アリト假定シ歐米諸國カ東洋ニ派遣シ得ヘキ勢力ヲ察シ之ニ對抗シ得ヘキ實力ヲ備ヘ以テ國防ノ完整ヲ期スヘキナリ然レトモ現今斯ノ如キ積極的計畫ヲ爲シ我海軍ノ強實ヲ期セムトスルカ如キハ有責者ノ斷シテ採ラサル所ナリ是ヲ以テ吾人ハ戰史ノ示ス所ニ信賴シ聯合勢力ハ豫想ノ如ク强大ナラス其内ノ最強艦隊ヲ擊破シ得ハ他ハ勞セスシラ制壓シ得ヘシトノ見地ニ基キ想定ノ實力ヲ稽查シテ之ト均衡ヲ維持スルニ足ルヘキ兵力ヲ論定シ之ヲ我海軍ノ採ルヘキ最低標準ト爲サムトス(中略)

又他ノ一方ヨリ觀察スルニ海軍ノ擴張ハ即チ商工業ノ伸張ト切實ナル關係ヲ有シ商工業ノ消長ハ常ニ海軍力ノ隆替ト相比例スルハ古來史傳ノ證明スル所ナリ今ヤ我國ノ富源ハ年ヲ逐フテ增加スルカ如シト雖モ戰勝後一時膨大シタル事業ハ未タ充分ノ美果ヲ收ムルニ至ラ

ス動モスレハ萎靡振ハス悲境ニ艱ムモノ亦尠ナカラス若シ夫レ事業ノ萌芽ヲ發セムトスルニ當リテ善ク之カ培養ヲ計リ其成長ヲ資クルアラハ前途ノ隆運得テ期スヘシト雖モ之ニ反シテ其發育上最要ノ時期ニ於テ他國ト争端ヲ開キ之カ爲メ事業ノ進歩ヲ妨害セラレ或ハ他國ノ強壓ニ逢フテ我利源ヲ放棄スルニ至ルカ如キコトアラハ我カ國力外ニ伸ヒスシテ事業ノ發達ハ得テ望ム可ラサルノミナラス却テ沈淪ノ淵ニ陷ラシムルニ至ラム故ニ向後少クモ數年間ハ東洋ノ平和ヲ持續シ我カ富源タル事業ニ興フルニ完全ニ發育シ得ヘキ時期ヲ以テスルト同時ニ其發達ヲ妨害スヘキ諸原因ハ極力之ヲ排除シ其伸張ヲ誘フヘキ方法ハ斷シテ之ヲ決行スルノ方針ヲ取ラサル可ラス然ルニ退テ將來ノ趨勢ヲ察スルニ隣邦ノ事情ハ數年ノ後全ク其趣ヲ異ニスヘク而シテ想定ノ反對者ハ我ニ二倍スル海軍ヲ以テ任意ノ運動ヲ行ヒ機運ノ己レニ可ナルヲ利用シテ倍々勢力ヲ扶植シ終ニ清韓兩國ニ於ケル我權利ト利益トヲ危害セム是ニ於テ我ハ其權利ヲ主張シ其利益ヲ保護セムカ爲メ勢ヒ彼ニ反抗セサルヲ得サルヘシ此時ニ當リ我カ實力ニシテ彼ヲ控制スルニ足ラサラムカ幸ニ平和ヲ維持シ得タリトスルモ之カ爲メニ隣邦ニ於ケル我カ利源ハ涸渇シ我カ事業モ亦半途ニシテ沮喪スルニ至ラム若シ更ニ紛争ノ度ヲ高メ不幸ニシテ干戈ヲ動カスカ如キコトアラムカ啻ニ事業ノ戰爭開始ト共ニ頓挫スルノミナラス之ニ加フルニ戰敗ノ慘禍ヲ以テスルニ至ルコトナキヲ保セス是亦吾人カ將來ノ情勢ヲ豫想シテ海軍ノ擴張ヲ規畫セムトスル所以ナリ

夫レ海軍ヲ擴張スルニ一定ノ標準ヲ設置シ軍備ノ經濟ト相俟テ之レカ實力ヲ完整セムトス

ルハ固ヨリ單ニ兵力ノ强大ヲ競ハムトスルニアラス之レヲ要スルニ帝國ノ威信ヲ永遠ニ維持シテ東洋ノ平和ヲ保障シ我カ事業ノ發達ヲ將來ニ保護シテ我カ富源ヲ涵養シ以テ國家ノ長計ヲ盡策セムトスルニ在ルナリ云々

左ニ軍艦製造及陸上設備ニ關スル事項ノ要領ヲ叙シテ以テ本議ヲ提出ス

事項要領

海軍ノ擴張ハ本文ニ於テ既ニ開陳セルカ如ク一定ノ標準ヲ立テ其命スル所ニ從テ造艦造兵ノコトヲ經營シ合セテ其經營ニ附隨スヘキ陸上ノ設備ヲ完整セムトスルニ在リ其經費ハ別チテ造船費造兵費及建築費トス

造船費ニ於テハ一等戰艦(一萬五千噸)三隻、一等巡洋艦(一萬噸)三隻及二等巡洋艦(五千噸)二隻ヲ製造スルノ計畫トシ以テ戰鬪第一線ニ列スヘキ戰艦ヲ充實シ且ツ同時ニ主戰艦隊ノ耳目トナルヘキ軍艦ヲ整備シ前述標準ノ示ス所ニ依ラシメ又本項ニ於テ造船工場ノ施設ヲ完備スルニ必要ナル造修機械ヲ製造若クハ購入シ維持ノ目的ヲ達セムトス

造兵費ニ於テハ造船費ノ支辨ニ屬スル戰艦及巡洋艦ニ裝備スヘキ兵器及水雷修理用器械ヲ製造若クハ購入セムトス

建築費ニ於テハ海軍ノ擴張ニ隨伴スル兵員ノ收容ト教育上ニ要スル施設及艦船ノ造修ニ必要ナル船渠等ヲ經營セムトス

前項ノ事業ニ關シテハ固ヨリ從來ノ施設ヲ併用スルコトトシテ費用ノ節減ニ努ムト雖モ勢

力ノ維持及教育ノ目的ニ應シ増設ノ已ム可ラサルモノ亦尠カラス即チ海兵團ノ兵舍、同團教育上ノ施設、病院並船渠等ノ増設其他砲術水雷術各練習所ニ於ケル教育上施設ノ增加ヲ必要トス但シ横須賀海兵團ノ一部及二練習所ノ如キハ本期擴張ニ隨伴シテ施設ノ増加ヲ要スルノミナラス其建物若クハ船體ハ經年ノ久シキ既ニ腐朽其用ニ堪ヘサルヲ以テ之レカ改築ヲ爲サムトス

叙上擴張事業ノ經費及維持費ヲ合シ總額一億千五百萬圓ノ支出ヲ要スヘク其詳細ハ豫算ノ提出ニ際シ之ヲ説明セムトス

本議ハ翌日ノ閣議ニ於テ之ヲ決シ總額一億千五百萬圓ノ中ヨリ將來ノ維持費ヲ除キ總額ヲ九千九百八十六萬三百五圓二錢一厘ト改メ三十六年度以降十一箇年度ニ涉ル繼續費トシテ三十 六年度豫算案ニ編入シ之ヲ三十五年十二月開會ノ第十七回帝國議會ニ提出セリ
三十五年十二月十三日衆議院ニ於テ議員ノ質問ニ對シ山本海軍大臣ハ大要左ノ如キ演說ヲ爲セリ

今回提出セル海軍擴張案ニ關シテハ便宜上豫算委員會ニ於テ其詳細ヲ申述ヘタイト考ヘテ居リマシタカ唯今御質問ヲ受ケマシタ故茲ニ大體ニ就キ一言致置キタイト存シマス備テ海軍ノ擴張ハ曩ニ明治二十九年度ヨリ三十八年度ニ涉ル繼續費トシテ既ニ議會ノ協賛ヲ經テ其計畫ヲ實行シツツアルハ諸君御熟知ノ次第アリマス而シテ該計畫ニ係ルモノハ將ニ竣成ノ期ニ達セントシテ居リマス然ルニ今ヤ宇内ノ趨勢ニ鑑ミ東洋ノ平和ヲ保タンカ爲メニ

ハ帝國ハ更ニ軍艦八隻及之ニ隨伴スル所ノ事業ノ整備ヲ期セサル可ラサルノ必要ニ迫リ居ルノテアリマス而シテ之ニ要スル繼續費總額ハ九千九百餘萬圓ニシテ初年度即チ三十六年度ニ於テハ二百六十八萬餘圓ノ支出ヲ以テ増艦ニ着手シ次年度ヨリハ之ニ隨伴シテ陸上ノ施設ヲモ共ニ致シタキ希望ヲ持ツテ居ルノテ御座リマス尙ホ詳細ニ涉リマシテハ豫算主查會及委員會ニ於テ十分ニ申述ヘタイト考ヘマス茲ニ國防ノ大計ニ則リ今日ノ狀勢ニ對シ計畫致シマシタ事情ヲ諒セラレ宜シク御審査ノ上之ニ協賛ヲ與ヘラレシコトヲ切望スル次第ニアリマス

然ルニ衆議院ハ地租條例中改正法律案ノ討議ニ際シ三十五年十二月二十八日解散セラレタル爲メ此擴張案ハ遂ニ附議セラルニ至ラサリキ

翌明治三十六年五月第十八回帝國議會ノ臨時開會ニ先チ山本海軍大臣ハ再ヒ前掲擴張案ヲ閣議ニ提出シテ其決定ヲ經タリ其內容ハ前議ト異ナル所ナシ但前議中列強海軍ノ狀勢ハ其後變更ヲ生シタルニヨリ我國カ第四位ニ在リシヲ第五位ニ訂正セリ之ヲ左ニ表示ス

七大海軍國所有新式航洋裝甲艦噸數比較(明治三十六年四月調査)進水式後三十年以上ヲ經タル舊製軍艦ヲ除ク

一、英吉利	六十五萬九千八百噸
二、佛蘭西	二十九萬九千噸
三、露西亞	二十三萬四千六百二十噸

四、獨逸

十五萬千二十九噸

五、日本

十四萬五千七十七噸

六、合衆國

十二萬九千七百四十四噸

七、伊太利

十二萬六千六百四十一噸

右擴張案ハ明治三十六年度總豫算ノ追加豫算案中ニ編入シ三十六年五月臨時開會ノ第十八回帝國議會ニ提出セラレタリ其要求書説明ノ要領ハ左ノ如シ

臨時歲出ニ關スル部

軍艦製造及建築費ニ於テ、海軍ノ設備ハ國防ノ大計ニ基キ時勢ノ必要ニ應シテ之ヲ金畫セサル可ラス曩ニ明治二十九年度ヨリ明治三十八年度ニ涉ル繼續事業トシテ之カ擴張ヲ畫策シ該事業ハ漸次竣成フ告ケントスルニ際シ更ニ設備ヲ進張スルノ急切ナルヲ認メ財政ノ狀況ニ應シ軍艦ノ製造及之ニ伴フ陸上ノ施設ヲ經畫シ總額九千九百八十六萬三百五圓二錢一厘ヲ要ス因テ本年度ニ於テハ軍艦ノ製造ニ着手シ之ニ伴フ陸上ノ設備ハ次年度ヨリ着手スルコトトシ茲ニ軍艦製造及建築費ノ款造船費及造兵費ノ二項ヲ設ケ明治三十六年度ヨリ明治四十六年度ニ涉ル十一箇年度ノ繼續費トシテ事業ノ完成ヲ期セントス而シテ本年度ニ於テハ金二百六十八萬七千六百八十二圓四十六錢ノ追加支出ヲ要ス

編者註(本文中ニ建築費ノ項ヲ掲ケサルハ建築費ノ項ハ三十七年度ヨリ起レルモノナルニ由リ三十六年度ノ説明ニ加ヘサリシモノナラン)

憲法第六十八條ニ據リ繼續費トシテ特ニ協賛ヲ要スルモノ

軍艦製造及建築費ハ總額九千九百八十六萬三百五圓二錢一厘ニシテ其事業ハ數年ヲ期スルニ非サレハ完成ヲ告クルヲ得ス因テ明治三十六年度ヨリ明治四十六年度ニ至ル十一箇年度ノ繼續費トシテ支出ヲ要ス其内譯左ノ如シ

科	款	項	目	總額
軍艦製造及建築費				
建造	造船			
建築	兵費			
費	費			
初度調辨費	監督諸費	機械器費	兵械費	九九、八六〇、三〇五・〇二一
横須賀鎮守府建築費	監督諸費	機械器費	兵械費	六二、三四八、二六九・〇〇〇
吳鎮守府建築費	監督諸費	機械器費	兵械費	六〇、三五二、六六〇・〇〇〇
佐世保鎮守府建築費	監督諸費	機械器費	兵械費	一、〇四八、七六〇・〇〇〇
舞鶴鎮守府建築費	監督諸費	機械器費	兵械費	九四六、八四九・〇〇〇
				二九、〇〇一、三一三・四四一
				二七、七四六、三七五・一四一
				五三八、七六〇・九七〇
				七一六、一七七・三三〇
				八、五一〇、七三三・五八〇
				七五八、九〇三・一〇〇
				一、五九六、九七一・〇〇〇
				四、一九七、八六七・四八〇
				一、七〇二、〇五一・〇〇〇
				一〇〇、〇〇〇・〇〇〇

作 場 費

一五四九三〇〇〇〇

本案ハ第十八回帝國議會ノ協賛ヲ經テ裁可實施セラレタリ

尙ホ右第三期擴張軍艦製造及建築費ノ支出年度別ヲ示セハ左表ノ如シ

(編者附言驅逐艦寃ハ去ル明治三十三年清國事變ニ關スル役務ニ從事中山東省南高角沖ニ於テ坐礁沈沒ノ難ニ罹レルヲ以テ之カ代艦補充ヲ急務ナリトシ明治三十六年度豫算ニ於テ同年度ヨリ三十七年度ニ涉ル繼續費トシテ製造費總額五十九萬圓ヲ第十七回帝國議會ニ提出セルモ同議會ハ衆議院解散ノ爲メ豫算案不成立ニ歸シタリ而シテ其計畫ハ第十八回帝國議會ニハ之ヲ提出セサリキ)

軍艦製造及建築費支出年度別一覽

黒線ハ繼續年度トス

科 目	年 度									
	三十六年度	三十七年度	三十八年度	三十九年度	四十年度	四十一年度	四十二年度	四十三年度	四十四年度	四十五年度
(款) 軍艦製造及建築費	110,000,000.00	110,000,000.00	110,000,000.00	110,000,000.00	110,000,000.00	110,000,000.00	110,000,000.00	110,000,000.00	110,000,000.00	110,000,000.00
(項) 造 船 費	300,000,000.00	300,000,000.00	300,000,000.00	300,000,000.00	300,000,000.00	300,000,000.00	300,000,000.00	300,000,000.00	300,000,000.00	300,000,000.00
(目) 製 造 費	500,000,000.00	500,000,000.00	500,000,000.00	500,000,000.00	500,000,000.00	500,000,000.00	500,000,000.00	500,000,000.00	500,000,000.00	500,000,000.00
(節) 戰 第 一 號 艦 製 造 費	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00
(節) 戰 第 二 號 艦 製 造 費	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00
(節) 戰 第 三 號 艦 製 造 費	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00
(目) 機 械 費	200,000,000.00	200,000,000.00	200,000,000.00	200,000,000.00	200,000,000.00	200,000,000.00	200,000,000.00	200,000,000.00	200,000,000.00	200,000,000.00
(節) 造船機械費	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00
(目) 監 督 諸 費	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00
(節) 監 督 兵 器 費	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00
(節) 戰 第 一 號 兵 器 費	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00
(節) 戰 第 二 號 兵 器 費	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00
(節) 戰 第 三 號 兵 器 費	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00
(目) 機 械 費	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00
(節) 造 兵 機 械 費	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00
(目) 監 督 諸 費	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00
(項) 建 築 費	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00	100,000,000.00

(建築費ノ目節ハ之ヲ省略ス)

本計畫中ノ戰艦二隻ノ製造期限線上ケニ關シテハ第十九節ヲ參看スヘシ

軍艦製造及建築費ハ叙上ノ如ク設定セラレタリシカ其ノ後總額及繼續年度等ニ更訂アリ明治四十四年度ニ至リ別ニ設定セラレタル軍備補充費ノ款ニ併合整理スルコトト爲レリ其經緯ヲ示セハ左ノ如シ

○軍艦製造及建築費(款)

一、明治三十六年度ニ於テ之ヲ設定シ豫算總額九千九百八十六萬三百五圓二錢一厘明治三十六年度ヨリ四十六年度ニ亘ル十一箇年度ノ繼續費トシ各其年額ヲ定ム
二、三十七年度豫算ハ三十六年十二月開會ノ帝國議會衆議院解散ノ爲メ成立ニ至ラス前年度ノ豫算ヲ施行セラレタリシカ本費ハ繼續費年割額三十七年度ノ豫算費ヲ實行セリ
三、三十八年度豫算ニ於テ同年度ノ年割額ニ更訂ヲ加ヘタリ總額ニハ變更ナシ
四、三十九年度豫算ニ於テ同年度ノ年割額ニ更訂ヲ加ヘタリ總額ニハ變更ナシ
五、四十年度豫算ニ於テ同年度ノ年割額ニ更訂ヲ加ヘタリ總額ニハ變更ナシ
六、四十一年度豫算ニ於テ既定總額ヲ九千九百八十六萬二百九十七圓十四錢ニ更訂シ繼續年度ヲ四十八年度迄延長シ且ツ年割額ヲ改定ス
七、四十二年度豫算ニ於テ繼續年度ヲ四十九年度迄延長シ且ツ年割額ヲ改定ス
八、四十三年度豫算ニ於テ年割額ヲ改定シ本費殘額ノ大部分ヲ四十七年度以降ニ續延ヘタリ
九、本款ハ明治四十三年度迄ニテ之ヲ打切り其四十四年度以降ニ屬スルモノハ軍備補充費ノ

款ニ併合セリ其計算ハ左ノ如シ

既定總額 九千九百八十六萬二百九十七圓十四錢

内

造船費 六千二百三十四萬八千二百六十九圓

造兵費 二千九百萬千三百七圓四錢

建築費 八百五十一萬七百二十一圓十錢

明治四十三年度迄支出額 五千三百三十一萬四千六十六圓十四錢

内

造船費 三千四十三萬三千七百二十一圓

造兵費 千四百四十九萬二千六百二十四圓四錢

建築費 八百三十八萬七千七百二十一圓十錢

明治四十四年度以降支出額 四千六百五十四萬六千二百三十一圓

内

造船費 三千百九十一萬四千五百四十八圓

造兵費 千四百五十萬八千六百八十三圓

建築費 十二萬三千圓

		(款) 軍艦製造費	(項) 造船費	(項) 造兵費	(項) 建築費
明治三十六年度	額	九、八六〇、三九二、一四〇	六、三四八、二六九、四〇	八、五一〇、一七三、一〇〇	一一、一〇三、一〇〇
明治三十七年度		二、六七、六八、一、四六〇	一、二四一、〇八八、〇〇〇	一、四四六、五九四、四六〇	一一、一〇三、一〇〇
明治三十八年度		六、七〇一、〇七七、六八〇	四、二四、六二一、〇〇〇	一、九九三、三五六〇	一一、一〇三、一〇〇
明治三十九年度		八、五四七、三一四、〇〇〇	五、〇一、一〇〇、四〇〇	二、五二、四〇四、〇〇〇	一一、一〇三、一〇〇
明治四十一年度		八、七五〇、〇四〇、〇〇〇	五、〇一、一〇七、〇七〇	一、一〇一、六八一、〇〇〇	一一、一〇三、一〇〇
明治四十ニ年度		一〇、〇四〇、〇〇〇	五、〇一、一〇七、〇七〇	一、一〇一、六八一、〇〇〇	一一、一〇三、一〇〇
明治四十三年度		一〇、〇四〇、〇〇〇	五、〇一、一〇七、〇七〇	一、一〇一、六八一、〇〇〇	一一、一〇三、一〇〇
明治四十四年度		一〇、〇四〇、〇〇〇	五、〇一、一〇七、〇七〇	一、一〇一、六八一、〇〇〇	一一、一〇三、一〇〇
明治四十五年度		一〇、〇四〇、〇〇〇	五、〇一、一〇七、〇七〇	一、一〇一、六八一、〇〇〇	一一、一〇三、一〇〇
明治四十六年度		一一、一〇〇、〇〇〇	一、一〇一、一〇〇、〇〇〇	一、一〇一、六八一、〇〇〇	一一、一〇三、一〇〇
明治四十七年度		一一、一〇〇、〇〇〇	一、一〇一、一〇〇、〇〇〇	一、一〇一、六八一、〇〇〇	一一、一〇三、一〇〇
明治四十九年度		一一、一〇〇、〇〇〇	一、一〇一、一〇〇、〇〇〇	一、一〇一、六八一、〇〇〇	一一、一〇三、一〇〇
明治四十ニ年度 度支出額合計	明治三十六年度乃至四十三年 度支出額合計	一、一〇一、一〇〇、〇〇〇	一、一〇一、一〇〇、〇〇〇	一、一〇一、六八一、〇〇〇	一一、一〇三、一〇〇
明治四十ニ年度 キ額合計	明治四十四年度乃至四十九年 度支出額合計	一、一〇一、一〇〇、〇〇〇	一、一〇一、一〇〇、〇〇〇	一、一〇一、六八一、〇〇〇	一一、一〇三、一〇〇

而シテ明治三十六年度ヨリ四十三年度ニ至ルマテノ豫算額五千三百三十一萬四千六十六圓十四錢ノ内實際仕拂命令濟ニ係ル額五千百十八萬千七百四十七圓七十三錢二厘不用額二十二圓

七錢四厘ニシテ豫算殘額二百十三萬二千二百九十六圓三十三錢四厘ハ四十四年度ノ軍備補充費ニ繰越セリ（第二十二節末尾）其詳細ハ左ニ表示スルカ如シ

總	度年三十四同	度年二十四同	度年一十四同	度年十四同	度年	
軍艦製造及建築費 造船費	軍艦製造及建築費 造船費	軍艦製造及建築費 造船費	軍艦製造及建築費 造船費	軍艦製造及建築費 造船費	建築費	
一	四〇五三·三七九·六九三 一五二一·九七九·三一五 二三一·五四三·一八三 三、五〇九·八五六·五五五	九九三六·六七五·四九三 三、一五·〇三·二八 三、五四九·三七三·五六九 三、一七二·三七九·七五五	七八〇四·八七〇·八五 二、六至〇·八二一·〇七三 三、〇四三·五〇〇·三五五	一三、四九九·一八三·一五五 七、八〇四·八七〇·八五 二、二三·九六四·六九〇	一、七五四·一八六七·四四五 五、〇一五·五九八·四七 一、三一三·三〇四·七〇八	一、七七二·一〇八·一三三 五、三三五·五〇一·一五五 一、七五三·七六五·八五六
二九·五三九·二五〇·六〇八	五一·一八一·七四七·七三三 二、三三·二九六·三三四 九〇四·四四八·三八	一〇九·九一七·九三 一、三九三·六三四·三八〇	二、一三二·二九六·三三四 三、三四二·八二九·七六六 一、三一七八·三五·一一〇	一、八五四·四四·五九五 三〇六·五四三·七六三 二、四四〇·三一三·六九三	一、六八四·一八四·七〇五 五三三·八五五·六九 一、二九三·五六八·二八	一、七〇四·九五三·三五五 五、五三六·七八一·〇七三 一、〇四四·九五三·三五五
九〇四·四四八·三八	二、二三·二九六·三三四 二二六·三三·三一五 一、一六六·三三·三一五					
二二〇·七七七						

計	
建 造	一四三〇・九六・三九
築 兵 費	一一六五八〇
	七、二七、四六・八五

第十九節 明治三十六年海軍大臣提議、軍艦購入

及第三期擴張計畫ニ係ル軍艦中製造

期限ノ繰上

(成立一春日・日進二隻ノ購入、第三期擴張ニ屬スル戰艦ノ
内二隻ノ製造期限繰上)

明治三十六年十月二十一日山本海軍大臣ハ戰艦二隻臨時購入及第三期擴張ニ係ル軍艦中ノ戰
艦一隻ノ製造期限繰上ニ關スル議ヲ提出シテ閣議ヲ請ヘリ其要ニ曰ク

東洋ニ於ケル時局ノ趨勢ニ鑑ミ我海軍ノ勢力増進ノ急切ヲ促スモノアリ依テ此際左記ノ通
リ軍艦ヲ購入シ並第三期擴張ニ屬スル新造軍艦ノ着手年度ヲ繰上ケ製造スルヲ必要ナリト
認ム

戰 艇 二隻

右ハ智利國ノ爲メ英國ニ於テ製造中ノモノヲ購入セントス

戰 艇 一隻

右ハ第三期擴張計畫ニヨリ製造スルモノノ内製造期限ヲ繰上ントス

軍艦購入及製艦年度變更ヲ要スル理由

輓近東洋ニ於ケル各國ノ關係ト世界列強ノ之ニ對スル政策經營及實在勢力トニ察シ帝國海軍ノ位置ヲ稽查シ其程度ノ標準ヲ策定シ以テ第三期擴張ヲ提案セシニ第十八議會ヲ通過シ准可ヲ經テ今ヤ其施設ノ發途ニ上リタルハ國家ノ爲メ最モ慶賀ニ堪ヘサル所ナリ然ルニ茲ニ尙ホ歩一步ヲ進メテ我軍備ノ増加ヲ早ムルノ手段ヲ取ルノ必要ヲ促スコト益々急切ナルモノアルニ至レリ即チ他ナシ頃者露國ノ東洋派遣勢力増加ノ急調是ナリ

嚮ニ第三期擴張ノ議ヲ立ツルヤ固トヨリ露國ノ七年計畫ノ實質ヲ量リ其造艦上ニ於テモ列強力既往ニ於テ踏襲シ來リタル例蹤ド露國カ其當時施設シツツアリシ實蹟トニ照ラシテ竣成期ヲ算シ彼我對較シテ以テ我勢力ノ增進歩合ヲ計畫セシカ我第三期擴張案ノ成立爾來ノ彼ノ態度ヲ見ルニ急轉直下俄カニ造艦竣工ノ期ヲ早メ加フルニ東洋派遣勢力ノ増加モ亦意料ノ外ニ出ツ斯クテ今ヤ續々其勢力ヲ增大シツツアルノミナラス遂ニ悉ク之ヲ東洋ニ集中セントスルノ趨勢ヲ呈スルニ至レリ夫レ國權ノ消長ハ常ニ武備ノ優劣ニ伴フハ言ヲ俟タサル所ニシテ國際上ノ輸贏一ニ茲ニ繫ル近ク十年ノ跡ヲ顧ミルニ露國ノ東洋ニ於ケル經營力終始其海軍力ト相應シテ施サレツツアルハ歷々トシテ之ヲ指摘シ得ヘク而シテ今ヤ其銳ヲ集メテ東洋ノ局面ヲ壓迫シ依テ以テ國際上ノ地歩ヲ進メ東亞ニ於ケル利源ヲ確立セントシ機先ヲ制シテ時局問題ニ對スルノ方策ニ出ツ此時ニ際シ帝國海軍ノ施設如何須ラク應急ノ手段ヲ取り以テ少ナクトモ彼レニ對峙シ得ヘキ程度ニ進メサル可ラサルヲ信ス我第三期擴

張事業ノ十一箇年ニ亘リテ計畫セラレタルハ財政方針ニ基キタルモノニシテ實ニ止ムヲ得
サルニ出ツト雖モ苟モ彼カ勢力ヲ集中スルコト此ノ如ク速カナルニ於テハ焉ソ我今日ノ
狀態ヲ以テ安ンスルヲ得ンヤ

是ヲ以テ此際急速勢力増加ノ手段トシテ目下英國造船會社ニ於テ賣却ニ附セントスル恰當
ノ戰艦二隻アルヲ利用シ一時緊急支出ヲ行ヒ之ヲ購入シ其金額ノ補填ハ年々軍艦水雷艇補
充基金ノ遞減歩率ニヨリ積ム所ノモノヲ以テ之ニ充テントス又一方ニ於テハ第三期擴張計
畫ヲ舉テ速成ヲ期セント欲スル切ナリト雖モ奈何セン財政上其實行ヲ許ササルヲ以テ該計
畫ノ金額及隻數ニ就テハ何等更改ヲ加ヘス軍艦製造費及建築費ヲ以テ製造スヘキ戰艦三隻
ノ中明治四十年度ヨリ同四十三年度ニ亘リテ製造スヘキ一隻ノ着手期限ヲ繰上ケ明治三十
六年度ヨリ同三十九年度ニ亘リ製造スヘキ戰艦ト共ニ竣工スルコトニ改メ即チ明治三十九
年度ニ於テ戰艦二隻ヲ收メントス而シテ其製造工事ヲ繰上クルモ既定年割額ヲ變更スルニ
アラス年賦消却ノ法ニ依ルコトトシ斯クノ如クシテ臨時購入ニヨリ各一萬千八百噸ノ戰艦
二隻ヲ得又製造工事ノ繰上ニヨリ明治三十九年度ニ於テハ各一萬六千噸ノ戰艦二隻ヲ加ヘ
合計五萬五千六百噸ノ勢力ヲ現在ノ上ニ増スコトヲ得ハ庶幾クハ彼ノ勢力ト均衡ヲ保持ス
ルニ足ルヘシ而モ此製造工事繰上ノ事タル金額ノ點ニ關シテハ變更ヲ要セス只タ着手及竣
工等ノ差縁ニヨリ爲シ得ヘキモノニシテ近キ將來ニ於テ砲火相見ルノ事アルニ當リテハ之
カ爲メニ軍事上ノ實力ニ加フルノ效果ハ誠ニ著大ナルヘク又之カ結果トシテ幸ニ平和ヲ維

持シ帝國ノ權利ト威信トヲ完フルヲ得ハ交戰ニ伴フ多大ノ軍資ニ比シ其利孰レソヤ是レ此機ニ際シ敢テ本議ヲ提出スル所以ナリ

此議ハ一日モ稽延ヲ容ササル當時ノ情勢ニ鑑ミ且ツ帝國議會開會期モ比較的遠キニアリシカ故ニ政府ハ緊急支出ノ方法ニ依リ軍艦購入ヲ實行スルノ臨機手段ヲ執ルノ考慮ヲ以テ此議ノ提出セラルルヤ直ニ英國ニ於テ製造中ノ智利國戰艦「リバータード」Libertad 及「コンスチチュー
ション」Constitution (各一萬千八百噸)ノ二隻ヲ購入スルコトニ關シ駐英我公使ニ電訓シテ内交渉ヲ開キシカ裏面ニ於ケル露國筋ノ運動其他ノ故障ニ遭遇シツツ遷延ノ折柄帝國議會開會モ近ツキタルカ爲メ十一月二十六日ニ至リ此内交渉ヲ中止スルノ已ムヲ得サルニ及ヘリ

因ニ記ス第十九回帝國議會ハ三十六年十二月十日ヲ以テ開院式ヲ行ハレタリシカ同日賜ハ
リタル開院式ノ 勅語ニ對シ同日衆議院ノ議決セル奉答文ニ起因シ翌十一日衆議院ノ解散
貴族院ノ停會ヲ命セラレ三十七年度豫算ハ不成立ニ歸シ三十七年二月三日政府ハ裁可ヲ經
テ前年度豫算施行ノ件ヲ公布セリ

然ルニ時局ハ益々切迫ヲ告ケ軍備補充及京釜鐵道株式會社線路工事速成ニ關シ緊急支出ノ必
要ヲ認メ三十六年十二月二十八日ヲ以テ帝國憲法第七十條ニ依ル財政上必要處分ニ關スル勅
令ヲ公布セラレタリ

本議軍艦購入ハ前掲ノ如ク智利國戰艦ニ就テハ内交渉ヲ中止セシカ其後該艦二隻トモ英國政
府ノ所有ニ歸シ最早施スヘキ手段ナカリキ而シテ之ト前後シテ伊國アンサルド造船會社ニ於

テ製造中ノ亞爾然丁國一等巡洋艦「リヴァダビア」Rivadavia 及「モレノ」Moreno ノ二隻(各七千七百噸)ヲ購入スルノ内交渉ヲ進メツツアリシカ此二隻ハ十二月三十日賣買契約成立シ三十七年一月一日前者ヲ春日後者ヲ日進ト命名セラレ同月七日帝國政府ノ手ニ之ヲ受領シ同月九日兩艦トモ伊國「ゼノア」ヲ拔錨シ二月十六日横須賀軍港ニ到着セリ

春日、日進ノ購入費支出ニ就テハ海軍大臣ヨリハノ請求書ヲ大藏大臣ニ送付シ十二月二十八日
大藏大臣ハ勅裁ヲ經テ明治三十六年度海軍省所管歳出臨時部末位ヘ「臨時事件費」ノ款項ヲ設ケ
一時借入金ヲ財源トシテ其金額ヲ支出スルコトトセリ

明治三十六年度豫算外支出請求計算書

尙ホ右ニ艦本邦ヘ回航ノ爲メ要スル回航費及保險料等ノ概算百七萬三千九百三十圓ノ豫算外
支出ヲ海軍大臣ヨリ大藏大臣ニ請求セルニ十二月三十一日大藏大臣ハ勅裁ヲ經テ一時借入金
ヲ財源トシ之ヲ支出スルコトトセリ

斯クテ右兩回勅裁濟金額ハ合計千六百一萬千三百二十圓ニシテ此支出ハ第二十回帝國議會ニ
於テ事後承諾ヲ得タリ而シテ本費ノ決算額ハ總計千五百九十八萬四千五百九十三圓三十六錢

三厘トス

本議第三期擴張ニ屬スル戰艦一隻ノ製造期限繰上ニ關シテハ閣議ノ諒解ヲ得テ二隻ノ製造期限ヲ繰上クルコトトシ三十六年十二月十九日海軍大臣ヨリ左ノ如ク大藏大臣ニ照議シ同月二十二日大藏大臣ノ同意ヲ得テ實行セリ

海軍第三期擴張ニ屬スル戰艦ノ内二隻ハ三十六年度ヨリ着手シ四十三年度迄ニ建造スル計畫ナリシカ時局ニ鑑ミルニ右ハ成ルヘク速ニ竣了セシムルノ必要ヲ認ム且ツ東洋ノ平和ヲ維持スル上ヨリ觀ルモ時局ノ解決如何ニ拘ラス海軍ノ勢力ヲ充實シ其整頓ヲ急ナラシムルハ最モ緊切ノ事ト存候然ルニ英國造船會社ニ於テハ二十七箇月ヲ以テ二隻ノ建造ヲ了リ其費用ノ仕拂期限ハ豫定年度割ヲ變更セシテ該豫算金額ノ範圍ニ於テ之カ註文ニ應スルコトニ協議相整ヒ候筈ニ付此際右ノ通決行致度云々

第二十節 明治三十七八年戰役當時ニ於ケル帝

國海軍艦船及露國ヨリ收容ノ艦船

明治三十七八年戰役當時ニ於ケル帝國海軍艦船及露國ヨリ收容ノ艦船等左ノ如シ

一、戰役開始前(三十六年十二月三十一日)現在セルモノ

軍艦

朝 日 一 等 戰 艦 一五、二〇〇噸

橋 松 嚴 千 筒 鎮 吾 八 磐 出 常 淺 八 富 敷 初 三

立 島 島 歲 置 遠 妻 雲 手 雲 磐 間 島 士 瀨 島 笠

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

二等巡洋艦
二等戰艦

一等巡洋艦

一等戰艦

一五、一四〇

一五、〇〇〇

一四、八五〇

一二、四五〇

一二、三二〇

九、七五〇

九、七五〇

九、七五〇

九、七五〇

九、六四六

九、三〇七

七、二二〇

四、八六二

四、七六〇

四、二一〇

四、二〇

四、二

日明
旅治
順三
口十
外七
ニ年
於五
月沈
十沒五

日明
旅治
順三
口十
外七
ニ年
於五
月沈
十沒五

一〇六

比 金 濟 濟 千 須 明 和 音 秋 新 對 浪 妥 豐 吉 高
代 津 千

叡 剛 遠 田 磨 石 泉 羽 洲 馬 高 穗 速 桑 橋 野 砂

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
水 雷 母 艦 二 等 戰 艦 二 等 巡 洋 艦 三 等 巡 洋 艦

四、一六〇 四、一六〇 四、〇五五 三、七一八 三、六五〇 三、六五〇 三、六五〇 三、六五〇 三、三六六 三、一二六 三、〇〇 二、九五〇 二、七五六 二、六五七 二、四四〇 二、三四七 二、三四四

山明 日明
東治 旅治
角三 順三
附十 口十
近七 外七
ニ年 ニ年
於五 於十
テ月 テ二
沈十 沈月
没五 没十
日 二

擣明
ニ治
於三
テ十
敵七
ノ年
水十一
雷一
觸三
レ十
沈日
沒十

宇大磐龍天千海筑武大葛天八高宮筑平
重

遠波古雄山龍城和藏紫門早城田城鳥治

驅逐艦計
摩愛烏赤隅速村朝白朝曉霞雷電

耶宕海城田雨烏霧雲潮

同同同同同
五十七隻

六一二
六一二
六一二
一三六
二五一七三〇

月明
十治
五三
日十八
廢船年六
日

三七五

旅明
順治
口三十
外七
ニ七年
於九月
テ沈没三
日

三七二

三七二

日明
旅治
順三
口十
外七
ニ年
於五月
テ沈没七

三六三

三四一

三四一

燕 鴿 雁 鵠 隼 小 豐 水 雷 艇 計
夕 不 陽 薄 陰 朧 朧 漣 漣 曙 曙
知

鷹 火 烟 雲 雾 雲 雲

同 同 同 同 同 一
等

十九隻

三四一 三四一 三四一 三四一
三二二 三二二 三二二 三二二
三二二 三二二 三二二 三二二
二七九 二七九 二七九 二七九
六五二一 六五二一 六五二一 六五二一

一三七 一三七 一三七 一三七

真千蒼白福
第三十九號
第四十號
第四十一號
第四十二號
第四十三號
第六十二號
第六十三號
第六十四號
第六十五號
第六十六號
第二十五號
第二十九號

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

等

一三七
一三七
一二三
一二一
一一〇
一一〇
一一〇
一一〇
一一〇
一一〇
一一〇
一一〇
一一〇

日明
旅治
順三
口十
外七
ニ年
於二
テ沈月
没十四

八九四

第三十號

二等

八九

一一二

第六十七號

八八

第六十八號

八八

日明
日治
本三
海十
八年
ノ五
月キ
沈十
没七

第六十九號

八八

第七十號

八八

第七十一號

八八

第七十二號

八八

第七十三號

八八

第七十四號

八八

第七十五號

八八

第七十六號

八八

第七十七號

八八

第七十八號

八八

第七十九號

八八

第六十號

八八

第六十一號

八一

日明
旅治
順三
口十
外七
ニ年
於五
テ月
沈十
沒二

第三十一號
第三十二號
第三十三號
第三十四號
第三十五號
第三十六號
第三十七號
第三十八號
第三十九號
第四十號
第四十一號
第四十二號
第四十三號
第四十四號
第四十五號
第四十六號
第四十七號
第四十八號
第四十九號
第五十號

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
等

五 五 五 五 五 五 六 七 八 八 八 八 八 八
三 三 三 三 三 三 九 八 八 一 一 一 一 一

同 日明
日治
本三
海十八
戰年
ノ五月
ト月
キ沈十
沒七

第十一號
第十二號
第十三號
第十四號
第十五號
第十六號
第十七號
第十八號

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
等

五 三
五 三
五 三
五 三
五 三
五 三
五 三
五 三
五 三
五 三
五 三
五 三
五 三

日明
旅治
順三
口十
外七
ニ年
於十二
月沈二
月於十
八日沒
十三

			第十九號	五二
			第二十號	五二
			計	同
			總計	同
			二、購入セルモノ	七十六隻
			軍艦	百五十二隻
			軍艦	二六四、六八一
			春日	六、四三〇
			進日	五二
			一等巡洋艦	同
			一等巡洋艦	同
			二隻	同
			二隻	七、六二八
			三等巡洋艦	七、六二八
			三等巡洋艦	一五、二五六
			三等巡洋艦	三、三六六
			三等巡洋艦	三、三六六
			三〇〇〇	九、七三二
			三	三八一
			軍艦	同
			軍艦	同
			對音	同
			新	同
			馬羽	同
			高	同
			雪	同
			驅逐艦	同
			吹	同
			計	同
			三	三八一
			製造竣工セルモノ	同

水雷艇

鷺 雉 雲 鴻 鷗 鶉 鶴 雷 水
子 潮 如 彌 初 神 震 有
計

計

雀

日 月 生 霜 風 明

同 同 同 同 同 同 一 九

等 隻

四露國ヨリ收容セル艦船

第七十四號

九 同 二
隻 等

一二三五
八八

三

三五
一六

一二六七四

一〇、九六〇

七七二六

六五〇〇

四、二二六

三〇〇

一〇五〇

韓 鈴 沖 見 壹 宗 津 阿 丹 周 相 肥 石

崎谷島島岐谷輕蘇後防模前見

水通同二二二二二戰

船盤 船盤 船盤 船盤

キ名 ン名 第名
シ舊 舊 一舊
ン名 世名
 ゲ

文 阜 卷 敷 山 姉 松 滿 計
總 計

計 月 月 雲 波 彥 川 州

三等海防艦	通報艦	通報艦
二、五五〇	一一、七〇〇	二、九一六
逐艦	艦	艦
十 六 隻	十 六 隻	十 六 隻

同 同 同 同 同	驅 驅 驅 驅 驅	通
五	十	報
二十一隻	十一隻	艦
一三八、六二二	一〇七八	一三七、五四四

命明	名明	日明	日明	命明	命明
名治	舊治	命治	命治	名治	名治
舊三	名三	名三	名三	舊三	舊三
名十	ビ十	舊十	舊十	名三	名三
シ八	ニ八	名八	名八	トナ	トナ
一年	ド年	ブ年	ガ年	イ十月	イ十月
ル九	ダ六	サ六	イタ	三	三
ヌ月	ウ月	ド月	マ	月	月
イ二	キ六	ニ三	ク	八	八
日	日	三十	ク	日	日
		一	ク		

明治三十八年一月十七日暁ト改名舊名レシテリ
明治三十九日山彦ト改名舊名マニチユリ
明治三十九年三月八日

第三章 明治三十七八年戰役以後大正十年迄

第二十一節 明治三十七八年戰役臨時軍事費二於

ケル艦艇補足費ノ設定

艦艇補足費ハ最初明治三十七八年戰役ニ際シ艦艇ノ建造及之ニ伴フ諸機械造備等ノ費用ニ充ツル爲メ臨時軍事費ノ款、臨時軍事費ノ項、艦艇補足費ノ目トシテ之ヲ置キ帝國議會ノ協贊ヲ得裁可ヲ經テ施行シタル臨時軍事費ノ豫算内ニ於テ大藏大臣ニ支出ヲ請求シ勅裁ヲ仰キテ設定セラレタルモノナリ即チ臨時軍事費ニ於ケル豫算現額四千八百四十六萬五千六百三十一圓六十五錢二厘、其仕拂命令濟額四千六百六十九萬八千八百八十九圓五十五錢四厘ニシテ殘額百七十六萬六千七百四十二圓九錢八厘ハ之ヲ一般會計へ移用セリ（因ニ記ス本戰役當時ニ於ケル内閣總理大臣ハ伯爵桂太郎、海軍大臣ハ男爵山本權兵衛ナリシカ明治三十九年一月七日内閣ノ更迭アリ前者ハ侯爵西園寺公望後者ハ齋藤實之ヲ襲ケリ）

臨時軍事費ハ三十七年三月法律第二號陸海軍ニ屬スル臨時事件費特別會計法ノ公布ニ依リ一般會計ト區分シ臨時事件ノ終局マテヲ一會計年度トシテ特別ニ之ヲ整理スルコトトス、而シテ三十九年五月法律第五十二號ニ依リ此特別會計ハ四十年三月三十日ヲ以テ終結シ其出納事務ハ同年十一月三十日迄ニ悉皆完結スヘキモノトシ該會計年度内ニ經費支出未濟ノ豫算額ハ之ヲ一般會計ニ移シ遞次繰越シ使用スルコトト爲レリ

(總理大臣ハ記ス本戰役當時ニ於ケル内閣大臣ハ

男爵山本權兵衛ナリシカ明治三十九年一月七日内閣ノ更迭アリ前者ハ侯爵西園寺公望後者ハ齋藤實之ヲ襲ケリ

今臨時軍事費中ニ於ケル艦艇補足費設定ノ經過ヲ示セハ左ノ如シ

一、驅逐艦製造費（款）臨時軍事費（項）臨時軍事費（目）驅逐艦製造費

(事由) 駆逐艦ハ開戦以來任務繁劇ニシテ船體機關ノ減耗特ニ甚シ速ニ新艦ヲ製造シ以テ新舊交代シテ其任務ニ當ラシムルニ非レハ現今ノ勢力ヲ維持スルコト能ハサルニ至ル依テ緊急支出ノ必要ヲ認ムルニ由ル

(編者註) 本費ハ之ヲ艦艇補足費ニ訂正セラル艦艇補足費ノ目ヲ參看スヘシ

二、水雷艇製造費（款）臨時軍事費（項）臨時軍事費（目）造船及修理費

明治三十七年六月十五日勅裁濟
六五八、三三四、○○○

(事由) 水雷艇五隻製造ノ必要ヲ認メ其總額二百三十三萬千四百三十五圓ヲ要スルモ差向キ船體及機關代價ノ三分ノ一即チ前記金額ノ支出ヲ要スルニ由ル尙ホ殘額百六十七萬三千一百一圓ハ其必要ノ都度要求ス云々

三、裝甲巡洋艦二隻製造費（款）臨時軍事費（項）臨時軍事費（目）造船及修理費

明治三十六年十月四日刺繡

(款項) 臨時軍事費 八五九、〇六〇·八〇〇四

(目)
造船兵費
及修理費
造
船
兵
及
修
理
費
三五
二三
二七
〇〇
六〇
〇〇
八〇
〇〇
〇〇

(事由) 裝甲巡洋艦二隻緊急製造ノ必要ヲ認メ其總額左記ノ通二千五百二十七萬九千七百

六十五圓八十五錢八厘ヲ要シ候處差向キ六月及七月ノ所要額前記ノ通支出ヲ要スルニ由
ル尙ホ殘額二千四百四十二萬七百五圓五錢八厘ハ爾後毎月要求ス云々

臨時軍事費 造兵及修理費 造船及修理費	豫算總額	第一年		
		第二年	第三年	
三五三七九、七五八五	九一六六、五三〇零六	八九九、七三六〇	七一六三、四六二六〇	
七八五、四五八五	三、五四三、九五〇零六	三、一八二、九三六〇	一一四八、五〇二六〇	
一七四〇四、三一〇〇〇	五、六三、五六〇〇〇	五、七六、六〇〇〇〇	六〇四、九六〇〇〇	

前記勅裁濟通知(三十七年七月四日)ニ附帶シテ大藏大臣ヨリ追書アリ曰ク本件裝甲巡洋艦
二隻製造費ノ財源ハ大藏省ニ豫算ナキニ依リ其財源準備方ニ付海軍省ト種々協議ノ末本
年十二月末マテニ支出ヲ要スル見込額六百八十九萬五千三百七十五圓九錢八厘ノ内百四
十六萬六千五百六十二圓八十二錢ハ明年一月以降ニ繰延ヘ差引五百四十二萬八千八百十
二圓二十七錢八厘ハ臨時軍事費海軍省豫定額内ヨリ之ニ相當スル金額ヲ控除シ之ヲ財源
トシテ差繰支辨シ右差繰支辨ノ爲メ豫定額中不足ヲ生シタル金額ハ追テ豫算追加成立ノ
上補填スルコトニ決定セリ云々

(編者註)此裝甲巡洋艦製造費ノ内勅裁ヲ經タル額ハ其儘實行ニ至ラサリシモノト見ニ、即
チ次ニ出ツル(四)艦艇補足費ノ事由書ニ依レハ其勅裁濟額七百十萬千九百十三圓ノ内ニハ
裝甲巡洋艦ノ三十七年所要額ヲ含ミ其金額ハ本文大藏大臣ノ追書ニアル三十七年十二月

末マテノ支出見込額ト符合スルヲ以テ此ニ(三)勅裁濟ミタル費額ヲモ右(四)艦艇補足費ニ一併シ更正シテ勅裁ヲ仰キタルモノナラン、故ニ本文ノ八十五萬九千六十圓八十錢ハ艦艇補足費ノ合計ニハ之ヲ算入セス、斯ク計算ヲ立ツルトキハ臨時軍事費ノ決算額ニ合致ス

四、艦艇補足費（款）臨時軍事費（項）臨事軍事費（目）艦艇補足費

明治三十八年一月九日勅裁濟 七一〇一九一三〇〇〇

(事由) 水雷艇五隻支出殘額百六十七萬三千一百一圓裝甲巡洋艦二隻製造費ノ内三十七年所要額ノ分五百四十二萬八千八百十二圓合計前記ノ支出ヲ要ス

五、艦艇補足費（款）臨時軍事費（項）臨時軍事費（目）艦艇補足費

(1) 驅明逐治艦三製十造七費年ヲ四本月費七二日訂勅正裁增額額前記

(口) 水明雷治
艇三製十七年六月十五日正增額(前記二)

八)明治三十八年一月九日勅裁額(前記)

五月八日勅裁額

亦司

十一月四日動載頃

卷之三

卷之三

(癸卯年三月二十七日賴義密

合計

四七、一五七、六七三〇〇〇

(イ) ヨリハマテハ驅逐艦水雷艇装甲巡洋艦製造費(ニ) ヨリチマテハ上記艦艇ノ繼續費額ノ外尙ホ他ノ艦艇製造費等ヲ含ムモノナリ

六、臨時軍事費歲出仕拂命令濟額目別並年別表(△印ハ訂正減額)

科 款 項 目	目 目 目	仕 令 濟 濟 額	拂 拂 拂 命	年	別
臨時軍事費 (款)臨時軍事費 (項)臨時軍事費 (目)艦艇補足費	(茲ニ略ス) 艦艇製造逐艦 補足費	三十六年 三十七年 三十八年 三十九年 四十一年	三十一年 三十一年 三十一年 三十一年 三十一年	三十一年 三十一年 三十一年 三十一年 三十一年	(△印ハ訂正減額)
		三、九二、九九八△ 元九、〇〇〇・三七	三、九二、九九八△ 元九、〇〇〇・三七	一、九六、二〇九・九 元九、〇〇〇・三七	一、九六、二〇九・九 元九、〇〇〇・三七
		一、九六、二〇九・九 元九、〇〇〇・三七	一、九六、二〇九・九 元九、〇〇〇・三七	一、九六、二〇九・九 元九、〇〇〇・三七	一、九六、二〇九・九 元九、〇〇〇・三七
		一、九六、二〇九・九 元九、〇〇〇・三七	一、九六、二〇九・九 元九、〇〇〇・三七	一、九六、二〇九・九 元九、〇〇〇・三七	一、九六、二〇九・九 元九、〇〇〇・三七

七、臨時軍事費歲出決算額目別表

款項目	勅裁濟額	流用増額	豫算現額	仕拂命令濟額	一般 移用會 額計	不用額
(款)臨時軍事費	一、九六、二〇九・九 元九、〇〇〇・三七	一、九六、二〇九・九 元九、〇〇〇・三七	一、九六、二〇九・九 元九、〇〇〇・三七	一、九六、二〇九・九 元九、〇〇〇・三七	一、九六、二〇九・九 元九、〇〇〇・三七	一、九六、二〇九・九 元九、〇〇〇・三七
(項)臨時軍事費	一、九六、二〇九・九 元九、〇〇〇・三七	一、九六、二〇九・九 元九、〇〇〇・三七	一、九六、二〇九・九 元九、〇〇〇・三七	一、九六、二〇九・九 元九、〇〇〇・三七	一、九六、二〇九・九 元九、〇〇〇・三七	一、九六、二〇九・九 元九、〇〇〇・三七
(目)艦艇補足費	一、九六、二〇九・九 元九、〇〇〇・三七	一、九六、二〇九・九 元九、〇〇〇・三七	一、九六、二〇九・九 元九、〇〇〇・三七	一、九六、二〇九・九 元九、〇〇〇・三七	一、九六、二〇九・九 元九、〇〇〇・三七	一、九六、二〇九・九 元九、〇〇〇・三七

(編者註) 流用増額トハ臨時軍事費豫算内ニ於テ勅裁ヲ經タル他ノ費目中ヨリ流用増額セルモノナリ

第二十二節 明治三十九年海軍大臣提議、海軍整備

ノ議

(成立——一般會計ニ於ケル艦艇補足費——整備費——補充
艦艇費ノ設定)附、軍艦水雷艇補充基金特別會計法

明治三十九年九月二十八日海軍大臣齋藤實ハ海軍整備ノ議ヲ内閣總理大臣侯爵西園寺公望ニ提出シテ閣議ヲ請ヘリ其要ニ曰ク

我海軍ハ從來數次ノ擴張ヲ經タリ而シテ明治三十六年第十八回帝國議會ニ於テ同年度ヨリ四十六年度ニ亘ル繼續事業トシテ軍艦製造及建築費ノ協贊ヲ得尋テ同年末ニ至リ露國トノ關係切迫セルヲ以テ日進春日兩艦ヲ購入シ開戦後喪失艦艇補填ノ急ヲ告クルヤ臨時軍事費中艦艇補足費ノ名稱ヲ以テ三十七年度以後數年繼續スヘキ艦艇ノ製造ニ着手シ三十九年度迄ハ其年割額ニ對シテ議會ノ協贊ヲ經該事業ハ前掲ノ軍艦製造及建築費支辨事業ト共ニ目下進行中ニアリ

顧フニ日露海戰ニ於テ我ハ曠古ノ大捷ヲ博セルノミナラス相模石見以下數多ノ戰利艦ヲ收容セルヲ以テ數額上喪失スル所ヲ補ヒ得テ餘リアルノ觀アリト雖モ由來艦艇ノ戰鬪能力ハ艦船ヲ重ヌルニ從ヒ遞降ノ歩武ヲ加フルモノニシテ屢々戰鬪ニ與リタル艦艇ニ就テハ特ニ其著大ナルヲ見ルヘク而シテ今ヤ日露海戰ノ教訓ト科學ノ進歩ト相俟テ列國ノ製艦兵裝ニ

一大革新ヲ促シ日露戰役ニ於テ最モ精銳ナリシ三笠以下ノ四戰艦スラ早既ニ優位ヲ保ツコト能ハサルニ至リ數年後我主戰艦タルヲ得ヘキモノハ目下製造若クハ計畫中ニ係ル薩摩安藝外一艦ト香取鹿島等ニ過キサルヘク相模石見以下ノ戰利艦中ニモ艦齡少ク頗ル有力ノモノアルヲ以テ將來有效ニ利用スル爲メ改造改裝ヲ加ヘツツアリト雖モ艦型ノ違式及兵裝等ノ點ヨリシテ其戰鬪能力ハ三笠以下ニ屬スルモノトス

夫レ海軍ノ現勢及事業進行中ニアルモノ前述ノ如シ翻テ世界列強ノ狀勢ヲ察スルニ東洋ニ利害關係ヲ有スルモノハ益々海軍力ノ增大ニ努メ新銳ノ艦艇ヲ建造シ各般ノ施設ヲ經營シ以テ利權ノ伸張ニ汲々タリ乃チ帝國カ此間ニ處シテ能ク既得ノ地位ヲ維持センニハ如上ノ狀態ニ安ンス可ラサルハ言ヲ俟タサル所ニシテ須ラク尙ホ左ノ艦艇ヲ近キ將來ニ於テ完成セシメサル可ラサルヲ信ス

戰 艇	凡 二 萬 噸	三 隻
裝甲巡洋艦	凡 一 萬 八 千 噸	四 隻
二等巡洋艦	凡 四 千 五 百 噸	三 隻
大形驅逐艦	凡 九 百 噸	六 隻
驅逐艦	凡 四 百 噸	二十四隻
潛水艇		六 隻

然レトモ戰後帝國ノ進運ニ伴フ殖產興業教育衛生等ノ施設ニ要スル經費ノ増嵩亦免カル可

ラサルヘキヲ以テ國家財政ニ鑑ミ其計畫全部ノ實行ハ暫ク之ヲ他日ニ讓リ此際先ツ左ノ艦艇新造ノ方案ヲ立テタリ是レ戰後ニ於ケル我海軍艦艇ノ整備ヲ圖ルニ外ナラサルナリ

戰 艇	艦	凡二萬噸	一隻
裝甲巡洋艦		凡一萬八千噸	三隻
二等巡洋艦		凡四千五百噸	三隻
大型驅逐艦		凡九百噸	六隻
驅逐艦		凡四百噸	十二隻
潛水艇		六	隻

而シテ右ノ外、戰利艦ノ修理完成、艦艇補足費支辨、艦艇ノ竣工等ニ伴フ陸上並港灣ノ設備、艦艇ノ繫留器具等及教育機關ノ擴張ニ要スル増費即チ整備費ヲ要シ又既定ノ計畫ニ依リ艦艇ノ復舊修理及補足ヲ爲スノ經費即チ臨時事件費ヲ要スルヲ以テ左表ノ如ク四十年度乃至四十年度ニ亘ル繼續費ノ支出ヲ要ス但シ之レカ細目ハ別ニ案シテ大藏大臣ニ送付スヘシ云々
添附ノ(一)海軍兵力表(二)軍艦製造費及建築費並艦艇補足費支辨ノ事業年度割表(三)列國製艦
顛末(四)臨時事件費支出年度割一覽表(五)海軍整備費支出年度割一覽表ハ茲ニ之ヲ略ス(編者註)

セ
リ

海軍省所管豫定經費要求書臨時歲出部中

(說明目及年度割等八茲二略又)

(款)臨時事件費

項 艇 舶 補 足 費

(項)造船造兵及修理費

(項)建築費

款補充艦艇費

項造船費

(項)造兵費

右ハ四十年度乃至四十六年度ノ七箇年度繼續費トシテ支出ヲ要ス

然ルニ豫算案審査ニ際シ款項ノ設置方法ニ就キ意見出テ政府ハ右臨時事件費ノ款ヲ削リ艦艇補足費ノ項ヲ款ニ改メ造船造兵及修理費、建築費ノ兩項ヲ合シテ整備費ナル一款トシ(金額ノ總體ニハ異動ナシ)左ノ如ク之ヲ修正セリ

海軍省所管豫定經費要求書中臨時歲出ニ關スル部(抄錄)

一、艦艇補足費ハ明治三十七八年戰役ニ伴ヒ艦艇ノ補足ヲ爲スノ必要アルカ爲メ明治四十年度以降六箇年度ノ繼續費トシテ總額六千四百七萬七千二百九十一圓ヲ要ス而シテ本年度ニ於テ支出スヘキ額千二百五十四萬七千二十八圓ナリトス但本費ハ前年度ニ於テ臨時事件費ヲ以テ支辨シタルモノヲ引繼キ茲ニ豫算シタリ

一、整備費ハ明治三十七八年戰役ノ結果ニ伴ヒ諸般ノ事業ヲ完成シ又軍事教育ノ發展ヲ圖リ艦艇ノ増加ニ隨伴セル各種設備ヲ整フ必要アルカ爲メ明治四十年度以降七箇年度ノ繼續費トシテ總額一億千九十二萬二千七百九圓ヲ要ス而シテ本年度ニ於テ支出スヘキ額千二百四十五萬二千九百七十二圓ナリトス但本費ハ前年度ニ於テ臨時事件費ヲ以テ支辨シタルモノヲ引繼キ茲ニ豫算シタリ

一、補充艦艇費ハ明治三十二年法律第七十九號軍艦水雷艇補充基金特別會計法第三條ニ依リ明治四十年度乃至四十六年度ノ間ニ組入ルヘキ金額ノ範圍内ニ於テ艦艇ヲ製造シ勢力ノ補充ヲ計ラントスルモノニシテ四十年度以降七箇年度ノ繼續費トシテ總額七千六百五十七萬七千百二圓ヲ要ス而シテ本年度ニ於テ支出スヘキ額千九十三萬九千五百八十六圓ナ

リトス

科 目	總額		支 出 年 度	割 度
	四十 年度	四十一 年度		
(款)艦艇補足費	四、〇七七、三九一	二、五四七、〇三八	一、三、八二八、九六	一、四、五三、四三〇
(項)造船費	五、七六三、四三四	九、三四〇、〇〇〇	八、五五五、〇〇〇	一、五、二七五、三五七
(項)造兵費	二、二九三、八六七	三、三〇七、〇三八	五、二六三、九六六	六、〇五六、六〇八
(款)整備費	二〇、九三、七〇九	一一、四五三、九七三	八、七七七、八四四	一、一〇、八七六
(項)及修船費	九、一九、三六一	九、三八二、九七三	五、七五四、五六六	一、一〇、八四五、〇〇〇
(項)建築費	三、一七四、四三六	三、〇七〇、〇〇〇	六、二七五、五五三	一、一〇、九四七、七三三
(款)補充艦艇費	一、七、五七七、一〇三	一〇、九三九、五六六	九、七三四、七四三	一、一〇、九四七、七三三
(項)造船費	四七、九五五、五三三	六、六一、三三一	七、一二四、七四三	一、一〇、九四六、三九三
(項)造兵費	二、六、六三一、五〇九	四、一五、三六五	二、六〇〇、〇〇〇	一、一〇、九三〇、〇〇〇
(款)補充艦艇費	一〇、九三九、五六六	一〇、九三九、五六六	一〇、九三九、五六六	一、一〇、九三〇、〇〇〇
(項)造船費	六、五〇、九〇九	六、五〇、九〇九	六、一八二、〇〇四	一、一〇、九三九、五六六
(項)造兵費	四、三六、六七七	四、五三九、一七七	四、一〇七、六七七	七、七四〇、四〇九

右ハ第二十三回帝國議會ノ協賛ヲ得明治四十年三月十六日裁可セラレ同十八日官報ヲ以テ公布セリ

(附記)補充艦艇費ノ財源ニ就テハ前出ノ説明ニモ見ヘタルカ今参考トシテ該基金ニ關スル事情ヲ茲ニ叙述ス

是ヨリ先キ政府ハ艦艇補充費ノ財源ニ充ツル爲メ基金ヲ置クノ必要ヲ認メ其法案ヲ明治三十一年十二月開會ノ第十三回帝國議會ニ提出シテ協賛ヲ得裁可ヲ經テ之ヲ施行セリ明

治三十二年法律第七十九號軍艦水雷艇補充基金特別會計法是ナリ其理由ノ要領及法文ヲ
擧クレハ左ノ如シ

(理由)抑ニ帝國ノ海軍ハ列強國ニ比シ甚タ微弱ナリシカ明治二十九年度以降大ニ擴張ヲ
努メ稍ニ强大ヲ致スニ至レリ然ルニ此擴張ハ臨時ノ財源タル償金ヲ以テ成シタルモノ
ニシテ國家經常歲入ヨリ出テタルモノニアラス故ニ補充ノ方法ヲ設ケサルトキハ艦艇
ハ漸次老朽ニ歸シ再ヒ勢力ヲ回復セントスルモ巨額ノ金額ニシテ容易ノ業ニアラサル
ヘシ依テ補充基金ヲ設ケ又艦艇代價消却積立ノ方法ヲ定ムルトキハ明治三十七年度以
降毎年凡六百六十餘萬圓ヲ積立ツルノ計算ニシテ艦船ノ補充ニ應シ海軍ノ勢力ヲ維持
スルヲ得ヘク是ニ於テカ帝國海軍ノ基礎初テ確立スト云フヘキナリ云々

法律第七十九號(明治三十二年三月二十日裁可同二十二日官報)

軍艦水雷艇補充基金特別會計法

第一條 軍艦水雷艇補充基金ヲ置キ其歲入歲出ハ一般會計ト區分シ特別會計ヲ設置ス
第二條 債金特別會計資金ノ内三千萬圓ハ軍艦水雷艇補充基金ニ組入ルヘシ
第三條 明治三十七年度以降各前年度末日ニ於テ艦籍ニ現在スル艦艇製造費ノ左ニ掲ク
ル遞減歩率ニ相當スル金額ヲ每年度一般會計ヨリ軍艦水雷艇補充基金ニ組入ルヘシ

防護軍艦

百分ノ五四

無防護軍艦

水雷艇 百分ノ六・五

第四條 軍艦水雷艇補充基金ニ前條ノ組入ヲ爲スニ當リ艦艇製造費ノ左ニ掲クル遞減年期ヲ過キタル艦艇ニ對シテハ翌年度ヨリ其組入ヲ停止シ爾後艦艇ノ艦籍ヨリ除カレタルモノアルトキハ其遞減殘額ニ相當スル金額ヲ翌年度ニ於テ一般會計ヨリ基金ニ組入ルヘシ

防護軍艦 二十五箇年

無防護軍艦 十八箇年

水雷艇 十五箇年

第五條 軍艦水雷艇補充基金ハ大藏省預金ニ寄託シ其利子ハ之ヲ基金ニ編入スヘシ

第六條 軍艦水雷艇補充基金ハ軍艦水雷艇補充費ノ財源ニ充ツ但シ元資金三千萬圓ハ之ヲ費消スルコトヲ得ス

第七條 政府ハ毎年軍艦水雷艇補充基金特別會計ノ歲入歲出豫算ヲ調整シ歲入歲出ノ總豫算ト共ニ帝國議會ニ提出スヘシ

艦艇補足費、整備費、補充艦艇費ハ叙上ノ如ク設定セラレタリシカ其後整備費ハ總額ニ追加アリ且ツ三費共繼續年度又ハ年割額等ニ更訂アリ明治四十四年度ニ至リ別ニ設定セラレタル軍備補充費ノ款ニ併合整理スルコトト爲レリ其經緯ヲ左ニ示ス

○艦艇補足費(款)

明治四十年度ニ於テ之ヲ設定シ豫算總額六千四百七萬七千二百九十一圓明治四十年度ヨリ四十五年度ニ亘ル六箇年度繼續費ナリシカ四十一年度ニ於テ繼續年度ヲ四十七年度迄ニ延長シ(明治四十年度乃至四十七年度即八箇年度繼續費トス)四十一年度以降ノ年割額ヲ改定ス而シテ本款ハ明治四十三年度迄ニテ之ヲ打切り其四十四年度以降ニ屬スルモノハ軍備補充費ニ併合セリ

艦艇補足費豫算(更訂ヲ經タルモノ)

○整備費(款)

明治四十年度ニ於テ之ヲ設定シ豫算總額一億千九十二萬二千七百九圓明治四十年度ヨリ四十六年度ニ亘ル七箇年度繼續費ナリシカ四十二年度ニ於テ繼續年度ヲ四十九年度迄延長シ(明治四十年度乃至四十九年度即チ十箇年度繼續費トス)四十二年度以降ノ年割額ヲ改定シ四十三年度ニ於テ同年度年割豫定額七百十萬八千百四十一圓ニ六十四萬八千四百四十七圓ヲ追加シテ同年度豫算額ヲ七百七十五萬六千五百八十八圓トス是ニ於テ本繼續費既定總額ハ一億千百五十七萬千百五十六圓ト爲レリ

而シテ本款ハ明治四十三年度迄ニテ之ヲ打切り其四十四年度以降ニ屬スルモノハ軍備補充

整備費豫算(更定ヲ經タルモノ)

(款)	整備費	(項)造船造兵及修理費	(項)建築費
明治四十年度	一一五七一、五六	七九、八六、七八	三一、七三、四二、八
同四年度	一三、四五、九七三	九、三八二、九七三	三、八〇、七〇
同四年度	一一、一八一、〇三二	八、五〇六、〇三二	二、六七五、〇〇〇
同四年度	九、四六七、五〇	七、四三九、六〇	二、〇三七、八〇〇
同四年度	七、七五六、五八八	六、三七三、五九六	一、三八三、九九三
同四年度	四〇、八五八、一六三	三、六九一、三七〇	九、一六六、七九二
明治十四年	一一、七三一、二七七	七八六、二七七	三、八四五、〇〇〇
明治十四年	一五、八〇一、七六	一、九五六、六二	三、八四五、〇〇〇
明治四十	明治四十年度乃至四十三年 度支出額合計		

明治四十六年度	一五、五九、三〇七	二二、七九、八九	三、七八九、四六
同四十七年度	二二、六一、三七九	二二、二〇、九三九	三、四一、五八
同四十八年度	二二、二〇、九三九	三、八三、三〇〇	三、六三、三〇〇
同四十九年度	二二、二〇、九三九	三、八三、三〇〇	三、六三、三〇〇
明治四十四年度乃至四十九年度 年度二支出スヘキ額合計	七〇、七二、九九八	四八、一五、三五八	二二、五五七、六三六

○補充艦艇費(款)

明治四十年度ニ於テ之ヲ設定シ豫算總額七千六百五十七萬七千百二圓明治四十年度ヨリ四十一年度ニ亘ル七箇年度繼續費ナリ(四十二年度ニ於テ同年度以降ノ年割額ヲ改定ス)

而シテ本款ハ明治四十三年度迄ニテ之ヲ打切り其四十四年度以降ニ屬スルモノハ軍備補充費ニ併合セリ

補充艦艇費豫算(更訂ヲ經タルモノ)

(款) 補充艦艇費	(項) 造船費	(項) 造兵費
明治四十一年度額	七六、五七七、一〇三	四七、九五、五九三
明治四十年度	一〇、九三九、五六六	六、六一、三三二
同四十一年度	一〇、九三九、五六六	六、五六〇、九〇九
同四十二年度	一〇、六六九、五六六	六、四〇〇、四〇九
同四十三年度	一〇、六六九、五六六	六、一八二、〇〇〇
明治四十年度乃至四十三年 度支出額合計	四三、三八、三四四	二五、九四、六三三
明治四十年度乃至四十三年 度支出額合計	一〇、九三九、五六六	六、八三一、九〇九
明治四十年度乃至四十三年 度支出額合計	一〇、九三九、五六六	一〇七、六七七

同 四 十 五 年 度	二、六九、五六	七、四〇、四〇九	三、八九、一七七
同 四 十 六 年 度	二、八九、五六	七、七六、六三三	三、三〇、九五四
明治四十四年度乃至四十六年度 年 度 二 支 出 ス ヘ キ 額 合 計 四 十 六	三、三八、七六	三、〇三〇、七〇	二、二八七八〇

而シテ以上三費ノ明治四十年度ヨリ四十三年度ニ至ル迄ノ豫算額、仕拂命令濟額、繰越額等ヲ擧

クレハ

艦艇補足費

豫算額

四八、二〇四、八六三・〇〇^四

仕拂命令濟額

三八、九二〇、八六八・三九六

不用額

一〇・九三〇

明治四十四年度へ繰越額

九、二八三、九八三・六七四

整備費

豫算額

四〇、八五八、一六二・〇〇〇

仕拂命令濟額

三七、三九六、五〇五・一五三

明治四十四年度へ繰越額

三、四六一、六五六・八四七

補充艦艇費

豫算額

四三、二五八、三四四・〇〇〇

仕拂命令濟額

三五、七〇七、〇三五・五八三

明治四十四年度八繩越額

七、五五一三〇八·四一七

ニシテ其詳細ハ左ノ如シ

(備考) 本表中四十三年度ノ翌年度繰越額ハ軍艦製造及建築費ノ四十三年度繰越額二、二、二、二九六・三三四(第十八節末尾參看)ト共ニ總計二二、四、二、四、五、二、七、二、八、四十四年度ノ軍備補充費ヘ繰越シタリ

(編者註)右備考ニ見ユル軍備補充費ノ款ニ繰越シタル總額二二・四二九、二四五・二七二ノ内一七・七七六・八三七・五四一ヲ軍艦製造費ノ項ニ入レタリ此計算ハ繰越總額ノ内、整備費三・四六一・六五六・八四七軍艦製造及建築費ノ款ニ於ケル建築費ノ項一・一一六・二二二・二一五及同款造船費ノ項中機械費ノ目七四・五二八・六六九ノ合計四・六五二・四〇七・七三一ヲ軍備補充費ノ款ニ於ケル他ノ項目ニ繰越シ其餘ノ額ヲ軍艦製造費ノ項ニ繰越セルナリ

第二十三節 明治四十三年海軍大臣提議、海軍軍備充實ノ議

(軍備補充費ノ設定—明治四十四年度以降二億四千八百六十七萬三千五百八十一圓—成立)

明治四十三年五月十三日海軍大臣男爵齋藤實ハ左ノ如ク海軍軍備充實ノ議ヲ内閣總理大臣候爵桂太郎ニ提出シテ閣議ヲ請ヘリ

今ヤ列強海軍ノ造艦方針ハ何レモ急激ナル大革新ヲ成シ全ク其面目ヲ一變セル結果之ニ伴フ必然ノ勢トシテ我海軍ニ於ケル既定造艦計畫ノ艦型ニモ亦改更ヲ加ヘサル可ラサルニ至レリ而シテ列強海軍擴張ノ趨勢ト國際關係ノ將來トヲ考察シ翻テ我艦艇威力ノ急遽遞減スル狀況ト既定計畫ニ由ル勢力補充ノ緩徐ニシテ且ツ小規模ナルコトニ想到スルトキハ我海軍ノ實力ハ數年ヲ出テスシテ著シク劣勢ノモノト爲リ終ニ國防上ノ目的ヲ達スルコト能ハサルニ至ルヘク帝國ノ前途實ニ寒心ニ堪ヘサルモノアリ故ニ既定計畫ノ艦型ニ改更ヲ加フルト同時ニ更ニ新ニ艦艇補充ノ計畫ヲ立テ以テ國防上ニ缺クヘカラサル最低標準ノ海軍力ヲ完整充實スルコトハ眞ニ焦眉ノ急務ナリト信ス乃チ此目的ヲ達成セシニハ既定計畫艦型改更ノ爲メ明治四十四年度以降四十九年度ニ涉ル繼續費追加トシテ三千九百四十六萬四千圓ヲ支出シ且ツ新ニ海軍充實ノ爲メ明治四十四年度以降五十一年度ニ涉ル繼續費トシテ三億六千七百四十四萬九千百七十圓ヲ支出シ左記ノ施設ヲ遂行セシメラレンコトヲ要ス

新充實計畫ノ要領

一、一等戰艦

七 隻

二、一等巡洋艦

三 隻

三、二等巡洋艦

四 隻

四、特務巡洋艦

一隻

五、驅逐艦

二十六隻

六、潛水艇

十隻

七、陸上ノ設備(新製艦二伴フ船渠ノ増設其他必要ナル軍港要港ノ設備)

右支出ヲ要スル費用ノ合計四億六百九十一萬三千百七十圓ニシテ年度割等左表ノ如シ

支出年度割金額表

費目名稱	總豫算額	支 出 年 度 割					
		四十四年度	四十五年度	四十六年度	四十七年度	四十八年度	四十九年度
充實費	三三,三〇〇,〇〇〇円	一一,一五〇,〇〇〇円	二元,一四〇,〇〇〇円	三元,一四〇,〇〇〇円	三元,一四〇,〇〇〇円	四元,九〇〇,〇〇〇円	五元,一四〇,〇〇〇円
既定計畫追加費	三三,三〇〇,〇〇〇円	一一,一五〇,〇〇〇円	二元,一四〇,〇〇〇円	三元,一四〇,〇〇〇円	三元,一四〇,〇〇〇円	四元,九〇〇,〇〇〇円	五元,一四〇,〇〇〇円
陸上設備費	二元,七九,〇〇〇円	一元,七九,〇〇〇円	一元,七九,〇〇〇円	一元,七九,〇〇〇円	一元,七九,〇〇〇円	一元,七九,〇〇〇円	一元,七九,〇〇〇円
合計	四六,九三,一七〇	一五,二九,〇〇〇	二元,七九,〇〇〇	三元,七九,〇〇〇	三元,七九,〇〇〇	四元,九〇,〇〇〇	五元,一四〇,〇〇〇

本案ニ添附セル海軍軍備充實計畫ノ理由ハ左ノ如シ

一、列國海軍ノ發展

熟、列國海軍造艦上ノ趨勢ヲ觀察スルニ日露戰爭後特ニ此一兩年間ニ於ケル急激ノ革新ト長足ノ發展トハ洵ニ愕クヘキモノアリ初メ英海軍ニ於テ實戰ノ結果ニ鑑ミ率先シテドレツ

ドノート型新艦ヲ建造シ各種ノ試験ヲ開始スルヤ其純巨砲主義ハ列國海軍ノ齊シク唱道スル所トナリ各國ハ更ニ之ニ改良ヲ加ヘ以テ益々其全能ヲ發揮セシメンコトヲ期シ先ツ砲熐水雷ヲ改良シテ其威力ヲ増進セシメ併セテ是等兵器ノ多數ヲ搭載シテ專ラ一艦ニ於ケル勢力ノ増加ヲ圖リ加之一面ニ於テハ機關ノ發達モ亦著シクシテ大ニ速力ヲ増進セシムルヲ得タルヲ以テ從來ノモノニ比シテ偉大ナル攻防力ヲ具備セシムルニ至リ其自然ノ結果トシテ艦型ハ龍大シ排水重ハ増加セリ而シテ今ヤ「ド型」ノ一段進歩シタル「スバードレッドノート」型ハ最新最銳ノ艦型トシテ殆ント動カス可ラサル優秀ノモノト認メラレ造兵造船ハ兩ツナカラ急激ノ革新ヲ實現セルヲ以テ今日ニ於ケル海軍力ノ比較ヲ爲スニ當リ戰鬪ノ第一線ニ列スヘキ主力ノ優劣ヲ定ムルニハ専ラ「ド型」以後ニ於ケル戰艦及裝甲巡洋艦ノ多寡ヲ以テスルニ至リ

(附錄第一參照)

更ニ列強ノ海軍力競争ニ至テハ一層激烈ヲ極メツアリ曩キニ獨逸カ大艦隊法ヲ立テ一九一七年(明治五十年)ヲ期シテ之ヲ竣工セントシ着々其歩ヲ進ムレハ對岸ノ英國ハ之ヲ以テ英國ノ國防ヲ危クスルモノナリトナシ有識ノ士ハ黨派ノ別ナク舉テ皆國防ノ急ヲ論シ輿論亦海軍力充實ノ緩漫ヲ叫ンテ之カ達成ニハ何等ノ犠牲ヲ拂フモ敢テ辭セサルノ決意ヲ示シ議會ハ政府ニ迫リテ造艦數ヲ增加スヘキヲ促シ銳意優越ナル海軍力ノ地位ヲ失墜セサランコトヲ期シ佛國モ亦曩キニ一九二五年(明治五十八年)ヲ期シ大海軍力ノ整備ヲ企圖セシカ今ヤ

列強海軍競争ノ大勢ニ促サレ新ニ一九一七年(明治五十年)迄ニ之ヲ完成スヘキ擴張案ヲ立て
米國モ亦銳意海軍力ノ増進ニ腐心シ毎年少クモ二隻ノ戰艦ヲ建造シ場合ニヨリテハ四隻若
ハ其レ以上ヲ建造セントシ又一時ハ殆ント全滅ノ姿ニ陥リシ露國海軍モ再興ノ計畫ヲ立て
其勢悔ル可ラサルモノアリ其他歐米ノ小海軍國ニ至ルマテ何レモ競フテ「ド」型新艦ノ建造ニ
着手セリ

二、帝國海軍力ノ現狀

翻テ我海軍ノ狀況ヲ見ルニ現下造艦ノ既定計畫ニ屬スルモノハ第三期擴張ニ基ク軍艦製造
及建築費ト軍艦水雷艇補充基金ニヨル補充艦艇費竝ニ臨時事件費ヲ繼承セル艦艇補足費ノ
三者ニ依ルモノニシテ一時財政上ノ都合ニヨリ事業繰延ヲ行ヒタリシモ既ニ其大部ハ製造
ヲ終ヘ或ハ現ニ建造中ニ屬シ殘ル所ハ戰艦一隻裝甲巡洋艦二隻二等巡洋艦一隻驅逐艦二隻
潛水艇二隻ノミトナレリ而シテ是等未着手ノ艦ト雖モ其計畫ハ列強ニ於ケル造艦方針ノ革
新以前ニ屬シ現在ノ新式堅艦ニ對シテスラ既ニ遜色アルヲ免カレス故ニ之ヲ以テ列強海軍
ノ新艦ニ對抗セシメンニハ必スヤ攻防ノ威力ヲ加ヘ速力ヲ增進セシメサル可ラサルヲ以テ
勢ヒ艦型ヲ大ニシ頓數ヲ增加スルノ止ムヲ得サル場合トナリ既定計畫ニ於ケル艦型ノ修正
ト同時ニ之カ爲メ不足ヲ告クル經費ノ追加ヲ必要トスルニ至レリ

惟フニ列強ノ海軍力競争ハ前述ノ如ク激烈ニシテ或ハ大艦隊法ト名ツケ或ハ擴張條例ト稱
シ或ハ二國標準ヲ聲明シ何レモ銳意「ド」型ノ戰艦及裝甲巡洋艦ヲ建造シ其數ノ多カラシコト

ヲ努メツツアル宇内ノ大勢中ニ在リテ我海軍ノミ獨リ依然トシテ既定計畫ニ甘ンシ何等新ニ計畫スル所ナクシハ今日ニ於テモ列強ニ對シ既ニ權衡ヲ失ヒツツアル我海軍勢力ハ愈々益々衰退シ數年ノ後ニハ雷ニ進テ攻勢ヲ取ルコト能ハサルノミナラス退テ守勢ヲ全フスルニモ足ラサル弱小ノモノトナリ丁ルヘシ即チ左表ヲ一覽セハ思ヒ半ニ過クルモノアラン

(附錄第二、第三、第四、第五、第六、第七參照)

一九一〇年明治四十三年及一九一七年(明治五十年)ニ於ケル列強海軍主力比較表

		一九一〇年(現時)		一九一七年(既定若ハ豫定)		一九一七年(狀況ニヨリ増加ヲ計)	
		戰艦	巡洋艦	甲	合	戰時	巡洋艦
		數	數	數	計	數	甲
英	日	二〇	三	九	隻	一、三七	艘
獨	米	一	一	八	隻	一、二五	艘
佛	國	一〇	二	七	隻	一、一七	艘
本	國	六	四	五	艘	一、一六	艘
國	國	六〇	五〇	五〇	艘	一、一六	艘
英	日	三	四	五	隻	一、三六七	艘
獨	米	一	一	二	隻	一、三六七	艘
佛	國	六	五	五	隻	一、三六七	艘
本	國	二七	九	九	艘	一、三六七	艘
國	國	六六	五五	五五	艘	一、三六七	艘
英	日	四	三	四	隻	一、一七五九	艘
獨	米	一	一	二	隻	一、一七五九	艘
佛	國	八	六	五	隻	一、一七五九	艘
本	國	一七三	九〇〇	九〇〇	艘	一、一七五九	艘

勢力ノ懸絶實ニ此ノ如クナルヲ以テ苟モ列強ニ伍シテ既得ノ地位ヲ確保セント欲セハ今ノ時ニ於テ之ニ應スルノ策ヲ立テサル可ラス機ヲ失セハ臍ヲ噬ムモ及ハサラン

三、國際關係

更ニ心ヲ潛メテ邦家ノ前途ヲ觀シ國防ノ大計ニ鑑ミルニ世界ノ形勢ハ益々我海軍力充實ノ

急ヲ促カスモノアルヲ覺ユ(中略)此ノ如キ時ニ當リ我海軍ノ勢力益々衰退シ居ラハ何ヲ以テ帝國ノ體面ヲ維持スルコトヲ得ン真ニ國防ノ大本タル海軍力ノ充實ハ正ニ焦眉ノ急ニ迫レルモノナレハ須ラク萬難ヲ排シテ一日モ速ニ之カ整備ヲ圖ラサル可ラサルナリ

四、軍備充實ノ標準

此見地ニ基キ我軍令部ハ海軍力充實ノ計畫ヲ立て近キ將來ニ於テ帝國海軍ノ中堅トシテ國防第一線ノ任務ヲ遂行スルニ適合スヘキ艦齡第一期ニ屬スル艦船ノ種類及隻數ヲ策定シ明治五十年三月ヲ以テ完整セシメンコトヲ提案セリ

今之ヲ精査スルニ右ノ提案ハ時局ノ急ニ應センカ爲メ作戦上必要ナル最小限ヲ以テ計畫セルモノナレハ最早此上之ヲ修正スルノ餘地ナキカ如シト雖モ尙深ク我國財政ノ現狀ニ鑑ミ成ルヘク其負擔ヲ輕減シ實行ヲ容易ナラシメンカ爲メ作戦上甚シク危殆ナラサル範圍ニ於テ百方苦心ノ結果幾分艦型ヲ縮少シ又其數ヲモ減シ完成期ヲモ延ハシ明治五十一年度ヲ以テ完成セシムルコトトシ以テ本案ノ如ク海軍軍備充實ノ計畫ヲ立てタリ

尙既定計畫ニ係ル艦艇ニ於テモ右ノ新計畫艦艇ト同戰列ニ伍セシムル爲メ艦型ノ改更ヲ要スルヲ以テ其經費ノ追加ヲ必要トスルニ至リ又軍港要港設備ノ爲メ若干ノ經費ヲ要求セリ此經費ハ前述充實計畫ノ實行ニ伴フ工場、船渠ノ増設、海底ノ浚渫等ニ要スルモノナリ

五、結論

以上記述セル如ク既定計畫艦型ノ改更並ニ艦艇新造及軍港要港ノ設備ハ今日列強ノ執レル

海軍政策ノ恢弘ト近キ將來ニ於ケル交通機關ノ發展並ニ東洋ニ於ケル形勢トニ鑑ミ帝國國防上一日モ猶豫スヘカラスト認メタル最小限度ニヨリ立案セルモノナリ

附錄諸表(茲ニ略ス)

右海軍軍備充實ノ議ハ四十三年七月十二日ニ至リ閣議左ノ如ク決定セリ

本案ハ財政ノ計畫ニ鑑ミ之ヲ四十四年度ヨリ全部ヲ實行スルヲ得サルカ故ニ先ツ曩キニ十七年度以後ニ繰延ヘタル「軍艦製造及建築費」ノ事業ヲ四十四年度以降四十八年度迄ノ間ニ繰上ケ施行スルコトニ改メ既定計畫諸艦艇ノ型狀ヲ新式ニスル爲メ之ニ要スル費用ノ追加ヲ認メ又之ニ適應スル陸上設備ヲ施行スルコトニ決定ス尙ホ充實計畫ハ四十六年度以後更ニ年度割ヲ定メ以テ完成ヲ期スルモノトス

是ニ於テ明治四十四年度豫算案ニ於テハ艦型及兵器ノ改良並ニ之ニ伴フ諸設備費トシテ新タニ八千二百二十二萬三千百七十圓ヲ要求スルコトシ從來ノ繼續費タル軍艦製造及建築費、艦艇補足費、整備費、補充艦艇費ノ四款ヲ合シテ軍備補充費ノ一款ヲ設定シ之ニ右新要求額ヲ併算シテ年割額ヲ改定シ四十四年度以降四十九年度ニ亘ル繼續費トシテ二億四千八百六十七萬三千五百八十一圓ヲ計上セリ而シテ此豫算ハ左ノ如ク四十三年十二月開會ノ第二十七回帝國議會ニ提出セリ

第二十七回帝國議會提出海軍省所管豫定經費要求書臨時歲出ニ關スル部(抄錄)

軍艦補充費ハ既ニ繼續費トシテ協賛ヲ經タル軍艦製造及建築費、艦艇補足費、整備費、補充艦

艇費ノ四款ニ於ケル明治四十四年度以降ノ年割額ヲ併合シ從テ其明治四十三年度ニ於ケル豫算殘額モ軍備補充費ニ繰越シ併算シ之ヲ一途ニ整理スルコトトシ且ツ既定計畫中ノ艦型及兵器ノ改良並ニ之ニ隨伴スル諸設備改善ノ爲メ八千二百二十二萬三千百七十圓ヲ追加シ同時ニ其年割額ヲ更定シ左ノ如ク明治四十四年度ヨリ四十九年度ニ亘ル六箇年度ノ繼續費ト爲スヲ要ス云々

右豫算ハ第二十七回帝國議會ノ協賛ヲ經四十四年三月二十一日裁可公布セラレタリ(三月二十
三日官報)

明治四十四年度豫算繼續費ノ部(抄錄)

軍備補充費

金三億五千二百八萬五千八百四十六圓十四錢

(軍艦製造及建築費、船艇費ニ屬スル既定總額)

金八千二百二十二萬三千百七十圓

追加額

計金四億三千四百三十萬九千十六圓十四錢

内

金一億八千五百六十三萬五千四百三十五圓十四錢

明治四十三年度迄支出額

金二億四千八百六十七萬三千五百八十一圓

明治四十四年度以降支出額

此改定年額左ノ如シ

(明治四十四年度ヨリ四十九年度ニ至ル各年度割額ハ議會ニ提出セル前掲金額ニ同
シキヲ以テ茲ニ略ス)

本費ハ明治四十五年度豫算ニ於テ事業進捗上ノ都合ニ依リ既定總額ノ範圍内ニ於テ其年割額ヲ變更シ(四十五年度ニ於テ百五十萬圓ヲ増シ四十九年度ニ於テ百五十萬圓ヲ減ス)第二十八回帝國議會ノ協賛ヲ經明治四十五年三月十五日裁可セラレ同三月十六日官報ヲ以テ公布セラレタリ其改定セラレタル年度割等左表ノ如シ

△印ハ減

軍備充費備	款項	區別	總費額	要求濟額
既定支出額	年四十度	年四十五度	年四十度	年四十度
一	一	一	一	一
元、七、三、四、五、一、〇〇〇、〇〇〇	元、七、三、二、四、五、一、〇〇〇、〇〇〇	元、七、三、一、八、五、一、〇〇〇、〇〇〇	元、六、三、一、八、五、一、〇〇〇、〇〇〇	元、六、三、一、八、五、一、〇〇〇、〇〇〇
一	一	一	一	一
一、五、〇〇〇、〇〇〇	一、五、〇〇〇、〇〇〇	一、五、〇〇〇、〇〇〇	一、五、〇〇〇、〇〇〇	一、五、〇〇〇、〇〇〇
一	一	一	一	一
一、五、〇〇〇、〇〇〇	一、五、〇〇〇、〇〇〇	一、五、〇〇〇、〇〇〇	一、五、〇〇〇、〇〇〇	一、五、〇〇〇、〇〇〇
一	一	一	一	一
一、五、〇〇〇、〇〇〇	一、五、〇〇〇、〇〇〇	一、五、〇〇〇、〇〇〇	一、五、〇〇〇、〇〇〇	一、五、〇〇〇、〇〇〇
一	一	一	一	一
一、五、〇〇〇、〇〇〇	一、五、〇〇〇、〇〇〇	一、五、〇〇〇、〇〇〇	一、五、〇〇〇、〇〇〇	一、五、〇〇〇、〇〇〇

				造軍艦費製		改定支出額			
				既定支出額		既定支出額			
				既定支出額	既定支出額	既定支出額	既定支出額	既定支出額	既定支出額
諸監費督	修理兵費及	修理船費及	造船修理費	備水陸費設	建築費	造兵費	造船費	改定支出額	改定支出額
既定支出額	既定支出額	既定支出額	既定支出額	既定支出額	既定支出額	既定支出額	既定支出額	既定支出額	既定支出額
102,818	五,八六	30,000	15,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000

尙ホ軍備補充費ノ経過ニ就テハ以下各節ニ於テ之ヲ記述スルコトトス

一五〇

第二十四節 明治四十四年海軍大臣提議、海軍軍備

緊急充實ノ議

(閣議之ヲ認メタルモ財政上ノ都合ニ依リ計畫中ノ一部ヲ四十六年度以降ノ豫算ニ計上スルコトトス)

明治四十四年九月(日佚ス)海軍大臣男爵齋藤實ハ海軍軍備緊急充實ノ議ヲ内閣總理大臣侯爵西園寺公望ニ提出シテ閣議ヲ請ヘリ(本議ハ四十四年五月九日内閣總理大臣公爵桂太郎ニ提出セシカ未タ閣議ヲ經ルニ至ラスシテ八月三十日内閣更迭シタルヲ以テ更ニ提出セルモノナリ)

本議ノ要領ハ客年閣議決定以來列強海軍造艦方針ハ益々砲熐ノ巨大ヲ來タシ裝申鋏汽機汽罐等亦一層强大有力ナルモノヲ用ヒルノ希望ニ副ハシカ爲メ艦型愈々宏大シ排水量ハ著シク増加セラルルノ趨勢ヲ呈シ擴張計畫モ增大速進シツツアルノ實況ヨリ說キ起シ國際關係及列強ノ經營シツツアル兵要地點ノ施設等ニ及ヒ我海軍勢力既定補充計畫ノ狀態ニ顧ミ彼我勢力ノ懸隔益々甚シキニ至ルヘキヲ較量シ我國防ノ目的ヲ達セシニハ此際更ニ左記ノ計畫ニ依リ緊急充實ノ必要ナル所以ヲ述ヘタリ(編者註)

明治四十五年度以降五十一年度ニ亘ル繼續費トシテ三億五千百九十萬圓ヲ支出シ左ノ艦艇ヲ建造スルコト

一等戦艦 七隻
一等巡洋艦 二隻
二等巡洋艦 五隻

特務巡洋艦

二隻
二十六隻

(一隻ハ
川代艦)

駆逐艦
潜水艇

十隻

而シテ右経費支出年度割等ハ左ノ如シ

支出年度割金額表

	四十五年度	四十六年度	四十七年度	四十八年度	四十九年度	五十年度	五十一年度
合計	六,000,000円	三八,七〇,000円	三三,〇五,000円	二四,〇〇,000円	一六,二二,000円	七九,〇〇,000円	六,六〇,000円
合計	三億五千百九十萬圓						

右ニ就キ四十四年十一月二十八日閣議左ノ如ク決定セリ

本案軍備補充ノ必要ナルコトハ之ヲ認ム然レトモ其遂行ニ要スル金額三億五千百九十萬圓ノ支出ニ關シテハ帝國財政ノ現状ニ鑑ミ今直ニ其全部ヲ定ムルヲ得サルヲ以テ先ツ以テ本計畫ノ中最モ焦眉ノ急アリト認ムル戰艦三隻ノ建造ニ要スル金九千萬圓ヲ來ル四十六年度以降ノ豫算ニ計上スルコトトシ其殘部ハ四十九年度以降ニ計上スルコトトス而シテ前記九

千萬圓ノ年度割ハ政府一般ヲ通シ斷行セラルヘキ行政整理ノ結果ニ從ヒ決定セラルヘシ云

因ニ記ス明治四十五年度豫算ニ於テハ本議計畫ニ屬スルモノニハアラサルモ前年度即四十四年度ノ設定ニ係ル軍備補充費繼續年度割ヲ變更シ(四十五年度ニ於テ百五十萬圓ヲ増シ四十九年度ニ於テ百五十萬圓ヲ減ス)該事業ノ進捗ヲ圖レリ其詳委ハ第二十三節ニ載ス

(明治四十五年七月三十日大正ト改元ス)

第二十五節 大正元年海軍大臣提議、海軍軍備緊急

充實計畫實施ノ議

(軍備補充費六百萬圓追加ノ成立)

大正元年十一月五日齋藤海軍大臣ハ海軍軍備緊急充實計畫實施ノ議ヲ西園寺内閣總理大臣ニ提出シテ閣議ヲ請ヘリ其要ニ曰ク

帝國國防ニ至緊ノ關係ヲ有スル列強海軍力更張增大ノ趨勢ニ鑑ミ我海軍威力自然遞耗ノ實狀ニ致ヘ帝國海軍軍備充實ノ一日モ緩フス可ラサル必要ヲ認メ明治四十三年五月海軍軍備充實ノ議ヲ上リ尋テ翌四十四年九月緊急充實ノ案ヲ呈シ帝國カ東洋ニ在テ其國權國利ヲ擁護スルニ於テ絶對的必須ノ最小限度ニ由レル標準ヲ立テ大正十年度ニ亘ル繼續費三億五千百九十萬圓ヲ以テ

戰艦

七隻

巡洋艦

二隻

巡洋戰艦

五隻

特務艦

二隻

驅逐艦

二十六隻

潛水艇

十隻

ヲ建造セサル可ラサル所以ヲ提議セリ然ルニ時恰モ内閣更迭ニ際シ且ツ豫算編制ノ期ニ迫リ審議ヲ盡スノ餘日ナク止ムヲ得ス該計畫全案ハ大正二年度豫算編制ノ時機ニ於テ之ヲ確定セラレンコトヲ期待セリ

(列強軍備經營ノ實況ヲ叙シ兵力異動運輸上ノ變化ヲ述ヘ國際關係ヲ說キ帝國ノ前途ニ及フ
中略)

讃テ帝國海軍ノ現狀ヲ查スルニ大小艦艇ノ多數ハ其齡漸ク老ヒ勢力亦當年ノ比ニアラス近ク若干隻ノ新造ヲ見タリシモ其數固トヨリ列強ノソレニ較スルニ足ラサルノミナラス彼我對勢上我海軍ノ威力ハ大ニ遞下シツツアルノ實狀タリ而シテ今ヤ戰列ノ主要艦ハ必ス弩型タラサル可ラサルノ時運ニ際シ我既定計畫ノ殘部ニ屬スルモノ僅ニ戰艦一隻巡洋戰艦四隻等ニ過キス然カモ大正十年度迄ノ間ニ於テ現有總艦艇ニ就キ老廢除籍ニ歸スヘキモノ(中略)
多數ニ上ラントス豈ニ夫レ彌縫荏苒一日ヲ苟且スルノ餘地アランヤ是レ前々年來海軍軍備

充實ノ案ヲ立テ帝國カ東洋ニ在テ其國權國利ヲ擁護スルニ於テ必然備ヘサル可ラサル最小限度ノ標準ヲ策定シ以テ廟議ヲ仰キタル所以ナリ

夫レ宇内列強カ其海軍力ノ增大伸張ニ營々タルノ實況ハ概述セルカ如ク水路運輸ノ企劃亦長足ノ發展ヲ來タシ海軍力ノ分野ニ多大ノ影響ヲ與フルハ言ヲ須ヒサルナリ而シテ彼我力量ノ比較趨勢ハ前叙セルカ如シ此秋ニ際シ苟モ我海軍軍備ノ充實一日ヲ緩フセんカ既ニ現狀ニ於テ列強ニ對シ著シク權衡ヲ失ヒツツアル帝國海軍力ハ愈々倍々退下シ今日ニ於ケル毫釐ノ失ハ明日ニ於ケル千里ノ差ト爲リ暮年ナランシテ國防ノ急須ニ應スル能ハサルノ狀態ニ陷ルニ至ラシコトヲ虞ル若シ此ノ如クンハ假令百萬ノ堅甲ヲ擁スルモノ之ヲ活躍雄飛セシムルノ途ナカラシ又外交上ノ神籌妙策モ實效ヲ收ムルニ由ナカラシ而シテ一旦緩急アルニ方リ如何ニシテ進ンテ我國權ヲ擁護シ國利ヲ保全スルヲ得ンヤ啻ニ之ヲ得サルノミナラス却テ事每ニ列強ノ威壓ニ逢ヒ退テ我正當ノ主張モ之ヲ立ツルニ由ナク遂ニ國勢ノ萎微ヲ招クニ終ランコト殷鑑史乘ニ歷々タリ彼ヲ顧ヒ此ヲ念へハ眞ニ焦慮ニ堪ヘサルナリ

叙上ノ次第ナルヲ以テ前掲海軍軍備緊急充實最小限度ノ計畫案ハ此際制度整理ト相俟テ財政計畫ヲ立ツルノ機ニ於テ決定ヲ要スヘキモノト確信シ大正二年度ヨリ萬難ヲ排シテ之カ實施ヲ期セラレンコトヲ切望ス云々

(大正元年十二月二十一日西園寺侯内閣總理大臣ヲ辭シ桂公之ヲ襲ク)

本議ニ關シ大正二年一月十日閣議決定ノ要領ハ左ノ如シ

大正二年度豫算案海軍軍備補充費ニ六百萬圓追加要求ニ關スル件

前内閣ニ於テハ國防上最モ緊急ナル需要ニ應スル爲メ經費總額三億五千百九十萬圓ニ達スル海軍軍備補充ノ計畫ヲ立テ本議會(大正元十二年第三十回帝國議會)ニ提出セントヲ欲シタリシモ豫算計畫完了ニ至ラサルニ内閣ノ更迭アリ現内閣ハ實際之ヲ果スノ時月ヲ有セサリシヲ以テ本年度(大正二年度)ニ於テ先ツ軍備補充費既定年度割ニ六百萬圓ヲ追加要求シ以テ戰艦三隻ノ製造ニ着手スルコトトシ其全般ノ計畫ハ更ニ第三十一回帝國議會以後ニ於テ提案要求シ以テ完成ヲ期スルモノナリ

斯クテ大正二年度豫算案ニ於テ既定軍備補充費中ニ更ニ六百萬圓ヲ增加計上シ大正元年十二月開會ノ第三十回帝國議會ニ提出セリ然ルニ大正二年二月二十日議會開會中桂内閣辭職シ山本内閣之ニ代ハリシカ大正二年度豫算案ハ桂内閣編成ノモノヲ踏襲シテ之ヲ同議會ニ提出セリ

(第三十回帝國議會提出)

大正二年度海軍省所管豫定經費要求書
軍備補充費(一般ノ説明中抄錄)

本費ハ明治四十四年度以降大正五年度ニ亘リ總額二億四千八百六十七萬三千五百八十一圓ノ既定繼續費ナルモ艦艇補充上ノ必要ニ依リ大正二年度ニ於テ既定年割額ヲ増加シ更ニ六百萬圓ヲ計上セリ

軍備補充費(繼續費ノ說明中抄錄)

右ハ四十四年度以降大正五年度ニ至ル六箇年度ノ既定繼續費ナルモ艦艇補充上ノ必要ニ依リ大正二年度年割額ヲ増加シ左ノ如ク更定ヲ要ス

右豫算案ハ第三十回帝國議會ノ協賛ヲ得大正二年三月二十九日裁可セラレ左ノ如ク同日官報號外ヲ以テ公布セラレタリ

軍備補充費

金四億三千四百三十萬九千十六圓十四錢

金六百萬圓

計四億四千三十萬九千十六圓十四錢

內

金二億七千九百十六萬九千八百十圓十四錢

金一億六千百十三萬九千二百六圓

右ノ内改定ヲ爲スヘキ年額左ノ如シ

大正支額年表

既定總額

追加額

迄大
支正
出元
額年
度

以大
降正
支二
出年
額度

大正二年度(前掲議會提出ノ豫算案ニ同シキヲ以テ略ス)

一五八

第二十六節 大正二年海軍大臣提議海軍軍備補充

計畫實施ノ議

(軍備補充費一億五千四百萬圓追加要求―衆議院三千萬圓削減修正可決―貴族院更ニ四千萬圓削減修正可決―兩院協議會成案―衆議院可決―貴族院否決―遂ニ不成立)

大正二年十一月(日佚ス)海軍大臣男爵齋藤實ハ海軍軍備補充計畫實施ノ議ヲ内閣總理大臣伯爵山本權兵衛ニ提出シテ閣議ヲ請ヘリ其要ニ曰ク

列強海軍擴張ノ趨勢ト造艦方針ノ激變ト帝國海軍力急速減耗ノ情況トニ鑑ミ我海軍軍備ノ補充ハ眞ニ焦眉ノ急務タルヲ信シ明治四十三年五月海軍軍備充費ノ議ヲ提出シタルニ廟議亦實際已ムヲ得サルモノト認メ當時ノ財政按配上先ツ翌年度以降六箇年ノ繼續費トシテ八千二百二十萬餘圓ノ増額ヲ行ヒ以テ既定造艦計畫ノ艦型ニ改良ヲ加フルコトトシ全計畫ノ主要部ハ之ヲ四十六年度ヨリ着手スルコトニ決セラレタリ

然ルニ其後列強ノ主力艦隊ノ勢力ハ急激ニ増加シ我海軍ハ相對的ニ其威力甚シク減退シ帝國ノ前途ニ想到スル時ハ到底四十六年度ヲ待ツラ容ササル狀況ニ陥リタルヲ以テ明治四十

四年九月更ニ國防上絶對的必須ノ最少限度ナル標準ヲ策定シテ軍備緊急充實ノ議ヲ呈シ大正十年度迄ノ繼續費三億五千百九十萬圓ヲ以テ

戰 艇 七 隻

巡 洋 戰 艇 二 隻

巡 洋 艦 五 隻

特 務 艦 二 隻

驅 逐 艦 二十六 隻

潛 水 艇 十 隻

ヲ建造セサル可ラサル所以ヲ述ヘタリシカ時恰モ内閣ノ更迭ニ會シ爾來再度内閣更迭シ大正二年度豫算編制ノ時機ニ際シテハ右計畫ニ對スル繼續費年度割ヲ確定スルノ餘日ナク已ムヲ得ス該計畫實行ノ先驅トシテ取敢ヘス大正二年度軍備補充費既定年度割ニ六百萬圓ヲ附加要求シ以テ戰艦三隻ノ建造準備ニ着手シ全般ノ計畫ハ更ニ第三十一回帝國議會以後ニ於テ提案シ之カ完成ヲ期スルノ外ナキニ至レリ

熟ニ列強ノ海軍力増大ノ趨勢ヲ考察スルニ(中略)極東ノ天地漸ク多事ナラントス

翻テ帝國海軍ノ現狀ヲ顧ミルニ艦齡ノ老廢ト列強海軍力ノ增進トニヨリ我威力頓ニ遞下シ日露戰爭當年ノ雄姿ハ今ヤ殆ント其影ナク擴張ハ擋キ滅耗勢力ノ補充サヘモ尙且ツ至難ノ窮態ニ在リ勿論大正二年度豫算ニ六百萬圓ヲ附加要求シテ豫定計畫ノ一部タル戰艦三隻ノ

建造準備ニ着手セリト雖モ已ニ數年ニ涉リテ補充計畫ヲ遷延シ而モ今年四月ニ於テ老廢除籍ニ歸シタル艦艇二十九隻ニ達シ更ニ今後大正十年度迄ニハ(中略)廢艦艇ヲ數フルニ至ラン
トスル實狀ニ致フレハ眞ニ寒心ノ至リニ堪ヘス

惟フニ帝國國防ノ第一線タル海軍力ノ補充カ斯クシテ姑息荏苒一日ヲ苟且センカ其結果ハ軍隊ニ於テ壯丁ノ徵募ヲ停止シタルニ等シカルヘク既ニ現狀ニ於テ列強ニ對シ著シク權衡ヲ失ヒツツアル我海軍力ハ愈々倍々退下シ(中略)遠カラスシテ國防ノ急須ニ應スル能ハサルノ狀態ニ陷リ從テ我國利國權ヲ擁護伸張シ東洋ノ平和ヲ維持スルコト能ハサルヲ虞ル是レ本大臣ノ日夜焦慮措ク能ハサルトコロニシテ海軍軍備ノ緊急補充計畫ヲ按シ之カ實施ヲ數々閣議ニ提出セシ所以ナリ(中略)

叙上ノ次第ナルヲ以テ前掲海軍軍備緊急補充最少限度計畫案ハ是非トモ萬難ヲ排シ大正三年度ヨリ之カ實施ヲ斷行セラレントヲ要ス

本議ハ閣議ニ於テ(是レヨリ先キ行政整理ヲ斷行シ經費ノ節減ヲ圖レリ)軍備補充費ニ更ニ一億五千四百萬圓ヲ追加要求スルコトニ決シ左ノ如ク大正二年十二月開會ノ第三十一回帝國議會へ提出セリ

大正三年度海軍省所管豫定經費要求書

軍艦製造費一般説明ノ部抄錄

本費ハ明治四十四年度以降大正五年度ニ亘ル繼續費ナルモ艦艇補充ノ必要上先ツ第一期

經畫トシテ既ニ前年度ニ於テ追加要求ニ係ル六百萬圓ト合シ總額一億六千萬圓ヲ追加スルノ必要アリ依テ大正三年度以降大正八年度ニ亘ル支出額一億五千四百萬圓ヲ既定總額ニ追加シ其本年度年割追加額千萬圓ヲ臨時部第六款第一項ニ豫算セリ

軍備補充費(繼續費說明ノ部抄錄)

右ハ前ニ説明シタル事由ニ依リ軍艦製造費トシテ總額一億五千四百萬圓ノ追加ヲ要スルト行政整理ノ結果事業繰延ノ爲既定年割額ノ變更ヲ要シ且ツ大正二年度ニ於テ繰延ニ係ル金額水陸設備費ニ於テ五十五萬八千七百三十三圓造船造兵及修理費ニ於テ百八十五萬五千四百十一圓合計二百四十一萬四千百四十四圓ハ一旦同年度ノ不用ニ立ツルカ爲將來ノ年度ニ之カ追加ヲ要スルトニ依リ繼續年限ヲ延長シ本年度以降左ノ區分ニ依リ之カ支

出ヲ要ス

既定額	修理費及 改定額	増減額	既定額	修理費及 改定額	増減額
三、六三、三四	七、七九、五八	一、〇二	三、五五、三三	八、一七九、四二	一、〇八、四六
三、五六、三三	七、七九、五八	一、〇二	三、五五、三三	八、一七九、四二	一、〇八、四六
二、七六、五三	四、六三、七六	一、〇二	二、八三、五三	五、五三、二三	一、〇六、九五
一、〇二	五、五三、二三	一、〇六、九五	一、〇六、九五	四、五四、二三	一、〇六、九五
一、〇二	四、五四、二三	一、〇六、九五	一、〇六、九五	一、〇六、九五	一、〇六、九五
一、〇二	一、〇六、九五	一、〇六、九五	一、〇六、九五	一、〇六、九五	一、〇六、九五
一、〇二	一、〇六、九五	一、〇六、九五	一、〇六、九五	一、〇六、九五	一、〇六、九五

右豫算案ハ衆議院ニ於テ左ノ如ク修正議決セリ

追加額一億五千四百萬圓中、大正五年度起工大正八年度竣工スヘキ軍艦一隻ノ建造費三千萬圓ヲ削減シ其他ハ原案ノ通トス(其理由ハ大正五年度着手ノ戰艦一隻ノ建造費ニ對シ今日ヨリ協賛ヲ與フルノ要ナシト云フニ在リ)

而シテ貴族院ニ於テハ左ノ如ク修正議決セリ

追加額一億五千四百萬圓中、衆議院議決案ノ外ニ尙ホ四千萬圓ヲ削減シ其他ハ原案ノ通トス
貴族院豫算委員會及本會議ニ於ケル問答及辯明ヲ舉クレハ大要左ノ如シ

男爵目賀田種太郎ノ海軍補充計畫完成期ニ就テノ質問ニ對スル齋藤海軍大臣ノ答辯

海軍ノ計畫ハ約三億五千萬圓ノ範圍内ニ於テ艦艇ヲ増加シ大正十二三年頃マテニ艦隊ノ編成ヲ完備スルニ在リ

豫算委員會ニ於テ爲シタル子爵曾我祐準ノ質問ニ關スル山本内閣總理大臣ノ辯明

余ハ先ツ海軍補充問題ニ付一言シ次ニ曾我子爵ノ質問ニ答ヘムト欲ス第四分科會カ海軍費ニ四千萬圓ノ大削減ヲ加ヘタル第一ノ理由ハ本豫算ニハ陸軍擴張ニ關スル何等ノ計畫ナク陸海軍ニ於テ偏重ノ嫌アリト言フニ在リ然レトモ陸海軍ノ事ハ過去ノ歴史ニ於テ時

ニハ之ヲ同時ニシ時ニハ之ヲ交互ニシ緩急其宜シキニ應シテ計畫ヲ立テ來レリ而シテ今
ヤ我海軍補充ノ必要ハ呶々ヲ要セス若シ一年ヲ緩フセムカ曾テ貴族院ニ於テ吳ニ於ケル
甲鐵艦製造費ヲ否決セラレタル爲メ日露戰爭中甲鐵艦ノ修理ニ困難シタルカ如キ經驗ヲ
繰返ササル可ラサルニ至ラム貴族院ハ前議會ニ於テ余ヲ信任シテ豫算ニ一錢一厘ノ削減
ヲモ加ヘス通過セシメラレタルニ今二三ノ犯罪者ヲ出シタル爲ニ國防ノ大事ヲ棄テテ顧
ミス事實ノ判明セサルニ尙ホ且ツ當局大臣ニ引責ヲ迫ラルル如キハ貴族院ノ爲メ遺憾ニ
堪ヘス收賄ニ對シテハ事實ノ判明ト共ニ相當ノ制裁ヲ加フヘキヲ以テ冷靜ノ判断ヲ以テ
衆議院修正案ノ通り海軍費ヲ復活サレムコトヲ望ム

次テ討議ニ入り齋藤海軍大臣ハ左ノ如ク陳述セリ

分科會ニ於テ削減サレタル四千萬圓ハ驅逐艦潛水艇ノ建造費ニシテ此兩者ノ現勢ハ大正
三年度ヨリ八年度迄ニ於テ約四割以上ノ減耗ヲ見ルヘク之カ補充ハ一日ヲ緩フス可ラサ
ル狀態ニ在レハ本委員會ニ於テハ四千萬圓削減ヲ復活シ衆議院修正案ノ通可決セラレン
コトヲ望ム

本議場ニ於ケル豫算委員長子爵曾我祐準ノ報告

海軍省所管ニ於テ軍艦製造費七千萬圓即チ衆議院ノ修正案ヨリ更ニ四千萬圓ヲ削減セム
トルノ理由ハ(第一)陸海軍ノ要求ニ於テ均衡ヲ得サルコト(第二)海軍部内ノ紊亂是レナリ
其理由ヲ説明セムニ貴族院ハ第二十八議會ニ於ケル海軍擴張ニ關スル決議ニ基キ大正元

年度豫算ニ計上セラレタル海軍擴張案ヲ通過セシメタリ然ルニ第三十議會ニ於テ貴族院ハ同シク陸軍增師案ノ提出ニ關スル決議ヲ爲シタルニ拘ラス政府ハ本豫算ニ於テ何等陸軍ニ關スル擴張ノ計畫ナク反テ再ヒ海軍擴張案ヲ提出シ來レリ大正元年以來陸軍大臣ヲ替フルコト三回ニシテ尙且增師計畫ノ實行セラレサル所以ノモノ其罪素ヨリ陸軍當局ニ在リト雖モ貴族院トシテハ之ニ對シ極メテ公平ノ判断ヲ下シテ國防ノ大事ヲ決セサル可ラス海軍當局ハ名ヲ補充ニ藉リ擴張ナル文字ヲ避クト雖事實ハ明ニ擴張ニシテ日露戰爭後陸軍ハ約五割弱ヲ增加シテ十三師團ヨリ十九師團トナレルニ對シ海軍ハ二倍半ヲ増加シテ二十五萬噸ヨリ六十六萬噸ニ進メリ是レ豈ニ偏倚ノ甚シキモノニアラスヤ第二ノ理由タル海軍部内ノ紊亂ニ付テハ茲ニ辭ヲ費スヲ要セス余ハ海軍大臣ニ對シ自ラ引責シテ海軍ノ廓清ヲ圖ラムコトヲ勸告セシモ終ニ其納ル所ト爲ラサリシヲ遺憾トス

次テ男爵阪井重季ハ增師案不提出ノ理由タル所謂四圍ノ狀況ニ關シテ質問シ山本内閣總理大臣之ニ答辯シ討論ニ入り修正案賛否ニ就キ議員交々演説スル所アリ最後ニ山本内閣總理大臣ハ大要左ノ如ク演述セリ

此場合一言諸君ニ懇フル所アラムトス陸海軍ノ擴張ハ必スシモ之ヲ同時ニ行フニアラサレハ其均衡ヲ失スルモノニアラス而シテ陸海軍共ニ我國力相應ノ程度アリ此程度ハ陸海軍共ニ確定セルアリ漸次必要ニ應シ國力ノ許ス範圍ニ於テ議會ノ協賛ヲ經ツツアリ本豫算ニ計上セル所ハ一方ニ偏倚セリトノ理由ヲ以テ修正セラレムトスルモ是レ金額ノ上ニ

止マリ政府ハ國防ノ大體ニ付或ハ外交ニ或ハ四圍ノ事情ニ或ハ財政ノ都合ニ考へ其緩急順序ニ依リテ計上シタリ唯本豫算ニ關シテハ海軍瀆職事件ノ突發シタル爲意外ノ困難ヲ感スルニ至レルモ元來此事件タルヤ關係スル所極メテ小部分ニ止マリ之カ爲メニ帝國海軍ノ光輝アル歴史ヲ埋沒セシムルノ恐ナシ其責任ノ歸スル所ハ事件ノ決定ヲ待チテ自ラ判明スヘシ徒ラニ感情ニ馳セテ人ヲ責ムル過酷ナラサラムコトヲ望ム政府提出案ニ對シ衆議院ハ未着手戰艦一隻建造費三千萬圓ヲ削除シ政府ハ之ニ同意セリ然ルニ本院ニ於テ削減セラレムトスル四千萬圓ハ驅逐艦及潛水艇建造費ニシテ現在ノ艦艇ハ既ニ舊型ニ屬シ一朝有事ノ日ニ於テハ到底沿海警護以上ノ用ヲ爲スヲ得サル狀態ニ在リ是レ諸君ノ一考ヲ煩ハササルヲ得サル所以ナリ而シテ陸軍問題ハ必ス近キ將來ニ於テ之ヲ解決スヘキハ既ニ明言セル所ノ如シ

本案ハ叙上ノ如ク兩院議決異レルヲ以テ協議會ヲ開キ衆議院議決ノ如ク成案ヲ得衆議院ハ可決セルモ貴族院ハ之ヲ否決セル爲メ遂ニ不成立ニ歸セリ(大正三年三月二十三日)

第二十七節 大正三年海軍大臣提議、軍備補充費六

百五十二萬六千圓追加ノ議

(成立)

大正三年(月日佚ス)海軍大臣八代六郎ハ軍備補充費ノ大正三年度豫算年割額六百五十二萬六千

圓ヲ追加スルノ議ヲ内閣總理大臣伯爵大隈重信ニ提出シ閣議ノ決定ヲ得同年六月臨時開會ノ第三十三回帝國議會ニ左ノ如ク提案セリ

大正三年度海軍省所管豫定經費追加要求書

軍艦製造費

本費ハ明治四十四年度ヨリ大正五年度ニ至ル既定繼續費ナルモ大正二年度年割額ニ増加シタル六百萬圓ヲ以テ已ニ製造ニ着手シタル新艦工事ヲ續行スル必要アルニ依リ差當リ大正三年度年割額ニ六百五十二萬六千圓ノ増加ヲ要スルニ由ル

款	項	目	大正三年度追加要求額
軍備補充費	軍艦製造費		
	監督	造船	六、五二六、〇〇〇
	諸費	兵船費	四、五七三、〇〇〇
			一、八五四、〇〇〇
			九九、〇〇〇
六月二十三日大隈内閣總理大臣ノ衆議院ニ於テ爲シタル施政方針ノ演説(抄錄)			
諸君政府ハ海軍軍備補充ノ緊急ナルヲ認メ臨時議會召集ノ事ヲ奏上シタルニ御裁可アラセラレ茲ニ此臨時議會ヲ以テ再ヒ諸君ト相見ユルニ至リタルハ本大臣ノ光榮トスル所ナリ云々			

戰艦三隻建造ノ計畫ハ大正二年度豫算ニ其一部ヲ現ハシ既ニ事業ニ着手セリ然ルニ大正三年度ニ於テ豫算不成立ト爲リタル爲メ一時事業ヲ中止スルノ已ムヲ得サルニ至レリ政府ハ此事業ヲ繼續實行スルヲ以テ國務進行上緊急ナリト認メ乃チ之ニ必要ナル追加豫算ヲ要求スルコトトセリ諸君ノ審議協賛ヲ乞フ云々

同日同院ニ於ケル若槻大藏大臣ノ演説(抄錄)

本豫算ニ計上スル所ノ歳出ハ總額六百五十二萬六千圓ニシテ臨時部海軍省所管軍備補充費中軍艦製造費ニ屬スル本年度既定年割額三千八百七十七萬三千四百四十三圓ニ對シ追加ヲ要スル金額トス云々

曩ニ明治四十四年度豫算計畫ニ於テ八千二百餘萬圓ヲ既定費額ニ追加シ大正五年度迄ニ竣成スヘキ艦艇製造ノ計畫ヲ定メ今ヤ其實施ノ央ニ在リト雖モ逐年減退スヘキ我海軍威力ノ補充ニ關シテハ自ラ別種ノ計畫ヲ必要トシ政府ハ前年度ニ於テ先ツ其最急ヲ要スル戰艦三隻製造ノ計畫ヲ定メ之ニ要スル總費額九千萬圓中初年度ニ於テ要スル金額六百萬圓ヲ同年度豫算ニ計上シ帝國議會ノ協賛ヲ經テ之カ建造ニ着手シタリ而シテ之カ完成ニ要スル本年度以降ノ費額ハ本年度總豫算ニ計上シ第三十一議會ニ提出セラレタルモ總豫算不成立ノ爲メ遂ニ其成立ヲ見ルニ及ハス而モ帝國國防ノ現狀ニ於テ之カ完成ハ一日モ緩フス可ラサルノ形勢ニ迫レルノミナラス該戰艦ノ工事ハ今日ニ於テ中止スルコト能ハサルノ事情アルヲ以テ工事ノ續行ニ要スル豫算ノ成立ハ到底次期ノ通常議會ヲ俟ツコト

能ハス是レ今回臨時議會ニ向テ本豫算ヲ提出スルノ已ムヲ得サルニ至リタル所以ナリ
右三艦建造費ノ本年度豫定所要額ハ九百五十萬圓ナリシモ豫算不成立ノ結果本年度ノ工
程ニ多少ノ遲延ヲ來シタルノミナラス政府ハ臨時議會ノ性質ニ鑑ミ本年度ノ追加要求額
ハ出來得ル限り之ヲ減少スルヲ相當ト認メタルニ依リ年度内緊急已ム可ラサル目前ノ需
要ニ應スル程度ニ於テ本費ヲ計上スルコトトシ以テ前述ノ金額ニ止メタリ而シテ其餘ノ
金額ニ關シテハ更ニ次期ノ議會ヲ俟テ諸君ノ協賛ヲ求メムトス云々

翌二十四日八代海軍大臣ノ衆議院豫算委員會ニ於ケル 説明要領

既ニ着手セル新建造戦艦三隻アリ其繼續費カ前々議會ニ於テ豫算不成立ト爲リタル爲メ
今日ニ於テハ民間ノ二隻ハ工事ヲ中止セリ此二隻ト海軍工廠ニ於ケル一隻ノ工事ヲ繼續
スルニアラサレハ大正五、六、七年度ノ交ニ至リ帝國海上武力ニ非常ノ缺陷ヲ來スノ虞アリ
且又此處一年全然工事ヲ中止ストセハ將來如何ニ經費ヲ増加スルモ如何ニ職工ヲ増員ス
ルモ此失ハレタル時間ヲ回復スルコト能ハス依テ之ニ必要ナル繼續費中今年度分六百五
十二萬六千圓ヲ請求ス

次テ竹越與三郎ハ我國製艦術ノ歐洲先進國ニ比シテ甚シク遜色アル狀態ヲ述ヘ今後製艦上
ニ於ケル當局者ノ意圖計畫如何ト質問シ八代海軍大臣ハ防務會議ニ於テ調査ノ上明言スヘ
シト答ヘ片桐酉次郎ハ戰艦三隻ノ建造カ國防上ノ大局ニ及ホス影響如何ト質問シ同大臣ハ
左ノ如ク答ヘタリ

海軍當局者、將來ニ希望スル所ハ決シテ三隻ニ止マラス且ツ今日ニ於テ戰艦三隻ノ建造ヲ怠ルニ於テハ大正五、六、七年ニ於テ著シク海軍力ノ薄弱ヲ來タシ國防上大缺陷ヲ生ス云々

六月二十七日貴族院豫算委員會ニ於テ子爵曾我祐準ハ海軍補充費ノ補充ナル意義ニ就テ質問シ八代海軍大臣ハ左ノ如ク答辯セリ

海軍補充費ハ前當局者ノ立タル計畫ヲ踏襲シ補充ト云フ名ヲ以テ要求シタルモノナリ凡ソ海軍武力ハ艦船ニ依リテ定マリ艦船ハ其質ト量トニ依リテ武力定マル此武力ト數トカ年々減退スルヲ以テ補充スルト云フ意味ニ於テ補充ナル文字ヲ用キタルモノナリト思惟ス目下列國ノ狀況ヲ見ルニ「ドレッドノート」型ノ艦船出來シ次テ「超ドレッドノート」型ノ艦船出來シ之ヲシテ戰鬪ノ第一線ニ立タシムヘク各國競テ其建造ニ從事シツツアリ海軍武力ノ根據トスル所ハ戰鬪第一線ニ立テル超「ドレッドノート」型艦船ヲ以テ第一トス而シテ海軍ハ如何ナル程度ニ於テ充實セシメサル可ラサルヤニ就テハ我國國防計畫ノ方針ヲ説明セサル可ラス從來我海軍ノ執リ來リタル方針ハ財政狀態ノ許ササル今日ニ於テハ最少限度ノ國防力ヲ得ルヲ以テ忍ハサル可ラス最少限度ノ國防力トハ他國ヲ侵略スルノ意恩ヲ有セス假想敵ヲ設ケス單ニ護國ノ任ヲ盡シ得ルノ力ヲ云フ

次テ鎌田榮吉ハ左ノ質問ヲ爲セリ

海軍大臣ノ答辯ニ依レハ我海軍ハ假想敵ヲ設ケス侵略主義ヲ執ラスシテ國防ノ爲メニ海

軍ノ補充ヲ必要トスト云ヘルモスノ如ク絕對ノ國防及絕對ノ最少限度ナルモノアリ得ル
 ャ又我帝國ハ環海ノ島國ナルカ故ニ我國ノ貿易ヲ保護スルハ平時ニ於ケル海軍ノ重大任
 務ナリ然ラハ今日外國貿易ノ狀態ニ鑑ミ幾何隻ノ軍艦幾何噸ノ軍艦ヲ以テ完全ニ之ヲ保
 護シ得ルヤ其標準ナクムハ海軍充實ノ計畫モ之ヲ立て得サルニアラスヤ
 之ニ對シ八代海軍大臣ハ左ノ如ク答辯セリ

或國ヲ認メテ之ト戰フ時ニ於テ要スル兵力ヲ定ム此對手國ヲ指シチ假想敵ト云フ軍備ハ
 固トヨリ絕對ニ定マルヘキモノニアラス列國ノ海軍軍備ノ形勢ヲ對照スルハ無論ノコト
 ニシテ列國カ有スル海上武力ノ趨勢、艦船ノ實質及製艦計畫ノ程度ヲ對照シ以テ我海軍力
 護國ノ任ニ堪ヘ得ル最少限度ノ充實ヲ爲ササル可ラス假想敵ヲ設ケストハ斯ル意味ヲ有
 スルモノナリ而シテ貿易ノ狀態ト海軍力ノ比較ニ對スル標準ニ付テハ列國孰レモ一定シ
 タルモノナシ調査ノ上陳述スヘシ

本豫算ハ兩院ノ協賛ヲ得テ六月三十日裁可ヲ經七月一日官報ヲ以テ公布セラレタリ

第二十八節 防務會議規則ノ制定

大正三年六月二十二日勅令第百二十五號(六月二十三日官報ヲ以テ公布)ヲ以テ防務會議規則ヲ
 制定セラレタリ(内閣總理大臣伯爵大隈重信、外務大臣男爵加藤高明、陸軍大臣岡市之助、海軍大臣
 八代六郎、大藏大臣若槻禮次郎副署)其條文左ノ如シ

防務會議規則

- 第一條 防務會議ハ内閣總理大臣ノ監督ニ屬シ陸海軍備ノ施設ニ關シ重要ナル事項ヲ審議ス
- 第二條 陸海軍備ノ施設ニ關シ重要ナル事項ハ主務大臣ヨリ内閣總理大臣ニ具申シ内閣總理大臣ハ先ツ之ヲ防務會議ノ議ニ付ス
- 第三條 防務會議ハ左ニ掲タル者ヲ以テ組織ス
- 一 内閣總理大臣
- 二 外務大臣
- 三 大藏大臣
- 四 陸軍大臣
- 五 海軍大臣
- 六 參謀總長
- 七 海軍軍令部長
- 第四條 内閣總理大臣ハ必要ト認ムル場合ニ於テ重要ナル軍務ニ服スル陸海軍將官ヲ會議ニ出席セシメ説明ヲ爲サシムルコトヲ得
- 第五條 防務會議ハ内閣總理大臣ヲ以テ議長トス
- 議長故障アルトキハ上席ノ國務大臣タル議員其職務ヲ代理ス
- 第六條 議長ハ議事ヲ準備シ會議ヲ開閉シ議事ヲ整理シ其他會務ヲ總管ス

議長ハ會議ノ結果ヲ内閣總理大臣ニ移牒ス

第七條 防務會議ニ幹事長一人幹事二人ヲ置ク

第八條 幹事長ハ内閣書記官長ヲ以テ之ニ充ツ

幹事長ハ議長ノ指揮ヲ承ケ會務ヲ掌理ス

第九條 幹事ハ本職アル陸海軍少將各一人ヲ以テ之ニ充ツ
幹事ハ幹事長ノ命ヲ承ケ會務ニ從事ス

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

六月二十二日開會ノ第三十三回帝國議會ニ於テ爲シタル大隈内閣總理大臣ノ演說及答辯ハ
防務會議規則制定ノ事由ヲ窺フニ足ルヲ以テ左ニ之ヲ抄錄ス

六月二十三日衆議院ニ於ケル大隈内閣總理大臣施政方針演說中ノ一節

國防ハ國家興廢ノ係ル所固トヨリ之カ弛緩ヲ容サス而シテ其施設ハ外交及財政ト調和
ヲ保タサル可ラサルハ言ヲ須キス政府ハ深ク内外ノ情形ヲ察シ調査審究ノ途ヲ設クル
ノ必要ヲ認メ乃チ本日ヲ以テ防務會議規則ヲ制定セリ政府ハ此途ニ依リ適當ナル解決
ノ方法ヲ講スベシ

六月二十七日貴族院豫算委員會ニ於テ男爵久保田讓ノ質問即チ

茲ニ海軍補充費ヲ提出セラレタルハ前議會ニ於テ豫算不成立トナリタル結果ナリ此豫

算不成立ニ至リタルハ貴衆兩院各々意見ヲ異ニシタルヲ以テナリ而シテ貴族院ニ於テ豫算ヲ修正シタル理由ニアリ其一ハ海陸軍ノ軍備權衡宜シキヲ得スト云フニ在リ其二ハ海軍ノ不正事件ニ關シ政府ハ其責任ヲ明ニシ廓清ノ實ヲ舉クヘシト云フニ在リ此二箇ノ原因ノ爲ニ豫算ハ遂ニ不成立ニ終リタリ海軍廓清ノ顛末ニ付テハ既ニ海軍大臣ノ報道アリテ大略了承シタルモ海陸軍ノ權衡問題ニ付テハ何等説明ナシ此點ニ付政府ノ所見如何

ニ
對シ大隈内閣總理大臣ノ答辯

從來國防ノ目的ヲ達スルニ付テハ海陸軍ニ於テモソレソレ意見ノ共通アリタルモ時ノ必要ニ依リ或ハ海軍ニ重キヲ置キ或ハ陸軍ニ重キヲ置カサル可ラサルコトアリシハ免レ能ハサリシ所ナリ固トヨリ國防上偏輕偏重アリト云フニアラサルモ時ノ勢ニ依リテ向後トテモ或ハ其間多少ノ衝突ナキヲ必ス可ラス是レ實ニ今回防務會議ヲ起スノ必要ヲ感シタル所以ナリ爾來内外ノ形勢、經濟ノ狀態及海陸軍ノ必要ニ應シテ計畫其宜シキニ中リ施設其當ヲ得テ十分ナル一致調和ヲ保タムコトハ職ニ防務會議ニ期待スル所ナリ

第二十九節 大正三年ニ於テ臨時軍事費中驅逐艦
製造費ノ設定

(千五十七萬八千九百十圓—大正三年九月乃至四年一
月勅裁濟)

大正三年戰役起ルヤ驅逐艦十隻急造スルノ必要ヲ認メ同年八月二十八日八代海軍大臣ハ臨時
軍事費ノ款臨時軍事費ノ項、驅逐艦製造費ノ目ニ於テ千五十七萬八千九百十圓ヲ計上スルノ件
ヲ若櫻大藏大臣ニ照議セリ該計算書ノ内容ハ左ノ如シ

臨時軍事費計算書(追加)

一時的經費ノ部

項目	金額	記事
臨時軍事費	一〇、五七八、九一〇	
驅逐艦製造費	一〇、五七八、九一〇	驅逐艦十隻製造費一隻ニ付百五萬八千九百十一圓ノ割合

三年九月四日開會ノ第三十四回帝國議會ヘ政府ハ臨時軍事費豫算及臨時軍事費特別會計法(此
會計ハ一般ノ歲入歲出ト區分シ事件ノ終局迄ヲ一會計年度トシテ特別ニ整理ス)ヲ提出シテ孰
レモ其協賛ヲ經九月九日裁可ヲ得同月十日官報ヲ以テ公布セリ

右臨時軍事費審査ニ際シ九月五日衆議院豫算委員會ニ於ケル八代海軍大臣ノ説明ヲ擧クレハ
大要左ノ如シ

海軍ノ臨時軍事費ハ三千八百萬圓ナリ其内一千五十七萬餘圓ハ驅逐艦十隻ノ新造費ナシ(中

略)驅逐艦ヲ此際新造スルコトニ付キ一言説明セントス我帝國ノ驅逐艦ハ現在五十隻ナルモ
其中艦齡十一年以上十七年迄ノモノ十三隻十年ノモノ十二隻九年ノモノ十七隻六年以上八
年迄ノモノ四隻三年乃至五年ノモノ四隻トス驅逐艦ノ艦齡ハ八年ヲ第一期トシ尙八年ヲ第
二期トシ通シテ十六年ナルカ今日ニ於テ既ニ其艦齡滿限即チ十六年カラ十七年迄ノモノ六
隻ナリ又艦齡九年以上ノモノハ大分汽機汽罐モ弱ツテ居ル有様ナリ(中略)此際ニ於テ補充ヲ
爲スコトハ極メテ必要ナルヲ以テ斯ク茲ニ驅逐艦十隻ノ新造ヲ要スル次第ナリ

乃チ驅逐艦製造費ハ臨時軍事費ノ項ニ於テ目トシテ勅裁濟額等ヲ舉クレハ左ノ如シ
ナリ而シテ勅裁濟額等ヲ舉クレハ左ノ如シ

○驅逐艦製造費(款)臨時軍事費(項)臨時軍事費(目)驅逐艦製造費

大正三年九月十九日勅裁濟	三、五二六、三〇〇 <small>円</small>
大正三年十一月二日勅裁濟	四、〇五二、六一〇
大正四年一月二十三日勅裁濟	三、〇〇〇、〇〇〇
計	一〇、五七八、九一〇

(編者註)本文驅逐艦十隻建造費實際支出額九百八十九萬八千五百六十三圓十七錢四厘ナリ

第三十節 大正三年海軍大臣提議、海軍充實ニ關

スル議

(軍備補充費八千五百九十三萬三千二百八十二圓追加)

不成立

大正三年七月十日八代海軍大臣ハ防務會議規則第二條ニ依リ帝國海軍充實ニ關スル議ヲ大限
内閣總理大臣ニ提出セリ其大要ニ曰ク

明治四十年ノ策定ニ基キ第一線艦隊(艦齡八年未満ノ戰艦八隻、巡洋戰艦八隻ヲ以テ最低限ノ
主力トシ之ニ補助部隊トシテ巡洋艦以下各種艦船ヲ附ス)ヲ案畫セルモ財政ノ現狀ニ考ヘ今
俄ニ之ヲ充實スルコト能ハサルヲ以テ漸次之カ完成ヲ期スルコトトシ其階段トシテ戰艦八
隻、巡洋戰艦四隻ヲ主力トシ之ニ伴フ補助部隊トシテ巡洋艦以下各種艦船ヲ附スルコトト致
度云々(第一案及第二案並ニ略ス)

同年十月三日八代海軍大臣ハ防務會議規則第二條ニ依リ概要左ノ如ク海軍充實ニ關スル第二
提議ヲ爲シ此議ハ同月七日防務會議ノ議決ヲ經タリ(左記ハ防務會議ニ於テ修正ヲ施シタルモ
ノヲ揭ク其原議ニ對シテハ大旨ニ於テ變更ナク唯字句ノ修正ニ止マル故ナリ)

一、防務會議ハ曩ニ提出セル軍備充實ニ關スル議ノ主義ヲ是認シ取敢ヘス帝國海軍ノ實力ヲ
失墜セサル爲メ國力ノ許ス限リ別紙艦艇補充方針ノ實行ヲ承認スルコト
二、差當リ要求スル軍備補充費ハ

(一)目下建造中ノ戰艦三隻(二)驅逐艦六隻(三)潛水艇二隻ニ對スル經費トス(年度割等茲ニ略ス)
三、數年ニ亘ル軍備補充計畫ニ關スル經費ノ要求ハ戰亂ノ結果ヲ參照シテ立案スル爲メ一箇

年延期ス

(別紙艦艇補充方針

一、軍艦ノ在籍スヘキ年期ハ之ヲ第一期八年第二期八年第三期八年トシテ通計二十四年トス

ス

驅逐艦水雷艇及潜水艇ノ在籍スヘキ年期ハ之ヲ第一期八年第二期八年通計十六年トス

二、前項ノ年期ハ竣工ヨリ起算ス

三、修理改裝等ニ依リ戦闘力ヲ持続スル艦艇若ハ戦闘其他ノ原因ニ依リ戦闘力ヲ減耗スル
艦艇ハ勅裁ヲ經テ相當ノ年限ヲ伸縮スルコトヲ得

四、艦艇年期第一期ヲ経過スル場合又ハ第一期中戦闘其他ノ原因ニ依リ亡失スル場合ニハ
之ヲ補充ス

五、河用砲艦及特務艦船等ノ補充ハ本方針ニ依ラス必要ニ應シ議會ノ協賛ヲ經テ之ヲ行フ
六、規定ノ通計年期ヲ経過シタル艦艇ハ之ヲ除籍ス

七、本方針ニ據リ補充スヘキ艦艇ノ數ハ左ノ如シ

戰艦巡洋戰艦 十二隻

巡洋艦

(隻數ハ茲)

驅逐艦潛水艇

(隻數ハ茲)

八、本方針實行ニ要スル經費ハ豫算ヲ以テ之ヲ定ム

艦艇補充方針 説明

海軍ノ戰鬪要素ノ一タル艦艇ノ勢力ハ永年不易ニアラス年月ヲ經ルニ從ヒ減退スルカ
故ニ年々新銳ノ艦艇ヲ補足シ常ニ勢力ノ填充ヲ行フコト例ヘハ毎歲壯丁ヲ徵募シテ絶
ヘス軍隊ノ實力ヲ維持スルカ如クナルヲ要ス然ラサレハ自然ノ結果トシテ久シカラス
シテ老廢無力ノ艦艇ノミ殘存シ竟ニハ一隻ノ有力ナル軍艦ヲモ有セサルニ至ランコト
疑ヲ容レス加之製艦ノ技術ハ日ニ月ニ進歩シ一艦一艇ノ攻防力及運動力ハ益々増加ス
ルノ趨勢ナルヲ以テ十年前ニ起工セル最良艦ハ現時ニ於ケル新艦ト對敵スルコト能ハ
ス(例略ス)故ニ第一戰線ニ立ツヘキ主戰艦及之ニ附隨スヘキ艦艇ハ新銳ノ威力アルモノ
ヲ以テ編制スルニアラスンハ他ノ新銳ナル艦隊ト戰フテ輸贏ヲ爭フニ由ナシ是レ艦艇
補充ニ關スル方針ヲ一定シ海軍力ノ維持ヲ安固ナラシムルノ必要アル所以ナリ而シテ
方針制定ノ利點トシテ一般ニ認メラル所ヲ列舉スレハ左ノ如シ

- (イ) 一定ノ標準ニ基キ終始常備ノ勢力ヲ維持シ得ルカ故ニ一時ニ實力ノ大缺陷ヲ來ス
ヘキ憂少ク從テ多數ノ新造ヲ行フカ如キ必要ニ會スルコト少キコト
- (ロ) 造艦政策一定スルカ故ニ各種單位ノ戰鬪素質ヲ均齊ナラシメ以テ戰術上ノ要求ニ
適應セシメ得ルコト
- (ハ) 將卒ノ養成組織ヲ統一シ所要時機ニ充當シ得ルカ如ク豫定調節シ易キコト
- (二) 工廠ノ業務ニ繁閑ナク工場ノ設備並職工ノ員數ヲ一定ナラシムルニ適シ從テ經濟

上ニモ尠カラサル好影響ヲ生スヘキコト

(ホ) 船渠擊船岸其他水陸設備並彈藥其他軍需ノ程度ヲ策定シ遺算ナキヲ期シ得ルコト
依テ此際艦艇補充方針ヲ定メラレ之ニ依テ帝國海軍ノ勢力ヲ維持スルノ要ヲ認ム參照

(略ス)

乃チ大正三年十二月七日開會ノ第三十五回帝國議會ニ提出ノ豫算案ニ左ノ如ク計上セリ

大正四年度海軍省所管豫定經費要求書(抄錄)

軍艦製造費

本費ハ明治四十四年度以降大正五年度ニ亘ル繼續費ナルモ艦艇補充ノ必要上先ツ第一期
計畫トシテ既ニ前々年度ニ於テ追加要求ニ係ル六百萬圓及前年度ニ於テ追加豫算トシテ
成立セル六百五十二萬六千圓トヲ合シテ總額一億四百八萬三千九百二十六圓ヲ追加スル
ノ必要アリ依テ大正四年度以降大正七年度ニ亘ル支出額九千百五十五萬七千九百二十六
圓ヲ既定總額ニ追加シ其本年度年割追加額二千三百三十三萬三千三百十八圓ヲ臨時部第
六款第一項ニ豫算セリ

軍備補充費

右ハ前ニ説明シタル事由ニ依リ軍艦製造費トシテ總額九千百五十五萬七千九百二十六圓
ノ追加ヲ要スルト行政整理ノ結果事業繰延ノ爲メ既定年割額ノ變更ヲ要シ且大正二年度
ニ於テ繰延ニ係ル水陸設備費五十五萬八千七百三十三圓造船造兵及修理費百八十五萬五

千四百十一圓及大正三年度ニ於テ繰延ニ係ル水陸設備費七十三萬五千四百四十八圓造船造兵及修理費二百七十二萬五千七百六十四圓合計五百八十七萬五千三百五十六圓ハ一旦大正三年度ノ不用ニ立ツルカ爲メ將來ノ年度ニ之カ追加ヲ要スルト及軍艦製造費ノ既定額中艦艇製造事業實施ノ結果千百五十萬圓ノ剩餘ヲ生スヘキ見込立チタルカ爲大正四年度年割額ヨリ之カ控除ヲ要スルトニ依リ繼續年限ヲ延長シ本年度以降左ノ區分ニ依リ之

(編者註此說明ニ依リ差引計算スルトキハ結局既定ノ軍備補充費總額ニ對シ八千五百九十三萬三千二百八十二圓ノ追加ト爲ル譯ナリ)

		(目) 勤 加俸		(目) 判任俸給		(目) 奏任俸給	
		既定額	既定額	既定額	既定額	既定額	既定額
		監督諸費	(項) 造修船	(目) 築場費	(目) 作場費	(目) 判任俸給	(目) 奏任俸給
既定額	既定額	既定額	既定額	既定額	既定額	既定額	既定額
改定額	改定額	改定額	改定額	改定額	改定額	改定額	改定額
一九、七三、六五	一九、七三、六五	一〇八、八八	一〇八、八八	一、三九三、三五七	一、三九三、三五九	八、三五〇	八、三五〇
一七九、八、九七九	一七九、八、九七九	八五、八八	八五、八八	一、一五二、一六六	一、一五二、一六六	五、三九五	五、三九五
一七、七六	一七、七六	八一、三六	八一、三六	一、一六九、一四六	一、一六九、一四六	一、一六九、一四六	一、一六九、一四六
		—	—	—	—	—	—

右ニ就キ三年十二月七日衆議院ニ於ケル大隈内閣總理大臣ノ施設方針ニ關スル演説ノ一節國防ノ施設ニ關シテハ政府ハ曩ニ防務會議ヲ設ケ慎重ナル審究ヲ經テ國防充實ノ方針ヲ定メ今期議會ニ提案スルコトト爲セリ

次テ若槻大藏大臣ノ爲セル財政計畫ニ關スル演説ノ一節

國防ノ充實ニ付テハ曩ニ防務會議ノ審究ヲ經テ定メラレタル陸海軍備ノ方針ニ依リ之カ
計畫ヲ立テタリ即チ海軍軍備補充費ニ付テハ大正二年度ノ起工ニ係ル戰艦三隻ノ完成ニ
要スル將來ノ年割額ヲ追加スルノ外帝國海軍ノ現狀ニ於テ緊急已ム可ラサル勢力ノ補充
ニ必要ナル驅逐艦八隻潛水艇二隻ノ建造ニ要スル費額ヲ計上シ又多年ノ懸案タル增師問
題ニ付テハ朝鮮ニ二箇師團ヲ常設スルノ計畫ヲ定メ本年度ヨリ之カ實行ニ着手スルコト
トシ以テ國防ノ充實ヲ期セリ

然ルニ衆議院ニ於テ豫算案審議ノ結果海軍軍備補充費ノ追加ハ可決ヲ見タルモ二箇師團增設費等否決ノ爲メ遂ニ十二月二十五日衆議院解散セラレ本豫算案ハ不成立ニ歸セリ

第三十一節 大正四年度ニ於テ軍備補充費繼續費

九千三百九十四萬六千九百十四圓追

加

(成立)

大正四年五月二十日臨時開會ノ第三十六回帝國議會ニ提出ノ豫算案ニ左ノ如ク計上セリ

大正四年度海軍省所管豫定經費追加要求書(抄錄)

軍艦製造費

本費ハ明治四十四年度以降大正五年度ニ亘ル繼續費ナルモ艦艇補充ノ必要上第一期計畫トシテ總額一億四百八萬三千九百二十六圓追加ヲ要シ其内既ニ前々年度ニ於テ追加要求ニ係ル六百萬圓前年度ニ於テ追加豫算トシテ成立セル六百五十二萬六千圓及既定豫算ノ剩餘額ノ以テ流用支出シタル百二十萬圓ヲ除キ殘額九千三十五萬七千九百二十六圓ヲ新ニ追加スルノ必要アリ然ルニ既定豫算額中工事實施ノ結果前記流用額ヲ除キ大正四年度ニ於テ尙千三十萬圓ノ剩餘ヲ生スル見込ナルニヨリ之ヲ充用スルコトトシ差引入八千五萬七千九百二十六圓ヲ既定總額ニ追加シ大正四年度以降大正七年度ニ亘リ支出セントス依テ本年度追加年割額千百八十三萬三千三百十八圓ヲ臨時部第六款第一項ニ豫算セリ

軍備補充費

右ハ前顯ノ事由ニ依リ軍艦製造費トシテ總額九千三十五萬七千九百二十六圓ノ追加ヲ要スルト行政整理ノ結果事業繰延ノ爲既定年割額ノ變更ヲ要シ且大正二年ヨリ大正四年度迄ニ於テ繰延ニ係ル水陸設備費四百八十一萬七千百十一圓造船造兵及修理費九百七萬千八百七十七圓合計千三百八十八萬八千九百八十八圓ハ一旦大正四年度ニ於テ不用ニ立ツルカ爲將來ノ年度ニ之カ追加ヲ要スルト及軍艦製造費ノ既定額中艦艇製造事業實施ノ結果千三十萬圓ノ剩餘ヲ生スヘキ見込立チタルカ爲メ大正四年度年割額ヨリ之カ控除ヲ要スルトニ依リ繼續年限ヲ延長シ本年度以降左ノ區分ニ依リ之カ支出ヲ要ス

(編者註、此説明ニ依リ差引計算スルトキハ結局既定ノ軍備補充費總額ニ九千三百九十四萬六千九百十四圓ノ追加トナル譯ナリ)

(項) 軍艦製造費	(款) 軍備補充費			既定額	區別	科日
	追加	既定額	不用減額			
追加	既定額	追加額	繰延增加額	既定額	區別	科日
追加	既定額	追加額	繰延增加額	既定額	區別	科日
九〇、五七、九三六	一七、八三四、四一七	一〇、三〇〇、〇〇〇	一七、八三七、八〇九	二〇四、四八二、五四四	二〇四、四八二、五四四	二〇四、四八二、五四四
一	一	一	一	一	一	一
三、一七七、三一八	八、六六三、六〇八	一〇、三〇〇、〇〇〇	五〇〇、〇〇〇	三三、三五八、七六七	三三、三五八、七六七	三三、三五八、七六七
三六、〇四八、四八九	五、八一五、六四一	一	一	二一、八四四、三五五	二一、八四四、三五五	二一、八四四、三五五
六、三六〇、四七八	一	一	一	五、四八三、八五七	五、四八三、八五七	五、四八三、八五七
七、四四三、二一六	九、三〇〇	一	一	六、三六〇、四七六	六、三六〇、四七六	六、三六〇、四七六
三五八、一五、四二一	九六三、〇〇〇	一	一	三六、〇四八、四八九	三六、〇四八、四八九	三六、〇四八、四八九
九、八三六、五一〇	一	一	一	一	一	一
四六、八八〇、五四七	一	一	一	一	一	一
二〇四、四八二、五四四	一	一	一	一	一	一
三三、一三三、三一八	一	一	一	一	一	一
五六、七二三、八六五	一	一	一	一	一	一
三六、〇四八、四八九	一	一	一	一	一	一
四六、八四七、〇〇〇	一	一	一	一	一	一
五六、八一五、五四一	一	一	一	一	一	一
七、四四三、二一六	一	一	一	一	一	一
九六三、〇〇〇	一	一	一	一	一	一
一〇、三〇〇、〇〇〇	一	一	一	一	一	一
一七、八三七、八〇九	一	一	一	一	一	一
一七、八三四、四一七	一	一	一	一	一	一
九〇、五七、九三六	一	一	一	一	一	一

(目) 場 費	改 定 額	五〇、六四	—	—	三六、四〇	一五〇、四五
(目) 築 費	改 定 額	四〇、七三	一九、四五、三四	八、四八、九〇	四、七六、一九〇五	四、七三、二一五
(項) 造 船 及 修 船 費	既 定 額	五、四九、二四	九、〇七一、七八	九、九六、九〇九	—	—
(目) 監 督 諸 費	既 定 額	五、五五、四七	—	—	—	—
(目) 造船及修理費	既 定 額	九、六九、〇〇九	五、三九、五五	五、〇五、二六	二、五〇、五〇〇	一、八〇九、〇七六
(目) 造船及修理費	改 定 額	一〇、八一八	八、五、八一八	三、三〇〇〇	一、五〇〇	一、八九〇
(目) 造船及修理費	既 定 額	一〇、七七三、〇八五	一、七九、八、九七九	一、七九、一、七六	一、五〇〇	一、八九〇
(目) 造船及修理費	改 定 額	一、一〇、四〇八	一、七九、八、九七九	一、七九、一、七六	一、五〇〇	一、八九〇
(目) 造船及修理費	既 定 額	三一、八九三、四九三	一、七九、一、七六	一、七九、一、七六	一、五〇〇	一、八九〇
(目) 造船及修理費	改 定 額	四、一五四、八一〇	五、三五、六七四	八、一七四、三二	一、一〇、七四六	一、一〇、七四六
(目) 造船及修理費	既 定 額	三四、六一三、三四一	八、一七四、三二	一、〇八八、四六	一、四四〇、六三六	一、四九七、五〇〇
(目) 造船及修理費	改 定 額	六、九四一、四六九	—	—	二、〇九一、七六九	二、四九七、五〇〇

備考

一 水陸設備費、造船造兵及修理費大正四年度年割額ハ既定額ヲ計上セルモ水陸設備費ニ
於テ三百五十二萬二千九百三十圓造船造兵及修理費ニ於テ四百四十九萬七百二圓合
計八百一萬三千六百三十二圓ハ行政整理ノ結果後年度ニ繰延フヘキヲ以テ差引軍備
補充費本年度實行豫算額ハ五千七十萬二百三十三圓ナリトス

二、本表ハ大正五年度以降新科目ニ據ル

而シテ八代海軍大臣ノ貴衆兩院豫算委員分科會ニ於ケル説明ニハ此追加ハ戰艦三隻ノ繼續費及驅逐艦大型四隻中型四隻潛水艇二隻ノ新造費トシテ要求セルモノナルヲ舉示セリ
右豫算案ハ同議會ノ協賛ヲ經大正四年六月十九日裁可セラレ同月二十一日官報ヲ以テ公布セラレタリ其繼續費ノ部ヲ抄錄スレハ左ノ如シ

軍備補充費

金四億四千六百八十三萬五千十六圓十四錢	既定總額
---------------------	------

金九千三百九十四萬六千九百十四圓	追加額
------------------	-----

計金五億四千七十八萬千九百三十圓十四錢	
---------------------	--

内

金三億九千十一萬七千九百五十九圓十四錢	大正三年度迄支出額
---------------------	-----------

金一億五千六十六萬三千九百七十一圓	大正四年度以降支出額
-------------------	------------

此改定年額左ノ如シ

(大正四年度ヨリ同七年度ニ至ル款項別年額ハ前掲議會提出ノ年割改定額ニ同シ
キヲ以テ茲ニ略ス)

第三十二節 大正四年海軍大臣提議、海軍軍備補充

二、關スル議

(軍備補充費三億六千四百二十九萬千七百四十四圓追
加案—大正五年度ニ於テ四千三百二十三萬八百九
九圓追加成立—其他ハ大正六年度ヨリ實行ノコトト
ス)

大正四年九月十日海軍大臣加藤友三郎ハ防務會議規則第二條ニ依リ海軍軍備補充ニ關スル議
ヲ内閣總理大臣伯爵大隈重信ニ提出セリ此議ハ大正三年十月七日ノ防務會議決定事故第三(第
三十節ニ載ス)ノ旨趣ニ基キ立案セルモノニシテ其計畫内容ノ梗概ヲ舉クレハ左ノ如シ

大正五年度以降同十二年度ニ亘ル八箇年度繼續費トシテ三億六千四百二十九萬千七百四十
四圓ヲ既定ノ軍備補充費ノ款、軍艦製造費ノ項ニ追加シテ軍備補充費ノ年度割ヲ更定シ以テ
八四艦隊ノ完成ヲ期スルト同時ニ該艦隊ノ補充ハ曩ニ防務會議ニ於テ承認セル艦艇補充方
針(第三十節ニ載ス)ニ依リテ實行ヲ進ムルノ計畫ナリ而シテ其艦艇ハ

戰
艦

大正四年度竣工豫定	一隻
大正六年度竣工豫定	二隻
大正七年度竣工豫定	一隻
大正五年度起工八年度竣工豫定	一隻
大正六年度起工九年度竣工豫定	一隻

既定計畫

計
八隻

大正七年度起工十年度竣工豫定 一隻

大正九年度起工十二年度竣工豫定 一隻

大正十年度起工

一隻

大正十一年度起工

一隻

大正十二年度起工

一隻

巡洋戰艦

現在(第一期ノモノ)

四隻

右ノ内一隻ハ大正十年度、一隻ハ大正十一年度ニ於テ孰レモ第二期ニ入ル故ニ其期迄ニ二隻ノ補充ヲ要スルモ經費ノ都合ニ依リ

大正七年度起工十年度竣工豫定 一隻

計補充
二隻

大正九年度起工十二年度竣工豫定 一隻

補充着手
一隻

大正十一年度起工

一隻 補充着手
一隻

巡洋艦

(隻數ハ茲ニ略ス)

驅逐艦

(隻數ハ茲ニ略ス)

潛水艇

(隻數ハ茲ニ略ス)

特務艦船

(隻數ハ茲ニ略ス)

右海軍大臣ノ提議ニ對シ防務會議ハ大正四年九月十三日左ノ決議ヲ爲セリ

一、目下ノ情態ニ鑑ミ差當リ左記艦艇ノ製造ヲ實行スルコト

戰 艇 三萬二千噸 一 隻

大正五年度乃至八年度間ニ完成スルコト

巡 洋 艇 三千五百噸 二 隻

大正五年度乃至七年度間ニ完成スルコト

大型驅逐艦 千二百二十二噸 一 隻

大正五年度及六年度ニ完成スルコト

潛 水 艇 七百噸 三 隻

大正五年度及六年度ニ完成スルコト

特 務 艇 一 隻

大正五年度乃至七年度間ニ完成スルコト

二、其他ノ艦艇ノ製造ハ別表ノ計畫ニ準據シ大正六年度ヨリ之ヲ實行スルコト

(別表トハ海軍大臣提議ノ計畫ヲ指スモノニシテ其梗概ハ前述セルカ如シ、編者註)

乃チ大正五年度豫算案ニ於テ右防務會議ノ決議ニ基ク艦艇補充ノ爲メ軍艦製造費四千五百三十二萬七千八百十九圓ヲ既定軍備補充費ニ追加計上シ(既定豫算額中不用減額及繰延増減額ヲ差引シ實際ノ追加額四千三百二十三萬八百九十九圓)大正四年十二月開會ノ第三十七回帝國議會ニ提出セリ其大要左ノ如シ

大正五年度海軍省所管豫定經費要求書(抄錄)

軍艦製造費

本費ハ明治四十四年度以降大正七年度ニ亘ル繼續費ナルモ艦艇補充ノ必要上財政ノ狀況ニ鑑ミ差當リ總額四千五百三十二萬七千八百十九圓ノ追加ヲ要スルモ既定豫算額ニ於テ工事實施上剩餘ヲ生スル見込額二百九十七萬二千圓ヲ控除シ差引四千二百三十五萬五千八百十九圓ヲ既定總額ニ追加シ大正五年度以降大正八年度ニ亘リ支出セントス依テ本年度追加年割額四百九十一萬三千四百六十八圓ヲ臨時部第六款第一項ニ豫算セリ

軍備補充費

右ハ前ニ説明シタル事由ニ依リ軍艦製造費ニ於テ總額四千五百三十二萬七千八百十九圓ノ追加ヲ要スルモ既定額中工事實施ノ結果二百九十七萬二千圓ノ剩餘ヲ生スヘキ見込ナルニ依リ差引四千二百三十五萬五千八百十九圓ノ追加ヲ要スルト水陸設備費及造船造兵及修理費ニ於テ財政上ノ都合ニ依リ事業ノ繰延ヲナスト大正四年度ニ於テ實行豫算節約ノ爲事業繰延ニ係ル水陸設備費三十七萬八千八十圓造船造兵及修理費四十九萬七千圓合計八十七萬五千八十圓ヲ一旦大正四年度ノ不用ニ立ツルカ爲メ將來ノ年度ニ之カ追加ヲ要スルトニ依リ繼續年限ヲ延長シ本年度以降左ノ區分ニ依リ之カ支出ヲ要ス

一九四

四年十二月七日衆議院ニ於ケル大隈内閣總理大臣ノ施政方針ニ關スル演説ノ一節
軍艦補充ノ計畫ハ目下ノ狀勢ニ於テ一日モ緩フス可ラサルヲ以テ政府ハ防務會議ノ審議
ヲ經テ財政經濟トノ調和ヲ圖リ必要ナル計畫ヲ定メ之ヲ豫算ニ編入セリ云々

海軍軍備補充費ニ於テ本年度以降四箇年度間ニ總額四千五百三十二萬七千八百十九圓ヲ追加スルノ計畫ヲ定メ其中本年度ニ於テ要スル所ノ金額五百八十八萬五千四百六十八圓ヲ既定ノ年割額ニ追加スルコトニナリ居レリ云々

同日同院ニ於テ關直彦ノ質問ニ對シ加藤海軍大臣ハ左ノ如ク答辯セリ

質問ノ要領ハ第一ハ從來國防方針トジテ所謂八八艦隊ナルモノヲ聲明セラレタルカ是レカ八四艦隊トナリ又昨年ノ豫算ニ於テハ誠ニ僅少ナルモノヲ計上シアリテ方針カ決定シテ居ラサル様ニ見ユルカ如何第二ハ歐洲ノ海戰ニテモアリシナラハ艦型其他ニ變更ヲ來スナラン故ニ此處一年カ又ハ暫ク待テ計畫ヲ立ツルコトシテハ如何以上ノ二點ニアリシト聽取セリ

第一ニ對シテハ明治三十九年乃至四十年頃八八艦隊ト云フモノヲ以テ國防ノ方針トスルニ決定セラレタル以來歴代ノ大臣ハ之ヲ變更セルコトナシ予ニ至リテモ亦變更セス將來ニ於テモ變更セントスルノ意思ナシ唯之レカ實行方法ニ至リテハ財政ニ至大ノ關係ヲ有スルヲ以テ直ニ茲ニ八八艦隊ノ全部ヲ完成スルト云フ形式ニ於テ諸君ノ協賛ヲ求ムルノ手續ヲ取り得サルハ當局トシテ誠ニ遺憾ニ念フ次第ナリ故ニ直ニ之ヲ實行セスト云フノ故ヲ以テ方針カ確定セスト云フノ解釋ハ之ヲ取ラス則チトコマテモ八八艦隊ヲ完成スルコトニ將來ニ向テ努力スル決心ナリ第二ニ對シテハ當局トシテハ假令歐洲ニ大海戰アリトスルモソレカ爲メ艦型ニ非常ナル變更ヲ來スヘシトハ豫想セス假リニ多少ノ變更カア

リトスルモ茲ニ要求スル豫算ノ範圍内ニ於テ爲シ得ヘシト信ス、且ツヤ今日迄御承知ノ如ク此補充ノ問題ハ種々ナル蹉跌ニ遭遇シテ特ニ不十分ヲ感シツツアルヲ以テ一日モ早ク進捗ヲ切望スルモノナリ此意味ニ於テ延期ノ必要ヲ認メサル次第ナリ云々

又同日貴族院ニ於テ男爵目賀田種太郎ノ質問ニ對シ加藤海軍大臣ハ左ノ如ク答辯セリ

海軍ノ國防方針ハ三十九年ヨリ翌四十年ニ掛ケ先帝陛下ノ御時代ニ於テ元帥府ノ諮詢ヲ經テ決定セラレタルカ今日尙其方針ヲ確守ス其方針ハ最新式ノ戰艦八隻巡洋戰艦八隻ヲ主力トシ之ニ相應スル補助艦艇ヲ附スルモノナリ（中略）之ハ世間ニテ俗ニ申ス八八艦隊ナリ之ヲ八四艦隊ニ變更セルヤノ質問ニ對シテハ其方針ハ少シモ變更セス依然八八艦隊ヲ完成センコトヲ努ム併シナカラ之レカ實行方法トシテハ直チニ八八艦隊ノ豫算ヲ計上シテ諸君ノ協賛ヲ求ムルト云フ次第ニハ參リ兼ヌルハ甚タ遺憾ナレトモ是レ財政上已ムヲ得サルニ出ツ故ニ來年度以降ノ豫算ハ金額及艦數モ僅少ナルモ是レ八八艦隊ニ進ムノ前提ニシテ方針ニハ少シモ變更アラサルナリ又補助艦カ少ナイト云フ質問アルモ當局トシテハ唯今計畫シテ居ルモノハ戰鬪ヲ爲スニ差支ナキ程度即チ戰術上ノ見地ヨリ割出シタルモノニシテ之ヲ以テ少ナイト云フ感ハ懷イテ居ラヌ勿論補助艦多ケレハ多イ程戰時ニ於テモ亦平時ノ任務ヲ果ス上ニ於テモ便利ナレトモ之ハ程度ノ問題ニシテ絕對的ノモノニアラス又三十九年ニハ六十萬噸ヲ以テ方針トセリト云フカ如キ質問ノ様聽取セシカ噸數ヲ以テ計畫ヲ立テタルコトナシ新聞紙ナトニテハ海軍ハ五十萬噸ヲ以テ方針トスト云

フカ如キコトヲ耳ニセルモ海軍當局トシテ斯ク言ヘルコトナシ尤モ三十九年ニ計畫ヲ立
タル八八艦隊ノ其第一期ニ屬スルモノノ噸數ヲ合スレハ殆ント五十萬噸トナルヲ以テ
多分是等ヨリ誤傳セルモノナルヘシ而シテ此國防方針ノ八八艦隊ナルモノモ一期二期三
期ト云フカ如ク區分スルヲ以テ之ヲ合スレハ五十萬噸ヤ六十萬噸ニハアラス殊ニ艦ハ年
年噸數ニ増減ヲ來タスヲ以テ到底噸數ヲ以テ方針ヲ決定スルコト能ハサルナリ又最高顧
問ノ諮詢ヲ經ルヤ否ヤノ點ニ對シテハ既ニ方針ヲ變更セサルニ付此諮詢ヲ經ルノ必要ハ
之ヲ認メサル次第ナリ云々

(編者註) 噸數ヲ以テ國防計畫ノ標準トスルヤ否ヤノ問題ニ關シテハ大正六年七月十日貴
族院豫算委員第四分科會ニ於テ小野田元熙ノ質問ニ對シ加藤海軍大臣ハ樺山大將ノ海
軍大臣時代ニ噸數十二萬噸トカラ以テ議會ニ説明セラレタルコトアリシト聞キタルモ
是ハニタ昔モ三昔モ前ノコトニテソレ以外ニハ海軍當局ハ噸數ヲ以テ國防計畫ノ方針

ヲ述ヘタルコトナシト考ヘマスト答辯セリ

右ハ第三十七回帝國議會ノ協賛ヲ經大正五年二月二十四日裁可公布セラレタリ

海軍省所管繼續費(抄錄)

軍備補充費

金五億四千七十八萬千九百三十圓十四錢

既定總額

金四千三百二十三萬八百九十九圓

追加額

計金五億八千四百一萬二千八百二十九圓十四錢

内

金四億四千八百八十三萬千八百二十四圓十四錢

大正四年度迄支出額

金一億三千五百十八萬千五圓

大正五年度以降支出額

此改定年額左ノ如シ

大正五年度ヨリ八年度ニ至ル改定年割額

(前掲議會提出豫算額ニ同シキヲ以テ略ス)

第三十三節 大正六年度豫算案ニ於テ軍備補充費

繼續費二億六千六十四萬千七百九十

三圓追加

(不成立)

加藤海軍大臣ハ大正四年九月十三日ノ防務會議決議第二第三十二節ニ載スノ旨趣ニ基キ海軍軍備補充ノ實行豫算(軍備補充費既定總額ニ二億六千六十四萬千七百九十三圓ヲ追加シ大正六年度以降十二年度迄ノ繼續費トス)ヲ大正六年度豫算案ニ計上シ閣議ヲ經テ大正五年十二月二十七日開會ノ第三十八回帝國議會ヘ提出セリ其要領左ノ如シ

大正六年度海軍省所管豫定經費要求書(抄錄)

軍艦製造費

本費ハ明治四十四年度以降大正八年度ニ亘ル繼續費ナルモ艦艇補充ノ必要上總額二億六千六十四萬千七百九十三圓ヲ既定總額ニ追加シ大正六年度以降大正十二年度ニ亘リ支出セントス依テ本年度追加割額千四百三十二萬九千二百八圓ヲ臨時部第六款第一項ニ豫算

セ
リ

乙、繼續費

左ニ掲タル費途ニ付テハ本年度以降既定年割額ヲ改定スルヲ要ス

右ハ前ニ説明シタル事由ニ依リ軍艦製造費ニ於テ總額二億六千六十四萬千七百九十三圓ノ追加ヲ要スルト水陸設備費ニ於テ財政上ノ都合ニ依リ事業ノ繰延ヲ爲ストニ依リ繼續年限ヲ延長シ本年度以降左ノ區分ニ依リ之カ支出ヲ要ス

費補軍備充備		款項目	區別	總費額	要求年度迄
既定額	既定額	既定額	既定額	既定額	既定額
二三、四〇、一三	三三、四七、九四	三三、四六、八六	三三、四五、零五	三三、四五、零五	五年度迄
三三、四五、三三	三三、四七、八六	三三、四六、八六	三三、四五、零五	三三、四五、零五	六年度迄
三三、四五、三五	三三、四七、八六	三三、四六、八六	三三、四五、零五	三三、四五、零五	七年度迄
六、九、一、三九	一〇、七六、七三	五、八、一〇、六六	五、八、一〇、六六	五、八、一〇、六六	八年度迄
—	—	五、一〇、四〇	五、一〇、四〇	五、一〇、四〇	九年度迄
—	—	四、九、三、八九	四、九、三、八九	四、九、三、八九	十年度迄
—	—	三四、九、零	三四、九、零	三四、九、零	十一年度迄

右ニ就キ六年一月二十三日衆議院ニ於ケル内閣總理大臣伯爵寺内正毅ノ施政方針ニ關スル演説ノ一節

國家ノ實力ニ顧ミテ軍備ヲ充實セサル可ラス云々

次テ大藏大臣勝田主計ノ爲シタル財政計畫ニ關スル演説ノ一節

海軍軍備補充費ニ於テハ本年度以降七箇年度間ニ亘リ總額二億六千六十四萬千七百九十三圓ヲ追加スルノ計畫ヲ定メ其本年度ニ於テ要スル所ノ金額千四百三十二萬九千二百八圓トス(中略)現内閣ハ客年十月ヲ以テ成立ヲ見其時既ニ大正六年度概算決定ノ後ナリシヲ以テ國家政務ノ各方面ニ涉リ調査研究ヲ遂ケテ諸般ノ計畫ヲ定ムルノ時日ナカリシ故ニ二三必要ナル改正ヲ加ヘタル外ハ大體ニ於テ前内閣ノ決定ニ基キテ大正六年度ノ豫算ヲ編成セリ(中略)海軍軍備補充費ノ追加ニ付テハ既ニ前年度ニ於テ其經費ノ一部ヲ要求セルカ大正六年度ニ於テハ其全部計畫ニ付テ要スル所ノ金額ヲ要求スルヲ相當ト認メ前ニ述ヘタル如ク大正六年度以降同十二年度迄ノ繼續費トシテ二億六千餘萬圓ヲ計上セルナリ云々

然ルニ同月二十五日衆議院ニ於テ内閣不信任案討議中同院ハ解散セラレタル爲メ本豫算案ハ遂ニ不成立ニ歸セリ

第三十四節 大正六年度豫算追加案ニ於テ軍備補充費繼續費二億六千百五十二萬千百

六十圓追加

(所謂八四艦隊完成案—成立)

加藤海軍大臣ハ前回議會ニ提出セルト同一ノ計畫ニ依リ艦艇補充ニ要スル經費ハ大正六年度追加豫算案ニ計上シ閣議ヲ經テ同年六月二十三日臨時開會ノ第三十九回帝國議會ニ提出セリ
大正六年度海軍省所管豫定經費追加要求書(抄錄)

軍艦製造費

本費ハ明治四十四年度以降大正八年度ニ亘ル繼續費ナルモ艦艇補充ノ必要上總額二億六千百五十二萬千百六十圓ヲ既定總額ニ追加シ大正六年度以降大正十二年度ニ亘リ支出セントス依テ本年度追加年割額千五百二十萬八千五百七十五圓ヲ臨時部第六款ニ豫算セリ

乙、繼續費

左ニ掲タル費用ニ付テハ本年度以降既定年割額ヲ改定スルヲ要ス

一、軍備補充費

右ハ前ニ説明シタル事由ニ依リ軍艦製造費ニ於テ總額二億六千百五十二萬千百六十圓ノ追加ヲ要スルト水陸設備費ニ於テ財政上ノ都合ニ依リ事業ノ繰延ヲ爲ストニ依リ繼續年限ヲ延長シ本年度以降左ノ區分ニ依リ之カ支出ヲ要ス

								費補軍充備		款項	
								費製軍造艦		目區別	
諸監費督		俸判給任		俸奏給任						總費額	
既定額	改追加額	既定額	要求年度迄								
額	額	額	額	額	額	額	額	額	額	額	五年度迄
一萬六千六百六	三萬二千五百	一萬六千六百六	六年度								
五十六年八月	三十六年五月	五十六年八月	七年度								
一九四〇年六月	一九四〇年三月	一九四〇年六月	八年度								
一九四一年六月	一九四一年三月	一九四一年六月	九年度								
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	十年度
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	十一年度
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	十二年度

△印ハ減

△印八減

修理費及 造船費		修理費及 造船費		監督費		改定額		四〇、五九〇六		三、五三、九九	
既定額	既定額	既定額	既定額	既定額	既定額	四二、五〇一、八〇	二六、八六	六四、〇七、一三	五八、三三、九九	二、四四、二六	一、八六、四四
三、五三、四三	三、五三、四三	三、五三、四三	三、五三、四三	三、五三、四三	三、五三、四三	一、五、二五、八四	一、三、三六	二、五〇	二、五〇	一、五、二〇、九三	一、四〇、六六、九三
五〇、〇〇	五〇、〇〇	五〇、〇〇	五〇、〇〇	五〇、〇〇	五〇、〇〇	一、九、〇〇、空六	一、五、〇〇	一	一	一	一
二、五七、五〇	二、五七、五〇	二、五七、五〇	二、五七、五〇	二、五七、五〇	二、五七、五〇	六六、五〇	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

右ニ就キ大正六年六月二十六日衆議院ニ於ケル寺内内閣總理大臣ノ施政方針ニ關スル演説
ノ一節

前議會ニ提出セル大正六年度總豫算ハ不幸ニシテ其成立ヲ見ルニ至ラス故ニ政府ハ前年
度豫算ヲ施行スル爲メニ實行豫算ヲ編成セリ、而シテ既定ノ政策ニ關スルモノ又ハ時局其
他ノ關係上一日ヲ緩フスルコト能ハサル所ノ各種施設ノ費目ハ追加豫算トシテ諸般法律
案ト共ニ當議會ニ提出セリ是等皆國家緊切ノ要務ニシテ遷延ヲ許ササルモノナルヲ以テ
(中略)特ニ時局ニ鑑ミテ審議協賛ヲ與ヘラレンコトヲ望ム云々

次テ同日同院ニ於ケル勝田大藏大臣ノ財政計畫ニ關スル演説ノ一節

軍艦製造費ハ其總額ニ於テ二億六千五百五十二萬餘圓ニシテ之ヲ大正六年度以降七箇年度
間ノ繼續支出トシテ追加豫算ニ計上セリ其大正六年度ノ分千五百萬圓ナリ此計畫ニ依リ
所謂海軍軍備補充上八四艦隊ナルモノノ編成ノ基礎ヲ完フルコトヲ得ヘシ云々

大正六年七月十日貴族院豫算委員第四分科會ニ於ケル加藤海軍大臣ノ説明

臨時部ニ屬スル大ナルモノハ軍備補充費ノ軍艦製造費大正六年度年割額千五百二十餘萬圓ナリ、又臨時艦艇修理費カ百五十萬餘圓ナリ此臨時艦艇修理費ト云フ名稱ノ下ニ費用ヲ要求スルハ近年ニ於テハ今回カ初メテナリ是レマテハ此費用ハ軍備補充費中ニ造船修理費ノ名目ノ下ニ要求シテアリマスノヲ今度ハ軍備補充費ヨリ引離シテ特ニ茲ニ計上スルコトトセリ云々(中略)

軍備補充費ノ大正六年度年割額千五百二十餘萬圓ハ十二年度迄ノ繼續費追加額二億六千餘萬圓ノ内ナリ而シテ繼續的豫算ハ前回議會へ提出ノモノト同シ、唯大正六年度ノ年割額一千五百餘萬圓カ前回ノ分ヨリ聊カ數字ニ於テ多クナリ居レリ、前回ニハ千四百何萬圓トナリ居リシカソレニ今回ハ八十七萬餘圓増加シアリ、是ハ前年英國會社ヘ二隻ノ驅逐艦ヲ註文シテ既ニ其内一隻ハ一昨年竣工シ本邦ヘ回航濟ナルモ殘ノ一隻ハ竣工前ニ戰爭カ勃發シタル爲メ此我カ驅逐艦ヲ註文シアル會社ヘ英國政府ヨリ註文スル驅逐艦ノ數カ俄カニ增加シタル結果我註文ノ驅逐艦ノ竣工ニ盡スノ餘力カ減スル様ニナリ度々督促ヲナセルモ急ニ竣工ノ見込立タサリシ故已ムヲ得ス昨年協議ノ上殘一隻ノ契約ヲ解キ其時迄ニ會社ヘ仕拂ヒタル金額ハ之ヲ拂戻サセ之レカ代艦ハ内地ニ於テ建造スルコトニ決定セリ、然ルニ此會社ヨリ拂戻シタル金ハ國庫ニ這入ル次第ナルヲ以テソレ丈ヶ又協賛ヲ經ネハナラヌ故此年割額カ八十何萬圓増加セル譯ナリ云々

右分科會ニ先チ同年七月八日貴族院豫算委員會ニ於ケル問答

○男爵本多政以問、國防上ノ事ニ付キマシテ政府ノ御方針ヲ一應伺ヒタイト思フノテアリ
マス、國防ハ常ニ充實サセテ置カナケレハナラヌト云フノハ無論侵略ノ意味テハアリマセ
ヌカ、國家ノ存立ヲ安固ニスル、確實ニスル上ヨリ見テモ、國利民福ヲ增進スル上ヨリ見テモ、
是非必要已ムヲ得ヌノテアリマス、政府ニ於テモ夙ニ其邊ニ御考ノアルコトニアツテ、數年
前ヨリ國防計畫ヲ御樹テニナツテ、著々其設備カ出來テ居リマス、歐洲ノ戰爭以來軍器等ノ
關係ヨリシテ、非常ニ變動ヲ來シタト云フコトテアリマス、ソレニモ拘ラス從來御計畫ノ通
リ御進行ニナツテ、ソレテ御安心カ出來ルモノテコサイマスカ、其邊ヲ伺ヒタイト思ヒマス、
又次ニハ先般新聞紙テ見マシタ所ノ海軍ノコトテコサイマスカ、戰艦等ノ上ヨリ日露戰爭
ノ當時ヨリ戰鬪力カ餘程弱ツテキルト云フコトカアリマシタ、果シテサウ云フコトニアレ
ハ非常ナル是ハ寒心スヘキコトニアリマス、其邊ニ付テハ當局ノ方々ニ
於テハ如何様ニ御考ニナリマスカ

○國務大臣加藤友三郎答、國防問題ニ付キマシテ、私ノ主管ニ關スルコトニ付キマシテ御答
致シマス、御說ノ通り今回ノ歐洲戰亂ノ結果、我國防上ノ計畫ヲ樹テマスル上ニ於キマシテ
種々ナル參考トナルヘキ事カアルト云フ事ハ事實テコサイマシテ、此點ニツキマシテハ吾
々當局モ種々研究ヲ致シテ居ルノテコサイマス、併ナカラ先年先帝陛下ニヨリマシテ定メ
ラレマシタ所謂八八艦隊ナル根本方針ニ於ケル主力ト云フモノヲ變更致シテ、例ヘハ八八

艦隊ヲ二隊造ル、或ハ八四艦隊ヲ二隊造ルト云フカ如キ此主力ノ變更ト云フ事ニ付キマシテハ、今日ハ考ヲ有ツテ居リマセヌノテ、主力ナルモノハ即チ國防方針トシテノ八八艦隊ハ既定ノ方針テ差支ヘナイト云フ考ヲ有ツテ居ルノテアリマス、併シナカラ此主力ナルモノハ、補助艦艇カ多々要ルノテアリマス、今日多ク吾々カ研究致シマス問題ハ主トシテ補助艦艇ニ屬スル問題テコサイマス、御承知ノ如ク、今回提出イタシテオキマシタトヨロノ八八艦隊多年我々ノ努力致シマシテ、漸ク數年後ノ今日ニ提出致スト云フ狀態ニアリマスル所ノ八四艦隊ハ將ニ御協賛ヲ經ントシテキル狀態テコサイマス、之ヲ實際問題トシマシテ、八八艦隊ナルモノニ増加スルト云フコトハ、是ハ容易ナ問題テコサイマセヌト思ヒマス、勿論艦隊ナルモノハ多々益々辨スルモノテアリマス、併シナカラ前申シマスル通りニ、此主力ト云フモノニ付キマシテハ、我々當局ト致シマシテハ、所謂八八艦隊ヲ以テ暫ク責任ヲ果シタイト考ヘテ居ルノテコサイマス、此補助艦艇ト云フコトニ付キマシテハ御承知ノ如ク歐洲ノ海面ニ於ケル敵ノ潜水艇ナルモノノ活動ハ非常ナモノテコサイマス、吾々カ殆ト豫期セサル以上ノ勵キヲシテキルノテアリマス、是等ノ問題ニツキマシテハ非常ニ吾々ハ攻究ヲ致シテ居リマス、今回提出イタシマシタ八四艦隊ノ各艦並ニ潛水艇ト云フモノノ計畫ハ、最初ニ計畫イタシマシタ其儘ノモノヲ提出イタシテ居ルノテ、補助艦艇ト各艦、即チ主力ナルモノノ各艦ノ艦形ト云フモノニ付キマシテ多少ノ變更ヲ致ス必要カアリハシマイカト云フコトヲ今日ハ考慮致スノテアリマス、言葉ヲ換ヘテ申シマスレハ、各艦ノ勢力ヲ多少增大ス

ル必要カアリハシナイカト云フコトヲ考ヘマシテ、船ノ數ヲ増スニ非スシテ、形ヲ大キクシ
テ船ヲ強力ニスル必要カアラウト思ヒマス又同時ニ補助艦艇ナルモノニ付キマシテハ年
々秘密會ニ於テ數ヲ申上ケマシタカ、是等ノ數ヲ多少増加スルト云フ必要カアリハシマイ
カト考ヘテ居リマス、唯是等ノ問題ヲ如何ナル程度マテ増加シ、若シクハ增大スレハ今日我
カ國防上差支ヘナイカト云フ最後ノ結論ヲ得マスルニハ、實ハマタ省議カ決定イタシテ居
リマセヌ、種々議論カコサイマス、直チキ八八案ヲ實行スヘシ、若クハ八四案ノ大正十二年度
迄ニ完成スヘキ案ヲ短縮シテ速成スルカ良イ、若クハ八四案ナルモノヲ前ニ提出致シテコ
サイマス通リニ止メテ置イテ、而シテ補助艦艇ノミヲ増加スルカ宜イ、又補助艦艇ヲ増加ス
ルニ付キマシテハ如何ナル程度マテニ増加スルカ宜イカト云フヤウナ種々ナル問題カコ
サイマスノテ、是等ノ點ニ付キマシテハ吾々當局ニ於キマシテ、目下研究中ニ屬シテ居リマ
ス、一方ニハ我國力ヲ考ヘネハナラヌ、單ニ軍事當局者ト致シマシテノ計畫ヲ直チニ實行致
スト云フコトハ、果シテ出來ルヤ否ヤト云フコトニ付キマシテモ大ニ苦慮致シテ居ルノテ
アリマス、從テ最後ノ結論ヲ得マスルニハ、尙ホ暫クノ時日ヲ藉サレムコトヲ偏ニ希望イタ
シテ居ルノテコサイマス、又日露戰爭當時ヨリモ今日ハ勢力カ幾分劣ツテ居ルカトウカト
云フ御質問ヲ受ケマシタ、甚タ意外ナコトヲ聞キマスノテ、事實ニ於キマシテ決シテ勢力ハ
劣ツテ居リマセヌ、各艦ニ付テ考ヘマシテモ、日露戰役當時ノ我カ最强ノ船ハ三笠ニアリマ
ス、其主砲ナルモノハ僅カ十二吋砲四門シカモツテ居リマセヌ、噸數ニ於キマシテモ一萬五

六千噸ノ船ニアリマス、唯今現ニ艦艇ニシテ居リマス船ニ付キマシテハ、三萬噸以上ノ船カコサイマス、其勢力モ十四時砲十二門ニアリマス、之ヲ數理的ニ換算イタシマスト、一隻ニ對シテ三笠ノ三四隻ニ對抗イタシテモ其一隻テ勝ツト云フ數カ出マス、此一事ヲ以テ見マシテモ、斷シテ日露戰爭當時ヨリ今日ノ勢力ハ劣ツトイナイト云フコトヲ私ハ茲ニ斷言イタスノニアリマス、此機會ニ尙ホ一言申シ上ケテ置キタイト思ヒマスカ、是迄ハ戰鬪艦ノ主砲ハ十四吋砲ヲ採用イタシテ居リマス、此後ハ十六吋砲ヲ採用致ス考テコサイマス、但シ十四吋砲ノ場合ニハ其數ニ於キマシテ十二門ヲ搭載イタシマシタ、十六吋砲ニ於キマシテハ八門ヲ搭載イタス考ヘテコサイマス、此十四吋砲十二門ト十六吋砲八門ト云フ問題ニ付キマシテハ、砲科戰術上ノ専門家ニ於キマシテ種々議論カコサイマスカ、要スルニ今後ノ戰爭ハ二萬メートルノ遠距離カラ海戰ヲスルト云フコトカ英獨ノ海戰ニ於キマシテ實驗サレマシタ、砲ヲ大クスルカ宜イト云フ結論ヲ得タノニアリマス、是ハ御参考ニ申上ケルノニアリマス、右ノ様ナ次第ニアリマスカラ、日露戰爭當時ト今日ト比較シテ其勢力ノ劣ツテ居ラヌト云フコトハ御了解下サルコトト信シマス、大要是レタケ……

○江木千之間、海軍大臣ニ伺ヒタインテアリマスカ、先刻御答カアリマシテ略ミ了承イタシマシタカ、尙ホハツキリ致サスヤウニ思ヒマスカラ推シテ伺ヒマスカ、冬ノ議會マテニ御決定ニナリマスコトハ、八四艦隊ヲ八八艦隊ニスルト云ブコトニマテ御變更ニナルト云フコトハナイノニアリマスカ、主力艦隊ハモウ八四艦隊ニ止メルト云フコトテ、八四艦隊ヲ八八

艦隊ニスルト云フノ御考ハナイノテアリマスルカ、ソレカラ何レ附屬艦隊ノ方ハ十分擴張シナクテハナラヌト云フ御言葉モアツタノテアリマシテ、如何ニモサウテアラウト考ヘマスルカ、是モ冬ノ議會マテニハ御決定ニナルト云フカ、其決定ニナル時期ハ既ニ御定マリニナツテ居ル、スレバ何レニ力ヲ入レルカト云フ御意見ニ付テモ、全ク御考ヘノナイコトテハナカラウト思ハレル、唯今陸軍大臣ノ御答ニナツタ程度ノ御答テモ承ルコトハ出來マセヌカ、主力艦隊ハ八四艦隊ニ止メテ置クトカ、附屬艦隊ノ方ニ力ヲ入レルトカ、何トカ、略ミサウ云フヤウナ御意向テモアルト云フヤウナコトヲ承ルコトハ出來マセヌテセウカ、全ク此冬ノ議會マテニハ八四艦隊ヲ八八艦隊ニスルヤ否ヤ、附屬艦隊ニ力ヲ入レルヤ否ヤト云フコトモ御分リニナラヌノテアリマセウカ、ソコヲ今少シハツキリ伺ヒタイト思ヒマス尙ホ今日ノ八四艦隊ヲ八八艦隊ニ擴張スルト云フコトニナリマスルト、經費ノ點ニ於テ凡ソ幾何ヲ要スルノテアルカ又附屬艦隊ノ方ヲ唯今御計畫ニナツテ居ル大正十二年迄ニ完成スルト云フ御計畫ハ、餘リ規模ハ大キナモノテハナイヤウニ思ハレマスルカ、若シ附屬艦隊ノ方ニ力ヲ入レルト云フ御方針ニ決ツテ假ニ之ヲ今日御計畫ニナツテ居ル大正十二年迄ニ完成スルレハ潜航艇ノ如キモ倍數ニスル、驅逐艦ノ如キモ倍數ニスルト云フコトニナリマシタナラハ、是モ極ク大略ノ處凡ソ幾何ノ費用ヲ要スルモノテアラウカ、之ヲ先ツ承ツテ置キタイ〇國務大臣加藤友三郎答、御答ヲ致シマスルカ、此冬ノ議會ニハ或ル計畫ヲ必ス提出ヲ致スト云フコトハ今日マテ申シタコトハナイノテアリマス、又責任ヲ以テ茲ニ必ス提出イタス

ト云フコトハ遺憾ナカラ申シ上ケ兼スルノテアリマス、海軍當局者ト致シマシテハ或程度
マテノ計畫ヲ提出イタシタイト云フ希望ヲ有ツテキル、ト云フ程度マテハ申上ケラレルノ
テアリマスカ、海軍省ニ於テスラマタ其計畫ハ決定イタシマセヌ、財務當局者トモマダ内相
談致シ居リマセヌ、無論閣議ノ問題トモナツテ居リマセヌノテ、單ニ海軍大臣トシテノ希望
ヲ申上ケルノニ止マルノテアリマス、閣議ノ決定シタモノテナイノヲ必ス提出イタスト云
フコトハ、私カ專斷ヲモツテ本議場ニ公言イタスト云フコトハ甚タ困難テアリマス、トウカ
其邊ハ御諒承ヲ乞ヒマス、又計畫其モノニ付テハ先刻本多男爵ノ御質問ニ御答イタシタ通
リテアリマシテ、海軍省ニ於テモ事實ニ於テ決定シテ居リマセヌ、唯八八艦隊ナルモノハ假
ニ十二年度マテノ繼續費トシテ要求イタシタナラハ、トノ位ノモノニナルカト云フ御質問
ニ對シテハ、是ハ今回テハコサイマセヌ、既ニ前内閣ニ於キマシテ私カ大命ヲ拜シマスル以
前ニ於テモ既ニ計畫ヲ立テタコトカコサイマス、其大體ノ數ハ記憶ニ殘ツテ居リマスカラ
御参考ニ申上ケマスカ、ソレトテモ無論正確テハアリマセヌ、毎年約一億二三千萬ノ金ヲ要
スル考ヘテアリマス、勿論此數字ナルモノハ船ノ大小計畫ノ如何ニヨツテ變化イタシマス、
艦ノ勢力ヲ幾分弱クスルトカ、若クハ補助艦艇ノ數ヲ減スルトカ種々ノ工夫ヲ致シマスレ
ハ、或ハ一億ヲチヨツト超エタ位を行クカモ知レマセヌ、要スルニ一億内外ノ豫算ヲ要スル
ト云フコトハ大體ニ於テ誤リナイテアラウト考ヘマス、又補助艦艇ヲ假ニトウカスルト云
フナラハ、其腹案ニ對スル豫算ハトノ位カト云フ御質問ナラハ、是ハ種々ナル案ヲ有ツテ居

リマスノテ、實ハドノ案ヲ申上ケテ宜イカ迷ツテ居リマス、是ハ暫ク御猶豫ヲ願ヒマス、如何ニシテモ餘リ無責任ナル數字ヲ申上ケルコトハ甚タ恐縮テコサイマス、ドウカ後日ノ問題ニ願ヒマス

右豫算案ハ第三十九回帝國議會ノ協賛ヲ經大正六年七月十九日裁可同二十日公布セラレタリ

大正六年度追加豫算海軍省所管繼續費

軍備補充費

金三億九千八百三十七萬七千三百九十四圓

既定總額

金二億六千五百十二萬千百六十圓

追加額

計金六億五千九百八十九萬八千五百五十四圓

内

金三億千三百四十五萬六千八百六十一圓

大正五年迄支出額

金三億四千六百四十四萬千六百九十三圓

大正六年度以降支出額

此改定年額左ノ如シ

大正六年度ヨリ同十二年度ニ亘ル繼續年割額前掲豫算追加要求書ニ同シキヲ以テ

(略ス)

(編者註)右豫算公布ノ節既定總額ニ於テ從前ノ形式ト異ナルハ左ノ計算ニ由ルモノナリ

軍備補充費

本費設定以前支出セルモノヲ除キ設
定當時即明治四十四年度以降支出額

二四八、六七三、五八一

大正二年度追加額 六〇〇〇、〇〇〇

大正三年度追加額 六、五、二六、〇〇〇

大正四年度追加額 九三、九四、六、九一四

大正五年度追加額 四三、二三〇、八九九

合計額 三九八、三七七、三九四

即以上合計額ヲ既定總額トシ之ニ今回ノ追加額ヲ加へ繼續年度ヲ改定セルナリ

尙ホ軍艦製造費ハ材料價格騰貴等ノ爲メ大正六年度豫算追加ヲ第四十回帝國議會ニ提出シ其
協賛ヲ經大正七年三月十九日裁可同二十日公布セラレタリ其金額左ノ如シ

海軍省所管大正六年度歲出臨時部豫算追加

第六款 軍備補充費 金六百三十二萬二千六百八十二圓

第一項 軍艦製造費 金六百三十二萬二千六百八十二圓

第三十五節 地中海方面派遣驅逐艦ニ對スル代艦

建造

(天正六年ニ於テ臨時軍事費支辨一千十八萬七百五十二
圓一大正六年五月勅裁濟)

大正六年五月二十一日加藤海軍大臣ハ地中海方面派遣驅逐艦ニ對シ代艦建造ノ請議ヲ寺内閣總理大臣ニ提出セリ其要ニ曰ク

帝國政府カ聯盟各國ノ海上作戦ヲ幫助スル爲メ地中海方面ニ派遣セル驅逐艦ニ對シ其勢力ノ減耗ヲ補足スルハ我國防上必要ノコトト認ム依テ差當リ右代艦トシテ驅逐艦六隻ヲ建造セントス

右ニ要スル經費ハ臨時軍事費支辨トシ大正六年度ニ於テ竣工セシメント欲ス而シテ豫算ハ一隻ニ付百六十九萬六千七百九十二圓ニシテ總額千十八萬七百五十二圓ナリ

右ハ大正六年五月二十二日裁可ヲ得タリ

(編者註)本文驅逐艦六隻建造費ノ實際支出額千十七萬五千二百四十圓八十四錢八厘ナリ

第三十六節 大正七年度豫算追加案ニ於テ軍備補

充費繼續費三億五十四萬八千四百三

十七圓追加

(所謂八六艦隊完成案—成立)但本文追加ト同時ニ備費ヲ別箇ノ款ト爲シ造船設
造兵及修理費ヲ大正七年度以降準備軍需品費ニ組替ノ爲
メ軍備補充費既定總額ヨリ四千四百五十一萬三千百十一
圓ヲ減ス

大正六年七月二十六日加藤海軍大臣ハ軍備補充ニ關スル請議ヲ寺内閣總理大臣ニ提出セリ

其要ニ曰ク

多年ノ懸案ニ係ル八四艦隊補充計畫ハ最近第三十九議會ノ協賛ヲ經テ成立ヲ告ケ茲ニ實行ノ緒ニ就クヲ得ルニ至レルハ國家ノ爲メ洵ニ慶賀ニ堪ヘサル所ナリ、然レトモ該補充案タルヤ明治四十年ニ於テ策定セル海軍兵力最低限度ノ一部ニシテ而カモ本戰役開始以前ノ計畫ニ屬スルモノナルヲ以テ内外ノ形勢激變セル今日ニ於テハ更ニ適應ノ追補ヲ講スルヲ當然ナリトス、蓋シ世界的大戰亂勃發シ我帝國モ亦協商國ノ一トシテ之ニ參與シ列強ト馳騒シテ國權ヲ振張シ國利ヲ増進セントスルニ滋ミ熟ミ既往ノ戰績ヲ回顧シ現在ノ戰勢ヲ考察シ將來ノ戰局ニ想到スレハ海軍ノ責務實ニ一層ノ重ヲ加フルモノアリ此際既定ノ計畫ニ對シテ焦眉ノ急ニ應スルノ改定ヲ加フルハ至緊至要ノ事ナリトス

抑々國防ハ外敵ニ對スル國家ノ防衛ニシテ時世ニ應シ變轉アルハ言ヲ俟タス是ヲ以テ國防ニ要スル軍備ニハ必スヤ之カ對象アリ此對象ハ所謂想定敵國ノ軍備ナリ而シテ政治的經濟的及地理上歷史上ノ關係ニヨリ利害衝突ノ公算最大ナル競爭國ハ即チ想定敵國ナリトス(中略)富力ノ懸隔多大ナル帝國ハ數字ヲ以テ彼ニ拮抗スルノ不可能ナルコト固トヨリ言ヲ俟タスト雖モ唯最善ノ努力ヲ傾注シ成シ得ル限リニ於テ武備ヲ整頓シ一旦緩急アラハ我ハ尠クモ東亞海面ノ管制ヲ策シ待機シテ徐ロニ彼ヲ届スルノ方途ヲ採ルニ足ルヘキ準備アルヲ要

ス

案スルニ東亞海面ノ管制ヲ完全ナラシメンカ爲ミニハ假令曩ニ策定セラレタル兵力標準即

チ八八艦隊ノ實現ヲ見ルモ尙ホ且ツ充分ナリト云フヲ得ス然ルニ我國力ハ右ノ標準ニ到達
センコトスラ容易ノ業ニアラス況シヤ夫レ以上ニ於テオヤ、然レトモ如何ニ消極的軍備ト雖
モ必スヤ左記ノ條件ヲ保障スルニアラサレハ到底國防ノ實ヲ舉クルコトヲ得ス

(イ)本土ノ防衛

(ロ)本土ト對岸大陸トノ聯絡保持

(ハ)南支那海ノ保安

若シ夫レ萬一不幸ニシテ晨ニ臺灣琉球ヲ奪ハレタニ樺太千島ヲ失ヒ而カモ是等ノ離島カ敵
手ニ反用セラレテ彼ノ前進根據地トナリタランニハ帝國ハ恰モヒ首ヲ咽喉ニ擬セラレタル
ニ異ナラス沿岸ハ最早ヤ敵軍ニ對スル防衛線タルヲ得ス敵飛行機ハ都邑ヲ襲撃シ敵潛水艇
ハ港灣ニ闖入シ延イテ人心ノ動搖通商ノ崩壊財界ノ擾亂ヲ誘起センヨト疑ヲ容レス又本邦
大陸間ノ聯絡斷絶セハ大陸ニ於ケル凡百ノ經營ハ水泡ニ歸シ南支那海ノ交通杜絶セハ物資
ノ輸入殆ント停止シ資源漸次涸渴シテ久シキヲ支フ可ラサルニ至ラン是レ如何ナル消極的
最低限度ノ國防策ト雖モ獨立自衛ヲ確保セント欲スル限り叙上各種ノ危險防止ヲ絕對ニ必
要トスル所以ナリ仍テ先ツ既定計畫タル八四艦隊ノ完成ニ向テ歩ヲ進ムルト同時ニ今次海
戰ノ教訓ニ鑑ミ比較的威力ヲ發揮セル補助艦艇ヲ急造シテ勢力ノ缺陷ヲ補填シ一時刻下ノ
危機ニ備ヘントス蓋シ正戰ヲ以テ敵軍ヲ制スルニ足ラスト雖トモ尙ホ奇戦ヲ以テ國防ノ目
的達成ヲ庶幾セントスルノ止ムヲ得サルノ見地ニ出ツルモノナリ

前顯ノ理由ニ基キ大正七年度以降同十年度ニ亘ル四箇年度繼續費總額一億八千百九十四萬八千百五十五圓ヲ以テ左記ノ艦艇ヲ建造セントヲ要ス

巡洋艦 (隻數略ス)

大型驅逐艦 (隻數略ス)

中型驅逐艦 (隻數略ス)

潛水艇 (隻數略ス)

特務艦 (隻數略ス)

又同日加藤海軍大臣ハ艦型改良ニ伴フ追加豫算ニ關スル左ノ請議ヲ寺内内閣總理大臣ニ提出

セリ

第三十九回議會ノ協賛ヲ經タル軍備補充費ハ開戦以前ノ艦型ヲ基準トシテ編成シタルモノニ係ル然ルニ爾來海戦ノ教訓ニ鑑ミ列強共ニ競フテ各種艦艇ノ攻擊力防禦力及速力ヲ増進シ着々新型ヲ實現シツツアルヲ以テ帝國海軍モ亦世界ノ大勢ニ順應シ軍艦個々ノ戰闘能力ニ於テ遜色ナカラシムル爲メ(中略)大正七年度以降ノ起工艦艇ニ對スル艦型改良費四千二百七十九萬六千七百一圓ノ追加豫算増額ヲ必要ト認ム云々

然ルニ大正六年十月十日加藤海軍大臣ハ勝田大藏大臣ニ照議シ巡洋戰艦二隻ノ建造費ヲ前記補充計畫ノ豫算中ニ追加スルコトトセリ

英獨海戰ノ教訓並ニ列強海軍ノ趨勢ハ兵力ノ中堅トシテ倍々巡洋戰艦ノ真價ヲ認メ各國相

競フテ高速ノ巨艦ヲ實現シツツアリ然ルニ帝國海軍ニ於テハ第三十九議會ノ協賛ヲ經テ成立セル八四艦隊中新ニ起工スヘキモノ僅カニ二隻ニシテ之ニ艦齡九年(大正十二年ニ於テ)ノ榛名霧島ヲ加ヘ強テ四隻ト假稱スルニ過キス而カモ前記兩艦ハ攻防力及速力ニ於テ到底精銳ナル新型ニ拮抗スル能ハス乃チ近キ將來ニ於ケル大局ノ推移ヲ考察スルニ有力ナル巡洋戰艦ノ必要ヲ感スルコト愈々痛切ナルモノアルヲ以テ大正八年度乃至十二年度間ニ於テ六千六百八十一萬四千百二十八圓ノ豫算ヲ以テ巡洋戰艦二隻ヲ追加建造スルコトトセハ茲ニ名實共ニ權威アル四隻編制ヲ完了スルヲ得ヘク依テ之カ豫算ヲ今回ノ補充計畫豫算中ニ追加セラレンコトヲ望ム云々

是ニ於テ

巡洋艦以下建造費	一八一、九四八、一五五
艦型改良費	四二、七九六、七〇一
巡洋戰艦二隻建造費	六六、八一四、一二八
計	二九一、五五八、九八四
物價騰貴ニ伴フ経費	八九八九、四五三
合計	三〇〇、五四八、四三七

ヲ豫算ニ計上シ之ヲ第四十回帝國議會(大正六年末開會)ニ提出セリ

大正七年度海軍省所管豫定経費要求書(抄錄)

軍艦製造費

本費ハ明治四十四年度以降大正十二年度ニ亘ル繼續費ナルモ艦艇補充ノ必要上總額三億五十四萬八千四百三十七圓ヲ既定總額ニ追加シ大正七年度以降大正十二年度ニ亘リ支出セントス依テ本年度追加年割額二千五百四十四萬八千五百十圓ヲ臨時部第六款ニ豫算セ

り

乙、繼續費

左ニ掲タル費途ニ付テハ本年度以降ノ繼續費ト爲シ若クハ本年度以降既定年割額ヲ改定スル

一、軍備補充費

右ハ前ニ説明シタル事由ニ依リ軍艦製造費ニ於テ總額三億五十四萬八千四百三十七圓ノ追加ヲ要スルト造船造兵及修理費ニ於テ大正七年度以降既定年割額ヲ準備軍需品費ニ組替ノ爲三百四十四萬七千圓ヲ減少スルト水陸設備費ヲ別個ノ款トナスカ爲四千百六萬六千百十一圓ヲ減少スルトニ依リ總額及年割額ヲ改定シ本年度以降左ノ區分ニ依リ之カ支出ヲ要ス

款項	軍備費補充	區別	總費額	要求濟額迄	七年度	八年度	九年度	十年度	十一年度	十二年度
既定額	完究、九八、五四円	減少額	三三、六四、五三円	六八年度迄	五四、三三、三七円	五四、六三、〇六円	五五、一四、一四円	四五、九三、八九円	四五、九四、三〇七円	四五、九四、三〇七円
△	四五、五三、一一△	△	三六、〇九、二五△	△	四、八〇、〇〇、〇〇円	二、一八、八〇△	一、五〇、〇〇、〇〇	一	一	一
追加額	三〇〇、五八、四三七	一	三五、四四、六三〇	一	七七、七七、六六〇	西、一三、八三	六八、一九、三九	七、三三、七〇	二三、八五、三九	二三、八五、三九

及造船修理費	減少額△	三,四〇〇,〇〇〇	一△	ニ,九〇〇,〇〇〇	高尾〇〇〇
	改定額△	高六六三	一△	高六六三	一

大正七年一月二十二日衆議院ニ於ケル寺内内閣總理大臣ノ施政方針ニ關スル演説ノ一節
政府ハ大正七年度ノ豫算ヲ編成スルニ方リ第一ニ國防充實ノ方針ヲ定メ陸軍ニ付テハ兵力ノ整備ヲ圖リ海軍ニ付テハ艦船補充ノ計畫ヲ立テタリ而シテ是カ財源ノ一部ニ付テハ増稅ニ由ルノ已ムヲ得サルヲ認メ之ニ關スル法案ヲ提出セリ云々

同日同院ニ於ケル勝田大藏大臣ノ財政計畫ニ關スル演説ノ一節

國防ノ計畫上後年度ニ亘リ必要ナル恒久的財源ヲ調達スルノ目的ヲ以テ租稅收入專賣局益金、及ヒ通信收入ニ付テ增收ノ計畫ヲ立テ其大正七年度ノ歲入ヲ以テ之ヲ補填スルコトニセリ、大正七年度ノ總豫算中歲出ノ主ナルモノニ關シ一言セんニ、國防計畫ハ國家自衛ノ保障ヲ全フスル主旨ヲ以テ海軍軍備ノ補充ヲ計ルコト即チ大正七年度ニ於テ軍艦製造費ニ二千五百四十四萬餘圓ヲ計上シ尙同年度以降大正十二年度ニ亘リ總額三億五十四萬圓ヲ追加要求セリ、是レニ既定豫算額ノ大正七年度以後使用スヘキモノヲ合スレハ五億八千四百餘萬圓ヲ支出スルノ計畫ト爲ル、而シテ此計畫ハ歐洲戰爭ノ經驗ニ鑑ミ艦型其他ニ變更ヲ加フルモノ艦艇ノ增加ヲ要スルモノ及ヒ物價騰貴ニ伴フ経費等ヲモ計上セルナリ、右ノ外海軍ニ就テハ大正七年度ニ於テ水陸設備費追加六百五十九萬餘圓、航空隊設備費追加百萬圓、火薬廠設備費二百四十七萬圓、準備軍需品費、無線電信所設備費、臺灣豫備油田試掘費

等ノ項目ヲ計上セリ、陸軍軍備充實ニ就テハ云々以下省略

大正七年二月十二日衆議院本議場ニ於テ大正七年度豫算案ヲ議スルニ先チ豫算委員長(小川

平吉)ノ報告ノ一節

豫算委員會ノ經過並ニ結果ヲ御報告致シマス、豫算委員會ハ一月二十四日ヨリ三十一日マ
テ總會ヲ開キ各分科ニ移リマシテ、二月一日ヨリ九日マテノ間分科ニ於テ質問討議ヲ盡シ
マシテ、去ル九日ニ議事ヲ終了致シマシテ御座イマス、委員會ニ於キマシテハ内外各般ノ事
項ニ亘リ、質問應答カアリマシタノテ御座イマスルカ、是ハ茲ニ申上ケル必要ハナイト考ヘ
マスル、唯一口申上ケテ置ク必要カアルト考ヘマスノハ即チ海陸軍備ニ關スル點テ御座イ
マス、今回ノ豫算ハ申ス迄モナク、此軍備ノ計畫カ骨子トナツテ居リマス、各派ノ諸君ヨリシ
テ、此點ニ關スル幾多ノ質問ガ出マシタ大體ニ於テ政府ノ計畫スル所ノ陸海軍備ノ計畫ハ
不徹底ノ感アリト云フ意味ヲ以テ、質問セラレタノテアリマス、之ニ對シマシテ陸軍當局ノ
答辯ト致シマシテハ陸軍ニ於テハ二十五師團ヲ以テ既定ノ計畫トシテ、之ニ向ツテ進ムノ
テアル、併ナカラ今回ノ要求スル所ハ現在ノ二十一師團ノ戰鬪力ヲ充實スル所ノ計畫ヲ以
テ豫算ヲ要求シテ居ルノテアル、此戰鬪力ヲ二十一師團丈ノ分ヲ充實スルト云フコトカ今
日ニ於テハ之ヲ以テ満足スルヲ至當ト認ムルノテアル、將來ニ於テハ追々增加擴張ヲシタ
イト云フ希望カアルノテアル、斯様ナ答辯ニナツテ居ル、海軍ニ於テハ大正十二年度迄ニ所
謂八六艦隊ヲ完成スル計畫ヲ立て、今回ノ豫算ヲ要求致シタノテアル、大正十一年度トナリマ

スレハ、更ニ新タル計畫ヲ立テテ要求セント欲スルノ希望ヲ懷イテ居ル、今日ハ即チ大正十二年度迄ヲ限トシテ八六艦隊ヲ完成スル計畫テアル、斯様ナ答辯テ御座イマス、之ニ對シテ何故ニ大正十二年度以降ニ亘ル所謂八八艦隊ナルモノヲ完成スル所ノ計畫ヲ立テナイノテアル、斯ウ云フ問ニ對シテハ是迄既定ノ計畫カ既ニ大正十二年度ヲ以テ限ト致シテ居ル先ツ之ニ基キ大正十二年度迄ノ計畫ヲ立テタノテアル、大正十三年度ニナレハ、水陸ノ設備モ完成ヲ告ケル積リテアル、製艦能力モ十分ニナルノテアルカラ、大正十三年度ニナレハ更ニ大戰艦二隻ヲ製造スルコトカ出來ル見込テアル、併ナカラ是ハ前申ス通リ大正十年頃ニ至ツテ新ニ計畫ヲ立テテ要求スル考テアル且又此場合ニ於テハ大戰艦二隻ノ外ニ補充費トシテ他ノ艦艇ノ補充費ヲモ共ニ計畫ヲ立テテ要求スル考テアル今日ノ所ニ於テハ海軍ニ於テハ、出來得ル丈ノ計畫ヲ立テテ要求ヲ致シタ考ハテアル、斯様ナ答辯カ御座イマシタ此軍備計畫ニ對シマシテハ、豫算委員會ニ於テ、更ニ希望ヲ決議致シマシタノテアリマスルカ、ソレハ後ニ至ツテ更ニ申上ケマス(中略)尙示此國防ノ事ニ關シマシテ、豫算總會ニ於テ議員野田卯太郎君ヨリ本年度ノ豫算ニ計上セラレタル國防計畫ノ不徹底ナルコトハ一般ノ定評ノ存スル所テアル、陸軍當局者ハ飛行機ノ充實、火藥ノ改良、其他陸軍軍備ノ充足ヲ圖ル爲メ又海軍當局ハ造艦能力ノ増進及艦艇ノ充足等ニ付一層努力サレンコトヲ希望スルト云フ動議ヲ提出セラレマシタ、滿場一致ヲ以テ此希望ヲ可決致シマシタ、之ニ對シテ陸海兩方ノ當局者ニ於キマシテモ成ルヘク議員諸君ノ希望ニ副フヘク十分ナル努力ヲスルト、

斯様ナ答辯カ御座イマシタ

右豫算案ハ第四十回帝國議會ノ協賛ヲ經大正七年三月二十二日裁可同二十三日公布セラレタ
リ

海軍省所管繼續費

軍備補充費

金六億五千九百八十九萬八千五百五十四圓

既定總額

金四千四百五十一萬三千百十一圓

減少額

金三億五十四萬八千四百三十七圓

追加額

計金九億千五百九十三萬三千八百八十圓

内

金三億三千百九十一萬千七百十七圓

大正六年度迄支出額

金五億八千四百二萬二千百六十三圓

大正七年度以降支出額

此改定年額左ノ如シ

大正七年度

金七千五百三萬三千七百二十七圓

款軍備補充費

金七千五百三萬三千七百二十七圓

項軍艦製造費

大正八年度

金一億二十二萬六千八百六十五圓

款軍備補充費

金一億二十二萬六千八百六十五圓

項軍艦製造費

大正九年度

金一億五百四十三萬四千五百九圓

款軍備補充費

金一億五百四十三萬四千五百九圓

項軍艦製造費

大正十年度

金一億二千三百三十三萬六千八百七圓

款軍備補充費

金一億二千三百三十三萬六千八百七圓

項軍艦製造費

大正十一年度

金一億二千百十六萬五百八十九圓

款軍備補充費

金一億二千百十六萬五百八十九圓

項軍艦製造費

大正十二年度

金五千八百八十二萬九千六百六十六圓

款軍備補充費

金五千八百八十二萬九千六百六十六圓

項軍艦製造費

尙ホ大正七年度軍艦製造費ハ財料價格騰貴等ノ爲メ豫算追加ヲ第四十一回帝國議會ニ提出シ其協賛ヲ經大正八年二月八日裁可同十日公布セラレタリ其金額左ノ如シ

海軍省所管大正七年度歲出臨時部豫算追加

第六款 軍備補充費 金三千五十三萬四千四百五十五圓

第一項 軍艦製造費 金三千五十三萬四千四百五十五圓

第三十七節 大正八年度乃至十年度ニ於テ輕巡洋

艦二隻建造ノ議

(不成立)

大正七年九月三日加藤海軍大臣ハ輕巡洋艦二隻建造ニ關スル覺書ヲ寺内内閣總理大臣ニ提出セリ其要ニ曰ク

曩ニ徳山灣ニ於テ不幸爆沈ノ災厄ニ遭遇セル軍艦河内ノ善後策ニ關シ研究調査ヲ遂ケタルニ其浮揚ハ敢テ不可能ニアラスト雖モ之レカ實行ニハ多大ノ經費ト幾多ノ危險困難トヲ伴フノミナラス約二箇年ノ歲月ヲ要スヘク更ニ其復舊ニハ少クモ亦二箇年ヲ費ササル可ラスシテ前後四箇年ヲ經テ完成ヲ告クルノ曉ニハ同艦ハ既ニ艦齡老ヒ最早第一戰列ニ編入スルヲ得サルニ至ルヘク加フルニ是等工事ノ爲メ新艦建造ノ工業力モ影響ヲ蒙ルコト尠少ナラサルヲ以テ寧ロ之レヲ解體シ船體、兵器、機關等ハ分離收揚ノ上他ニ利用スルヲ最上策トスルノ結論ニ到達セリ依テ不日解體收揚ニ着手セントス

河内ハ大正第九號戰艦ノ竣工ヲ見ルマテハ第一戰列部隊ニ編入セラルヘキ艦タリシノミナラス現ニ着手中ノ補充計畫カ大正十二年ニ於テ完成ノ曉ニ於テモ當分第二戰列部隊ノ

首班ヲ占ムヘキモノニシテ其喪失ハ現在及近キ將來ニ於ケル國防上ノ一大缺陷ナリトス殊ニ現下裝甲巡洋艦以下大小ノ艦艇ハ特別任務アルモノノ外地中海以東亞米利加西岸ニ亘ル海面ニ分散シテ協同作戦ニ從ヒ行動繁劇ノ結果勢力ノ減耗亦著シキモノアルニ想到スルトキハ既定計畫ノ進捗ニノミ安スルコト能ハサルノ實狀アルニ鑑ミ速ニ是等勢力ノ補充回復ヲ圖ルハ刻下ノ急務ナリトス

然ルニ戰艦巡洋戰艦ノ建造ハ我工業能力ニ於テ其特種材料ノ製作等到底現補充計畫以上ノ添加ヲ容ルサス又其建造期間モ大約四年ニ上ルヲ以テ刻下ノ急ニ應スルヲ得スト雖モ巡洋艦ノ建造ハ若干ノ餘力アルノミナラス建造期間モ亦大約二年ニシテ足ルヘシ固トヨリ艦艇ハ其種別ニヨリ任務ヲ異ニスルヲ以テ巡洋艦ヲシテ戰艦ノ任務ヲ盡サシムルコト能ハサレトモ用兵其法ヲ得レハ之ニ依テ以テ敵ノ作戦ヲ窘縮セシメ敵戰艦ヲシテ其力ヲ伸ハサシメサルヲ得ヘク殊ニ前述スル如ク現下巡洋艦ノ勢力減耗ヲ憂ヘツツアルニ加ヘ將來現補充計畫完成後ニ於ケル編制上ノ點ヨリ見ルモ此際輕巡洋艦二隻ヲ建造スルヲ得策ナリト認ム云々

輕巡洋艦五千五百噸級二隻建造費

大正八年度乃至十年度三箇年度繼續費 一四、九一九、六〇〇円

大正七年九月二十九日寺内伯辭任シ本件ハ未解決ノ儘之ヲ後繼内閣(原内閣)ニ引繼カレタリシカ遂ニ成立ニ至ラサリキ

大正七年十月十五日加藤海軍大臣ハ軍艦製造費豫算ニ關スル覺書ヲ内閣總理大臣原敬ニ提出セリ其要ニ曰ク

曩ニ第四十議會ニ於テ所謂八六艦隊ニ對スル軍艦製造費豫算ノ協賛ヲ經候處既定ノ八八艦隊ヲ完成スルノ議ニ就テハ同議會ニ於テ既ニ言明セル次第ニモ有之帝國官私工業力ノ現狀並ニ將來ノ發達ニ考慮シ研究ノ末凡ソ別表ノ如キ成案ヲ得タリ

別表ハ大正九年度ヨリ新規要求ヲ爲スモノトシ既定計畫ト併セ大小十六年度末迄ニ八八艦隊ヲ竣工セシメントスルモノニシテ本案ノ實行ニ依リ大正十六年度ニ於テ始メテ艦齡第一期即八年未滿ノ八八艦隊ヲ完成シ得ル次第ナリ

右大正九年度以降十六年度ニ亘リ新規要求額ニ依リ建造セントスル艦艇ハ戰艦四隻一巡洋戰艦四隻外ニ巡洋艦、驅逐艦、潛水艇、特務艦等若干ナリトス右ハ將來ノ財政政策樹立上必然考慮セラレサル可ラサルモノト認メ御参考トシテ茲ニ貴覽ニ供ス云々

別表(茲ニ省略ス)

(編者註)大正七年九月二十九日原内閣成立シ豫算編成期ニ入ルヤ國防充實ノ主義ハ固トヨリ之ヲ認ムルモ大正八年度ニ於テ直ニ新艦建造ノ計畫ヲ爲スコトハ財源ノ燃出上到底來ルヘキ議會ニ提出スルノ間ニ合ハサルヲ以テ暫ク之ヲ差控ヘ九年度以降ニ於テ之カ計畫ヲ爲スコトトナリ河内喪失ニ關聯スル輕巡洋艦二隻ノ建造モ取止メ八年度ニ於テハ單ニ既定計畫ノ遂行ニ必要ナル費用ヲ要求スルニ止メタリ依テ九年度以降ニ於テ要スヘキ新

艦艇建造費ノ豫算ヲ案定シ將來ノ財政計畫ニ對シ豫メ當局ノ考慮ヲ得置クヲ妥當ナリト
シ其参考ノ爲メ本覺書ヲ提出セルモノナリ

其後本豫算ニ關シテハ愈々之ヲ財政計畫ニ現ハスニ至ルマテハ閣議幾多ノ曲折アリタル
モ遂ニ大正八年十月二十八日ノ閣議ニ於テ大體案ノ決定ヲ得同年十一月三日具體案ヲ提
出シ九年度豫算案ニ計上セラレ第四十二議會(九年末開會ノ通常議會)ニ提出ノ處同議會ハ
解散セラレ豫算不成立ニ了リタルヲ以テ第四十三議會(九年七月開會)ニ提出シ其協賛ヲ經
テ茲ニ八八艦隊完成案ノ成立ヲ見ルニ至レリ其決定豫算ニ關シテハ後節ニ於テ之ヲ説述
ス

第三十九節 大正八年度軍艦製造費追加

(物價騰貴ニ依リ五千二百五萬九百五十八圓追加一成
立)

大正七年十二月二十七日開會ノ第四十一回帝國議會ニ提出セル軍備補充費(款)軍艦製造費(項)ハ
既定繼續費年割額ノ外ニ物價騰貴ニ伴フ追加豫算五千二百五萬九百五十八圓ニシテ左ノ如シ

既定年割額 一〇〇,二二六,八六円

追 加 額 五一,〇五〇,九五八

合 計 一五二,二七七,八二三

大正八年度海軍省所管豫定經費要求書(抄錄)

軍艦製造費

本費ハ明治四十四年度以降大正十二年度ニ亘ル繼續費ニシテ物價騰貴ノ爲メ工費材料費ニ於テ不足ヲ告クルヲ以テ本年度既定年割額ニ對スル追加額五千二百五萬九百五十八圓ヲ臨時部第六款ニ豫算セリ

右ハ第四十一回帝國議會ノ協賛ヲ經大正八年三月二十四日裁可同二十五日公布セラレタリ

海軍省所管大正八年度歲出臨時部豫算

第六款 軍備補充費 金一億五千二百二十七萬七千八百二十三圓

第一項 軍艦製造費 金一億五千二百二十七萬七千八百二十三圓

第四十節 大正八年度軍艦製造費ノ補足

(繼續費外トシテ二千七百三十九萬四千七百三十八圓支
出)

物價騰貴ノ爲メ軍艦製造費既定豫算ニ不足ヲ生スルニ由リ大正八年度豫算追加案ヲ左ノ如ク
第四十二回帝國議會(大正八年十二月二十六日開會)ニ提出セリ

大正八年度歲入歲出總豫算追加(抄錄)

軍艦製造費ニ於テ物價騰貴ノ爲豫算ニ不足ヲ生スルニ由リ三千六百五十二萬六千三百十

七圓ヲ海軍省所管臨時部第六款ニ豫算セリ

海軍省所管

第六款 軍備補充費 金三千六百五十二萬六千三百十七圓

第一項 軍艦製造費 金三千六百五十二萬六千三百十七圓

然ルニ同議會ハ解散セラレ成立ニ至ラサリシヲ以テ止ムヲ得ス大正八年度豫算ノ不足ヲ補フ
爲メ剩餘金ノ中ヨリ金二千七百三十九萬四千七百三十八圓ヲ軍艦製造費ノ補足(繼續費外)トシ
テ支出スルコトニ勅裁ヲ經テ施行セリ

第四十一節 大正八年海軍大臣請議、軍備充實ノ議

(大正九年度以降十六年度迄軍艦製造費追加七億六千
百十一萬二千五百五十二圓追加ト所謂八八艦隊完成案

ト成立)

大正八年六月二日加藤海軍大臣ハ海軍軍備充實ニ關スル議ヲ原内閣總理大臣ニ提出シテ閣議
ヲ請ヘリ其要ニ曰ク

(前略)

朝野多年ノ希望タル所謂八八艦隊ニ到達スルノ階梯トシテ第三十九議會ニ於テ八四艦隊ノ
協賛ヲ得第四十議會ニ於テ八六艦隊完成案ノ通過ヲ見第四十一議會ニ於テ前議會ニ要求セ

ル所ト併セテ右艦隊ノ建設維持ニ必要ナル設備費ノ一部ヲ求メ其協賛ヲ經タリ則チ帝國海軍ハ近來漸ヲ逐フテ其勢力ヲ増加セリト雖モ今尙ホ用兵上最少限度トシテ案畫セラレタル兵力ニ到達スルノ途中ニ在ルモノニシテ之ヲ戰爭ノ結果急速ニ其海軍ヲ擴張シ而カモ之ヲ保全シ得タル列強ノ勢力ト對照スルトキハ其差隔頗ル著大ニシテ(中略)經年益々窘迫ヲ加ヘ他年一日風雲急ナルノ秋用兵ノ局ニ當ルモノヲシテ策ノ施ス可キ無キニ陷ラシメム

(中略)而シテ此際先ツ所謂八八艦隊ヲ完成スルハ國防兵力ニ到達スルニ必要ナル第一步ニシテ且ツ最モ穩健ナル手段ナリト信ス而シテ八八艦隊ヲ建設センカ爲メ既定計畫以外ニ新造ヲ要スル艦船竝ニ經費ハ左ノ如シ

一、戰 艇 四 隻

巡 洋 戰 艇 四 隻

巡 洋 艇 大 型 (隻數ハ茲ニ略ス)

巡 洋 艇 中 型 (隻數ハ茲ニ略ス)

驅 逐 艇 大 型 (隻數ハ茲ニ略ス)

驅 逐 艇 中 型 (隻數ハ茲ニ略ス)

潛 水 艇 大 型 (隻數ハ茲ニ略ス)

潛 水 艓 中 型 (隻數ハ茲ニ略ス)

特 務 艩 (隻數ハ茲ニ略ス)

砲 艦 (隻數ハ茲ニ略ス)

艦

二、右建造ニ要スル經費總豫算額(茲ニ略ス)

第一項建造艦船ノ隻數ハ大正十六年度末迄ニ八八艦隊ヲ完成スルモノトシテ算出セリ而シテ十六年度末ヲ以テ完成期トセルハ左ノ理由ニ基ク

第一、過度ニ製艦費ノ膨脹ヲ避タルコト

第二、既定計畫ハ我官私工業力ノ關係上主力艦ニ就テハ大正十二年度末迄ニ建設シ得ヘキ限度ナルヲ以テ艦齡第一期(八年)未満ノ主力艦十六隻ヲ得シニハ更ニ時日ノ餘裕ヲ必要トス而シテ十六年度ニ至ラハ之ヲ完成シ得ルノ見込確實ナルコト

右ノ計畫ニ依リ九年度以降十六年度ニ亘ル軍艦製造費年度割ヲ假定スレハ附表第一ノ如シ

(附表第一略ス)

以上艦船ノ充實ト共ニ考慮ヲ要スルハ之カ建設維持並ニ之ヲ使用シテ全能ヲ發揮セシムヘキ人力等ノ整備是レナリ即チ

一、艦船ノ建造ニ必要ナル造船造機及造兵力ノ増大

二、軍港要港ノ整頓

三、教育機關ノ擴張

四、準備軍需品ノ充實

五、航空勢力並通信機能ノ改善

等ハ右艦船ノ補充ト並行シテ整備ヲ要ス

是等五件ハ從來水陸設備費、準備軍需品費等ニ包羅セラレ着々之レカ整備ヲ圖リ來レリト雖モ未タ以テ完全ナルヲ得ス殊ニ將來ニ於ケル艦型ノ増大、各部機構ノ進歩及建造隻數ノ増加ニ考フルトキハ此際更ニ是等諸般ノ設備ヲ整頓セサル可ラス之ヲ艦型増大ノミニ就テ察スルモ艦大ナレハ自ラ搭載兵器機關ノ數ヲ増シ從テ之ヲ使用スル將校下士卒モ亦增加シ之ニ要スル軍需品及燃料モ巨額トナルヘキハ必然ニシテ之カ製作修理維持竝ニ貯藏ニ必要ナル機關及將校下士卒ノ養成等其能力増進ニ要スル設備ハ自ラ增大ノ止ムナキニ至レハナリ部外竝ニ民間ノ工業力其他諸機關ノ利用ハ帝國海軍ノ夙ニ留意セル所今後ニ於テモ努メテ之ニ依ルヘキハ勿論ナリト雖モ海軍獨有ニシテ到底他ヲ恃ムノ餘地ナキモノニ對シテハ海軍ニ於テ自ラ設備ヲ營ムノ外無シ此見地ヨリシテ查定シタル以上數件ノ設備費ハ既定豫算等ヲ合セテ總額(中略)年度割豫定附表第二ノ如シ(附表第二略ス)

以上艦船ノ充實竝ニ之ニ伴フ設備ハ現下ノ情勢ニ於テ一日ヲ緩フス可ラサルヲ以テ來年度(大正九年度以降ニ於テ直ニ之ニ着手セラレント)要ス云々

右ハ閣議ニ於テ固トヨリ其主義ハ之ヲ認ムル所ナリト雖モ財政ノ計畫ト調和ヲ保ツノ必要アリ幾多ノ攻究審議ヲ經テ艦型及巡洋艦以下隻數等ニ修正ヲ施シ之ニ依テ豫算ヲ編成シ軍備補充費(款)軍艦製造費(項)ノ追加額ヲ大正九年度以降十六年度迄七億五千百九十五萬三千八百八十

五圓トシテ第四十二回帝國議會(大正八年十二月二十六日開會)ニ提出セリ

戦艦四隻巡洋戦艦四隻及巡洋艦以下建造費

六八〇、二五八、四一九円

大正九年度既定年割額ニ對シ物價騰貴ノ増額

七一、六九五、四六六

合計

七五一、九五三、八八五

(水陸設備費其他ハ茲ニ略ス)

大正九年度海軍省所管豫定經費要求書(抄錄)

軍艦製造費

本費ハ明治四十四年度以降大正十二年度ニ亘ル繼續費ナルモ艦船補充ノ必要上總額六億八千二十五萬八千四百十九圓及大正九年度既定年割額ニ對シ工費及材料費ノ騰貴ニ依リ七千百六十九萬五千四百六十六圓合計七億五千百九十五萬三千八百八十五圓ヲ既定繼續費ニ追加シ大正九年度以降大正十六年度ニ亘リ支出セントス依テ本年度追加年割額八千二十三萬二千九百五十七圓ヲ臨時部第二款ニ豫算セリ

乙、繼續費

左ニ掲タル費途ニ付テハ本年度以降ノ繼續費トナシ若ハ本年度以降既定年割額ヲ改定スルヲ要ス

一、軍備補充費

右ハ前ニ説明シタル事由ニ依リ總額七億五千百九十五萬三千八百八十五圓ノ追加ヲ要スルヲ以テ總費額及年割額ヲ改定シ本年度以降左ノ區分ニ依リ之カ支出ヲ要ス

八八艦隊完成案ノ再提出

然ルニ右豫算案ハ大正九年二月十三日衆議院ヲ通過シ貴族院ニ於テ審査中同月二十六日衆議院ニ於テ衆議院議員選舉法中改正法律案ノ討議ニ際シ衆議院解散セラレ同時ニ貴族院停會セラレタルヲ以テ遂ニ成立ニ至ラサリキ

第四十二回 帝國議會解散ノ爲メ前述ノ如ク豫算不成立ニ了リタルヲ以テ政府ハ再ヒ八八艦隊完成案ニ對スル軍艦製造費豫算ヲ編成シヲ 第四十三回 帝國議會(大正九年七月一日開會)ニ提出セリ其豫算ノ算出基準ハ大體ニ於テ前議會ニ提出セルモノニ異ナル所ナシト雖モ金額ニ於テ多少ノ變更ヲ見タリ即チ

一、新ニ建造スヘキ艦船

巡洋戦艦 四 隻

巡洋艦 十二隻

驅逐艦 三十二隻

(隻數略ス)

潜水艦 (隻數略ス)

特務艦

(隻數略ス)

砲艦

(隻數略ス)

二、右新造艦船ノ經費追加額

六八〇・三六〇・〇五五円

三、既定年割額ニ對シ物價騰貴ニ伴フ經費追加額

八〇・七五二・〇九七

計

七六一・一一二・一五二

ニシテ議會へ提出セル豫算追加要求書ハ左ノ如シ

大正九年度海軍省所管豫定經費追加要求書(抄錄)

軍艦製造費ノ追加

本費ハ明治四十四年度以降大正十二年度ニ亘ル繼續費ナルモ艦船補充ノ必要上總額六億八千三十六萬五十五圓及既定年割額ニ對シ工費及材料費ノ騰貴ニ依リ八千七十五萬二千九十七圓合計七億六千百十一萬二千五百十二圓ヲ既定繼續費ニ追加シ大正九年度以降大正十六年度ニ亘リ支出セントス依テ本年度追加年割額八千九百三十九萬千二百二十四圓ヲ臨時部第六款ニ豫算セリ

乙、繼續費

左ニ掲タル費途ニ付テハ本年度以降ノ繼續費トナシ若ハ本年度以降既定年割額ヲ改定スルヲ

一、軍備補充費

右ハ前ニ説明シタル事由ニ依リ總額七億六千百十一萬二千百十二圓ノ追加ヲ要スルヲ以テ
總費額及年割額ヲ改定シ本年度以降左ノ區分ニ依リ之カ支出ヲ要ス

		軍備費補		款項
		造船費		目別
俸奏給任		軍艦製費		區別
改追定額	既定額	既追加額	既追加額	總費額
追加額	組替額	增額	額	要求額度
九三二五九元	五百八十六元	一	一	八年度迄
九三二五九元	五百八十六元	一	一	九年度
九三二五九元	五百八十六元	一	一	十年度
九三二五九元	五百八十六元	一	一	十一年度
九三二五九元	五百八十六元	一	一	十二年度
九三二五九元	五百八十六元	一	一	十三年度
九三二五九元	五百八十六元	一	一	十四年度
九三二五九元	五百八十六元	一	一	十五年度
九三二五九元	五百八十六元	一	一	十六年度

大正九年七月三日衆議院ニ於ケル高橋大藏大臣ノ財政計畫ニ關スル演説ノ一節
大正九年度歲入豫算追加額中最モ主ナル事項ハ租稅二千三百餘萬圓ニアリマシテ是ハ主
トシテ新規國防計畫ノ財源ニ充當スル爲メ計畫ヲ致シマシタ增收額ニアリマス、當初提出

豫算ニ於テハ右ノ金額ハ五千七百餘萬圓テアリマシタカ年度半ハヨリ施行スル等ノ爲メ多少ノ變更ヲ加ヘマシタ結果大正九年度ニ於テハ二千三百餘萬圓ノ增收ニ止ルノテアリマス、九年度ハサウテアリマスカ平年度ニ於テハ一億三千五百餘萬圓トナル見込テアリマス……歲出追加額中最モ重要ナルモノハ國防ノ充實テコサイマシテ之カ財源トシテ所得稅及酒稅ニ於テ增收ノ計畫ヲ定メ尙ホ其不足スル所ニ對シテハ當分ノ中、國債償還ヲ停止シテ之カ補足ニ充ツルノ計畫テアリマス云々

大正九年七月九日衆議院豫算委員第四分科會議ニ於ケル説明及問答

○加藤海軍大臣説明ノ要旨

本回提出ノ軍備費ノ主ナルモノハ軍艦製造費ニシテ之ニ依テ新造セントスル艦ハ大正九年度ヨリ大正十六年度ニ亘ル八箇年間ニ戰艦四隻、巡洋戰艦四隻、巡洋艦十二隻、驅逐艦三十二隻、其外潛水艦、特務艦等ナリトス

其豫算總額ハ物價騰貴ヲ見込マスシテ六億八千餘萬圓ナリ、算出基礎ハ是迄ノ軍備計畫費カ總テ戰前ノ物價ヲ基礎トシテ計上シアルヲ以テ今回モ同様ニセリ、而シテ之ニ年々其當時ノ物價ニ應シテ物價騰貴ニ對スル追加要求ヲ致シ居ルヲ以テ將來モ同様ノ事トナラン、十六年度迄約二割ノ物價騰貴ヲ見テ置カネハナラヌト考フ、但シ九年度丈ケハ約五割ノ物價騰貴ヲ見テ居リマス、斯様ナル計算ナリ、此後物價カ安定シテ戰前ノ物價ニ折合フトハ一寸豫想スルヲ得スト雖モ相當ノ所テ折合フコトトナラハソレニ相應スル様ニ之ヲ改訂ス

ル必要起ルナラン云々

○津野田是重議員問

海軍ノ國防ノ大方針、斯ウ申セハ漠然トシテ居リマスカ、總テ陸海軍ノ別ナク假想敵國ト云フモノハアル、其假想敵國ハ何處ヲ先ツ目シテ居リマスカ、若シモ言ヒ惡イト云フコトテアレハ、強テ承ラウトハ申シマセヌ、假想敵國ノ艦隊カ現今ハドウ云フ狀勢ニアルカ、大正十六年度即チ我カ八八艦隊カ成立シタ曉ニハ彼我ノ關係ハドウ云フコトニナルカ、此假想敵ニ對シテ若シ事アル時ニハ攻擊ノ策戦ヲ取ル御考テアリマスカ或ハ守勢ノ御考テアリマスカ云々

○加藤海軍大臣答

國防計畫ヲ立テマスニ、假想敵國ト云フ御質問ニハ能ク接シマスカ今日公言シ得ヘキ假想敵國ト云フモノハ無イノテアリマス、是レハ在來カラ其方針ヲ執ツテ居ルノテアリマス、即チ御承知ノ通リノ地理的關係其他ニ於テ單ニ一國ヲ敵ト豫定シマシタ所テソレヲ以テ満足ナル方針ヲ立テルコトハ出來ナイ、又東洋ニ派遣シ得ル列國ノ艦隊勢力ト云フヤウナモノモ、考ノ中ニ入レテ居ルノテアリマスケレトモ大體カラ申シマスレハ如何ナル國カ攻勢ヲ取ツテ來ヤウカ、今日ノ國情カラ推シマシテ國力ノ許ス範圍内ニ於テ出來得ル限リノ勢力ヲ維持シタイト云フノカ目的テアリマス、隨テ敵國ヲ假想シテ何處ノ國ハ斯ウ云フ風テアル、之レニ負ケヌヤウニヤル、丁度十數年前ニ英吉利カ佛獨二國ノ艦隊勢力ノ倍ノ勢力ヲ

維持スルト云フコトヲ當時公言シマシタ、其後獨逸ニ對シテハ六割ノ勢力ノ増加ヲ以テ満足ヲスル、斯ウ云フ方針ヲ立テ居リマス、日本ノ方テハサウ云フノハナイノテアリマス、決シテ敵國ヲ假想シテ此國ニ對シテ戰爭スル爲メノ國防計畫テアル、斯ウ云フコトハナイノテアリマス、ソレカラ又攻勢ニ出ルカ守勢ニ出ルカト云フ御話テアリマスカ是レハ向フノ出ヤウ如何ニ依ル戰略ノ問題ニナリマスカラ今カラ何トモ明言ハ仕兼ネル、即チ何處ノ國ヲ敵トシテ戰ハナクチヤナラヌト云フコトカ先決問題ニナツテ參リマス、又其時ノ情勢如何ト云フコトヲモ考ヘナクチヤナラヌ、今日戰略上ニ關シテ攻勢ニ出ル守勢ニ出ルト云フ方針ノ明言ハ致シ兼ネルノテアリマス云々

右ハ第四十三回帝國議會ノ協賛ヲ經大正九年八月一日裁可同日公布セラレタリ

大正九年度歲入歲出總豫算追加、甲號(歲出臨時部)海軍省所管中、

第六款 軍備補充費 金八千九百三十九萬千二百二十四圓

第一項 軍艦製造費 金八千九百三十九萬千二百二十四圓

同總豫算追加、乙號(繼續費)海軍省所管中、

軍備補充費

金十億四百八十四萬千九百七十五圓

既定總額

金七億六千百十一萬二千五百十二圓

追加額

計金十七億六千五百九十五萬四千百二十七圓

内

金五億九千六百八萬四百四圓

大正八年度迄支出額

金十一億六千九百八十七萬三千七百二十三圓

大正九年度以降支出額

此改定年額左ノ如シ

大正九年度

金一億九千四百八十二萬五千七百三十三圓

款軍備補充費

金一億九千四百八十二萬五千七百三十三圓

項軍艦製造費

大正十年度

金一億六千八百二十五萬千二百四十七圓

款軍備補充費

金一億六千八百二十五萬千二百四十七圓

項軍艦製造費

大正十一年度

金二億九十二萬五千六百五十九圓

款軍備補充費

金二億九十二萬五千六百五十九圓

項軍艦製造費

大正十二年度

金一億五千四百九十三萬四千六百三十四圓

款軍備補充費

金一億五千四百九十三萬四千六百三十四圓

項軍艦製造費

大正十三年度

金一億九百八十一萬千四百四十四圓

款軍備補充費

金一億九百八十一萬千四百四十四圓

項軍艦製造費

大正十四年度

金一億千二百五萬四千七百九十四圓

款軍備補充費

金一億千二百五萬四千七百九十四圓

項軍艦製造費

大正十五年度

金一億千三百六十九萬二千八百五十七圓

款軍備補充費

金一億千三百六十九萬二千八百五十七圓

項軍艦製造費

大正十六年度

金一億千五百三十七萬七千三百五十五圓

款軍備補充費

金一億千五百三十七萬七千三百五十五圓

項軍艦製造費

第四十二節 大正九年度軍艦製造費追加

(物價騰貴ニ依リ三千七百六萬六千七百五圓追加一成

立

製艦用材料ノ暴騰並ニ職工賃金ノ昂上ニ依リ工事費ノ不足ヲ告クルニ至リタルヲ以テ軍備補充費(款)軍艦製造費(項)既定繼續費大正九年度年割額ニ三千七百六萬六千七百五圓ヲ追加スルノ

案ヲ第四十四回帝國議會(大正九年十二月二十七日開會)ニ提出シ其協賛ヲ經大正十年三月二十八日裁可公布セラレタリ

第四十三節 大正十年度軍艦製造費追加

(物價騰貴ニ依リ一億五百五萬百十二圓追加ニ成立)

物價騰貴ニ依リ軍艦製造費既定繼續年割額ニ不足ヲ生スルヲ以テ大正十年度ニ於テ一億五百五萬百十二圓ヲ追加スルノ必要ヲ認メ之ヲ同年度ノ年割額ニ合算シ即チ大正十年度軍備補充費軍艦製造費ヲ二億七千三百三十萬千三百五十九圓トシ左ノ如ク第四十四回帝國議會(大正九年十二月二十七日開會)ニ提出セリ

既定繼續費大正十年度年割額 一六八、二五一、三四七

物價騰貴ニ依ル既定繼續費ノ追加 一〇五、〇五〇、一一二

計 二七三、三〇一、三五九

大正十年度歲入歲出總豫算甲號歲出臨時部(抄錄)

海軍省所管

第一款 軍備補充費 金二億七千三百三十萬千三百五十九圓

第一項 軍艦製造費 金二億七千三百三十萬千三百五十九圓

(要求書抄錄)

本費ハ明治四十四年度ヨリ大正十六年度ニ亘ル繼續費ニシテ物價騰貴ノ爲メ更ニ一億五百五萬百十二圓ヲ本年度年割額ニ追加シ總額十八億七千百萬四千二百三十九圓トス
(編者註)本文要求書説明中ニアル總額十八億七千百萬四千二百三十九圓ニハ前節ニ載スル大正九年度物價騰貴追加額三千七百六萬六千七百五圓ヲ含マス(同時ニ同一議會ニ提出セルヲ以テ未タ本説明中ニハ掲タルコト能ハサリシニ由ル)故ニ此追加額ヲ合スレハ總額十九億八百七萬九百四十四圓トナル

右ハ第四十四回帝國議會ノ協賛ヲ經大正十年三月二十九日裁可公布セラレタリ

第四十四節 軍備補充費設定以後ニ於ケル同費豫算ノ更訂及支出経過ノ概要

軍備補充費ハ明治四十四年度ニ於テ設定セラレタル爾來屢々更訂ヲ經タルコトハ既ニ前數節ニ於テ記述セルカ如シ今通覽ニ便センカ爲メ其更訂及支出ノ経過ニ就キ左ニ之ヲ概叙スル所アラントス

軍備補充費(款)

一、明治四十四年度ニ於テ之ヲ設定シ明治三十六年度以降ノ軍艦製造及建築費ノ(款)豫算總額九千九百八十六萬二百九十七圓十四錢、明治四十年度以降ノ艦艇補足費ノ(款)豫算總額六千四百七萬七千二百九十一圓整備費ノ(款)豫算總額一億千百五十七萬千百五十六圓、補充艦艇費ノ(款)

豫算總額七千六百五十七萬七千二百二圓ノ(四款)合計豫算三億五千二百八萬五千八百四十六圓十四錢ヲ既定總額トシ之ニ八千二百二十二萬三千百七十圓ヲ追加シテ基本額ヲ四億三千四百三十萬九千十六圓十四錢ト爲シ右ノ内明治四十三年度迄ノ支出額即チ軍艦製造及建築費五千三百三十一萬四千六十六圓十四錢、艦艇補足費四千八百二十萬四千八百六十三圓、整備費四千八十五萬八千百六十二圓、補充艦艇費四千三百二十五萬八千三百四十四圓ノ合計一億八千五百六十三萬五千四百三十五圓十四錢ヲ差引キ該四款ノ明治四十四年度以降支出スヘキ額即チ軍艦製造及建築費四千六百五十四萬六千二百三十一圓、艦艇補足費千五百八十七萬二千四百二十八圓、整備費七千七十一萬二千九百九十四圓、補充艦艇費三千三百三十一萬八千七百五十八圓ノ合計一億六千六百四十五萬四百十一圓ニ今回軍備補充費設定ニ伴ヒ新ニ追加ノ八千二百二十二萬三千百七十圓ヲ合シタルモノニ二億四千八百六十七萬三千五百八十一圓ヲ以テ明治四十四年度以降ノ支出額トス而シテ其繼續年度ヲ同年度ヨリ四十九年(大正五年)度ニ亘ル六箇年度トシ各其年額ヲ定メタリ

二、明治四十五年(大正元年)度ニ於テ同年度及四十九年(大正五年)度ノ年割額ヲ改定ス

三、大正二年度ニ於テ既定總額ニ六百萬圓ヲ追加シ同年度ノ年割額ヲ改定ス

四、大正三年度追加豫算ニ於テ六百五十二萬六千圓ヲ追加ス

五、大正四年度追加豫算ニ於テ既定總額ニ九千三百九十四萬六千九百十四圓ヲ追加シ繼續年度

ヲ大正七年度迄延長シ且ツ四年度以降ノ年割額ヲ改定ス

六、大正五年度ニ於テ既定總額ニ四千三百二十三萬八百九十九圓ヲ追加シ繼續年度ヲ大正八年度迄延長シ且ツ五年度以降ノ年割額ヲ改定ス

七、大正六年度追加豫算ニ於テ既定總額ニ二億六千百五十二萬千百六十圓ヲ追加シ繼續年度ヲ大正十二年度迄延長シ且ツ六年度以降ノ年割額ヲ改定ス

此時軍備補充費豫算總額ヲ六億五千九百八十九萬八千五百五十四圓ト更訂セリ此計算ハ最初本費設定ノ當時併算セル軍艦製造及建築費、艦艇補足費、整備費、補充艦艇費ノ四款ノ明治四十三年度迄ノ支出額一億八千五百六十三萬五千四百三十五圓十四錢ハ全ク本費設定以前ノモノニ係ルヲ以テ之ヲ本費ヨリ控除スルヲ至當トシ本費設定ノ時繼承セル右四款ノ明治四十四年度以降ニ屬スル費額一億六千六百四十五萬四百十一圓ト其際追加セル八千二百二十二萬三千百七十圓、大正二年度追加額六百萬圓、大正三年度追加額六百五十二萬六千圓、大正四年度ニ於テ追加セルモノ九千三百九十四萬六千九百十四圓、大正五年度ニ於テ追加セルモノ四千三百二十三萬八百九十九圓ヲ合シ既定總額ヲ三億九千八百三十七萬七千三百九十四圓トシ之ニ今回追加セル二億六千五百六十圓ヲ併算シ即チ軍備補充費設定(明治四十四年度以後ニ屬スル總額六億五千九百八十九萬八千五百五十四圓ト爲ル)次第ナリ

尙ホ大正六年度ニ於テ物價騰貴ニ伴フ増費ノ爲メ第四十議會ノ協賛ヲ經テ同年度豫算ニ六百三十二萬二千六百八十二圓ヲ追加セリ

八、大正七年度ニ於テ既定總額ニ三億五十四萬八千四百三十七圓ヲ追加シ(同時ニ水陸設備費ヲ

別個ノ款ト爲シ且ツ造船造兵及修理費ヲ大正七年度以降準備軍需品費ニ組替ノ爲メ軍備補充費既定總額ヨリ四千四百五十一萬三千百十一圓ヲ減少ス)七年度以降ノ年割額ヲ改定ス此時軍備補充費豫算總額ヲ九億千五百九十三萬三千八百八十一圓ト更訂セリ此計算ハ本款中ノ水陸設備費ノ項ヲ本款ヨリ分離シテ別ニ一款ト爲スタメ四千百六萬六千百十一圓ヲ減少シ且ツ本款中ノ造船造兵及修理費ノ項ニ於ケル大正七年度以降ニ屬スル既定年割額ヲ準備軍需品費ノ款ニ組替ノ爲メ三百四十四萬七千圓ヲ減少シ即チ軍備補充費既定總額六億五千九百八十九萬八千五百五十四圓(大正六年度物價騰貴追加額ハ算入セス其事由ハ第十ノ説明ニ詳ナリ)中ヨリ控除スル額四千四百五十一萬三千百十一圓ノ處今回新ニ本費ニ三億五十四萬八千四百三十七圓ヲ追加セルニ由ル

尙ホ大正七年度ニ於テ物價騰貴ニ伴フ増費ノ爲メ同年度豫算ニ三千五十三萬四千四百五十五圓ヲ追加セリ

九大正九年度豫算ハ第四十二議會衆議院解散ノ爲メ成立ニ至ラス前年度豫算施行ノコトト爲リシカ同年七月開會ノ第四十三議會ノ協賛ヲ經テ本費既定總額ニ七億六千百十一萬二千五百十二圓ヲ追加シ且ツ繼續年度ヲ大正十六年度迄延長シ各其年割額ヲ改定セリ

此時軍備補充費豫算總額十七億六千五百九十五萬四千百二十七圓ト爲レリ此計算ハ大正七

年度ノ豫算總額九億千五百九十三萬三千八百八十圓ニ大正六年度物價騰貴追加額六百三十
二萬二千六百八十二圓(此追加額ハ大正七年度總豫算ト同時ニ提出シ同一議會ノ協賛ヲ經タ
ルモノナルヲ以テ當時ノ豫算總額ニハ計上セラレサリキ)及大正七年八年兩年度ノ物價騰貴
追加額(前出ヲ合シ既定總額十億四百八十四萬千九百七十五圓ノ處今回新ニ七億六千百十一
萬二千百五十二圓ヲ追加セルニ由ル

尙ホ第四十四議會ノ協賛ヲ經テ物價騰貴ニ伴フ増費トシテ大正九年度基本年額一億九千四
百八十二萬五千七百三十三圓ニ三千七百六千七百五圓ヲ追加セリ

十一、大正十年度ニ於テ物價騰貴ニ伴フ増費ノ爲メ第四十四議會ノ協賛ヲ經テ大正十年度既定
年額一億六千八百二十五萬千二百四十七圓ニ一億五百萬百十二圓ヲ增加シ同年度年額ヲ
二億七千三百三十萬千三百五十九圓ニ更訂セリ

十二、以上更訂ヲ經タル軍備補充費總額十九億四千四百十萬百九十八圓ニシテ此內水陸設備費
ハ大正七年度ニ於テ之ヲ本費ヨリ分離シ全部別個ノ款ト爲シ(前出本費ヨリノ控除額四千百
六萬六千百十一圓トアリ而シテ別表ノ本款ノ年度割水陸設備費ノ項ノ總額ハ三千六百二萬
九千二百五十四圓トアレトモ是ハ大正六年度迄ノ同項支出額ヲ示シタルモノニシテ當時同
項ハ尙ホ七八九ノ三箇年度繼續費アリシヲ以テ本款ヨリ分離セル額ハ實際明治四十四年度
以降全額四千百六萬六千百十一圓ナリキ)且ツ大正七年度ニ於テ同年度以降ニ屬スル造船造
兵及修理費ヲ準備軍需品費ニ組替ヘタルヲ以テ差引計算スルトキハ軍備補充費ノ款ニ於テ

總額十九億八百七萬九千四十四圓ナリトス而シテ本款中更ニ造船造兵及修理費ノ項ニ屬スル費額六千六十一萬六千百二十一圓ヲ差引クトキハ總額十八億四千七百四十五萬四千八百二十三圓ト爲ル此額ハ悉皆本款中ニ於ケル軍艦製造費ノ項ノ額ナリトス

而シテ右軍艦製造費總額十八億四千七百四十五萬四千八百二十三圓ノ内明治四十四年度以降大正十年度迄ノ年割合計額十億四千六十五萬八千八十圓ニシテ大正十一年度以降十六年度迄ノ年割合計額八億六百七十九萬六千七百四十三圓ナリトス

軍備補充費豫算總額及年度割(更訂ヲ經タルモノ)

（款）軍備補充費	（項）軍艦製造費	（項）水陸設備費	（項）及造船造兵費
一、九四、一〇〇、一九六 円	一、八四七、四五四、八三六 円	三六、〇三九、三五四 円	六〇、六一六、一二二 円
四三、七二、一九四	三九、三三三、一四四	五三、二七、四九四	九、一三一、五〇六
四九、八三、一八一	三三、三三六、一六六	四八、五五、九三四	二、七九、六七一
五三、七六、三三六	三四、七八二、五六六	五五、六七、三三九	二、三九、四二一
五六、一九、八二三	四五、二九九、四四三	三七九四、四八七	九、〇八五、八八三
五六、七三、八五五	四五、九九五、九三六	八、三四八、九三〇	九、九九九、〇〇九
五〇、三六、四七三	四二、四六一、九五七	四、〇〇、〇〇〇	四、七九、五二五
六〇、八六、七九三	四五、九六八、五六〇	四、三五、〇八〇	二、四九、三二六
一〇五、五六、一八三	一〇五、五六、一八三	一、五三、七七、八三三	一、五三、七七、八三三
一五三、三七七、八三三	一五三、三七七、八三三	三三一、八九三、四三六	三三一、八九三、四三六

而シテ大正九年度迄ニ於ケル實際支出ノ經過ハ左ノ如シ

附

錄

附錄第一

製艦一覽表

一、此表ハ本編各節ニ記述スル所ノ各經費中、軍艦製造費及購入費ヲ摘錄シ之ニ對シ製造及購入セル艦船ノ主要ナルモノヲ掲ケ以テ經費ノ區分ト艦船整備ノ狀態トヲ一覽スルニ便ス。

明治十五年度以前ニ於テ經常費定額内ヲ以テ製造セル艦船ノ經費ハ本編各節ノ記述ニ省略セシカ其費額ノ集計ト艦船名トハ之ヲ本表中ニ加フルコトセリ是レ亦我海軍整備ノ一部ヲ成スモノニシテ蓋シ明治維新以降製艦事業ノ全豹ヲ窺知スルニ於テ缺ク可ラサル資料タレハナリ

二、同一艦船ノ經費ニシテ甲乙ニ跨ルモノアリ是等ハ各其欄内ニ註記シテ關聯スル所ヲ示ス
三、軍備補充費ノ軍艦製造費ハ大正十六年度迄ニ亘リ尙ホ未タ繼續中ニ屬ス故ニ之ニ對スル造船ハ大正十年十月迄ニ現ハレタルモノヲ舉ケ其餘ハ他日ノ經過ヲ待ツ

(製 艇 一 覧 表)

明治十五年度以前		年 度		經 費		製造又ハ購入セル艦船ノ主要ナルモノ	
明治十八年度	乃至十一年度	明治十六年度	乃至二十一年度	軍艦製造費(決算)	九、〇五五、六四四・七〇八	軍艦製造費(決算)	九、〇五五、六四四・七〇八
明治十九年度	乃至二十二年度	明治二十二年度	乃至二十三年度	特 別 費 中 造 船 費(決算)	一七、四三二、二二〇・三八六	特 別 費 中 造 船 費(決算)	一七、四三二、二二〇・三八六
明治二十一年度	乃至二十五年度	明治二十二年度	乃至二十五年度	軍艦製造費(決算)	一、五七三、六二九・五六六	軍艦製造費(決算)	一、五七三、六二九・五六六
明治二十四年度	乃至二十八年度	明治二十二年度	乃至二十九年度	兵器水雷費(決算)	七一〇、九四五・六九九	兵器水雷費(決算)	七一〇、九四五・六九九
明治二十九年度	乃至三十八年度	明治二十六年度	乃至三十一年度	軍艦製造費(決算)	五、三四六、一九八・五九二	軍艦製造費(決算)	五、三四六、一九八・五九二
明治三十六年度	乃至四十年度	明治二十六年度	乃至四十年度	軍艦購入費(決算)	三、二三六、九九〇・四〇九	軍艦購入費(決算)	三、二三六、九九〇・四〇九
明治三十七八年戰役	乃至四十三年度	明治二十七八年戰役	乃至四十三年度	臨時軍事費中 造船費及建築費中 造船費及造兵費(決算)	一九六、九九七、五四九・五一〇	吉野、須磨、龍田、水雷艇	前櫛秋津洲、大島ニ裝備スル兵器水雷ノ製造購買ニ要セルモノ ナリ
明治三十七八年戰役	乃至四十三年度	明治三十七八年戰役	乃至四十三年度	臨時軍事費中 造船費及建築費中 造船費及造兵費(決算)	四三、九一〇、二四八・八四七	和泉(二代)	秋津洲、大島、水雷艇
明治四十年度	乃至四十三年度	明治四十年度	乃至四十三年度	臨時軍事費中 艦艇補足費(決算)	一五、九八四、五九三・三六三	敷島、朝日、初瀬、三笠、八雲、吾妻(二代)、凌間(二代)、常 磐、出雲、磐手、笠置、千歲、高砂、新高、對馬、晉羽、千早 (二代)、宇治、伏見、隅田、驅逐艦、水雷艇 吾妻ハ東ヲ初代ニ算シ本櫛ニ出ツルモノヲ二代トセリ	敵島、松島、橋立、八重山、千島、赤城、千代田(二代)、滿珠、 千珠、水雷艇
明治四十年度	乃至四十三年度	明治四十年度	乃至四十三年度	艦艇補足費(決算)	三八、九二〇、八六八・三九六	香取、鹿島、伊吹、鳥羽ハ尙ホ軍備補充費ニ繼續ス	筑波(二代)、生駒、安藝、薩摩、鞍馬、利根(二代)、淀、最上、 比叡(二代)、驅逐艦、水雷艇 筑波(二代)、生駒、安藝、薩摩、鞍馬、利根(二代)、比叡 (二代)ハ尙ホ軍備補充費ニ繼續ス
明治四十年度	乃至四十三年度	明治四十年度	乃至四十三年度	補充艦艇費(決算)	三五、七〇七、〇三五・五八三	春日(二代)、日進(二代)	河内(二代)、攝津(二代)、筑摩、矢矧、平戸、金剛(二代)、驅 逐艦 河内(二代)、攝津(二代)、筑摩、矢矧、平戸、金剛(二代)、驅 逐艦 河内(二代)、攝津(二代)、筑摩、矢矧、平戸、金剛(二代)、驅 逐艦

附 錄 第 二

艦 船 年 表

一、此表ハ明治元年以降帝國海軍艦船籍ニ登録セラレタル艦船ヲ掲タルモノトス但シ潛水艦、特務艇及雜役船ハ之ヲ省ク

二、明治海軍創設當時ニ於ケル艦船及臨時購入又ハ戰利艦船ノ要目中詳カナラサルモノアリ是等今ニ於テ尙ホ文書ノ徵スヘキナシ故ニ本表中亦未詳ノ儘之ヲ載ス

三、艦船ヲ各年次ニ配スルハ其海軍所管ニ歸屬シタル年次ニ從フ但シ新ニ建造セルモノハ其竣工ノ年次ニ依ル

四、艦船名ヲ呼稱スル明治維新前ニ在テハ軍艦ト運送船トヲ問ハス一般ニ何々丸ト呼ヒ徳川幕府ノ末造稍々精銳ノ艦船ヲ備フルニ及ヒ何々號又ハ何々艦ト稱スルモノアルニ至リタルカ如シ故ニ明治海軍創始ノ頃ニ於テハ何々艦、何々丸、何々號、何々船等其稱呼一ナラサリシカ軍制其緒ニ就クニ迨ヒ軍艦ヲ某艦、運送船等ヲ某丸ト稱セリ、然ルニ明治二十一年九月二十一日某艦、某丸ト稱スルノ制ヲ廢シ單ニ其名ヲ稱スルコトト爲レリ但シ雜役船舟ハ尙ホ某丸等ト呼ヘリ

本表艦船名ヲ載スル皆ナ其入籍當時ノ稱呼ニ從フ

五、艦船ノ種類等級ヲ區別スルノ法海軍創設時代ニ在テハ其制未タ具ハラス唯タ各艦船ノ型式
 (スループ、コルベット、バーキ、ガンボート、デスパツチボート等ノ如シ)ト大小トニ應シ僅ニ之ヲ
 序列セルニ過キス、明治六年海軍概則並俸給表ヲ制定シ軍艦ノ等級ヲ乘組人員ニ從ヒ一等乃
 至七等(裝鐵軍艦ハ乘組人員ニ關セス三等以上ニ列ス)トシ尙ホ之ヲ大中小艦一二三等ヲ大艦、
 四五等ヲ中艦、六七等ヲ小艦トス而シテ大尉艦長タルトキハ四五等ノ艦モ之ヲ小艦ト稱スニ
 分チ運送船ヲ噸數ニ從ヒ四等乃至七等トス又此規則ニ於テ始メテ艦隊編制ノ法ヲ定メ且ツ
 常備艦、航海練習艦、繫泊練習艦、測量艦、豫備艦、艦裝艦、修復艦、旗艦(少將以上艦隊指揮トシテ乘組ム艦)指揮艦(大佐艦隊指揮トシテ乘組ム艦)等ノ稱謂ヲ示シタリ、而シテ明治二十二年ニ至リ軍艦條例及艦隊條例ノ發布ヲ見
 翌二十三年海軍艦船籍條例ヲ定メ艦船ヲ五種(戰鬪航海ノ役務ニ堪フル軍艦ヲ第一種、水雷艇
 ヲ第二種、戰鬪航海ノ役務ニ堪ヘサル軍艦ヲ第三種、運送船曳船小蒸汽船ヲ第四種、倉庫船荷船
 雜船ヲ第五種トス)ニ區別シニ十六年水雷艇ヲ其排水噸數ニ由リ一等乃至三等ニ分チ、二十九
 年更ニ海軍艦船條例ヲ定メ艦船ヲ四種、第一種軍艦、第二種軍艦、水雷艇、雜役船舟ニ區分セリ、然
 ルニ明治三十一年ニ至リ軍艦及水雷艇ノ類別等級ヲ定メ軍艦ヲ戰艦、巡洋艦、海防艦、砲艦、通報
 艦、水雷母艦ノ六類ニ、水雷艇ヲ驅逐艇、水雷艇ノ二類ニ區別シ尙ホ排水量ニ依リ戰艦ヲ一、二等、
 巡洋艦ヲ一、二、三等、海防艦ヲ一、二、三等、砲艦ヲ一、二等、水雷艇ヲ一、二、三等ニ分テリ是レ蓋シ類別
 法ニ一紀元ヲ畫スルモノニシテ現今ノ制度亦之ニ起因スルモノナリ、三十三年右水雷艇ノ類
 別中ヨリ驅逐艇ヲ除キ軍艦類別末項水雷母艦ノ次ニ驅逐艦ノ一類ヲ加ヘタリ、三十八年艦船

ノ種別ヲ軍艦、驅逐艦、水雷艇、潜水艇、運送船、病院船、工作船、雜役船舟ノ八種ニ分チ(潜水艇始メテ現ハル)其種別中ニ於テ更ニ軍艦ノ類別等級ヲ戰艦、巡洋艦(一、二、三等)、海防艦(一、二、三等)、砲艦(一、二等)、通報艦、水雷母艦ニ、水雷艇ノ等級ヲ(一、二、三、四等)ニ改メタリシカ、大正元年軍艦ノ類別等級ヲ戰艦、巡洋戰艦、巡洋艦(一、二等)、海防艦(一、二等)、砲艦(一、二等)トシ、驅逐艦ノ等級ヲ(一、二、三等)トシ、水雷艇ノ等級ヲ(一、二等)トセリ(巡洋戰艦始メテ現ハル)大正五年艦船令ヲ制定シ艦船ヲ軍艦、驅逐艦、水雷艇、潛水艇、敷設船、工作船、運送船、雜役船ニ種別シ敷設船、工作船、運送船ヲ總稱シテ特務船ト謂フ又潛水艇ニ等級(一、二等)ヲ付セリ、大正八年艦船令ヲ改定シ艦船ヲ軍艦、驅逐艦、潛水艇、水雷艇、敷設船、工作船、運送船ヲ總稱シテ特務船ト唱フルコト尙ホ舊ニ依ル)又潛水艦ノ等級ヲ(一、二、三等)トセリ、大正九年艦船令中ノ改正ニ伴ヒ艦船ノ種別ハ軍艦、驅逐艦、潛水艦、水雷艇、特務艦、特務艇、雜役船ト爲リ、又大正元年所定ノ軍艦ノ類別中、巡洋艦ノ次ニ航空母艦、水雷母艦、敷設艦ヲ加ヘ、且ツ特務艦ノ類別ヲ工作艦、運送艦トシ特務艇ノ類別等級ヲ敷設艇(一、二、三等)、掃海艇(一、二等)、潛水艦母艇トス、而シテ大正十年特務艦類別中、運送艦ノ次ニ碎冰艦ヲ加ヘタリ、斯クテ現今ニ於ケル艦艇ノ種別、類別、等級ノ標準ハ左ノ如シ

(種
別)

(類
別)

(等
級)

(計
畫
排
水
量)

軍
艦

巡
洋
戰
艦

特水潛驅
務雷水逐
艇艦艇艦

掃敷碎運工
海設水送作
艇艇艦艦

砲海敷航巡
防雷空母洋
艦艦艦艦

二一三二一
等等等等等
二一三二一三二一
等等等等等等等
二一
等等

五五四八八
百
百百百百未
未未未未未
未以未未未未
滿上滿上上

百百水水上
二二上子上
十五未千
百滿五未
未以未未
滿上滿上上

水水水六千千
百未未滿
未六未以
未未未未
滿上滿上上

八八七七
百百千千
未未未未
未未未未
滿上滿上上

七七
千千
未未
未未

潛水艦母艇

雜役船

六、本表軍艦ノ部ニ於ケル種類別ノ記載ハ皆ナ其入籍當時ノモノニ依ル而シテ明治十四年以前ノモノハ單ニ軍艦ト運送船トノ種別ヲ示スニ止メ十五年以後ノモノハ類別ヲ掲ク

入籍當時ニ於ケル類別ハ其後類別標準ノ更改ト各艦ノ艦齡トニ伴ヒ自然ニ變動ヲ來タセルモノアリ(巡洋艦ニシテ巡洋戰艦ニ列シ戰艦、巡洋戰艦、巡洋艦ニシテ海防艦ニ入ル等ノ如シ、又海防艦トシテ我海軍ノ新造ニ係ルモノハ明治二十四年乃至二十七年嚴島、松島、橋立ノ三艦アルノミ其後ニ於ケル海防艦ハ概ネ他ノ老艦ヲ以テ之ニ編入スルヲ例トス而シテ嚴島、松島、橋立ノ如キモ新造後數年ナラスシテ巡洋艦ノ分類ニ入り松島ハ四十一年除籍ト爲リ嚴島、橋立ハ大正元年復タ海防艦ニ編入セラレタリ)是等ノ經緯ヲ叙スルハ煩雜ノ嫌アルヲ以テ本表之ヲ省略セリ

明治六年所定ノ軍艦及運送船ノ等位、二十五年及二十九年所定ノ軍艦種別、三十一年以後所定ノ軍艦類別中ノ各等級ニ關スル閱歷等表示ニ便ナラサルモノ本表亦其記註ヲ省ケリ

艦船年表（其一）

船

之部

(明治海軍創設時代ニ於ケル運送船ノ軍艦トニ併シテ通商スルノ側ニ從ヒ始ク此部ニ收載ス其近代ニ屬スルモノハ特務艦ノ部ニ出ツ

年三明治				年二明治				年一明治			
虹	乾	日	第二丁卯	龍	第一丁卯	春	船	長	千代田	東	快
橋	行	進	艦	驥	艦	日	艦	阪	形	阪	飛
船	艦	艦	艦	艦	艦	船	艦	鯨	艦	九	風
運送船	軍艦	軍艦	軍艦	軍艦	軍艦	軍艦	軍艦	運送船	軍艦	九	龍
木	木	木	木	木	木	鐵帶製	木	鐵	木	甲木鐵製	隼
墨	三	六	三	五	三	二、三	一	圓	糸	三	丸
一	九	一	一	一	一	一	一	一	文久	二、五、七	一
一	一	一	一	一	一	一	一	一	文久	三、七	元治
萬	安政	明治	慶應	慶應	明治	文久	慶應	元治	元治	一八六四年	一八六年收容
延	一八五九年	一八六年	一八六年	一八六年	一八六年	一八六年	二、三	一八六年	一八六年	一八六年	同治四年七月除籍
〇	〇	二	三	三	三	三	一	元治元年	元治元年	一八六年	同治四年二月詳
清	英	蘭	英	英	英	英	英	佛	石川島	米	米
國	國	國	國	國	國	國	國	國	國	國	國
同明治三年七月六日上總豐津藩獻納	同明治三年六月九日鹿兒島藩獻納	同明治三年六月二十日除籍	同明治三年五月山口藩獻納	同明治三年五月山口藩獻納	同明治三年五月山口藩獻納	同明治三年五月熊本藩獻納	同明治二年正月米國ヨリ購入	同明治二年正月米國ヨリ購入	同明治二年正月米國ヨリ購入	同明治元年八月收容	同治元年八月收容
同明治三年七月六日於テ破壞	同明治三年六月九日於テ沈沒	同明治三年六月二十日除籍	同明治三年五月山口藩獻納	同明治三年五月山口藩獻納	同明治三年五月山口藩獻納	同明治二年五月熊本藩獻納	同明治二年正月米國ヨリ購入	同明治二年正月米國ヨリ購入	同明治二年正月米國ヨリ購入	同治元年八月收容	同治元年八月收容

明治六年		明治五年		明治四年		明治三年		行速丸	
第二利根丸	第一利根丸	蒼龍丸	練習艦	東筑肇鳳孟雲	揚帆春翔	軍艦	軍艦	軍艦	軍艦
運送船	内海御召船	御内召船	運送船	波敏	艦	軍艦	練習艦	軍艦	軍艦
一隻	一隻	一隻	四隻	丸	艦	艦	艦	艦	艦
木	木	木	一隻	木	木	木	木	木	木
元	吉	丸	一隻	一、四〇	一、八	一、八	三六	三七	三九
明治四、五、一	明治三、三、一	明治三、二、一	明治三、二、一	一、四〇	一、八	一、八	三六	三七	三九
明治六、三、一	明治五、三、一	明治五、二、一	明治五、二、一	一、四〇	一、八	一、八	三六	三七	三九
明治七、三、一	明治六、二、三	明治五、一、三	明治五、一、三	一、四〇	一、八	一、八	三六	三七	三九
造横須賀	造横須賀	造横須賀	造横須賀	一、四〇	一、八	一、八	三六	三七	三九
明治十九年十二月除籍	明治十九年十二月除籍	明治十九年四月二十二日除籍	明治十五年九月二十四日海軍省ニ預ケラレ六年	明治四年六月英人ヨリ購入、春風丸ト名ケ風	明治四年六月英人ヨリ購入、春風丸ト名ケ風	明治四年六月英人ヨリ購入、春風丸ト名ケ風	明治四年五月山口藩獻納	明治九年十月廿一日紀州阿田和浦ニ於テ沈没	一八六〇年清國
初名第二利根川丸	初名第一利根川丸	十九年四月二十日北海道ニ於テ沈沒	十一年三月二日付セラル	後チ練習艦トス、十九年三月十五日除籍	同明治四年七月英人ヨリ購入	同明治四年六月山口藩獻納	同明治二十年十月八日除籍	同明治二十年五月佐賀藩獻納	同治四年七月靜岡藩獻納

年一十治明	年十治明	年九治明	年八治明	年七治明
比 叡 艦	金 剛 艦	扶 桑 艦	清 輝 艦	函 容 丸
軍 艦	軍 艦	軍 艦	軍 艦	軍 艦
木鐵 皮骨	木鐵 皮骨	鐵鐵 帶製	練習 艦	運送 船
二、 四	三、 七	三、 七	九明治 六、二、三	明治 四、九、一
三明治 八、九、四	三明治 八、九、四	明治 九、六、三	明治 六、二、三	明治 元、一
明治 二〇、六、二	明治 二〇、四、一	明治 九、三、二	明治 八、三、一	明治 二、一
英 國	英 國	嘉 永 三、一	横 須 賀	英 國
國	國	英 國	造船 所	國
明治四十四年四月一日除籍	明治四十一年四月一日除籍	明治二十一年十二月七日駿河灣ニ於テ破壊 年三月九日除籍	明治二十二年二月五日開拓使ヨリ受領 初メ運送船、後チ練習艦ト爲ル、明治二十六 年四月二十四日工部省ニ付ス	明治八年三月二十二日開拓使ニ付ス 明治十年二月五日開拓使ニ付ス 明治八年十二月購入 明治十年四月二十四日工部省ニ付ス

明	年八十治明	年七十治明	年四十治明	年三十治明	年一十治明
浪速艦	巡洋艦	天龍艦	海門艦	館山艦	磐城艦
巡洋艦	巡洋艦	巡洋艦	巡洋艦	迅鯨艦	天城艦
一隻	一隻	一隻	一隻	軍艦	軍艦
鋼	巡洋艦	木	木	木	木
三、七〇	巡洋艦	一、五七	一、五九	一、五七	一、五七
明治二七、三、三	巡洋艦	明治二六、九、九	明治二〇、九、九	明治二〇、九、九	明治二〇、九、九
明治一八、三、二	巡洋艦	明治一六、八、八	明治一六、八、八	明治一六、九、九	明治一六、九、九
明治一九、二、一	巡洋艦	明治一八、三、五	明治一七、三、三	明治一四、八、五	明治一四、八、五
英國	造橫船須賀所	造橫船須賀所	東京川崎造船所	横須賀	横須賀
明治四十五年七月十八日北海道ニ於テ擱坐沈没	明治三十九年十月二十日除籍	雷ニ觸レ沈没	初名第一回漕丸、明治十六年六月若水兵練習用ニ充テ後チ館山ト改名、明治二十九年九月二十六日除籍	明治二十六年十二月二日除籍	明治三十八年六月十四日除籍
			同明治三十六年六月購入		
			同明治三十九年五月二十五日除籍		

年二十二治明		年一十二治明				年十二治明		年十九治	
巡洋艦	高愛雄(代三)宿	砲艦	巡洋艦	砲艦	鳥海	摩滿	武藏(代二)	葛城	千穂艦
一隻	鐵銅皮骨	鐵銅皮骨	巡洋艦	練航艦	砲艦	巡洋艦	大和艦	千穂艦	敵傍艦
	一、四四	一、四四	二隻	二、二一	二、二一	二隻	二隻	二隻	三隻
	明治二九、七、七	明治二九、七、七		明治二九、八、五	明治二九、八、五		明治二九、四、一	明治二九、四、一	明治二九、五、三
	明治三、一、三	明治三、一、三		明治二九、九、五	明治二九、九、五		明治二九、二、六	明治二九、二、六	明治二九、三、三
	明治三、二、六	明治三、二、六		明治二九、八、二	明治二九、八、二		明治二九、一、一	明治二九、一、一	明治二九、一、一
	造橫船須所賀	造橫船須所賀		船川所島	船野所濱		船野所濱	船野所濱	船野所濱
	明治三十八年六月十五日除籍	明治四十四年四月一日除籍		明治四十年五月十六日除籍	明治四十年五月十六日除籍		明治四十年五月十六日除籍	明治四十年五月十六日除籍	明治四十年五月十六日除籍
				明治二十九年九月二十六日除籍	明治二十九年九月二十六日除籍		明治二十九年九月二十六日除籍	明治二十九年九月二十六日除籍	明治二十九年九月二十六日除籍
				明治四十一年四月一日除籍	明治四十一年四月一日除籍		明治四十一年四月一日除籍	明治四十一年四月一日除籍	明治四十一年四月一日除籍

ノ日獨戰役ニ於テ大正三年十月十七日敵水雷艇
ノ襲撃ヲ受ケ沈没
明治十九年十月十八日佛國ヲ發シ日本へ回航
ノ途中踪跡不明トナリ、二十年十月十九日亡
没ト認定

大正二年四月一日除籍

年六十二治明		年五十二治明		年四十二治明		年三十二治明		年二十二治明	
橋立	吉野	砲海防艦	松島	千代田	嚴島	赤城	八重山	砲艦	砲艦
海防艦	巡洋艦	巡洋艦	海防艦	巡洋艦	海防艦	通報艦	通報艦	砲艦	砲艦
鋼	一隻	一隻	砲艦	巡洋艦	海防艦	一隻	一隻	一隻	一隻
四、三六	四、二〇	三、一〇	四、二〇	四、二〇	四、二〇	四、二〇	四、二〇	四、一九	四、一九
六明治三、八、六	明治三、三、二	明治三、三、一	明治三、三、一	明治三、三、一	明治三、一、七	明治三、一、七	明治三、三、二	明治三、三、二	明治三、三、二
六明治三、八、六	明治三、三、二	明治三、三、一	明治三、三、一	明治三、三、一	明治三、一、七	明治三、一、七	明治三、三、二	明治三、三、二	明治三、三、二
造橫船須賀	英國	英國	佛國	佛國	佛國	大正八年四月一日除籍	小工場	横須賀所	明治四十四年四月一日除籍
日露戰役ニ於テ明治三十七年五月十五日春日	日露戰役ニ於テ明治三十七年五月十八日赤城ト衝突沈没	日露戰役ニ於テ明治三十七年五月十八日赤城ト衝突沈沒	明治四十一年四月三十日澎湖島ニ於テ爆沈	明治二十五年十一月三十日愛媛縣堀江沖ニ於テ英國商船下衝突沈沒	明治二十五年十一月三十日愛媛縣堀江沖ニ於テ英國商船下衝突沈沒	明治四十四年四月一日除籍	小工場	横須賀所	明治四十四年四月一日除籍

四

明治二十八年六月五日帝國軍
日清戰役戰利、同年七月七日除籍

國守府造船横須賀

渭雲

砲艦

鋼

五八

八

一

一

一

清國

明治二十九年四月二十二日帝

敏捷磨

巡洋艦

隻

二、毫

一

明治三、八、六

明治三、九

明治三、一

部

守府造船

日清戰役戰利、同年九月二十六日除籍

明治三十七年五月十五日敵ノ

巡洋艦

隻

一

未詳

一

一

一

一

一

富士(代二)
島橋

戰艦

隻

三、毫

一

明治三、八、十

明治三、三、三

明治三、八、五

明治三、九、九

英

國

明治三十七年五月十五日敵ノ

戰艦

隻

一

水雷母艦

一

一

一

一

一

笠高砂

巡洋艦

隻

四、空

一

三、毫

明治三、八、元

明治三、五、二

明治三、五、七

米英

國

明治三十七年五月十五日敵ノ

巡洋艦

隻

二

一

ノ日露戰役ニ於テ明治三十七年十二月十二日敵
水雷ニ觸レ沈没

英國ヨリ購入、初メ豊橋丸ト號ス、明治三十
八年十二月一日軍艦ト定ム、大正三年四月一日
除籍

大正五年十一月五日除籍

年四十三治明		年三十三治明				年二十二治明			
戰艦	千磐初早(代三)手瀬	巡戰艦	出八朝吾妻(代二)雲日雲島	通報艦	常磐古石間(代二)歲				
一隻	通報艦巡洋艦戰艦	巡洋艦	巡洋艦	巡洋艦	巡洋艦	巡洋艦	巡洋艦	巡洋艦	
	鋼鋼鋼	三隻	鋼鋼鋼	四隻	鋼鋼鋼	四隻	鋼鋼鋼	四隻	
	一、五 九、六	五、四	五、六 九、七	五、六 九、八	五、六 九、八	五、六 九、八	五、六 九、八	四、九 九、八	
	三明治三、一、二、一 明治三、一、二、一	八明治三、一、二、一 明治三、一、二、一	明治三、一、二、一 明治三、一、二、一	明治三、一、二、一 明治三、一、二、一	明治三、一、二、一 明治三、一、二、一	明治三、一、二、一 明治三、一、二、一	明治三、一、二、一 明治三、一、二、一	三明治三、一、二 明治三、一、二、一	
	明治三、一、二、一 明治三、一、二、一	明治三、一、二、一 明治三、一、二、一	明治三、一、二、一 明治三、一、二、一	明治三、一、二、一 明治三、一、二、一	明治三、一、二、一 明治三、一、二、一	明治三、一、二、一 明治三、一、二、一	明治三、一、二、一 明治三、一、二、一	米國	
	造橫船須廠賀國	英	獨	英	英	英	英	英	
	國	國	國	國	國	國	國	國	
水雷戰役ニ於テ明治三十七年五月十四日敵ノ 日露戰役ニ於テ明治三十七年五月十五日敵ノ									

明治三十七年				明治三六年				明治三五年				明治三四年						
見		沖		壹		石		巡		洋		音		春		日		
島	島	島	島	島	島	島	島	船	船	船	船	羽	馬	高	進	日 (代二)	日 (代二)	
海防艦	海防艦	戰	艦	戰	艦	戰	艦	巡洋艦	砲	砲	砲							
鋼	鋼	鋼	鋼	鋼	鋼	鋼	鋼	鋼	鋼	鋼	鋼	鋼	鋼	鋼	砲	砲	砲	
四、三六	四、三〇	九、三三	三、五六					七、〇〇	七、三六	七、三六	七、三六	七、三六	七、三六	七、三六	砲	砲	砲	
六明治元、五、一	五明治元、一、一	明治元、五、一	明治元、七、一	明治三、六、一	明治三、六、一	明治三、六、一	明治三、六、一	明治三、一、〇	砲	砲	砲							
明治元、五、一	明治元、五、一	明治元、五、一	明治元、五、一	明治三、五、一	明治三、五、一	明治三、五、一	明治三、五、一	明治三、一、〇	砲	砲	砲							
露	露	露	露	國	國	國	國	造	横	造	横	造	横	造	砲	砲	砲	
國	國	國	國	日本露戰役戰利、舊名アリヨークル、明治三十八年六月六日帝國軍艦ト定メ命名	日本露戰役戰利、舊名インペラートル、ニコライ一世、明治三十八年六月六日帝國軍艦ト定メ命名	日本露戰役戰利、舊名インペラートル、ニコライ一世、明治三八年五月一日除籍	日本露戰役戰利、舊名ゲネラル、アドミラル、アドミラルキシン、明治三十八年六月六日帝國軍艦ト定メ命名	大正六年七月二十五日大王崎近海ニ於テ擱坐破壊	明治三十六年十二月三十日購入	明治三十六年十二月三十日購入	明治三十六年十二月三十日購入	明治三十六年十二月三十日購入	明治三十六年十二月三十日購入	明治三六年十二月三十日購入	明治三六年十二月三十日購入	砲	砲	砲
日本露戰役戰利、舊名アリヨークル、明治三十八年六月六日帝國軍艦ト定メ命名	日本露戰役戰利、舊名インペラートル、ニコライ一世、明治三八年五月一日除籍	日本露戰役戰利、舊名ゲネラル、アドミラル、アドミラルキシン、明治三十八年六月六日帝國軍艦ト定メ命名	日本露戰役戰利、舊名ゲネラル、アドミラル、アドミラルキシン、明治三八年五月一日除籍	日本露戰役戰利、舊名ゲネラル、アドミラル、アドミラルキシン、明治三八年五月一日除籍	日本露戰役戰利、舊名ゲネラル、アドミラル、アドミラルキシン、明治三八年五月一日除籍	日本露戰役戰利、舊名ゲネラル、アドミラル、アドミラルキシン、明治三八年五月一日除籍	日本露戰役戰利、舊名ゲネラル、アドミラル、アドミラルキシン、明治三八年五月一日除籍	日本露戰役戰利、舊名ゲネラル、アドミラル、アドミラルキシン、明治三八年五月一日除籍	日本露戰役戰利、舊名ゲネラル、アドミラル、アドミラルキシン、明治三八年五月一日除籍	日本露戰役戰利、舊名ゲネラル、アドミラル、アドミラルキシン、明治三八年五月一日除籍	日本露戰役戰利、舊名ゲネラル、アドミラル、アドミラルキシン、明治三八年五月一日除籍	日本露戰役戰利、舊名ゲネラル、アドミラル、アドミラルキシン、明治三八年五月一日除籍	日本露戰役戰利、舊名ゲネラル、アドミラル、アドミラルキシン、明治三八年五月一日除籍	日本露戰役戰利、舊名ゲネラル、アドミラル、アドミラルキシン、明治三八年五月一日除籍	砲	砲	砲	

日露戰役戰利、舊名ノーラウキツク、明治三十九年八月二十日帝國軍艦ト定メ命名、大正二年四月一日除籍

伏見谷	通報艦	鋼	三,〇〇	明治三、一
砲艦	鋼	三,〇〇	元	明治三、三
通報艦	鋼	二	明治三、八	明治三、八
砲艦	鋼	一	明治三、一	明治三、一
通報艦	鋼	一	明治三、六	明治三、六

明	年二十四治明	年一十四治明	年十四治明	明治三十九年
薩摩	伊吹	最生駒	筑波(二)	戰海防艦
戰艦	巡洋艦	通報艦	巡洋艦	戰艦
鋼	一隻	巡洋艦	一隻	防艦
一九三	巡洋艦	通報艦	一隻	艦
八	鋼	鋼	鋼	艦
明治三、五、一、二、五	一、三〇	一、三〇	一、三〇	一、二
明治三、五、三	三、三〇	三、三〇	三、三〇	二
明治三、五、二、三	明治三、二、一	明治三、三、三	明治三、三、三	一
明治三、三、五	吳工廠	吳工廠	吳工廠	一
横須賀		造船所	造船所	一
		長崎三菱	神戶川崎	
				大正六年一月十四日橫須賀港ニ於テ爆沈

正大年六正大年		大正四年		大正三年		大正二年	
日向	戰艦	伊勢	山城	榛名	比叡(代)	金剛(代)	巡洋戰艦
戰艦	一隻	戰艦	戰艦	巡洋戰艦	海防艦	巡洋戰艦	巡洋戰艦
鋼		鋼	鋼	扶桑(代)	海防艦	海防艦	海防艦
三、四〇		三、五〇	三、六〇	大正一、二、三、四	大正四、四、九	大正三、八、四	大正三、八、六
三、大正四、五、六		三、大正四、五、六	三、大正四、五、六	明治三、七、八	明治三、七、八	明治三、一、三	明治三、一、七
大正六、一、三		大正五、二、三	大正六、三、五	大正四、二、八	大正四、二、八	大正三、一、三	大正三、一、七
大正七、四、三		大正六、三、五	大正六、三、五	吳工廠	神戶川崎造船所	横須賀工廠	英國
長崎三所菱		造船所	造船所	英國	長崎三所菱	初メ雑役船、駒橋丸ト號ス、大正三年八月十 日軍艦ト定ム	初メ運送船、若宮丸ト號ス、大正四年六月一 日軍艦ト定ム

中造製	年十正大				年九正大				年七八正大			
加賀	巡戰艦	大洋艦	木北艦	多陸艦	敷設艦	巡洋艦	戰球艦	勝磨艦	巡洋艦	天龍艦	田代艦	一戰艦
戰艦	四隻	一隻	一隻	一隻	一隻	一隻	一隻	一隻	二隻	巡洋艦	巡洋艦	一隻
鋼			鋼	鋼	鋼	鋼	鋼	鋼		鋼	鋼	
元、零			五、五〇	五、五〇	五、五〇	五、五〇	五、五〇	五、五〇		三、五〇	三、五〇	
三大正九、七、九			一大正七、八、六	一大正八、九、七	一大正九、七、六	一大正九、八、六	一大正九、七、六	一大正九、八、六		三大正五、一、一	三大正六、一、一	
大正二、一、七			一大正九、五、三	一大正九、七、五	一大正九、六、一	一大正九、八、二	一大正九、七、一	一大正九、八、二		大正五、〇、四、五	大正六、一、一	
造船所	神戶川崎	工橫須賀	造船廠	造船廠	造船廠	造船廠	造船廠	造船廠	吳工廠	工佐世保	工佐世保	工佐世保

初メ敷設船、大正九年四月一日軍艦ト定ム

製

翔鳳夕神川那加鬼阿由名五長愛高赤天尾紀土

武十宿雄城城
鶴翔代二代三張通內珂古怒隈良取鈴良
代二代三代二代三代二代二代二代二代二

戰艦巡洋艦巡洋戰艦巡洋戰艦巡洋艦巡洋艦巡洋艦巡洋艦巡洋艦巡洋艦巡洋艦巡洋艦巡洋艦巡洋艦巡洋艦巡洋艦

鋼 鋼 鋼 鋼 鋼 鋼 鋼 鋼 鋼 鋼 鋼 鋼 鋼 鋼 鋼 鋼 鋼

艦船年表（其二）

驅逐艦之部

驅逐艦ハ明治三十一年建造着手翌三十二年未竣別工セリモノア以テ
メトス當時ニフ駆逐艦トノ改正ニ依リ驅逐艦ヲ驅逐艦トシ水雷部
十三年六月二十ニノ類別ニ分離獨立ス、此部ニハ最初ヨリモノヲ網羅
艇ノ類別中ヨリ分離獨立ス、此部ニハ最初ヨリモノヲ網羅

年八十三治明		年六十三治明		年五十三治明		年三十三治明	
霞	有吹	朝	速	村	春	白	曉
四	隻					霞	一隻
霧	鳥	雨	雨			潮	三等
三等	三等	三等	三等			三等	鋼
鋼	鋼	鋼	鋼			三等	雲
元	元	元	毛	毛		三	三
元明治毛、九、元	明治毛、九、元	元明治毛、三、明治三、二、明治三、一、明治三、〇、三	明治毛、三、明治三、二、明治三、一、明治三、〇、一	明治毛、二、明治三、一、明治三、〇、一	明治毛、二、明治三、一、明治三、〇、一	明治三、一、明治三、一、明治三、一、明治三、一	明治三、一、明治三、一、明治三、一、明治三、一
明治毛、一〇、元	明治毛、一〇、元	明治毛、三、明治三、二、明治三、一、明治三、〇、一	明治毛、二、明治三、一、明治三、〇、一	明治毛、一、明治三、一、明治三、〇、一	明治毛、一、明治三、一、明治三、〇、一	明治三、一、明治三、一、明治三、一、明治三、一	明治三、一、明治三、一、明治三、一、明治三、一
明治毛、四、五	明治毛、四、五	明治毛、四、五	明治毛、九、八	造橫	造橫	英	英
吳	工廠	船須	船須	船須	船須	國	國
工廠	吳	廠賀	廠賀	廠賀	廠賀	國	國
		雷日露戰役ニ於テ明治三十七年九月三日敵ノ水 ニ觸レ沈没	明治四十四年十一月二十四日志摩國營塙附近	大正二年四月一日除籍		水雷ニ觸レ沈没	日露戰役ニ於テ明治三十七年五月十七日敵ノ水雷ニ觸レ沈没
							清國事變中、明治三十三年七月二十九日山東省南東岬角ニ於テ坐礁沈没

正 大		年五十四治明	年四十四治明	年二十四治明	四治明 年一十
松	柏	楠	梅	桂	楓 檵
二等	二等	二等	二等	二等	二等
鋼	鋼	鋼	鋼	鋼	鋼
交	交	交	交	交	交
三 大 正	三 大 正	三 大 正	三 大 正	三 大 正	三 大 正
三、一、 二、一、 三、一、 大正四、 二、四、 六	三、一、 二、一、 三、一、 大正四、 二、四、 六	三、一、 二、一、 三、一、 大正四、 二、三、 五	三、一、 二、一、 三、一、 大正四、 二、三、 五	三、一、 二、一、 三、一、 大正四、 二、三、 五	三、一、 二、一、 三、一、 大正四、 二、三、 五
船所 長崎 三菱造	船所 長崎 三菱造	船所 神戶川崎造	船所 神戶川崎造	船所 舞鶴工廠	船所 舞鶴工廠

年七正大	年六正大	年五正大	年四正大
楓 桑	磯 濱 檜 天 柳 時 津 風 風	桃	杉 浦 榆 桐
二等	一等 二等 二等 一等 一等	十一隻	風
鋼 鋼	鋼 鋼 鋼 鋼 鋼 鋼	二等	二等 二等 二等
八 三	一、三七 二、三七 八 三	鋼	鋼 鋼 鋼
三 大正 六、一〇、六	三 大正 五、三、五 五、三、一〇、一〇、一〇	三 大正 五、二、六	九 大正 三、二、四 大正 四、二、六
五 大正 七、二、三	三 大正 五、一〇、一〇 大正 六、二、西	大正 五、一〇、三	大正 四、一〇、四
七 大正 七、四、七	三 大正 五、一〇、一〇 大正 六、五、三、二	佐世保工廠	大阪鐵工所 英 國
佐世保工廠	船所 神戶川崎造	吳 工 廠	佐世保工廠 社浦賀船渠會

正 大				大 正 八 年				大 正 七 年			
梅 矢 峯 栗 榆 檻 椎 澤				谷 梨 竹 檻 楠 檩 江 風				櫛 椿 檜 檩 檃 風			
風 風				風 風				風 風			
二 等	一 等	一 等	二 等	二 等	二 等	二 等	一 等	一 等	二 等	二 等	二 等
鋼	鋼	鋼	鋼	鋼	鋼	鋼	鋼	鋼	鋼	鋼	鋼
一、 五〇	一、 五〇	一、 五〇	八〇	八〇	一、 五〇	一、 五〇	三 六	三 六	三 六	三 六	三 六
三 四	西	西	三 六	三 六	三 六	三 六	大正 七、一、 七	大正 七、一、 七	大正 八、一、 七	大正 六、一、 七	大正 七、一、 七
大正 八、三、 五	大正 七、八、 五	大正 八、三、 五	大正 七、三、 三	大正 八、九、 五	大正 八、三、 三	大正 八、三、 三	大正 八、三、 三	大正 八、三、 三	大正 八、三、 三	大正 八、一、 七	大正 九、一、 七
大正 九、四、 七	大正 九、四、 七	大正 九、四、 七	大正 九、三、 九	大正 九、三、 九	大正 九、三、 九	大正 九、三、 九	大正 九、三、 九	大正 九、三、 九	大正 九、三、 九	大正 九、三、 九	大正 九、三、 九
所 石 川 島 船 造	船 所 長 崎 三 菱 造	舞 鶴 工 廠	吳 工 廠	橫 須 賀 工 廠	吳 工 廠	船 所 長 崎 三 菱 造	神 戶 川 崎 造	船 所 長 崎 三 菱 造	舞 鶴 工 廠	佐 世 保 工 廠	吳 工 廠

造

製

野沼蓬波菱葦蓮蓼第一驅逐艦第三驅逐艦第五驅逐艦第七驅逐艦第九驅逐艦第二驅逐艦第六驅逐艦第四驅逐艦

風 風 風

二等 二等 二等 一等 一等 一等 一等 一等 一等 二等 二等 二等 二等 二等 二等 一等 一等

鋼 鋼 鋼 鋼 鋼 鋼 鋼 鋼 鋼 鋼 鋼 鋼 鋼 鋼 鋼 鋼 鋼 鋼

十二隻

一三四

三四

正二四

大正10・10

一

鶴工廠

10

三四

中

第八驅逐艦	二等
第十驅逐艦	二等
第三驅逐艦	二等
第十四驅逐艦	二等
第六驅逐艦	二等
第十二驅逐艦	二等

二等	二等
二等	二等
二等	二等

鋼	鋼	鋼	鋼	鋼	鋼	鋼
---	---	---	---	---	---	---

—	—	—	—	—	—	—
---	---	---	---	---	---	---

—	—	—	—	—	—	—
---	---	---	---	---	---	---

—	—	—	—	—	—	—
---	---	---	---	---	---	---

—	—	—	—	—	—	—
---	---	---	---	---	---	---

—	—	—	—	—	—	—
---	---	---	---	---	---	---

造船所 大阪藤永田	造船所 大阪藤永田	造船所 石川島造船	造船會社 浦賀船渠
--------------	--------------	--------------	--------------

合計 百四十一隻（内除籍二十隻製造中二十五隻）

二十五隻

艦船年表（其三）

水雷艇之部

水雷艇ハ明治十三年建造手、翌十四年竣工ノモノヲ以テ始メトスシテ明治三十七年竣工モノヲ以テ終リトシ爾後建造セルモノナシ但シ艦載水雷艇ハ此限ニアラス

艦 船 年 表 (其三)

水雷艇之部

(水雷艇ハ明治十三年建造着手、翌十四年竣工ノモノヲ以テ始メトス而シテ
明治三十七年竣工ノモノヲ以テ終リトシ爾後建造セルモノナシ但シ艦載水雷艇ハ此限ニアラス)

年次	艇名	等級	船材	排水量	力速	起工年月日	進水年月日	竣工年月日	製造場所
年四十治明	第一水雷艇	三等	鋼	四〇噸	七節	明治三、七、三	明治三、二、一	明治四、五、三	英國製造
年十七治明	第二水雷艇	三等	鋼	四〇噸	七節	明治一、四、二、九	明治一、七、一、三	明治二、七、二、六	英國製造
年一十二治明	第三水雷艇	三等	鋼	四〇噸	七節	明治一、四、二、九	明治一、七、一、三	明治二、七、二、六	英國製造
治明	第四水雷艇	三等	鋼	四〇噸	七節	明治一、四、二、九	明治一、七、二、六	明治二、七、一、〇	英國製造
第一五號	小鷹	一等	鋼	四〇噸	七節	明治一、四、二、九	明治一、七、一、三	明治二、七、一、〇	英國製造
第六號	一隻	三隻	三隻	三隻	三隻	明治一、四、二、九	明治一、七、一、三	明治二、七、一、〇	英國製造
三等						明治一、四、二、九	明治一、七、一、三	明治二、七、一、〇	英國製造
鋼 鋼						明治一、四、二、九	明治一、七、一、三	明治二、七、一、〇	英國製造
西 西						明治一、四、二、九	明治一、七、一、三	明治二、七、一、〇	英國製造
二 二						明治一、四、二、九	明治一、七、一、三	明治二、七、一、〇	英國製造
明治三、二、三〇						明治三十二年五月三十日除籍			明治三十二年五月三十一日除籍
明治三、二、三〇						明治三十二年五月三十日除籍			明治三十二年五月三十一日除籍
明治三、二、三〇						明治三十二年五月三十日除籍			明治三十二年五月三十一日除籍
佛 國						明治四十年九月二十八日除籍			明治四十年九月二十八日除籍
明治四十三年四月一日除籍						明治四十一年四月一日除籍			明治四十一年四月一日除籍

三八

年四十三治明		年三十										第三十四號	
千	鳥	第三十六號	第三十七號	第三十八號	第四十四號	第四十五號	第四十六號	第四十七號	第四十八號	第四十九號	第五十號	第五十一號	二等
第四十二號	第三十九號	明治三、六、二 明治三、一、毛	明治三、五、明治三、四、三 明治三、七、九	明治三、六、三 明治三、七、九	明治三、七、三 明治三、六、四	明治三、六、三 明治三、七、三	明治三、六、二 明治三、七、三	明治三、五、明治三、四、三 明治三、六、二	明治三、四、三 明治三、五、明治三、六、二	明治三、三、六 明治三、四、三	明治三、二、二 明治三、三、三	明治三、一、二 明治三、二、二	二等
第四十一號	第四十號	明治三、三、毛	明治三、二、毛	明治三、一、毛	明治三、一、毛	明治三、一、毛	明治三、一、毛	明治三、一、毛	明治三、一、毛	明治三、一、毛	明治三、一、毛	明治三、一、毛	二等
二等	二等	一等	二等	二等	二等	二等	二等	二等	二等	二等	二等	二等	二等
鋼	鋼	鋼	鋼	鋼	鋼	鋼	鋼	鋼	鋼	鋼	鋼	鋼	鋼
三	三	毛	三	三	毛	三	三	三	三	三	三	三	三
毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛
元	明治三、六、二 明治三、三、毛	明治三、一、毛	明治三、四、三 明治三、七、九	明治三、六、三 明治三、七、九	明治三、七、三 明治三、六、四	明治三、六、三 明治三、七、三	明治三、六、二 明治三、七、三	明治三、五、明治三、四、三 明治三、六、二	明治三、四、三 明治三、五、明治三、六、二	明治三、三、六 明治三、四、三	明治三、二、二 明治三、三、三	明治三、一、二 明治三、二、二	二等
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
明治三、三、毛	明治三、二、毛	明治三、一、毛	明治三、四、三 明治三、七、九	明治三、六、三 明治三、七、九	明治三、七、三 明治三、六、四	明治三、六、三 明治三、七、三	明治三、六、二 明治三、七、三	明治三、五、明治三、四、三 明治三、六、二	明治三、四、三 明治三、五、明治三、六、二	明治三、三、六 明治三、四、三	明治三、二、二 明治三、三、三	明治三、一、二 明治三、二、二	二等
英	英	英	英	英	佛								獨
國	國	國	國	國									獨
順日露戰役ニ於テ明治三十七年十二月十四日旅順口沈沒	大正八年四月一日除籍	大正二年四月一日除籍	大正二年四月一日除籍	順日露戰役ニ於テ明治三十七年六月二十八日旅順口沈沒	大正三年四月一日除籍	明治四十五年四月一日除籍	順日露戰役ニ於テ明治三十七年五月十二日旅順口沈沒	大正二年四月一日除籍	大正二年四月一日除籍	大正二年四月一日除籍	大正二年四月一日除籍	大正二年四月一日除籍	本海海戰ノ際沈沒

明治三十三年五月十一年										明治三十四年三月十一年										
八 隻	第五十六號					第五十三號					第五十四號					第四十三號				
	第五十八號		第五十九號		第五十五號		第六十號		第六十一號		第五十七號		第五十六號		第五十二號		第五十三號		第五十四號	
	二等	二等	三等	三等	三等	三等	三等	二等	二等	二等	二等	二等								
	鋼	鋼	鋼	鋼	鋼	鋼	鋼	鋼	鋼	鋼	鋼	鋼	鋼	鋼	鋼	鋼	鋼	鋼	鋼	
	三	三	三	三	三	雪	雪	雪	雪	雪	三	三	西	西	西	西	西	西	西	
	毛	毛	毛	毛	毛	云	云	云	云	云	毛	毛	云	云	云	云	云	云	毛	
	明治三、五、五	明治三、五、五	明治三、五、五	明治三、五、五	明治三、五、五	明治三、六、六	明治三、六、六	明治三、六、六	明治三、六、六	明治三、六、六	明治三、六、六	明治三、六、六	明治三、六、六	明治三、六、六	明治三、七、七	明治三、七、七	明治三、七、七	明治三、七、七	明治三、七、七	
	英	英	英	英	英	吳	造	橫	吳	佛	吳	造	橫	吳	造	船	須	賀	英	
	國	國	國	國	國	造船廠	船廠	須賀	造船廠	佛國	造船廠	造船廠	須賀	吳	造船廠	廠	廠	國	國	
	大正五年七月一日除籍	大正二年四月一日除籍	大正四年四月一日除籍	大正四年四月一日除籍	大正二年四月一日除籍	大正二年四月一日除籍	大正二年四月一日除籍	大正二年四月一日除籍	大正二年四月一日除籍	大正二年四月一日除籍	大正二年四月一日除籍	大正二年四月一日除籍	大正二年四月一日除籍	大正二年四月一日除籍	大正二年四月一日除籍	大正二年四月一日除籍	大正二年四月一日除籍	大正二年四月一日除籍		

大正二年四月一日除籍
明治四十五年四月一日除籍
順口沖ニ於テ沈没
日露戰役ニ於テ沈没
明治三十七年十二月十三日旅
大正三年四月一日除籍
大正二年四月一日除籍
大正二年四月一日除籍
大正四年四月一日除籍
大正四年四月一日除籍
大正四年四月一日除籍
大正四年四月一日除籍

年七十三明治鶴鳩雲雉鷺雀												年六十明治鷺燕蒼鴞																	
十一隻						第六十九號						第七十號						第六十八號						第六十七號					
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二	二	二	二	二	二	一	一	一	一	一	一	一			
銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅	銅				
毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛			
元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元			
明治三、一〇、一	明治三、九、一	明治三、八、一	明治三、七、一	明治三、六、一	明治三、五、一	明治三、四、一	明治三、三、一	明治三、二、一	明治三、一、一	明治三、零、一	明治三、九、一	明治三、八、一	明治三、七、一	明治三、六、一	明治三、五、一	明治三、四、一	明治三、三、一	明治三、二、一	明治三、一、一	明治三、零、一	明治三、九、一	明治三、八、一	明治三、七、一	明治三、六、一	明治三、五、一				
明治三、一〇、一	明治三、九、一	明治三、八、一	明治三、七、一	明治三、六、一	明治三、五、一	明治三、四、一	明治三、三、一	明治三、二、一	明治三、一、一	明治三、零、一	明治三、九、一	明治三、八、一	明治三、七、一	明治三、六、一	明治三、五、一	明治三、四、一	明治三、三、一	明治三、二、一	明治三、一、一	明治三、零、一	明治三、九、一	明治三、八、一	明治三、七、一	明治三、六、一	明治三、五、一				
吳工廠	吳工廠	吳工廠	吳工廠	吳工廠	吳工廠	吳工廠	吳工廠	吳工廠	吳工廠	吳工廠	吳工廠	吳工廠	吳工廠	吳工廠	吳工廠	吳工廠	吳工廠	吳工廠	吳工廠	吳工廠	吳工廠	吳工廠	吳工廠	吳工廠	吳工廠				
神戶川崎造船所												佐世保工廠												橫須賀工廠					
日本海戰役於明治三十八年五月二十七日												沈沒												吳工廠					

年	七十三	治明
九	第七十四號	二等
隻	第七十五號	二等
	鋼	鋼
	公	公
西	明治三、六、一	明治三、十、一
明	明治三、六、一	明治三、七、一
三	明治三、六、一	明治三、七、一
六	明治三、二、〇	明治三、七、一
一	明治三、一、三	明治三、七、一
三		
船	神戶川崎造	神戶川崎造
所		

合計 九十三隻（內除籍七十三隻）

九
雙

第七十四號

二 等

金剛

八 八

西明治

清三六

明治

三〇

明治三

四
七

船神 船神

川崎造

艦船年表（其四）

特務艦之部

特務艦ナル種別ハ大正九年四月一日船令中ノ改正ニ伴ヒ起レモノナルモ從來工船運送船トシテ存在シ特務艦ニ編入セルモノハ總テ改定類別ニ從ヒ之ヲ掲上ス但シ志自岐ハ其以前亡沒ニ係ルモ便宜取錄セリ

		中造製		正大年一十	年十正大	年九正大	正大年八
合計		早鳴神石鶴	尻	大佐	襟能登	野間	
工作船		柄戸威廊見	矢	泊多	裳床呂		
碎水艦		運送艦	運送艦	運送艦	運送艦		
一隻		鋼	鋼	鋼	鋼		
二十一隻 （内製造中五隻）		三、四〇	三、四〇	三、四〇	三、四〇	三、四〇	三、四〇
		一 一 一	一 一 一	一 一 一	一 一 一	一 一 一	一 一 一
		三大正二〇、三、〇	三大正二〇、四、七	三大正二〇、六、四	三大正二〇、六、〇	三大正二〇、六、〇	三大正二〇、六、〇
		大正二〇、九、三	大正二〇、九、四	大正二〇、九、〇	大正二〇、九、〇	大正二〇、九、〇	大正二〇、九、〇
		一 一 一	一 一 一	一 一 一	一 一 一	一 一 一	一 一 一
		一 一 一	一 一 一	一 一 一	一 一 一	一 一 一	一 一 一
		吳工廠	横須賀工廠	米國	大阪鐵工場	社橫濱船渠會	神戶川崎造船所

艦種別規準沿革撮要

別種船艦	
軍艦	明治六年八月二十四日海軍省達甲第百七十 一號(九月一日ヨリ施行)海軍概則並俸給制 明治十九年七月十三日廢止
運送船	明治二十三年八月十三日海軍省達第二 百九十一號海軍艦船籍條例中ノ規定 明治二十九年四月二十七日廢止
第一種 水雷艇	明治二十九年三月二十九日勅令第七十 一號(三十日官報、四月一日ヨリ施行) 海軍艦船條例中ノ規定
第二種 水雷艇	明治二十九年三月二十九日勅令第七十 一號(三十日官報、四月一日ヨリ施行) 海軍艦船條例中ノ規定
第三種 艦	明治二十九年三月二十九日勅令第七十 一號(三十日官報、四月一日ヨリ施行) 海軍艦船條例中ノ規定
第四種 運送船、曳船、小蒸氣船	明治二十九年三月二十九日勅令第七十 一號(三十日官報、四月一日ヨリ施行) 海軍艦船條例中ノ規定
第五種 倉庫船、荷船、雜船	明治二十九年三月二十九日勅令第七十 一號(三十日官報、四月一日ヨリ施行) 海軍艦船條例中ノ規定
(編者註)	
水雷艇ハ最初水雷船ト稱セリ明治 十三年英國ニ注文シ横須賀造船所 ニ於テ組立テ十四年竣工セル一隻	明治三十八年十二月十一日勅令第二百 五十八號(十二日官報)海軍艦船條例中 改正 大正五年五月十七日廢止
水雷艇	明治三十八年十二月十一日勅令第二百 五十八號(十二日官報)海軍艦船條例中 改正 大正五年五月十七日廢止
魚形水雷使用ノ主旨ニ從ヒ特種ノ構 造ヲ有シ戰闘ノ役務ニ堪フル艇ヲ謂 フ	明治三十八年十二月十一日勅令第二百 五十八號(十二日官報)海軍艦船條例中 改正 大正五年五月十七日廢止
雜役船舟	明治三十八年十二月十一日勅令第二百 五十八號(十二日官報)海軍艦船條例中 改正 大正五年五月十七日廢止
軍艦水雷艇及ヒ之ニ裝置セル小蒸氣 船、端舟ヲ除クノ外總テ他ノ船舶舟 艇ヲ謂フ	明治三十八年十二月十一日勅令第二百 五十八號(十二日官報)海軍艦船條例中 改正 大正五年五月十七日廢止
(編者註)	
驅逐艦ヲ軍艦ノ類別中ヨリ除キ獨 立セシメタリ	明治三十八年十二月十一日勅令第二百 五十八號(十二日官報)海軍艦船條例中 改正 大正五年五月十七日廢止
潛水艇ハ米國ニ注文シ明治三十七 年横須賀造船廠ニ於テ組立テ翌三 十八年竣工セルモノヲ嚆矢トス	明治三十八年十二月十一日勅令第二百 五十八號(十二日官報)海軍艦船條例中 改正 大正五年五月十七日廢止

要

大正五年五月十七日軍令海第六號（十
八日官報）艦船令中ノ規定

大正八年三月十九日軍令海第一號（二
十日官報、四月一日ヨリ施行）改定艦船
令中ノ規定

大正九年三月三十日軍令海第一號（三
十一日官報、四月一日ヨリ施行）艦船令
中改正

大正十年八月二日軍令海第四號（三日
官報）艦船令中改正

軍驅逐艦
水雷艇
潛水艇
敷設船
工作船
運送船
雜役船

軍驅逐艦
潛水艇
敷設船
工作船
運送船
雜役船

軍驅逐艦
潛水艇
特務艇
特務船

（備考）

軍艦、驅逐艦、水雷艇、潛水艇ヲ
艦艇ト總稱シ敷設船、工作船、運
送船ヲ特務船ト總稱ス
水雷母艦、航空隊母艦ノ呼稱ハ艦
船役務ノ條下ニ之ヲ規定セリ
航空隊母艦ノ稱定マル

軍艦、驅逐艦、潛水艇、水雷艇ヲ
艦艇ト總稱シ敷設船、工作船、運
送船ヲ特務船ト總稱ス
水雷母艦、航空母艦ノ呼稱ハ艦船
役務ノ條下ニ之ヲ規定セリ

軍艦、驅逐艦、潛水艇、水雷艇ヲ
艦艇ト總稱シ特務艦、特務艇ヲ特
務艦艇ト總稱ス

（備考）

本令ニ於テ敷設船ヲ軍艦中ニ入レ
敷設艦ト改メ工作船、運送船ヲ特
務艦トシ工作艦、運送艦ト改ム
敷設艇、掃海艇、潛水艦母艇ノ稱
ハ雜役船中ノ區分ニ於テ既ニ存ス
ル所ナリシカ茲ニ特務艇トシテ規
定ヲ見タリ

（備考）

本令ニ於テ特務艦ノ區分中ニ碎水
艦ヲ加ヘラレタルナリ

級等ノ船送運附 級等別類ノ船艦務及艇艦

明治六年八月二十四日海軍省達甲第百七十
一號(九月一日ヨリ施行)海軍概則竝俸給制
明治十九年七月十三日廢止

明治二十六年十月十九日海軍省達第百
五號水雷艇類別
明治三十一年三月二十一日廢止

軍艦

乗組人員

- | | |
|----|----------|
| 一等 | 四百五十五人以上 |
| 二等 | 三百十五人以上 |
| 三等 | 百七十人以上 |
| 四等 | 一百人以上 |
| 五等 | 六十五人以上 |
| 六等 | 四十人以上 |
| 七等 | 三十九人以下 |
- 右一等乃至三等ヲ大艦、四等五等ヲ中艦、
六等以下ヲ小艦ト唱フ

(除外例)

- 一、皇艦ノ等級ハ臨時海軍卿ノ決議
ニ付ス

- 二、裝鏡軍艦ハ乗組人員ニ關セス三
等以上ニ列シ其艦ノ大中小ニ由
リ一等二等三等ヲ分ツ
- 三、大尉艦長タルトキハ六等以上四
等以下ノ艦ト雖モ小艦ト唱フ

運送船

- | | |
|----|-------|
| 四等 | 五百噸以上 |
| 五等 | 二百噸以上 |
| 六等 | 右以下 |

(編者註)

皇艦ナル語ハ His Majesty's Ship. ノ義
ニ採リ當時帝國軍艦ニ對シテ一般ニ之
ヲ使用セラレタリシカ本則除外例ニ見
ユル皇艦ハ單ニ天皇乘御ノ場合即御召
艦ヲ指セルモノナリ
明治維新海軍建制ノ初メ艦船ヲ類別ス
ル概外國語 (Sloop Schooner Gunboat
Gunvessel Despatch-boat Corvette Frigate
等) ノ儀之ヲ呼稱シ或ハ間々甲鐵艦鐵
甲船等ノ字ヲ用キシモノアリテ我國語
ノ一定セルモノナシ、十六年ニ至リ巡
洋艦(當時或ハ巡航艦トモ云ヘリ)ノ成
語出テ尋テ砲艦、報知艦(後、通報艦ト
改ム)海防艦等ノ稱呼現ハレ三十一年
ニ及ヒ艦艇類別ノ標準ヲ制定セラレタ
リ役務又ハ狀態ニ應シ艦船ヲ區別スル本
海軍概則竝俸給制中、常備艦、豫備艦、
艦裝艦、修復艦、測量艦、航海練習艦、
繫泊練習艦等ノ名稱見ニ蓋シ其以前既
ニ使用セラレタルナリ是等ハ時代ニ由
リテ變更増減アリ例セハ役務ノ有無ヲ
以テ在役艦船ト豫備艦船トヲ分チ製造
中ノモノヲ未成艦船ト唱ヘ練習艦ニ砲
術、水雷術、運用術等ノ科別ヲ冠シ艦
隊編入ノ軍艦ハ軍艦ソレ自體ノ役務別
ニヨラスシテ某艦隊軍艦某ト稱シ又警
備ニ服スルモノハ警備艦艇ト呼フノ
類ナリ今其沿革ヲ叙スルハ煩雜ノ嫌ア
ルヲ以テ本表之ヲ省略セリ

水雷艇

- | | |
|----|------------------------|
| 一等 | 七十噸以上 |
| 二等 | 二十噸以上七十噸未滿 |
| 三等 | 二十噸未滿ニシテ艦船ニ搭
載スヘキモノ |

明治二十六年十月十九日海軍省達第百
五號水雷艇類別
明治三十一年三月二十一日廢止

明治三十一年三月二十一日海軍省達第三十四號軍艦及水雷艇類別等級標準

明治三十三年六月二十二日廢止

明治三十八年十二月十二日海軍省達第一百八十一號改定艦艇類別標準

大正五年八月四日海軍省達第百十七號

艦艇類別標準中改正

軍 艦	戰 艦	巡洋艦	海防艦	砲 艦	通報艦	水雷母艦	水雷艇
二等	一等	二等	三等	二等	三等	三等	二等
一万噸以上	七千噸以上	五千五百噸以上	三千五百噸未滿三千五百噸以上	七千噸以上	五千五百噸以上	三千五百噸未滿三千五百噸以上	一千噸以上
一萬噸未滿	七千噸未滿	五千五百噸未滿	三千五百噸未滿	七千噸未滿	五千五百噸未滿	三千五百噸未滿	一千噸未滿
一等	二等	三等	四等	一等	二等	三等	四等
百二十噸以上	百二十噸未滿七十噸以上	七十噸未滿二十噸以上	二十噸未滿	百二十噸以上	百二十噸未滿七十噸以上	七十噸未滿二十噸以上	二十噸未滿

(編者註)

水雷母艦ノ稱始メテ定マル

驅逐艇ハ最初水雷艇驅逐艇又ハ水

雷驅逐艇ト稱シ明治三十一年英國ニ

注文シ三十一年竣工セルモノヲ嘴

矢トス叢雲是レナリ

明治三十三年六月二十二日海軍省達第百二十一號艦艇類別標準

軍 艦	戰 艦	巡洋艦	海防艦	砲 艦	通報艦	水雷母艦	水雷艇
二等	一等	二等	三等	二等	三等	三等	二等
七千噸以上	五千五百噸以上	三千五百噸以上	二千五百噸以上	七千噸以上	五千五百噸以上	三千五百噸以上	一千噸以上
七千噸未滿	五千五百噸未滿	三千五百噸未滿	二千五百噸未滿	七千噸未滿	五千五百噸未滿	三千五百噸未滿	一千噸未滿
一等	二等	三等	四等	一等	二等	三等	四等
百二十噸以上	百二十噸未滿七十噸以上	七十噸未滿二十噸以上	二十噸未滿	百二十噸以上	百二十噸未滿七十噸以上	七十噸未滿二十噸以上	二十噸未滿

(編者註)

水雷艇ノ稱始メテ定マル

駆逐艇ヲ水雷艇ノ類別中ヨリ除キ

之ヲ駆逐艦ト改メ軍艦ノ類別中二

入レタリ

大正元年八月二十八日海軍省達第十一號改定艦艇類別標準

軍 艦	戰 艦	巡洋戰艦	海防艦	砲 艦	通報艦	水雷母艦	水雷艇
二等	一等	二等	三等	二等	三等	三等	二等
七千噸以上	五千五百噸以上	三千五百噸以上	二千五百噸以上	七千噸以上	五千五百噸以上	三千五百噸以上	一千噸以上
七千噸未滿	五千五百噸未滿	三千五百噸未滿	二千五百噸未滿	七千噸未滿	五千五百噸未滿	三千五百噸未滿	一千噸未滿
一等	二等	三等	四等	一等	二等	三等	四等
千噸以上	百二十噸以上	六百噸未滿	百二十噸未滿	百二十噸以上	百二十噸未滿七十噸以上	七十噸未滿二十噸以上	二十噸未滿

(編者註)

此改正ハ大正元年八月二十八日改

定ノ標準中ニ於テ單ニ潛水艇ノ等

級ヲ追加セシニ過キナルモ今閱覽

ノ便ヲ圖リ其更訂ヲ施シタル全豹

ヲ掲ク以下本表中此類皆之ニ倣フ

大正八年三月二十日海軍省達第二十六號(四月一日ヨリ施行)艦艇類別標準中改正

大正九年四月一日海軍省達第三十七號
艦艇類別標準中改正

軍 艦	戰 艦	巡洋戰艦
驅逐艦	巡洋艦	二等 七千噸以上
砲艦	二等 七千噸以上	一等 八百噸以上
海防艦	二等 七千噸以上	二等 八百噸以上
潛水艦	一等 一千噸以上	一等 六百噸未滿
水雷艇	二等 水上一千噸未滿五百噸以上	二等 水上五百噸未滿
一等 百二十噸未滿	一等 百二十噸以上	一等 六百噸未滿

軍 艦	戰 艦	巡洋戰艦
驅逐艦	巡洋艦	二等 七千噸以上
砲艦	二等 七千噸以上	一等 八百噸以上
海防艦	二等 七千噸以上	二等 八百噸以上
敷設艦	航空母艦	水雷母艦
潛水艦	一等 一千噸以上	一等 六百噸未滿
水雷艇	二等 水上一千噸未滿五百噸以上	二等 水上五百噸未滿
一等 百二十噸未滿	一等 百二十噸以上	一等 六百噸未滿

大正九年四月一日海軍省達第三十九號 特務艦艇類別標準		
特務艦	工作艦	潛水艦
敷設艇	運送艦	水雷艇
特務艇	工作艦	水雷艇
敷設艇	運送艦	潛水艦
掃海艇	碎冰艦	母艦
潛水艦母艦		

大正十年八月三日海軍省達第百五十三號 特務艦艇類別標準中改正		
特務艦	工作艦	潛水艦
敷設艇	運送艦	水雷艇
特務艇	碎冰艦	母艦
敷設艇	運送艦	潛水艦
掃海艇	碎冰艦	母艦
潛水艦母艦		

(編者註)
碎水艦大泊ノ建造始メテ成ル是レ
蓋シ我海軍ニ於ケル碎水艦ノ嚆矢
ナリ

軍

艦

累

年

1

覽

備考

		計											
計		二等砲艦	一等砲艦	水雷艇	巡洋艦	裝甲艦	通海防艦	三等海防艦	一等海防艦	二等海防艦	敷設艦	航空母艦	
噸隻		噸隻	噸隻	噸隻	噸隻	噸隻	噸隻	噸隻	噸隻	噸隻	噸隻	噸隻	
九〇〇〇	一四〇	一九五	六三〇	一三〇	一三〇	一三〇	一七八	一五八	一五八	一七四	一六三	一六三	
元明治年二年	一八〇八												
三年	三四〇四												
四年	九四〇一〇												
五年	二三〇一四												
六年	二二〇一四												
七年	二二〇一四												
八年	二二〇一五												
九年	三三〇一四												
十年	三三〇一四												
十一年	三三〇一五												
十二年	三三〇一九												
十三年	三三〇一九												
十四年	三三〇一九												
十五年	三三〇一九												
十六年	三三〇一九						一〇九						
十七年	三三〇一九						一〇九						
十八年	三三〇一九						一〇九						
十九年	三三〇一九						一〇九						
二十年	三三〇一九						一〇九						
二十一年	三三〇一九						一〇九						
二十二年	三三〇一九						一〇九						
二十三年	三三〇一九						一〇九						
二十四年	三三〇一九						一〇九						
二十五年	三三〇一九						一〇九						

○此表ハ附錄第二艦船年表其一軍艦之部ニ就キ運送船ヲ除クノ外總テノ軍艦ヲ網羅シ該軍艦ノ存置スル間各年ニ於ケル種類別、隻數、排水量等ヲ示シ以テ其消長同年回航途中亡沒ノ故傍、明治二十五年佛國ニテ竣工シ同年回航途中沈没ノ千島、明治二十八年入籍同年沈沒除籍ノ廣丙、湄雲、明治二十九年入籍同年除籍ノ肇敏(明治四年入籍)、石川(明治九年入籍)、館山(明治十六年入籍)、千珠、満珠(以上兩艦トモ明治二十一年入籍トモ明治二十九年除籍)ノ如キ單ニ練習艦トシテ艦裝セルニ過キサリシモノ及蒼龍(明治五年入籍)、○種類別及等級ハ海軍入籍當時ニ於ケル稱呼ヲ各艦名ノ下ニ現ハシ其後變動ヲ生シタル都度各其當該年ノ欄内ニ記註セリ○排水量ハ海軍入籍當時ノモノヲ種類別ノ下ニ現ハセリ而シテ兵裝等ノ更改ニ伴ヒ其噸數ニ異動ヲ來タセルモノ尠カラスト雖モ今之ヲ記註スルハ却テ煩雜ニ陷ラ○總計ノ欄ニ於テガンボート、ガンベツセル、コルベット、フリグートノ如キ砲艦、巡洋艦等ノ項ニ一併シテ掲クルモ妨ケナキモノアレトモ是等當時ニ於ケル狀

テ其消長ノ述ヲ通覽スルニ便センカ爲メニ作レリ但シ調査ハ毎暦年末日ニ於ケル現在ニ依ルヲ以テ除籍ノ年ニ繫ルモノハ之ヲ掲ケス、明治十九年佛國ニテ竣工シ年除籍ノ敏捷ノ如キ亦同シ

五年入籍(二十六年除籍)、迅鯨(明治十四年入籍)ノ如キ「ヨット」型ノモノハ本表之ヲ載セス

雜ニ陷ランコトヲ虞ルルノミナラス要ハ大體ヲ観知スルニ在ルゾ以テ本表姑ラク之ヲ節略セリ
於ケル狀景ヲ彷彿セシメンカ爲メ其儘之ヲ收メタリ

驅逐艦累年一覽

備考

○各曆年末ニ於テ現任スルモノヲ掲ク故ニ明治三十三年一月一日竣工シ同年七月二十九日沈没セル覽ノ如キハ之ヲ收載セス
○驅逐艦ハ明治三十一年三月二十一日水雷艇中ノ類別ニ於テ驅逐艦ヲ設ケタルヲ始トシ三十三年六月二十二日之ヲ軍艦ノ類別中ニ移シテ驅逐艦ト改メ三十八年十二月十二日軍艦ノ類別中ヨリ之ヲ除キ別ニ驅逐艦ナル種別ヲ艦船中ニ設定シ以テ今日ニ迨ヘリ
○等級ハ大正元年八月二十八日初メテ之ヲ定ム故ニ其ノ以前ニ係ルモノハ便宜其ノ所定ノ標準ニ依リ之ヲ示ス

附錄第六

水雷艇累年

備
考
○各曆年末ニ於ケル現在ニ依ル
○等級ハ明治二十六年十月十九日初メテ之ヲ定メ三十一年三月二十一日及大正元年八月二十八日其標準ヲ改ム、大正元年

附錄第七

海軍人員累年一覽

(各歷年末調)

附錄第八

海軍經費累年一覽

年 度	海軍經費		國庫歲出總額	決算額
	常 部	臨時部		
明治四年	八六六、八五六、一六四	一	一九三、五五、一五五	〇六六、六
同 年 度	一九五、五〇九、一三四	一	一九三、五〇、〇三五	〇六〇、六
五 年 度	一一一、六一、一四九〇	一	一九三、五〇、〇三五	〇六〇、六
六 年 度	一一一、六二、一四九一	一	一九三、五〇、〇三五	〇六〇、六
七 年 度	一一一、六三、一四九二	一	一九三、五〇、〇三五	〇六〇、六
八 年 度	一一一、六四、一四九三	一	一九三、五〇、〇三五	〇六〇、六
九 年 度	一一一、六五、一四九四	一	一九三、五〇、〇三五	〇六〇、六
十 年 度	一一一、六六、一四九五	一	一九三、五〇、〇三五	〇六〇、六
十一 年 度	一一一、六七、一四九六	一	一九三、五〇、〇三五	〇六〇、六
十二 年 度	一一一、六八、一四九七	一	一九三、五〇、〇三五	〇六〇、六
十三 年 度	一一一、六九、一四九八	一	一九三、五〇、〇三五	〇六〇、六
十四 年 度	一一一、七〇、一四九九	一	一九三、五〇、〇三五	〇六〇、六
十五 年 度	一一一、七一、一五〇〇	一	一九三、五〇、〇三五	〇六〇、六
十六 年 度	一一一、七二、一五　一	一	一九三、五〇、〇三五	〇六〇、六
十七 年 度	一一一、七三、一五　二	一	一九三、五〇、〇三五	〇六〇、六
十八 年 度	一一一、七四、一五　三	一	一九三、五〇、〇三五	〇六〇、六
十九 年 度	一一一、七五、一五　四	一	一九三、五〇、〇三五	〇六〇、六
二十 年 度	一一一、七六、一五　五	一	一九三、五〇、〇三五	〇六〇、六
二十一 年 度	一一一、七七、一五　六	一	一九三、五〇、〇三五	〇六〇、六
二十二 年 度	一一一、七八、一五　七	一	一九三、五〇、〇三五	〇六〇、六
二十三 年 度	一一一、七九、一五　八	一	一九三、五〇、〇三五	〇六〇、六
二十四 年 度	一一一、八〇、一五　九	一	一九三、五〇、〇三五	〇六〇、六
二十五 年 度	一一一、八一、一五　九	一	一九三、五〇、〇三五	〇六〇、六
二十六 年 度	一一一、八二、一五　九	一	一九三、五〇、〇三五	〇六〇、六
二十七 年 度	一一一、八三、一五　九	一	一九三、五〇、〇三五	〇六〇、六
二十八 年 度	一一一、八四、一五　九	一	一九三、五〇、〇三五	〇六〇、六
二十九 年 度	一一一、八五、一五　九	一	一九三、五〇、〇三五	〇六〇、六
三十 年 度	一一一、八六、一五　九	一	一九三、五〇、〇三五	〇六〇、六
三十一 年 度	一一一、八七、一五　九	一	一九三、五〇、〇三五	〇六〇、六
三十二 年 度	一一一、八八、一五　九	一	一九三、五〇、〇三五	〇六〇、六
三十三 年 度	一一一、八九、一五　九	一	一九三、五〇、〇三五	〇六〇、六
三十四 年 度	一一一、九〇、一五　九	一	一九三、五〇、〇三五	〇六〇、六
三十五 年 度	一一一、九一、一五　九	一	一九三、五〇、〇三五	〇六〇、六
三十六 年 度	一一一、九二、一五　九	一	一九三、五〇、〇三五	〇六〇、六
三十七 年 度	一一一、九三、一五　九	一	一九三、五〇、〇三五	〇六〇、六
三十八 年 度	一一一、九四、一五　九	一	一九三、五〇、〇三五	〇六〇、六

備考

一、明治元年度ヨリ三年度ニ至ル間ハ海陸軍費ノ區別明確ナラサルモノアリ故ニ此年間ハ之ヲ除く
二、年度ハ明治十九年度以降ハ其年四月ニ始マリ翌年三月ニ終ル、十八年度以前ハ左ノ區別ニ依ル

三、職役等ノ臨時費ハ本表外トス主ナルモノヲ擧クレハ左ノ如シ
七年度自其年七月至翌年六月十八年度自七月至十九年三月

明治七年臺灣征討費

同三十一年清國事件費三十七八年日露戰役費

大正三十九年戰役費

二四三、八八五、八二〇(豫算、大正十一年三月十五日調)

大正十一年四月二十六日印刷
大正十一年四月二十八日發行

海軍大臣官房

東京市京橋區瀧山町六番地

印刷者 小川邦孝

東京市京橋區瀧山町六番地

印刷所 東京製本合資會社

銀座一六六百五十五十一
電話六百五十五十一
總務口座東京一七、六九八
番番番